

伏見稲荷大社 白狐



この白狐を題材にした「小説コラム」を書いています。伊奈利です。。。

初詣客の警備にフォックス警備の狐が大活躍するも人間に化ける特訓は大変になる・伏見稲荷大社の物語... 8 1 話

 2017年元旦・あけましておめでとうございます 

 初詣客の警備にフォックス警備の狐が大活躍するも人間に化ける特訓は大変になる・伏見稲荷大社の物語... 8 1 話

823年正月三が日の参拝客は約20万人(平安騎馬隊発表)と予想されていた。現在の2017年はこれが200万人(京都府警発表)と予想されているが、現在の京都市民は150万人、823年ごろの同じ京都市民は約15万人ですから人口の割合で計算すると同じぐらいの賑わいになります。

この平穏な平安時代でもこの参拝客の誘導や事故防止、はたまたテロ対策には力を入れていた。しかし、約100名の稲荷神社の神官、巫女などは本職が忙しくて警備には参加できない、そこで稲荷大学の学生のボランティア200名、平安騎馬隊の60名で交通整理をすることになったが、これとて三が日も徹夜の24時間警備は無理になるので稲荷神社三代目の宮司の伊蔵はテロ対策要員としてフォックス警備保障の狐に応援を依頼していた。この狐はイヌ科の動物で嗅覚は人間の約1000倍といわれているので爆発物、麻薬所持者の監視には都合がすこぶるよかった。

この狐の隊員はこの任務を遂行しようと思ったらまずは人間に化けなければならない。そこで狐らは人間に化ける特訓をもう半年前からやっていた。まず人間のモデルの男女を神職、巫女から5人ほど選び仕草や顔の動作を研究していたが、これまた狐らも平安時代の平和ボケで化け方を忘れていたのか四苦八苦していた。ある狐は顔の輪郭は上手に化けるのに眼が一つとか三つになっている。また首が異様に長くてロクロ首というのもいた。

そこで各地の稲荷神社に赴任している狐の中から人間に化けるのが上手い狐をピックアップして動員していたが、その応援狐も入れてやっと240匹になっていた。それと上手く化けても何かに気を取られると化けるのを忘れて元に戻り狐が着物を着ているのでこのほうが参拝者が気絶する騒ぎになる恐れもあった。しかも狐が人間に化けていられる時間にも制限がありせいぜい90分が限度とわかった。そこで狐一匹のパトロール出動は1回60分として20匹組の12班の班が編成されていた。

大晦日の夜の8時ごろから神社で新年を迎えるため、また稲荷山からの初日の出を拝む目的のために若いカップルを中心に大勢の参拝者が訪れていた。狐の人間に化けた隊員も雄と雌のカップルで人ごみに紛れて警備をしていた。そしてこの厳重な警備体制を洛中、洛外の辻々の札(掲示板)

に書いてテロ犯罪の抑止力を高め参拝者には安全をアピールしたおかげで参拝者は去年より増えていた。

この警備のおかげで検挙された者はスリが3名、痴漢が2名のみで三が日の警備が解かれる3日の夜10時にはフォックス警備保障の年始特別警備解散式が開催されていた。この式典には狐の大好物の油揚げなども屋台方式の食べ放題、それに酒も飲み放題だった。宮司の伊蔵も参加していたが、伊蔵は狐の隊長に、

「ほう、狐の警備員は240匹と聞いていたから料理も酒もふんだんに用意したが席がガラガラだが、警備で疲れて寝込んでいるのか？」

「あっ、はい、たしかにどこかで寝ているかも...」

「ふむ、隊長、なにか？待遇の不満でもあったのか？」

「いえ、それが...」

「ほう、今日はえらい歯切れが悪いが...」

狐の隊長は伊蔵に問いつめられて、

「実は、狐の警備員は雄と雌のカップルで1組として人間に怪しまれないために恋人同士という設定で境内をパトロールしていました。ところがそこに愛が生まれたのか仲良くなってしまい。この警備が解かれたと同時に山の中で愛し合っているのです...」

「ほう、すると約80組のカップルが誕生したのか？それは目出度い」

「あっ、はい、しかし、この中には単身赴任の既婚者も人妻もいますから不倫になります」

「そか、狐界では不倫は認めていないからの～それは困ったことじゃ...」

「はい、隊長の私としてはそんな下品な不倫までも人間に化けなくてもいいと叱っていましたが」

「おいおい、耳が痛いことをいうね～隊長は...」

そのあくる日の4日には各地から応援に来ていた狐らもお土産をいっぱいもらって家路についていた。しかし、稻荷山の狐の不倫した夫、それに不倫した妻の家庭では夫婦喧嘩が始まりその仲裁に狐の隊長と伊蔵は正月気分を返上して山の中を走り回っていたというお話でした。



世界三大美女の小野小町と深草少将との100日の恋、そして100日目に大雪で転落凍死...伏見稻荷大社の物語 78話

世界三大美女の小野小町と深草少将との100日の恋、そして100日目に大雪で転落凍死...伏見稻荷大社の物語 78話

稲荷神社のある深草地域は豊かな農地が広がり2000年前の縄文時代から農業が盛んだった。この深草には朝廷の南部支所がありその支配地は深草、桃山、山科、宇治、八幡、淀までの広大な農地で地方の小さな県より年貢の石高は多かった。この南部支所は藤森にあり事務所と倉庫、それに南部支所長の屋敷まで入れれば約2000坪の広さだった。

この南部支所の最高責任者は従4位で少将の藤原憲明だった。この憲明をこの地域の人たちは「深草少将」と呼びこの支所も深草御殿と呼ばれて農民たちからもかなり慕われていた好人物でもあった。稲荷神社もこの深草にあり朝廷の出先機関である南部支所の管轄になり憲明こと深草少将とは稲荷神社三代目の宮司の伊蔵とは気が合い仲がよかった。

嵯峨天皇は東山の裏側になる山科と醍醐地区に新しい東部支所を作ると決められこの深草少将に東部事務所の設置場所を探せと命じられていた。この山科から醍醐にかけては山科盆地が広がり農地の開拓がまだまだ未開であった。それに山科、醍醐地域から深草支所へ年貢米を運ぶのには墨染峠という難所を越えなければならない。そこで奈良街道を北上して東海道から京の都に年貢を運ぶルートになった。

深草少将はこの山科の元豪族で小野氏の旧屋敷をこの東部支所の候補にしていた。この豪族は平安京になったと同時に桓武天皇に忠誠を誓っていた。そして小野氏が支配していた広大な土地が天皇家に取り上げられたが、この一族は貴族として召し抱えられていた。小野篁などがそれになる。

この小野氏の屋敷の敷地は奈良街道に面して約2500坪にもなるがこの屋敷に住んでいるのはほんの数名だった。その屋敷の仏間を随心院という寺にして住職は尼さんだった。深草少将はこの尼さんにこの寺はそのままにするが、その他の屋敷を東部支所にするがいいかと相談をしていた。この尼は即答をできないから少し待つてほしいという。この住職はどこかに相談をしにいったのかもう日が落ちていた。

深草少将は腹が減り裏庭に柿でもないかと探していた。すると離れ屋敷の障子がス〜と開けられて品のいい女性が、

「お役人さま、住職は檀家の人々となにやら話込んでいます。寒いですから中にお入りください」

「それはかたじけない...」

深草少将はこの女性をまじまじと見るが、それは若くて綺麗でしかも貴族の姫のように髪は長くて肌は透けるように白い、

「そちはこの小野氏の姫なのか？」

「はい、小野小町と申します」

「しかし、小野氏の一族はすべて貴族で屋敷は宮廷の近くにあると聞いているが？」

「はい、私は従3位の小野良樹の娘で良樹が浮気してできた子供になります。それで仮の屋敷としてここに住んでいます」

「ほう、あの良樹さまのお姫さまでしたか」

この日はそのまま帰ってはいたが、深草少将はこの小町に一目惚れをしていた。それからこの屋敷に仕事で来るたびに小町の住んでいる離れ屋敷に恋文を置いていた。やかでその思いが通じたのか小町からの文がそこにあった。それを読むと、

「いつも素敵な恋文をありがとうございます。私の憲明さまのことをお慕いしています。人目もありますから夜の10時に私の屋敷に来てください」

深草少将は洛中の有名なお菓子を土産にその日の午後8時に藤森の屋敷を出発していた。大和街道を南へ、そして墨染街道の峠越えだが、この峠は標高こそ約200mと小さな丘だがその急斜面の峠は難所としても知られている。約2時間かけて憲明は小町への夜這いに成功していた。小町は恥ずかしいのか明かりをすべて消して待っていてくれた。この日は曇りで部屋の中は真っ暗闇で小町の衣擦れの音さえ大きく聞こえるほど耳の神経は異様に過敏になっている。

「小町さん、愛しています」

「はい、憲明さま～わたしもです～」

こうして2人は愛を確かめ合った、そして憲明は、

「小町さん、私と結婚してほしい」

「それなら私をこうして100回愛してください。それにその都度、何か今日のお土産のような甘いものをお願いします」

といわれて憲明は萱(かや)の実を100個渡されていた。それは1回の夜這いで1個証拠として数えるためだと小町は説明している。

それからの深草少将は毎日午後8時出発が日課となっていた。そしてそれが90日目になろうとする時に稲荷神社の伊蔵が憲明と面会したが、その憲明は見る影もなくゲッソリ痩せて顔色も悪い、伊蔵は思わず、

「おい、お主なにかに取りつかれているのでは...」

「いや～そんなことはない、こうして元気だ」

とはいうが、それは嘘になるので伊蔵はフォックス警備保障の狐に憲明の調査を依頼していた。

その調査はすぐにわかり狐が伊蔵に報告をしている。

「伊蔵さま、深草少将は小野小町に化けた古だぬきに騙されています。その目的は憲明さまの愛撫と甘いお菓子でそれを100回もノルマにしていたようです」

「ほう、犯人は狸か？」

「はい、本来狸は化けるのが下手ですが、あの老婆の狸は化けるのが上手いそうです」

「そか、それなら憲明にそれをいっても信用はしないだろう...」

「その通りです。しかも今夜がその100回目の記念日になります」

「そか、それがどんな結末になるのかはわからないが、100回目を憲明にやらせてやろう...」

「して、その古狸への100回目後の処分は？」

「いや、憲明の話ではあの屋敷は随心院の寺を残してすべて取り壊されて新しい東部支所になるというから、その狸も棲む所がなくなるからそれでいいのでは」

「はい、そうですね～あの古狸も憲明さまが毎日持ってくる甘いお菓子で相当糖尿病が悪化していますからそう命は長くはありません」

この100日目の記念すべく日は朝から大雪だった。それでも深草少将は残り一つとなった萱の実とお土産のお菓子を持って峠を下っていたが、足を滑らして急斜面から崖に落ちて凍死していた。しかし、その死に顔は笑みをもって何かをやり遂げた自慢顔にも見えた。

...画像は小野小町

祖父に空海、父は嵯峨天皇のスーパーベビー皇子誕生・空海真言宗の総本山金剛峯寺を 建立・月光稲荷神社 58話

空海、高野山に真言宗の総本山金剛峯寺、高野山佛教大学を建立・人質に?一人娘の「月光」を嵯
峨天皇に・月光稲荷神社 58話

官営の東寺の管主だった空海は東寺だけでは飽き足らないと真言宗の総本山金剛峯寺、そして高野山佛教大学の建立の許可を嵯峨天皇に申し入れていた。これを聞いた高級官僚の貴族らは猛反対をしていた。なぜなら官営の東寺の管主だけでも最高の名誉なのにそれを辞して紀州(和歌山)など都から遠い所に比叡山クラスの寺院を造るということは都に敵対しているしか考えられなかったからだ。

この空海は比叡山に僧兵を組織してその数も1000名を超えていた。ただこの僧兵は嵯峨天皇に忠誠を誓ってはいたが、それは空海がいてのことでまた次の天台宗の管主が代われればこの忠誠もどうなるかもわからないからだ。しかも、この比叡山クラスの僧兵をもし空海が高野山で組織したなら天皇の軍隊の武将及武士の数1500名より多くなり再び奈良仏教会のように強権になる恐れがあったからだ。

嵯峨天皇はこのことへの祈禱と予言を稲荷神社三代目の伊蔵に託していた。天皇は伊蔵に、
「右大臣も左大臣、それに参議の全員が空海の東寺管主辞退と高野山の本山建立に反発している」

「そうですか...しかし、空海の言い分は比叡山は天台宗であって空海は真言宗として活動がしたいと聞いている」

「それなら東寺を真言宗の総本山とすればいいのではないか？」

「比叡山は高い山にあるからこそ修行の聖地になる。高野山も比叡山と同じぐらいの高い山になるから、つまり、空海は最澄のように高い山でこそ真言密教の学校が必要だと考えているようです」

「そうか～空海の夢は大きいのう～」

「そうです、その夢を実現させるには天皇の許可が必要になります」

そこで伊蔵の考えた助言は、

「天皇、空海をそのまま東寺の管主にしたままで塔頭の20の寺院も真言宗の寺だけにします」

「ほう、それは真言宗の坊主を人質にするのか？」

「人質とは聞こえが悪いが、官営の東寺の管主ということで高野山とは密接に連絡ができます」

「そか、それだけか？」

「いえ、それと空海は一人娘で17歳の「月光」を京の都に残していくともっています」

「ほう、あの笛の名手で超美形の月光をか?それで伊蔵...」

「はい、その月光が住む屋敷は六条河原離宮では少し具合が悪いので別邸が必要になります」

「そか、それなら伊蔵、月光の住む屋敷をすぐ造りなさい」

こうして高野山への真言宗の各寺院の建立は嵯峨天皇から許されていた。813年の春、空海は天皇に引っ越しの挨拶にきている。空海は、

「いよいよ、明日には高野山に引っ越しをします。高野山の総本山金剛峯寺の建立には3年、寺院がすべて完成するには10年ほどかかります。それまで私は京の都に帰れませんが、天皇への忠誠心は私が生きている限り守ることをお約束します」

「そか、空海とも長い付き合いだった、予がこの世で友達と思っているのは空海、最澄、それに伊蔵と松尾神社の酒幸だけだ。それぞれ果てしない夢を実現することに命を懸けている姿は美しいのう〜」

「はい、どれを一つ取っても天皇と私たちのコラボで成功したものばかりです」

一方、空海の一人娘の月光の屋敷は右京の朱雀大路二条から西へ300mに敷地約1500坪の「月光邸」(後、江戸時代には天文学所)が造られていた。ここへは宮殿から牛車で約30分と近いので嵯峨天皇はほぼ毎日のように通っていた。この月光はまだ幼さが残る色の白い娘だが、空海の娘らしく国宝級の写経の巻物を数本も発行していた。さらに文学と絵にもにも長けているのかお釈迦様の教えを絵と文字で表し数本の巻物も世に出していた。そしてこれが比叡山佛教大学の教材にもなっていた。

月光は父の空海から京の都の人質という言葉は聞いてはいなかったが、そこは頭のいい娘で嵯峨天皇には身も心も心底尽くしていた。やがて月光は妊娠したが、このことで朝廷は比叡山と高野山からの声なき脅迫と緊張から脱してまた平和ながら風紀の乱れた貴族の世の中に戻っていた。嵯峨天皇は伊蔵に、

「お主の予言は今回も当たったが、もし空海の要求を認めなかったらどうなっていた」

「ささ、それは空海も最澄も天皇への忠誠心とは別に歴史は動いていたかも知りません。権力を持ちたいという輩は次から次へとでてきます。一つの不満からそれが暴発へとつながるが、こうして空海を祖父に持ち父は天皇というスーパーベビーが生まれようとしているときは皆さんハッピーな気持ちになるものです」

「そか、予の女好きが歴史を作っているのか？」

「いやいや、それが立派な天皇の天職になります」

この月光の子供は男の子で嵯峨天皇の皇子としては6番目で源の氏を名乗り「嵯峨源氏・源星光」発祥の武将となり大活躍したというお話しでした。皇子誕生を記念して屋敷内に建立されたのが「月光稲荷神社」でご利益は立身出世、安産の神として今でもあります。中京区西ノ京西月光町



...画像は、月光稲荷神社



月光稲荷神社

京都先住民、騎馬民族の藤族～京の都の治安を守る「平安騎馬隊」へ、狐の交番・藤森神社駟馬神事」警察狐、狐の狐番・17話

京都先住民、騎馬民族の藤族～京の都の治安を守る「平安騎馬隊」へ、狐の交番・藤森神社駟馬神事」警察狐、狐の狐番・17話

稲荷山から西山の間はもう湿地帯の姿はなくなっていた。田畑が広がり20軒ばかりの集落も点在していた。稲荷山のある深草より南の藤森の集落はこの地の先住民で猟で生計をたてていた騎馬民族でもあった。稲荷神社ができる前は藤森から見る風景はすべて沼と湿地帯でそこに鹿や猪が水を飲みにくるがそれを弓で射止めていた。ところが都の洛外整備で獣は山伝いに桃山、木幡、宇治、醍醐へと逃げていた。この醍醐の裏山から東は滋賀県から琵琶湖まで山深く到底馬では狩ができなく生活もできなくなった。

この藤森神社の宮司も稲荷神社の宮司二代目荷田生成も集落の集会の度に騎馬民族から農耕民族へのトラバークーをと口が酸っぱくなるほど説得していた。藤森村の戸数は約100軒ほどだが、その戸数と成人男子の数だけ水田を優先的に斡旋する、しかも年貢米については3年間は免除するという桓武天皇の提案も無視されていた。彼らにすれば、

「我々は先祖からこの地を受け継いで500年にはなる。騎馬民族としての誇りもある。それを今さら米を作れとは...」

生成は、

「たしかにその通りで先住民の人間も動物もここに都ができなければ...しかし、時代は流れている。それにこの日本の中の土地も山も川もすべて天皇のものだ、ここは一つ私の顔を立ててほしい」

元々この生成の父親である伊呂具は奈良からの流れ者でようやくたどりついたこの藤森神社の宮司からお情けで末社の藤社を借りたことが稲荷神社の始まりだという大恩義があるから「ほな、そうかと」ほっとくわけにもいかなかった。そこで生成は藤森の族長で今は村長の奥川辰馬に、

「この村には馬は何頭いる？」

「へえ～60頭はいます」

「それに弓矢は？武器は？」

「弓矢は我々の命だから数万本はあります、それにすぐ製造はできます。武器は銅剣に槍だが、これも馬の蹄鉄を造るために鍛冶屋の技術もあります」

「そうか～辰馬、それなら狩を止めて警察騎馬隊を結成しないか？」

「けいさつ、警察？」

「そう、武将や健兜は(こんでい・農民を兵役にした兵隊)戦争のためにあるが、都の強盗や火付けには警察力が必要になる」

まだ都は正式にはオープンしていないが、全国からの物資が都に届いていた。それには北陸、東北からの物資は山科から渋谷峠(旧1号線)を越えなければならない。山陰から物資は大枝の老の坂峠(9号線)を越えなければならない。この二つの峠に鬼といわれる強盗団が棲みついていた。特に都に近い渋谷峠の被害は甚大なもので真昼間に全国から年貢として納められようとしていた米、絹織物、貨幣、金、銀などを強奪していた。さらに夜は商家に強盗に入り若い娘を誘拐もしている。

ただこれらは天皇の軍隊が出動するがそれは事件の後のことで常勤警戒はしてくれない。そこで生成が考えたのが藤森の警察騎馬隊になる。これは峠の下の都側に騎馬隊の詰め所を置いて24時間体制で警戒するというものになる。このアイデアを桓武天皇は喜び馬10頭分の馬屋と警備室の建設を認めてくれた。そして天皇は、

「騎馬隊の名称は平安騎馬隊とする。騎馬隊員は準公務員として征夷大將軍坂上田村麻呂の配下とする。この騎馬隊の本拠地の地名を馬町とする。尚、老の坂峠、京見峠、蹴上峠にも順次この平安騎馬隊を配置すること」をお決めになっていた。

この各地の強盗団は峠での強奪を諦めて真夜中に行動するようになった。そこで生成は夜目がきく狐の警察狐を組織していた。これは騎馬隊の隊員とセットになる、狐は警察官の前に乗って真っ暗闇の京の町を巡回するというものになる。そのころになると京の町中にも稻荷神社が目立つようになったが、その祠の下にも狐は棲んでいる。その祠が狐番(こんばん)で現代でいう交番の役割をしていた。その狐番の狐と馬に乗った狐の連携プレーに降参して京都の強盗団は都から退散して丹後の大江山に逃げている。これが後の酒吞童子になる。

この藤ノ森神社のお祭りには現在でも流鏝馬という神事が行われている。これは藤森神社駈馬神事会の若者が馬に乗って走り絵をかいたり扇子の的に矢を射るという神事でもう1200年の歴史がある。ちなみに現代の平安騎馬隊も京都府警の所属で京の町の治安を守っている。そして桓武天皇が付けた地名の「馬町」もある。

 京都府警の平安騎馬隊、藤森神社駈馬神事



京都歴史裏の小説...伏見稻荷大社はインターネットの神様...1300年前のお話で私のペンネーム「伊奈利」の由来どす。

まだ都が奈良にあった711年ごろに奈良から新天地を求め旅をする家族があった。この家族の総数は12名で家長は「伊呂具」という中国帰化系の秦氏の血筋になる。この伊呂具が深草の地を訪れこの部族の長でもある藤森神社の神主に一族を住まわせてほしいと願ったが、神主はこの地も狭くて人が住める土地はないといった。しかし、この神社より北半里のところに伊奈利山というのがある、その中腹には末社の「藤社」という小さな祠があるが、ここならお連れの子供2～3名なら雨露ぐらいはしのげるから貸してやるといつてくれた。

そのころの京都というのは鴨川の右岸(西側)の堤防はなく雨が降るたびに水があふれ、一年を通して湿地帯で人はとても住めなく原住民は鹿などの狩場に使っていた。縄文時代から弥生時代の人は鴨川より東の森の糺の森(下賀茂神社)には北の部族「賀茂族」、南にこの藤森の藤族しか住んでいなかった。

そして東山も草木の一本もない中国の枯山水のような山でした。その伊呂具が借りた藤社の裏山も花崗岩できていて雨や風で風化した白い砂が川のように流れて鴨川の流れも大きく押し曲げていた。その伊奈利山から鴨川までの地名を「砂川」といい1400年前の地名を今も使っています。(砂川小学校など)

伊呂具一族が借りた祠の中は2畳ほどの広さで小さな子供3名をそこで寝起きさせ大人は花崗岩を掘って穴倉生活になったが、その山には先に穴を掘って暮らしていた狐の家族の穴も数100もあった。伊呂具は家族を二つに分けて一斑は近くの鴨川や沼地で鯉、なまず、うなぎ、夏には鮎、そして鹿や猪、うさぎを獲っていた。元々この伊呂具らというのは土木、植林、稲作、魚師の専門集団で鴨川での漁は連日の大漁だった。もう一斑はこの藤社から大和街道までの参道の整備だった。この距離は約200メートルだが、大量の砂の撤去に一年はかかっていた。この大和街道というのはまだ京の都はなかったが、北国、信州、近江から奈良の都への一級国道だった。

伊呂具はこの大漁の魚や鹿、猪を売って金に換えて苗木を買って山に植えて砂の流失をストップさせていたから、この大和街道を旅する商人からも喜ばれていたが、さらに伊呂具は整備した藤社の参道入り口に「無料湯茶接待所」という看板を立てて旅人を藤社にお参りさせていた。湯茶接待所には伊呂具の娘らを巫女さんに仕立てて接待したものだから、若い旅人からお年寄りまで喜んでいただけではなしに、その噂をインターネットのごとくここを起点にして北国の若狭から新潟、信州から関東、奈良から大阪、四国、中国、九州の地まで藤社の人気はうなぎ登りにな

った。

やがて藤社は「伊奈利神社」と社名を変更して五穀豊穰と今でいう「旅の交通安全」のお守りまで売って旅人のお土産にもなった。そして直営の茶店も参道に数店だしたものだから金はどんどん入ってきた、しかし、伊呂具はそれを社殿の建造にすべて使っていたから、この地の持ち主の藤森神社より社殿は大きくなったのです。元々藤森神社は藤族300名ほどの守り神でしたから、そんなに裕福でなかった。そこで藤族の人々は「ひさしを貸して母屋を取られたとか、伊奈利神社は商売が上手い」と噂していたが、その噂から伊奈利神社は「商売の神様」になったのです。

それから80年後に長岡京から京都に都が移された。天皇も公家も商人もすべて新しい都にお引越しをしてきた。都の外には見渡す限りの田園(伏見、淀、九条、西七条、鳥羽)が広がった。それまで旅の交通安全を売りにしてきたが、こんどは社名を「伏見稲荷大社」に再び変更して五穀豊穰の神として京都の都の農民をお得意様にして、商売繁盛、五穀繁盛の神として衣替えをして現在に至っています。

それから1300年も伏見稲荷大社は藤森神社から土地を無償で借りてまだ返していません。島根県の竹島に韓国軍、沖縄には米軍、そして北方四島にもロシア軍がいるようになかなか実行支配されたら歴史的にも法律的にもこの伏見稲荷大社の土地は藤森神社の物だが、理屈では通らないということを教えてくれたのも稲荷神社になります。

この伏見稲荷大社の支店というのか分社(〇〇稲荷神社)は全国で3万社とも5万社ともいわれていますが、この伊奈利神社が発展したのは一級国道に神社を置き、そこを起点に全国に情報を発信したおかげですから、もう伊呂具は1300年前に現在のインターネットを考えていたのかもわかりません。ということで、これからの伏見稲荷大社は「インターネット」の神様に衣替えするそうです、

似顔絵はこの小説を書いている音川伊奈利



九条ねぎは浪速で自生していた。その浪速からの狐の禰宜（ねぎ）が九条村に持ち込んでいた。九条ねぎの鴨鍋が稲荷神社名物になった。18話

九条ねぎは浪速で自生していた。その浪速からの狐の禰宜（ねぎ）が九条村に持ち込んでいた。九条ねぎの鴨鍋が稲荷神社名物になった。18話

長岡京から平安京へのお引越しが秒読みになったころの京都盆地では淀川の山崎の港へ、浪速、堺方面からの船便が集まっていた。ここで陸揚げされた荷物は西国街道を通過して長岡京、そして平安京へと大八車で運ばれていた。狐の世界でも旅行が大ブームでこの船の荷物の中に潜り込み京都観光をする狐も多かった。また新天地を求めて移民する狐一族もいた。

狐は稲荷神社のお使いだとされているが、各地の祠に棲んでいるが狐の世界にも一般の狐と神職の狐がいた。狐の場合は宮司ではなくその祠の責任者を禰宜(ねぎ)という位で呼ばれていた。この当時は稲荷信仰が大流行でもう全国に〇〇稲荷神社というのが数千か所も普及していた。そうになると神社の責任者の禰宜狐も人手不足で全国に募集されていた。

その一匹の中に禰宜の資格を持つ狐の源(げん)が京都の九条にある稲荷神社を紹介されていた。この源狐は浪速に棲んでいたために船の荷物の中に紛れ込んで山崎へ、そして港から歩いて九条の稲荷神社に赴任していた。その神社はまだ名前がなく「正一位 稲荷大明神」とだけある。源狐はとりあえず長い旅の疲れを取る為に祠の下にある穴で寝ようと思ったが、まだその穴も掘られていなかった。そこでやむを得ず土の上で寝ていた。そしてこの禰宜狐は村民に慕われて「九条の禰宜さん」と呼ばれていた。

それから半年後に官営の東寺が建立される土地の視察団がこの地にやってきた。一行は桓武天皇と設計士、宮大工の棟梁、それにこの東寺の柱などの調達役の稲荷神社宮司の荷田生成など約50名の大視察団。一行は南大門、金堂、講堂、食堂の建設現場を視察した後に西門予定地まで来ていた。そこから西を見るとそこには朱色の稲荷神社があった。

ほう、こんなところにも稲荷神社があると桓武天皇は感心して拝んでいくといった。そんなことを知らない源狐は頭を穴に入れ尻尾を外にだして呑気に昼寝をしていた。そして天皇は、「あれはなんじゃと」指をさしている。この村の村長は狐の尻尾のことだと思って、「あれは九条の禰宜です」「ほう、九条ねぎか？」

天皇が指を指していたのは祠の周りで長く伸びた葱でその先には葱坊主があった。天皇は生成になぜ?ここにこんな珍なる植物があるのかと聞いている。生成もこれが何かとわからず、この昼寝中の狐をおこして聞いている。

「これはお前が育てているのか？」

「これ？ああ、私も名前は知らないが浪速の村では稲刈りが終わった冬にかけて自生しています。この地の百姓はなんでも鴨の肉と一緒に煮ると旨いといっていました」

「その旨い野菜がなぜここにある？」

「ああ、これは私が浪速の畑でネズミを追いかけていた時にこの種が私の毛の中に入っていたのが落ちてここで芽がでたのです」

天皇はこの九条村の村長に「この九条ねぎの葱坊主をすべて採取して九条の畑で育てよ！そして鴨川で鴨を獲って予に持って来い」と命令していた。当時は米にしか年貢はかからなかったので稲刈りが終わった冬場の作物として九条村の農民はこぞってこの「九条ねぎ」を栽培していた。そして冬が来て鴨川や桂川には鴨がやってきた。

稲荷神社の直営の茶店の名物は雀の焼鳥、稲荷寿司、鯖寿司だが、冬は雀も獲れない。鯖も若狭の峠が雪で通れないために冬場の名物がなかった。そこで生成は「九条ねぎの鴨鍋」を売り出したところこれは予想外の大人気になった。やがてこの九条ねぎの栽培は京の都の洛外の九条村から鳥羽、伏見、淀、吉祥院、久世まで広がっている。今でもこの九条村の禰宜狐と勘違いされたままの「九条ねぎ」は1200年の歴史があるということはもう誰も知らない。

この九条村では今でも農家の屋号として「葱常」「葱秀」「葱伊」として残ってやはり九条ねぎを栽培している。そのきっかけとなった当時西門前の稲荷神社は今でもその地にあるが、その神社にはまだ名前がなく「正一位 稲荷大明神」とだけある。そして葱狐の源というのはその辺りの町名「源町・げんまち」として残っています。

(東寺西門上がる一筋目西入)

 正一位 稲荷大明神・九条ねぎ



南区・東寺町にある(西門)

正一位 稻荷大明神

伏見稲荷大社とキツネと油揚げ

伏見稲荷大社とキツネと油あげ

稲荷山は花崗岩の山で草木は育たず風化した花崗岩の砂が砂の川のように麓に流れていた。当時は此の辺りの地名を砂川といい現在でも砂川小学校など地名として使われている。麓の一級国道でもあった大和街道も一度雨が降れば砂に埋もれて荷車などが通れないことがしばしばあった。

そこで伊奈利神社の宮司の秦伊呂具は一族総出で砂で立ち往生している荷車を救出していた。ある日、山崎の豪商で油問屋山崎屋の荷車を砂の中から押し出したことがあったが、それが縁で山崎屋から菜種油の樽が届いた。当時この菜種油は食用というより行燈の照明用油としてかなりの高価なものであった。

伊呂具は平城京からの流れ者だが帰化人で奈良では農業指導していた下級役人でもあった。そして大豆を使った豆腐作りも得意分野だった。そのころからこの藤森、深草の荒れ地を耕す原住民も増えてきてこれらに大豆の栽培と中国風豆腐の作り方を指導していた。中国の豆腐はかなり固いのでこれを油で揚げるという料理が主流だったので山崎屋からもらった菜種油でこの豆腐を揚げてみた。これが今でいう油揚げのルーツになっている。

伊呂具は境内で大きな鍋と寄進の菜種油でこの油揚げを作っていた。この匂いは街道の旅人も引き寄せていたが、なにより山に住む数百というキツネも本殿の前に集まってきた。伊呂具はそのキツネの子供たちを前に並ばせ順に出来立ての油揚げを手渡していた。そして次はお年寄り、最後に若いキツネとなるが、それまでこの伊奈利神社の人間とは遠巻きには接したことはある。しかし、食べ物を人間から手渡されというのは日本のキツネの歴史的なできごとだった。そして伊呂具とキツネの信頼はここに築かれていた。

一方の旅人もこの油揚げ食べたが、あまりの美味にこの伊奈利神社の油揚げはこれもインターネット並みの速さで全国に伝わっていき参拝者も数倍も増えていた。それまで照明用だったこの菜種油がこれを機会に食用(天ぷらなど)として重宝されてたことは当然だが、この菜種油が高騰して油問屋の山崎屋は巨万の富を得た。山崎屋は伊呂具になにかお礼をしたいがというと、伊呂具は、

「それなら神社に鳥居を寄進してほしい」

山崎屋はそれを聞きそれなら日本一の鳥居を寄進すると山崎屋自身が吉野の山から千年杉を見つけてこれで高さ25メートルの大鳥居を建立していた。つまり、この山にある千本鳥居の1本目の寄進者が山崎屋になる。それから1300年、この今までも商売で成功したものが赤い鳥居を寄進するという数も数万本になっている。

山崎の油問屋山崎屋は高さ25メートルの大鳥居を寄進したが、それと同時に吉野杉の苗を千株寄進していた。伊呂具はそれを山に植えて花崗岩の風化を押さえて山裾への砂の流出を止める作業に入っていた。参拝者らにも杉に限らず根のある木々の寄進を求めるとこれも全国からの寄進があり伊奈利山も中国の枯山水のような山から少しは緑が目立つようになってきた。

伏見稲荷大社・記念写真・2016 7月16日

この京都歴史裏のコラムの取材と写真撮影に行ってきました。

7月16日の午前10時ごろだが、京阪伏見稲荷駅からの参道にはすべてとっていいほどの外人観光客が歩いていました。本殿前の大鳥居の前での記念写真、本殿のお参り、千本鳥居とこれまた大渋滞で日本人は200人に1日ぐらいしか見かけません。この日は祇園祭の宵々山の日でこの外人たちは祇園祭の流れかもわからないが、なにせ写真を撮ってもらう日本人を探したがいなかった。

境内には外人の案内所もありました。それに鳥居形の絵馬にも英語が…境内の朱塗りの鳥居も派手だが、白人外人の金髪とファッションもかなり派手でワシの目の保養にもなりました。

その画像は、

<http://ameblo.jp/inari24/>

<http://plaza.rakuten.co.jp/kyoto24/>



稲荷信仰の布教とキツネの関係・なぜ鳥居は朱色なの？

稲荷信仰の布教とキツネの関係・なぜ鳥居は朱色なの？

稲荷神社は西暦711年に藤森神社の社領の北の端の小さな藤社という祠を帰化人の秦伊呂具に無料で貸し与えたことから始まりました。この伊呂具一族は総勢12名の家族でこの神社や参道の整備、そして北國と奈良を結ぶ一級国道の大和街道沿いに鳥居を立てて旅人などを湯茶で接待していました。

この伊呂具はなかなかのアイデアマンでこの旅人たちに「道中安全」を祈願したお札を売ったりして生計を立てていた。ある日、農民から畑に野ネズミが大量発生して農産物が不作で奈良の都でも米や野菜が高騰しているという話を聞いていた。そこで伊呂具は野ネズミが近寄らない神の砂という触れ込みで花崗岩が風化してできた白い砂を旅人たちに無償で渡していた。

この伊奈利神社(当時は稲荷ではなかった)からもらった神の砂を野ネズミやモグラの出そうな畑に置いて置くだけで野ネズミの被害が極端に減少したいという。この噂は北國から奈良の都、そして西国まで広がり農民たちはこぞってこの伊奈利神社に神の砂をもらいに全国から駆け付けた。

伊呂具はこの砂を売らずに無償で農民に与えたが、そこはそこで砂をもらった農民も本殿にお参りして賽銭を投げ入れるからこれは販売しているのと同じになる。この神の砂の正体は伊奈利山に無数に住んでいる狐の尿と糞が染み込んだ砂で野ネズミからすれば天敵の匂いになるのでこの近くに狐がいると錯覚するのか野ネズミは一斉にその農地から退去していたのです。

しかし、この神の砂も雨風にさらされて狐の匂いも消え効能は1年ももたなかった。そこで伊呂具は日本全国どこの山にでも住んでいる狐を人が住む里や畑に移住させる計画を発表していた。狐が村に住んでくれればその周辺に匂いをつけてくれるようになれば農民の天敵でもある野ネズミ、モグラ、それに鶏など家畜を襲うイタチまでが出没しなくなるというアイデアだった。

農民はこのアイデアに飛びついたが、その狐を人里に住んでもらうノウハウを教えてほしいとこれまた全国から伊奈利神社への参拝者が絶えなかった。伊呂具はこれらに親切に説明をしている。

「まず、この伊奈利山には全国のアカギツネ連合会を代表する狐が住んでいる。その狐は女狐でそれも全身真っ白の白狐で名前を白藤という。この白藤がいうには全国の仲間に連絡を取り狐を必要としている村があれば山からその村に移住せよと命令をした」

これを聞いていた農民は、

「しかし、その狐に我が村に住んでほしいという願いをどうして届けるのか？」

「いやいや、それは簡単なことでまず狐が住む伊奈利神社の祠を立ててほしい、そして祠の下に穴を掘っていただければいい。そしてお供えものの油揚げを日に1枚神棚に置いとけばいい」

「しかし、我が村には天神さんや山の神、海の神がおってそれぞれに祠があるが…」

「それもそうだな～それでは伊奈利神社の証としてまず鳥居や祠などを真っ赤な朱色で染めてほしい、そうすれば全国の狐もここが伊奈利神社で狐の移住を希望している村だと一目で判断ができる」

この話は全国にインターネットぐらいの速さで伝わった。その狐の効果は抜群で赤い社のある村は豊作で沸き返っていた、そしていつのまにか「稲が成り」、イナリ神社、そして稲荷神社と呼ばれるようになった。その稲荷神社の祠も江戸時代には全国に波及して〇〇稲荷、〇〇稲荷大明神という赤い鳥居のある祠は約3万社にもなっていた。

伊呂具がたった一つの神社を立ち上げてから数年で日本を代表する神社になった。それも藤森神社の末社の藤社という小さな祠を借りてのスタートだから、この伊呂具の商売上手が今の世でも「商売の神様」になっている。しかしながらこの立派な本殿も千本鳥居のある稲荷山もいまだに藤森神社の社領地であって伏見稲荷大社の土地ではないし借地料も1円も支払ってはいない。このことから「軒先を貸して母屋を取られた」だから「商売が上手い」という説もある。

音川伊奈利のフェイスブックは

<https://www.facebook.com/inari.otokawa>

主なブログは、

<http://ameblo.jp/inari24/>

<http://plaza.rakuten.co.jp/kyoto24/>



大石内蔵助と白狐の恋 その1

大石内蔵助は京都山科の山中で隠棲生活をしていました。この屋敷の裏山は京都市内側から見ると東山三十六峰の最後の山の稲荷山になる。隠棲生活としているが京都所司代や浅野家のスパイからは見張られていた。この内蔵助が幕府の役人から仇討ちなど毛頭考えていないという証なのか連日祇園のお茶屋「一力」に入り浸りだっという話は有名になる。その山科から祇園へ通う道は今でも大石街道とされている。

しかし、これは江戸時代の作家が書いたもので実際には伏見の榎木町遊郭「万亭」に連日連夜通っていた。この山科から榎木町への道は小栗栖街道（明智光秀が殺された場所）から大岩街道へと稲荷山の裾野をぐるりと回ることになる。当然ながら幕府の間者もついてくることになるから仲間らとの連絡も容易ではなかった。

そこで内蔵助は裏山の険しい獣道を駆け登り伏見稲荷大社の奥の院～千本鳥居～本殿～参道～大和街道～榎木町遊郭への道を選んでいました。内蔵助は狐の大好物とされていた油揚げを数枚奥の院に毎日献上していた。そして主君、浅野長矩（内匠頭）の仇討ちが成功するようにと願をかけていた。もちろん幕府の間者も浅野家が雇ったスパイもついてはくるが、なぜか？毎回道に迷い、時には崖から転落して死ぬものもいた。

本殿から表参道への道に参拝者のためのお茶屋があったが、夜は営業はしていないはずなのに薄っすらと灯りがついて店の前には白い着物を着た女性が内蔵助に頭を下げて「どうかこの茶屋で遊んでください」という、その女は色白で背は内蔵助よりも高いしなによりも美形だった。元々、この筆頭家老の内蔵助は赤穂の城下でも有名な女好きだったからこの妖しい誘惑に負けていた。

女は白藤といい生まれも育ちもこの稲荷山だという。内蔵助は夜が明ける前にはこのお茶屋から屋敷に帰っていた。そしてその後このお茶屋が赤穂浪士との秘密の深夜の会合場所になっていた。そして数日後に江戸への仇討ちの旅にでることになったことを白藤に報告をしている。白藤は、

「この伏見稲荷大社は稲荷神社の総本宮で全国に約3万社あります。その神社には必ずお使いの狐が住んでいます。その全国の狐に内蔵助さまをお守りするようにと手紙をだしています。もし、道中になにかがあればその地の稲荷神社に駆けこんでください」

「白藤…お前は…狐だったのか？」

「はい、奥の院に毎日油揚げを献上していただきありがとうございました。そのお礼のつもりでしたが、私は内蔵助さまを好きになりました。それに…内蔵助さまの赤ちゃんが…」

吉良邸は両国の松坂町、回向院の裏にあったが、その回向院の片隅に両国稲荷という神社があった。その神社の狐も総本宮の白藤から手紙をもらっていた、吉良邸とは地下の狐道を通じて自由に出入りしているので吉良邸の動向などは手に取るように分かっている。それをそば屋に化けた赤穂浪士に人間の姿に化けた狐が報告している。後にこの赤穂浪士は48人と数えられていたが、後1人の正体は歴史的にも不明になり47士となった。この1人こそ両国稲荷の狐になる。

つづく

音川伊奈利のフェイスブックは

<https://www.facebook.com/inari.otokawa>

主なブログは、

<http://ameblo.jp/inari24/>

<http://plaza.rakuten.co.jp/kyoto24/>



内蔵助と白狐の子供は「東丸」と命名された その2

大石内蔵助と白狐の白藤との子供は「東丸」と命名された その2

主君の仇討のために江戸へ旅立つ前日に白狐の白藤からお腹に内蔵助の子が宿っていることを打ち明けられた大石は以前から懇意にしていた荷田春満にその日のうちに相談していた。荷田の屋敷は伏見稻荷の本殿のすぐ近くにあり父親はこの稻荷大社の社家で羽倉信詮という。

この夜は大石と同じように江戸に向かう荷田晴満も家で送別会を開いていた。大石からこの話を聞いた羽倉信詮はもしその子が男の子だったら神官に育てる、女の子だったら巫女にすると約束をしてくれた。ただ、その子の父親が大石内蔵助にすることには色々幕府の目もあるので父親は荷田春満にすることになった。この夜のこの密談を縁にして江戸に出た2人は色々連絡を取り合い吉良邸討入の日時を決定する根拠になったという古文書もある。

赤穂浪士の吉良邸討入事件が京の都に届いたところに白狐の白藤は奥の院の祠の下の穴で立派な人間の赤ちゃんを産んだ。白藤はその子を社家の羽倉信詮の門前に置くと同時に門の中から羽倉が出てきてその子を受け取っていた。その子は荷田東丸(あずままる)と命名された。その東丸は神道は当然ながら国学、漢字、歌学までをなんなくこなし武術、馬術もすぐれていた。

当時の伏見稻荷大社の宮司は大西家が代々世襲していたが、後継ぎが途切れて筆頭社家でもあった羽倉家の孫の東丸にへと白羽の矢が飛んできたがこれには羽倉も義父の荷田も悩んだ。それはそうだろう～この東丸は表向きは荷田の子だが、本当の父は大石内蔵助で母は狐だとは口が裂けてもいえないことだった。

そしてこの話は羽倉が社家から抜けるということで落ち着いた。こうなると羽倉家に収入がなくなるが、そこでこの羽倉家の屋敷を「東丸神社」として伏見稻荷大社から独立することになった。そして現在も伏見稻荷大社の本殿の目の前に東丸神社はあるが、実はこの神社は伏見稻荷大社からは独立した宗教法人であることは誰も気が付かない。当然ながらこの神社の御利益は「学問の神様」になります。



吉祥院天満宮・政所公園の白狐

吉祥院天満宮の南側に政所公園というのがある。政所というのは諸説あるが、この場合は太閤秀吉の正室の「おね」のことでこの政所公園の南側の一角にはこの北政所の墓碑がある。しかし、この吉祥院村になぜ北政所の墓碑があるのかということは解明されていないばかりかこの北政所の戒名が間違っただけで石に彫られているためにこの墓碑は偽物だという説が有力になる。

この墓碑の裏は児童公園で子供の遊具やゲートボール場、それに公衆トイレも完備されている。北側の通路は大きい樹木の陰で昼間は休憩や食事のために車が数台止まっている。私もよくここで近所のスーパーで買った弁当を食べた後に昼寝をしていた。

ある日、ミニ稲荷寿司10個入りを車の中で食べていると小さな女の子が窓越しに笑顔くれた。公園の中を見回したがこの子の母親らしき姿は見えない、私は近所の女の子だと判断して窓を開けて、

「お嬢さん、この近くの子？」

その子は小さな指で南の方向を指さしている。この辺りは古い民家とマンションが多い地域で子供が一人で公園で遊んでいてもそんなに違和感はなかった。その子に「これ...ほしい?食べる?」と聞くと満面の笑顔で頷いている。

ミニ稲荷寿司だから小さな子供でもすぐ食べられる、その子は3個食べた後に笑顔でお礼をいっている。この子とは一言の会話はしていないが意思は心の中まで通じていた。そして20分ばかり昼寝をしたが、この時の夢にさっきの小さな女の子の母親がでてきた。

この母親は「娘に美味しい稲荷寿司をありがとうございました。あの娘はあの北政所のお墓で眠っている狐でございます」

「狐?ということはお母さんも狐ですか?」

「はい、白狐の白藤といいます。元々あのお墓の場所は吉祥院稲荷神社という祠があったのです。ところが今でいう村おこしの観光政策で当時人気のあった北政所の墓にしたほうが参拝者は増えると墓にしてしまったのです」

「村おこしね〜...」

「はい、その当時私の娘は生まれたばかりで祠の下にあった穴にいましたが、その穴に埋められて死んでしまいました」

そんなことがあってから私は毎月17日の「いなりの日」にはこの元吉祥院稲荷神社の北政所の墓所に稲荷寿司をお供えしています。そしてその夜には必ず白狐の白藤さんが白い藤の柄の着物

を着て私の家に遊びにきてくれます。

北政所御墳墓



京都市南区吉祥院政所町

伊奈利神社直営のお茶屋 (現在は国の重要文化財)

伊奈利神社直営のお茶屋 (現在は国の重要文化財)

元々この伊奈利神社の御神体は山岳信仰で山そのものが御神体になる。とりわけ山の中腹にある大きな白い岩があるが、この岩に夕日が反射しているのを見つけた伊呂具が「あの光が俺を呼んでいる」とこの光を目印に奈良からこの深草の地にやってきた経緯もあった。つまり、もし伊呂具がこの光を偶然発見していなければこの伏見稲荷大社そのものがこの世になかったことになる。

この白い大きな石こそ御神体だとその御神体への参拝道を整備していた。しかし、それには莫大な資金がいる、そこで伊呂具は山崎屋が寄進してくれた大鳥居への見物者が増えてきたことでこの客相手の茶店を神社直営で出すことになった。そのころ深草の原住民の若い娘を巫女として十数名雇っていたが、その巫女を巫女の姿のまま客を接待したものだが、これがまた大評判になって近郊の集落からは当然、1日以上歩かなければならない奈良の都からも若い男を中心に連日参拝客が押し寄せてきた。

これは今でいうコスプレ喫茶でしかも茶店の中に神楽舞台を作り雅楽の演奏と巫女の舞も日に5回上演していた。茶店とはいうが、もちろん料理も酒も提供していたのだからやがてコスプレ喫茶というより祇園の高級クラブに近い店になっていた。当時、伊勢神宮という有名神社があったが、この参拝は皇族と貴族しか認められなかった。一方、この伊奈利神社は誰でも参拝できることからこの茶店の巫女の舞を目当てに全国各地に伊奈利参りの講ができていた。

こうなれば伊奈利神社の門前にはお土産屋さん、お茶屋さん、そして旅籠まで進出してくるのは世の習い、それがまた人を呼び、伊奈利神社の信者も増えて社殿もこの地の氏神というより大家さんの藤森神社より大きく立派になっていた。その藤森神社としては同じ大和街道にあるのに参拝者は伊奈利神社に取られて経営も相当苦しくなっていた。

そんな折、藤森神社の宮司の奥川徳之進が伊呂具に、

「あなたに貸した藤社を勝手に伊奈利神社と社名を変更していいのかと」抗議をしてきた。それに対して伊呂具は、

「いや、藤社は藤社でこの伊奈利神社の祖神様として立派にお祀りしています。その藤社の末社として伊奈利神社があります。その藤社さまの許可を得ていますから勝手に社名を変更してはいけません、つまり、御社からすればこの伊奈利神社は孫社になります」

「し、しかし、あの大鳥居には「伊奈利神社」と書いてある」

「それは、お寺でも山号、寺名、院名、堂名とあるが、どの通称名を使うのは寺の勝手になります。それと同じで我社は藤森神社の末社の藤社の末社で伊奈利神社になりますが、たまたま伊

奈利神社が有名になっただけです...」

「そ、そんな屁理屈を...それなら土地代を払ってほしい...」

「たしかに、土地を借りて土地代を払うのは当然になる。しかし、その土地代の価格をまだ決めてはいませんので今暫く待ちください」

「あい、わかった」

この会話があったのが西暦750年の春、それから1266年も経つがまだこの話し合いは続いているようです。ちなみに藤森神社のお祭りの神輿がこの伏見稻荷大社の前を通るが、未だにその神輿の行列が稻荷大社の前で立ち止まり「こら!稲荷神社、土地代を払え!」と叫ぶそうです。そうすると稲荷側は「まだ、土地代の価格を交渉中ですのであと少しお待ちください」というのが恒例になっているそうです。

国の重要文化財のお茶屋

このコラムにある直営のお茶屋は本殿と同じ国の重要文化財になっています。ちなみに現在は巫女さんは接待してくれませんので期待しても無理になります。



重要文化財のお茶屋

伊呂具の予言で平安京が築かれた...桓武天皇と正一位 伏見稻荷大社

伊奈利山の整備も全国から寄付があり本殿から約300メートルほど上の奥の院の社が建立されていた、そしてそこにも茶店がオープンされていた。そのころ奈良の都から桓武天皇が伊奈利神社に参拝したいという申し入れがあった。奈良の都での噂では伊呂具は先が読めるので予言師とか祈祷師ともいわれていた。そして桓武天皇と伊呂具はこの伊奈利山中腹にある茶店で話をしていた。

桓武天皇は、

「近ごろ都では疫病が蔓延している。それに平城京は海から遠くて新鮮なものは食べられない。農業も水不足で飢餓で死ぬ人間もいる。そこで次の新天地の都の候補地を貴殿のその予言で決めてほしい」という。

伊呂具は眼下に広がる京都盆地を指さして、

「この盆地は三方を山に囲まれてそれが自然の城壁になる。この伏見に港を置けば淀川から大阪湾の堺港、浪速港に入る全国の物資が船で運ばれてくる。北海道や東北、北陸の物資も日本海の敦賀まで船でそして陸路で琵琶湖へ、大津からは陸路でも近い。さらに淀川から大阪へ、つまり、太平洋から日本海への航路にもなる」

「ふむ、この地は日本列島の中心になるのか?伊呂具?」

「そう、天皇、この地からは西国、四国、九州、山陰、北陸、東北、関東、北海道までのすべて街道が整備されています。もしここで情報を発信するならここから網の目のような経路と最短の距離で全国に伝わります。また反対に地方の動きも手に取るようになります」

「ふむ、でかした伊呂具、都はここに決定じゃ!」

ところがこのころの京都盆地は鴨川の流れが比叡山の麓の北東から南西に斜めに走っていることから一雨降ると湿地帯の盆地そのものが沼になっていた。しかしながらこの鴨川を東山の裾野へと一直線に流れを変える巨大の堤を造った後10年もあれば水が引いて湿地帯から乾いた広大な土地になると思います。

天皇は、

「10年か~それまでは予は我慢ができない」

「それなら天皇、西山連峰の長岡に一旦仮の都を造成すると同時にこの鴨川の工事を行えば?」

「そうか~長岡京なら次の引っ越し(京都への遷都)も近くていい...しかし、その鴨川の流れを変えろという大土木工事は...伊呂具、お主はできるのか?」

「いえ、私はできませんが、私と同じ血筋を持つ秦氏の末裔が嵐山嵯峨に住んでいます。その者は秦酒公といい松尾神社の社家の総代だが、土木工事の達人で保津峡を整備して山陰からの船を通しました。さらに嵐山からかんがい用水を引いた者です」

「そか、伊呂具の縁者なら信用できる。よし、その者に工事の発注をする」

そして桓武天皇は伊呂具に平安京に無事遷都された暁にはこの伊奈利神社に「正一位」の位を与えると約束された。その長岡京遷都への引っ越しも無事終わってから丁度10年目に秦酒公の土木工事が終わって正式に平安京への遷都が決まった。こうなければ皇族から貴族、出入りの商人から農民、鍛冶屋まで我先にと整備された京の都に引っ越ししてきた。そしてその多くが伊奈利神社の氏子となり今現在でも繁栄は続いています。

この鴨川改修工事は川底を掘り右岸左岸の堤防を造るというものだが、この堤防の土は川のそばまで山があった東山の土を使った。その土を掘った後は当然平地になるが、その平地こそが鴨川から東の土地になる。北は京大病院～祇園～など鴨川と東大路の間はすべてこの時に開発された土地となる。

 鴨川とは13000年前に造られた人工河川だった。稲荷山・東丸神社

鴨川の直線化工事は加茂川と高野川との合流地点から九条と十条の間まででそこから右に曲がって桂川に合流させている。この画像は十条の橋から、ここより200メートル上流で右に曲がっている。後ろの山は比叡山、手前は大文字山。



鴨川・十条から、比叡山、手前は大文字山

長岡京造成・沼の中のオアシス狐塚(宇賀塚)・宇賀神社、新宮神社

長岡京造成の責任者だった武将の坂上辰麿はある日馬に乗って狩りをしていた。この長岡京予定地の西には桂川が流れている、その浅瀬で一頭の鹿が渡っているが、その鹿の毛色は金のように光っている、それに立派な角はそれこそ金で夕日に反射してピカピカ光っている。

辰麿はその鹿を仕留めようと桂川を鹿と同じように浅瀬を渡り追跡した。その金色の鹿は東へと東へと逃げている、そのころ愛宕山から黒い雲が沸き立ち嵐になった。この辺りというより人が住めない湿地帯になっているので一度雨が降ると馬も前へ進めないほど水かさが増える。日はどっぴり暮れて西も東も分からず辰麿は立ち往生していた。

その時、前方にぼんやりと光が見える。そしてその光は辰麿において...おいでをしているようにも感じて馬をその光の先へ進めるとそこには沼の中に島のようなものがあり辰麿はそこに上陸をしていた。すると先に避難していた葛野郡の漁師もいて話を聞いている。その漁師は、

「この島は宇賀塚(狐塚)といって大昔から漁師や猟師の避難場所になっていてここに住む狐たちがキツネ灯で遭難している人間たちを誘導してくれている、そこからこの塚をわしらは狐塚といっている」

「キツネ灯...キツネ灯とはあのゆらゆらした光のことか？」

「そう、お武家さんもあのキツネ灯で...」

「なぜ？獣の狐が我々人間を助けるのか？」

「そら～ここの狐は伊奈利神社のお使いで、その伊奈利神社の宮司の伊呂具さまの家来ですから...日ごろから狐と人間は仲良くしなさいと教育しているそうです」

この京都盆地は湿地帯と沼でできていた。そこには鯉やうなぎ、なまずを獲る漁師、それに鹿や猪を獲る猟師の生活を支えていた。漁師は西山系原住民の農民の副業が多く、猟師は騎馬民族賀茂族系(下鴨神社、上賀茂神社)、同じく騎馬民族系の藤族(藤森神社)が多かった。いずれにしてもこの地に都ができれば漁場も猟場も失うことになる。

辰麿はこの狐に助けられたこと、宇賀塚の話桓武天皇に話をしていたが、この桓武天皇と伊呂具はもう顔なじみでそんなことには驚かなかった。そればかりか辰麿が金の鹿を弓で殺そうとした行為を非難した、

「辰麿よ!、その金の鹿は神のお使いかもわからない、その神のお使いを殺そうとしたお前を神のお使いの狐が助けてくれた。漁師も猟師も生き物を殺すが、それは必要な分だけだ、お前は狩という遊びで鹿を殺そうとした」

そのことがあってから辰麿は伊奈利神社に参拝して伊呂具に鹿を殺そうとしたこと、それに狐に助けてもらったお礼をいっている。そしてあの宇賀塚に伊奈利大明神の末社の社殿を建立したいと申し入れた。伊呂具は、

「あの宇賀塚も鴨川の改修工事が終われば陸の中の塚になる。その周りには田畑が広がり村ができる。村ができれば神社が必要になるからとこの申し入れを受けていた。

これが現在の宇賀神社(南区東九条)になるが、実際にはこれより少し北の小さな祠がこの話の狐塚という説もある。そこで宇賀神社の真横の車も通れない細い路地を北へ歩いて200メートルほど行くと西側に小さな「新宮神社」という社殿があった。一応、鳥居形の赤い絵馬と石の鳥居はあったが、前の道路は幅約1メートルほどの狐の通り道になっている。本殿の中を覗くとそこには社の大きさに似合わない大きなキツネが二匹こっちを向いて鎮座している。

湿地帯の沼の中の塚だからそんなに大きくはないことを考慮するとこの小さな神社が奈良の武将が建立した伊奈利神社かもわからない。なにはともあれ伊呂具の予言通りに此の地は東九条村として田畑が広がり主に九条ネギが盛んに栽培されている。もちろんこの辺りの農民、住人は1300年前から伏見稻荷大社の氏子であり祭の神輿の担ぎ手でもある。



宇賀神社・東九条

奈良から長岡京への遷都 向日神社に勝山稲荷神社が建立された。狐の嫁入り 10話

1400年前に人口のかんがい用水が嵐山から引かれて桂川右岸から西山の間にある桂、檜原、長岡、久世、大山崎の村は豊作が続いていた。そして長岡京への遷都が決まったころ大山崎の豪商で油問屋の山崎屋がこの地の守り神の向日神社の境内に勝山稲荷という社殿を建立したいという話があった。

この向日神社がある小高い丘は元々この地の豪族の古墳群で一番大きな古墳は卑弥呼の時代の元稲荷古墳、全長94mを測る前方後方墳があります。この地は伊奈利神社のある東山連峰の正反対にある西山連峰になるが、この西山の狐と東山の狐というのは大昔から交流がなかった。そこに勝山稲荷の社殿が建てられてその祠の下の穴に伊奈利山の狐が引っ越ししてくるとなって西山の狐は縄張りが荒らされると大反対をしていた。

この西山の狐のボスは銀狐の権太という若い男だった。もちろん全国狐連合会の会員だから、この東山の狐たちの活躍は知ってはいるが、西山と東山では文化も風習も違い人間との距離は遠くというよりむしろ敵対視していた。そこで山崎屋の山崎屋善右衛門はこの西山狐の権太に会い話をしていた。善右衛門は、

「せっかくお社を建立するのだからその社にお使いの狐が住まなければ稲荷神社とは呼べない。そこで権太さんにこのお社のお守りをしてほしい」

「俺は～そんな柄ではない、それに俺は人間が大嫌いだからお参りに来る人間とは仲良しになれない」

「そうか～ところで権太さんは独身だと聞くが？」

「そんなことは関係ない！」

「いや、実は伊奈利山の白狐の白藤の娘で白菊というのがいる。これがまた母親そっくりの美人で全国から嫁に来てほしいといってきた。その白菊のことを権太さんは？」

「いや、噂には聞いたことがある、しかし、そんな美人とは…」

「そか、それならこの話はなかったことに…」

権太はこの話を聞いてから白菊のことが気になってしょうがなく、ある日の夜、伊奈利神社に向かっていた。まず権太はこの赤い大鳥居に驚いた、さらに本殿の立派なことといったらありゃしない、権太の住む村の鎮守の神さんでもある向日神社とは比べ物にならなかった。それに夜というのに境内は明かりがついて本殿前には人間が数名もお参りしている。そこで権太は人間に化けて境内を見回していた。

本殿の裏の白狐社の前には白い着物を着た若い娘がなにやら真剣に拝んでいる。その娘が権太の


気配を感じて振り向くとそこにいた権太と白菊の目が会った。が、そこはお互い狐で化けていることはすぐにわかる...そこで権太は、
「も、もしかして白菊さんですか?」
「はい、白狐の白藤の娘で白菊と申します」
「実は人間の山崎屋さんからあなたのことを聞いて...それで今夜きました」
「はい、私も山崎屋さんから権太さんのことを聞いています」

こうして白菊は西山の勝山稲荷神社の権太の嫁になることになった。この二匹の結婚とはいうが、白菊は全国狐連合会会長の白藤の娘、婿殿は西山連峰狐集団のボスとの結婚となれば全国の狐の代表がお祝いに來ることになり経費も莫大になる。もちろんこの経費は山崎屋がだすことになった。狐の嫁入りとは深夜に行われ両家の家からそれぞれ婚礼の行列が出発して中間地点でドッキングした場所にて花嫁が婿に引き渡される。その際に両家から貢物の交換があり婚礼の儀式は終わっていた。

その婚礼の日取りや貢物の相談は両家の相談役が話し合っていて決めていた。この白菊と権太の婚礼の貢物は権太家の強い希望で伊奈利神社の名物になっていた油揚げ1000枚となったが、白菊家への貢物がなかなか決まらなかった。というのも伊奈利神社へは全国から珍しいものがお供えとして集まっていたから、狐たちも口が肥えていた。その反対に西山の狐には野ネズミぐらいしか御馳走はなかったからだ。そこで相談役は伊奈利神社の宮司の伊呂具に相談していた。

伊呂具はそれなら稲作の最大の害鳥の雀は獲れるのかと聞いている。相談役は狐そのものは雀をそんなに食べないが、雀でよかったら1000羽ぐらいはすぐに獲れます。それなら白菊家への貢物は雀と決まったが、その雀をどうするのかと聞くと伊呂具は、
「その雀を炭火で焼いてタレをつけてそれを茶店で売る。これが伊奈利名物になれば農民や猟師が雀を捕まえて茶店に売りにくる。そうすれば害鳥の雀も減って農家には現金収入があり一石三鳥になる」

こうして白菊と権太の結婚式があったが、それを山の中腹の茶店で伊呂具が観ていると西山の勝山稲荷神社から出発した権太の行列も伊奈利山から出発した白菊の行列も白く光る狐火をゆらゆらさせてこれが狐の嫁入りだと誇示をしている。そして両家の婚礼が始まるとその狐火は一層光って歓喜の喜びが伊奈利山まで聞こえるような気がした。

 現勝山稲荷神社は向日神社の参道にあるが、このコラムの白菊が嫁入りしたのは元勝山稲荷神社で現の社殿の真裏にあり見落とししてしまいます。ここからの稲荷山は真東になり距離も約7キロほどと近い。画像は元勝山稲荷神社、現勝山稲荷神社、向日神社、元稲荷古墳の順になる。



元勝山稻荷神社

京都歴史裏のコラム・吉祥院天満宮と春房稲荷大明神・菅原道真の曾祖父、菅原古人と狐のお話し・11話

平城京から長岡京、そして平安京への引っ越しは皇族、貴族も大変だった。中には平城京に家族を置いて単身赴任する貴族もいた。それは長岡京は仮の都で10年も起てば京の都に遷都することが決まっていたので引っ越しの二度手間になるからだ。

その単身組には菅原古人(ふると)という貴族がいた。この古人は学問に優れ文章博士、大学頭を歴任していたが、退屈な役所勤めを嫌い造成中の平安京の監督や唐との外交問題を担当したいと桓武天皇に直訴していた。桓武天皇はこれを許して平安京の設計技師と任命していた。そのころ都の入り口に当たる九条大路、羅城門の位置も決まりこの九条大路から南を洛外としていた。古人は都の入り口で凱旋門の役割を担う「羅城門」の建設、それに洛外の設計担当(農地の区割り、かんがい用水)として九条大路から一町ほど南の場所に屋敷兼設計事務所を構えた。

この屋敷こそ現在の吉祥院天満宮になるがそれはこの古人のひ孫の菅原道真の時代の話になる。古人がこの地を選んだ理由はある日の夜のこと、長岡京へ帰る途中の西国街道を歩いていたが、いつも歩きなれている道なのに道を迷ったのか森の中に迷い込んでいた。古人は、

「これは狐に化かされているのか?」と思っていると白い着物姿の女が現れて、

「お役人さま、この地は代々私たち狐の一族が棲んでいる森になります。ここを整備されて田畑になったら人間とのいざこざも起こります」

「そうか~この地の先住民の狐か?、しかし、この森の木を伐採してそれを都の入り口の羅城門に使うともう決定している」

「ならば、我が子春房狐の病気が治るまで猶予をお願いします」

古人は学者であるが医学者も兼務していた。そこで古人はこの狐の子供の春房狐を診ることになったが、これは重病でこの森から追われたらこの子狐の命はないと判断していた。そこで古人は桓武天皇に洛外整備の事務所と私の家族を奈良から呼び寄せその家族の住む屋敷の土地としてこの森を使わしてほしいとして直訴すると天皇はこの狐の話を知っているのか、

「あい、わかった」

というので古人はこの狐の住む森を手に入れていた。その森の一部に菅原家一族15名が住む屋敷を造っていた。これを聞いたこの狐の母親とその一族の長は古人に、

「ありがとうございました。私達の一族は今後1000年間、この菅原家の子孫繁栄と家内安全をお守りします」とお礼をいっていた。

その古人の子で菅原清公が遣唐使として唐へ向かい、その帰りの途上の深夜大嵐に遭遇して船が転覆したが、その船に潜んでいた狐数匹が海の神様の吉祥天女に化けて海に浮かんでいる板切れを集めて清公に渡し、そして狐火で仲間の船に清公の遭難場所を知らせていた。それを聞いた父の古人は屋敷内に「春房稲荷大明神」を建立して菅原家の守り神としていた。

その後、この助けた狐は海の神様の吉祥天女に化けたことからこれも屋敷内に「吉祥天女」のお堂を建立していた。このことからこの地を今でも「吉祥院」と呼んでいる。そしてこの清公の孫が菅原道真でその後、この屋敷が吉祥院天満宮となった。

その春房稲荷大明神の社殿は菅原道真公を祀る本殿に比べたらかなり小さいが、本殿の真横に並び、社格は吉祥院天満宮は村社だが、稲荷神社は最高位の「正一位」となっている。この桓武天皇と伊奈利神社の伊呂具との出会いがなかったら天皇も狐ごときを助けるという古人の直訴の願いもかなわなかったことになる。そうすると清公も海のもずくとなってその後の孫の菅原道真公はこの世には存在していなかったことになる。



春房稲荷大明神

二代目稲荷神社宮司 荷田生成 車折神社は狐の芸能学校だった。1200年前の人口の水路は今でもある

二代目稲荷神社宮司 荷田生成 車折神社は狐の芸能学校だった。1200年前の人口の水路は今でもある。

伊奈利神社の宮司、秦伊呂具は785年3月1日に95歳で亡くなっていた。後継ぎは長男の生成(いなり)に伊呂具の生前から決まっていたが、長岡京の桓武天皇はこの伊奈利神社に従二位の位を与え、そして荷田の姓を与えられた。さらに社名を稲荷神社によせと命令していた。

従二位とは最高位の正一位、従一位、正二位の次の位になる。これで「従二位 稲荷神社」二代目宮司の荷田生成として稲荷神社創設75年目のスタートになった。生成は秦の血筋で嵯峨嵐山で土木工事を請け負っている秦酒公の技師見習いとして15歳から35歳までの20年間修業させられていた。その間に土木工事の他には造園技術も覚えて奈良から長岡京への引っ越しの際には貴族の屋敷、それに寺院の庭の造園もしてきた。そして伊奈利神社に帰ってきてからは伊奈利山の参道の整備に力を入れていた。

ある日、生成は桓武天皇から平安京造営の相談を受けている。天皇は、

「丹波の木材を嵐山まで筏で運ぶが、その後の陸路の道が悪くてどうも10年では都ができない...」生成は、

「それなら嵐山から都の中心部まで水路を掘って原木の筏を流せばいい。それに木材を水揚げした後はその水を中心地から西南に元の桂川まで戻せば壬生、西七条、唐橋、吉祥院の田畑のかがい用水にもなります」

「ほお～さすがに伊呂具の息子じゃ!考えることが大きい!」

「はい、京都盆地は北と南の標高差が約55メートルもありますから、これを上手く使えばかがい用水、それに大雨などの治水、上水に下水と人間がこの水を上手くコントロールできます」

「そうか～ほなこの河川工事は生成に任すが、神社の宮司はどうする?」

「これは私の子供もいるし、それに神官と巫女の大学の卒業生も100名を超えました。もう、ほっといても神社の運営はできます」

稲荷神社は商売上手とはいわれているが、一方では大学教育に力を入れている。さらに稲作にはかせない天文学も教えているが、これは何も人間だけでなく夜学として狐にも門戸を広げていた。

こうして生成は嵐山左岸から水路を引く工事をして三か月目、桂川から数百メートルのところで工事用の大八車の車輪が折れる事故が続発した、それに工事人夫が怪我をしたり、はたまた食中毒で倒れたりしていた。そこで生成はこれは狐の仕業と思い、工事現場に神棚を置いてそこに油揚げを10枚供えていた。

この10枚は夜の内に持っていかれてどの狐の集団かは判断ができないが、とりあえずこれを一か月続けたある夜に生成の夢の中に狐が現れて、

「生成さま、いつも美味しい油揚げをありがとうございます。私は全国の旅芸人の元締めをしている狐座の女狐で斎王女と申します。生成さまの水路の工事の真下に我々の命でもある芸能学校の能舞台があるのです。それに森全体が狐の寮になっているために全国に公演に出かけている狐の帰るところもありません。どうかもう少しだけ水路を南か北へ...」

「いや、あの水路は原木の丸太の筏で直線の川でないと流れない。もし流れが曲がっているとそこに原木が衝突して溜まり大渋滞を起こす。とはいっても我々が先住民の狐の生活を脅かすことはできない」

「でも...なにかいい方法は？」

「それなら水路の北側にそれなりの森と神社を造成するからそこに芸能学校と能舞台を引っ越ししていただけないか？その費用も私たちが負担いたします」

こうしてできたのが「車折神社」でももちろん今でも芸能上達の神社として有名になっている。この神社の前の道がその後の三条通でこの三条通り沿いに嵐山から市内中心部の千本三条まで一部暗渠になってはいるが今もあります。この水路は明治時代に山陰線ができて蒸気機関車で木材が運ばれるまで水路として利用されてきた、そしてこの木材の集積場にできたのが現JR二条駅になります。

ちなみに機関車が走ってからはこの水路は利用されなくなり嵐山から三条まで多くあった木材問屋は消えたがまだ〇〇木材という会社は三条通り沿いには点在している。そしてその広大な木材置き場の跡地にできたのが東映撮影所(東映映画村)、大映撮影所、松竹撮影所になります。1200年前の人口の水路が今も同じコースで流れているが、もう誰もこのことは知らない。

嵐山

渡月橋



取水口

1200年前に都を建造する原木を流した、ここから千本三条までの人工河川



伏見稲荷大社の名物・稲荷寿司、雀の焼鳥、若狭の鯖寿司、招き猫のルーツは「招き狐」...稲荷発「若狭の鯖寿司」

伏見稲荷大社の名物・稲荷寿司、雀の焼鳥、若狭の鯖寿司、招き猫のルーツは伏見稲荷の「招き狐」の置物だった。若狭の鯖寿司も荷田生成が考えたものだというお話。 13話

長岡京への遷都から10年後には平安京に遷都されるという噂から奈良の商人も農民も長岡京には移住せず直接京都盆地への移住を始めた。これは奈良から莫大な経費を使って長岡京に引っ越しをするより先に京都盆地に移住したほうがいい土地が手に入ると思ったからだ。

まだ長岡京に遷都されてから2年しか経たないのに農民は洛外の土地を、商人らは平城京と同じ碁盤の目の街並みになるのを予想して奈良で商売していた場所に店を出したいとまだ造成中なのに長岡京の役人に交渉をしていた。こうして京都盆地に人々が住み始めると伏見稲荷への参拝者もうなぎ登りに増えていた。

そのころ稲荷山の土を持ち帰ると家内安全、子孫繁栄になるという噂が広がり境内の土を持ち帰る輩が増えてきた。そこで門前でお土産屋を営んでいた土師嘉楽という人物がこの稲荷山の土を使って土人形を造って売っていた。これは伏見人形といって土を素焼きにして顔料で色付けした素朴な人形だが、当時としては画期的な子供へのお土産になっていた。

江戸時代にはこの土人形が発展して博多人形になるが、この当時は稲荷神社のお土産だから狐でそれも左右一対になって向かって右の狐は左手を左の狐は右手を上げているのでこれを「招き狐」といわれて右手を上げているのは「金運」を呼ぶ、左手を上げているのは「客」を呼ぶとなっていた。

ところがいつのまにかこの狐の土人形を神棚にあげるという風習になり子供の玩具から神具へと位があがってしまった。それはそれなり需要はあるが、子供のお土産がなくなりこの土師嘉楽は鯉、熊、猫、犬、お姫様、お殿様などの土人形を作っていた。これが当たり前で稲荷神社の参拝客は増え続けていた。そして全国に稲荷神社への参拝の講もできた。

村で毎月積み立てをして村民の代表が「五穀豊穡」「子孫繁栄」「家内安全」の願いをするのだが、本当の目的は茶店で稲荷名物の「雀の焼鳥」「稲荷寿司」「若狭の鯖寿司」そして巫女さんのお神楽、巫女さんのお酌で酒を飲む。足洗と称して門前の旅籠でドンチャン騒ぎ、そしてお土産は嘉楽が作った土人形となった。

この嘉楽はさらに商売繁盛の稲荷らしい人形を考えていた。先の「招き狐」の種類は白狐、銀狐、赤狐、茶狐、黒狐だったが、これに代わる動物がないかと考えた結果、猫も狐もネズミが大

好物、それに猫も三毛猫に白も銀もあると思いついて招き狐から「招き猫」へと頭をチェンジしていた。これがまた特に商売人には大うけして生産が追い付かないほど売れてまた一つ稲荷神社名物が増えていた。

先の稲荷名物の中に「若狭の鯖寿司」というのがあるが、これは稲荷神社の二代目荷田生成が琵琶湖を使ったルートで若狭湾から新鮮な魚を運べないかと考えていた。そこで生成は陸路で大津、そして船で高島郡、そこから山を越えて若狭へという道を土木工事をして開発していた。この若狭の新鮮な鯖を一塩して樽に詰めて若狭から峠を越えて高島郡の港に陸路で運ぶ。そこから船で大津まで、そこから山科～稲荷神社まで陸路の一昼夜(24時間)かかるが、塩漬けされた鯖はい塩梅になる。それを酢に漬けて「若狭の鯖寿司」として神社直営の茶店で販売するとこれもまた大繁盛で長岡京の皇族や貴族までが我先にと稲荷神社へと参拝してきた。

若狭から京都までの鯖街道というのは二通りあるというが、実はこの生成が通した鯖街道は平安京遷都の8年も前からあることになる。さらにこの琵琶湖の船を使っただけの航路は敦賀まで延長されて北海道から運ばれてくる昆布や鰯などの海産物、農産物は敦賀の港に、敦賀からは陸路で琵琶湖に、大津からは陸路で京の都に運ばれることになるが、京料理そのものの材料はすべて生成が開発したルートのおかげだといってもいいことになる。

今も昔もおなじ稲荷名物は、稲荷寿司、雀の焼鳥、鯖寿司、招き猫になる。それにもう一つのお土産は「狐のお面の煎餅」になるが、これは現在取材中です。

 招き猫のルーツは招き狐だった。



羅城門の高さが1 m低かった歴史は変わっていた。唐橋稻荷（鎌達稻荷神社）は安倍晴明の守り神だった。人気のパワースポット

羅城門の高さが1 m低かった歴史は変わっていた。唐橋稻荷（鎌達稻荷神社）は安倍晴明の守り神だった。人気のパワースポット 14話

羅城門の建設は菅原古人に決まっていたが設計は平城京の羅城門を設計した工房が担当することになった。その設計図では高さは21 m、幅35 m、奥行きは9 mだったが、平城京の羅城門は高さ20 m、幅31,5 m、奥行き10 mで平城京の羅城門よりは高さが1 mも高かった。

古人は土木が専門だが高さの割には奥行きが9 mと不安があると考えたがなにせ平城京の羅城門を設計した事務所で桓武天皇もこれでいいとしたものだからこの設計図通りに建設を始めていた。骨格の柱と屋根の板張りが完成したころ稲荷神社の荷田生成が差し入れの「若狭の鯖寿司」を持って工事見舞いにきてくれた。お供は神職に化けた若い狐の3名（匹）で夜は夜間の稲荷大学で設計の勉強をしていた。これは稲荷神社でも山門（桜門）の建造が予定されておりその勉強も兼ねていた。

その狐に化けた神官は屋根の上になんなく登り北西の愛宕山からの風を肌で感じている。やがて風向きが南西に変わり西山連峰の南の端の天王山と男山八幡宮の間にある淀川の水面から都に入ってくる風も肌で感じていた。そして狐の神職は宮司の生成に、

「台風や大風は北西と南西からこの羅城門を直撃します。高さが21 mに奥行きが9 mなら少々無理になります。できたら高さを1 m低くしたほうが風には強くなります」

これを聞いていた古人も同感していたがこの話を設計士にどう話すかは結論がでなかった。こちらは神職だが正体は狐であってその狐の動物の勘と平城京の数々の公共の建物を扱ってきた名設計事務所とでは天皇への信頼が違うからだ。その一週間後に桓武天皇の御一行がこの工事の進捗状態を視察しにきた。天皇は工事現場責任者の古人に、

「夕べ変な夢を見た。その夢には稲荷神社の神社の白狐の白菊というのが出てきて、この羅城門の守り神に稲荷神社の摂社をお祀りしてほしいとっている夢だ」

古人は天皇に、

「それでどう返事したのです？」

「いや～あいにくこの門の二階の仏間には「兜跋毘沙門天」を配置すると決定しているという和白菊は悲しそうな目をしていた」

それを聞いた古人は話のきっかけができたと天皇にこの羅城門の高さに対して奥行きがない。高さを1 m低くするほうがいと進言したが、天皇は、

「平城京より平安京の羅城門のほうが1 m高い、朱雀大路も奈良より10 m広い80 mと自慢し

た書簡をもう遣唐使に持たしている。もし唐の渤海や新羅からの使節が来て20mしかなかったら日本国の恥になる」

古人の願いは却下されたが、羅城門から入ったすぐの左側に稲荷神社公認の「唐橋稲荷」の建立は許されていた。その後、何回もの台風に耐えてきたこの羅城門も建立20年後の大嵐で倒壊していた。そして再建されたが元の設計図を基にまた21mの門が建立されていたためにまた大風で倒壊した後、現在まで1000年以上も再建されないまま唐橋稲荷の唐橋のみが地名として残っている。

その羅城門倒壊後は守り本尊だった「兜跋毘沙門天立像」(国宝)は東寺に引き取られた。そして唐橋稲荷は朱雀大路を北へ四町ほど上がった安倍家に引き取られた。この辺りは堺からの鍛冶屋など刃物製造業の工房が多かった町内だったことから名前も「剣達稲荷神社」→「鎌達稲荷神社」と変えら「白菊稲荷神社」とともに長く安倍家の守り神としていたが、明治時代に旧国鉄の東海道本線の真上にあつたためまた引っ越しを余儀なくされている。現在は唐橋小学校横の西寺址公園の一角に祀られている。

この安倍家とはこれから100年ほど後の子孫が陰陽師の安倍晴明となる。したがって安倍晴明もこの屋敷で育ったというから元唐橋稲荷神社の鎌達稲荷神社に毎日のように拜んできたこととしてこの神社を「安倍晴明ゆかりのパワースポット」として参拝者には人気があります。

 羅城門の模型など、今年の11月ごろから再展示される予定。これを機会に羅城門ブームが起これこのコラムも売れるかも？



『古建築模型 - ひながた - のつくり手』

http://blog.livedoor.jp/kokentiku_hinagata/archives/16641206.html

空海と伏見稲荷大社・空海は稲荷大学で2年間自然科学を学んでいた。神泉苑の雨乞いでスーパースターになった空海

空海と伏見稲荷大社・空海は稲荷大学で2年間自然科学を学んでいた。神泉苑の雨乞いでスーパースターになった空海

平安京遷都まであと数年となったころ長岡京の桓武天皇の皇子の伊予親王が一人の若者を連れて稲荷神社に参拝にきていた。そして15歳のその青年を稲荷神社で修行させてほしいとっている。その青年は空海といい2年後には比叡山の延暦寺に修行に入るというが、その前に稲荷神社で神道の勉強もしたいという。当時は仏教も神道もそんなに垣根はなく宗教という枠の中のことでそんなに珍しいことでもなかった。

稲荷神社二代目の宮司荷田生成(いなり)はこれを快く歓迎して稲荷大学の入学を許している。当時はこの15歳という年から親元を離れて修行するのが当たり前だった。生成も15歳から20年間も土木と造園の修行をしている。この生成の男子の子供二人も親元を離れて長男は宮大工、次男は菅原家で貴族の勉強をしていた。これは初代の伊呂具の教えで「100年先の子孫の繁栄を願うならなにもしなくてもいい、ただ、1000年後の子孫の繁栄を願うなら家業以外の技術や思想を勉強しなくてはならない」という教えからだった。

昨今、日本を代表する会社でそろそろ創業100年を迎える企業の業績が悪くて社会問題化しているが、それは伊呂具がいう「家業以外の技術や思想」を取り入れなかったのが原因ともいえる。これは人間にもいえることで仕事一筋でやってきたが退職すれば何もできない人でやがて痴呆症になるのが関の山だ。つまり、1000年先のために今何をするかになる。

稲荷大学に入学した空海は稲荷山の四辻にある教室から毎日雲の動きを勉強していた。ここからは南は奈良の山、西南には大阪湾、そして西には六甲山、さらに北西には愛宕山と風と雲が京都盆地に入ってくるのがよくわかる。奈良方面からくる雲は枚方辺りの山で遮られてここで雨になる場合が多い。四国からの雲は六甲山と天王山から西山連峰、丹波からの雲は愛宕山とそれぞれ特色があった。しかし、この稲荷山は標高300mほどでたとえこれらを参考にして雨や嵐の予報をしても12時間後程度のことで空海は満足していなかった。

そこで空海は京都で一番高い愛宕山に稲荷大学の自然科学部の開設を生成に進言していた。生成はその話を桓武天皇にいうと天皇は「この愛宕山にある愛宕権現白雲寺は征夷大将軍の坂上田村麻呂が勝軍地蔵を奉納した寺で坂上田村麻呂の許可がいる」というので空海は田村麻呂に会いにいった。この坂上田村麻呂こそがその昔に狐に助けられて新宮稲荷神社を建立した人物だった。

これが縁で愛宕山に稲荷大学愛宕山自然科学部を設立していた。ここからは瀬戸内海や四国の上空と思われる雲の動きがよくわかる。それに丹波、丹後は地面もわかる。つまり、台風、大風の雲の動きを記録してその動きの癖と確率で京都盆地に雨や嵐が来る予報も2日～4日ほど前からわかるようになっていた。この自然科学部には稲荷山の学生狐10匹が選ばれて毎日雲と風の動きを記録していた。

この狐らは空海にもし沢の水が枯れていた場合にどこに湧き出る水の水脈があるかの見つけ出し方も教えていた。これは狐が沢蟹が好物で沢の水が枯れたら沢蟹が石の下に潜んでいる場所を見つければそこが水が湧き出る水脈になるというものだ、空海は試しに杖で沢蟹が隠れていた場所を突くとそこから水が噴き出してきた。空海はこの狐の話をヒントに地質学も学び水脈と温泉源の因果関係の理論を確立していた。

空海は2年で稲荷大学を卒業して神官の免許を得ていた。そして17歳の春に比叡山延暦寺の最澄の弟子になった。その後、修行のために全国を旅するがそのあちこちで水脈や温泉を発見して「空海が見つけた湧き水、温泉」というのは1000か所は下らない。さらに空海は官寺の東寺の住職を任命されていた。そのころ都は雨が降らない飢餓寸前になっていた。そして東寺の空海、西寺の守敏との雨乞い合戦になったが、守敏はただただ金堂で護摩木を焚いて祈祷するのみで2日目には熱中症で倒れてしまった。

空海は愛宕山の狐が瀬戸内海の雨雲を見つけてそれが京都盆地に来る時間を計算してそれを愛宕山からのろしで知らせるのを待っていた。そして空海は神泉苑の龍神を祀るお堂で一応西寺の守敏と同じように護摩木を焚いて祈祷の振りをして一心に拝んだ...もちろんこの雨乞いのパフォーマンスは雨を待つ農民どころか皇族、貴族までに宣伝されており、観衆は1000名を超えていた。やがて雲一つなかった空が真っ黒になり竜が暴れるごときの雨が降ってきた。この瞬間に空海は全国ネットのスーパースターになった。

 神泉苑、東寺など、2016年8月3日撮影

善女竜王社



神泉苑

空海がここで雨乞いの祈禱をした



善女竜王社・音川伊奈利

京の暴れ川・吉川(紙屋川・天神川)...吉川大明神、北野天満宮と狐と鹿のお話し・16話

金閣寺のある北山(標高500m前後)から京都市内西部を流れる川だが、北山から兩岸を岩で囲まれ深い谷にあり、この流れは都会にはない溪谷のような急流になっている。衣笠山から北の森(現、北野天満宮)の中を通り丸太町辺りまで谷底の川だが、ここから右に曲がっている場所でやっと都会の川の顔を見せている。この吉川の由来だが、この冷たい川の水を利用して和紙を製造している工房が数軒あったことから「紙に善し川・吉川」その後「紙屋川」「天神川」となっている。

稲荷神社はこの吉川の和紙を利用していたが、この和紙製造業の「紙秀」が和紙を納入めるために稲荷神社を訪れて宮司の荷田生成に話をしていた。紙秀は、

「近頃よく紙屋川が右に曲がっている浅瀬に狐の死体が浮いているのをよくみかけます」

「紙屋川といえば北の森の狐になるが怪我をしたのか？それとも病気なのか？」

「いえ、怪我の痕は崖から落ちた擦り傷程度で、病気のように衰弱はしていません」

「ふむ、狐が崖から誤って落ちることはない？で、何匹ぐらいか？」

「そうですね～ここ1年ほどで私が見つけただけで8匹になります。それで川の東側に埋めて狐塚としています」」

これを聞いた生成は狐の全国連合会会長の白狐の5代目白藤に報告をしている。白藤は早速部下の狐に調査の命令をしていた。この北の森(後に北野天満宮)とは京都五大森の一つになるが、残りの森は糺の森(下鴨神社)、藤の森(藤森神社)、宇賀の森(宇賀神社)、蔵王の森(蔵王堂)となる。その森にはそれぞれ先住民の狐の一族が棲んでいた。

そのころから今まで紙屋川は氾濫したことがなかったが、狐が死んでからはこの狐塚から右に曲がっているところから少しの雨でも氾濫していた。生成は嵐山から真東に平安京を造設する原木を都の中心部まで運ぶ水路を掘っていたが、その大工事でも水の折り返し地点にもう少しの西大路まで進んでいた。しかし、この紙屋川の氾濫で西ノ京、西院辺りまで水没、そしてその生成が造っていた河川は北から流れ来る土砂で埋まってしまい大損害が発生していた。

人々はこれは北の森の狐の祟りだと騒ぎなんとかこれを鎮めようとこの狐塚に稲荷神社の境外摂社の吉川大明神をお祀りしたいと生成に「紙秀」らの陳情団から申し入れがあった。こうして786年の10月吉日に吉川大明神が建立され。(丸太町紙屋川下がる)

一方、北の森の事件の真相の報告が白藤から生成にされている。それによると狐を紙屋川に転落

させたのは鹿であった。この鹿は元々紫野の草原を縄張りにしていたが、平安京の大内裏(御所)の工事と左京の住宅地の開発で餌の草原がなくなり鹿は西へ移動して北の森を見つけたという。そこには先に狐一族が棲んでいたがその森の水場でもある池は鹿が占領して水が飲めなかった。そこで狐は北の森の西側を流れる紙屋川の水を飲もうとしたが、水面まで約10mの絶壁断崖になっている。狐は恐る恐る崖を降りるがそれを鹿がみつけてからかい半分に鹿の角で後ろから押しつけて狐が転落して急流にのまれるというものだった。

そこで生成は鹿の親分と面談することになった。生成は此の地は狐のものでどこかへ移動してほしいという鹿は、

「そんな～そもそも紫野の地も我々鹿の物だったが、それを人間が追い出した」

「そか、それはすまん、なんなら北山の衣笠山から御室、それに双ヶ岡には草が豊富にあるからそこに引っ越しをしないか？」

「いや、あの地は古代の古墳が点在しているため立ち入り禁止になっている。それに時々武士の見回りが来る、もし見つければ弓で討たれる」

これを聞いた生成は桓武天皇に直訴していた。生成はこの北の森の狐と紫野の鹿の話をしてから、どうか鹿に住む許可を与えてほしいという天皇は、

「あい、シカとわかった」

これは1200年前の話になるが、この鹿の子孫は今でも衣笠山から御室にかけて時々、京福電車で跳ねられたとか自動車と衝突した。また立命館大学のキャンパスに迷い込んだという地元の京都新聞にホットな話題を提供している。その後、この北の森は菅原道真公を祀る北野天満宮になり、そのころから天神川となったが、この紙屋川そのものは当時の流れのままに都会の中の渓谷としてパワースポットとなっている。

 紙屋川の渓谷、この左岸の岩を基準にして秀吉は全長24キロの御土居を造成したという説もある。吉川大明神



紙屋川 1 わら天神辺り



菅川大明神
丸太町紙屋川下がる

一つ積んでは母のため...賽の河原の物語...西院の河原...京の都の左京は発展して右京が衰退したもう一つの理由 19話

平安京遷都の2年前から洛中への移転希望者の募集が始まっていた。羅城門から大内裏までは南北の幅80mのメイン通りの朱雀大路がある。この羅城門から北へ向かって右側（東）が左京、左側（西）が右京となっていた。当然ながら朱雀大路に面した一等地は希望が多くて豪商や貴族が門を構えていた。そして左京の朱雀大路から鴨川の間住宅地も人気があったが、右京の方はまったく人気がなく整備された土地も荒れてきた。

1200年後の現在でいう右京とは南は九条通りから北は一条通りの5,2キロになる、東は朱雀大路から西の葛野大路の2,2キロになる。この右京と左京はまったく同じ面積であるが、この右京には歴史的な大寺院は一つもないことがわかる。強いていえば江戸時代の壬生寺ぐらいであるがこれは朱雀大路に面している。一方の左京の方は京都市内の有名寺院とその塔頭で石を投げれば必ずお寺に当たるともいわれている。

桓武天皇は此の地はまったくの新天地であり、右京、左京との差がないのに商人も職人、工人も右京を嫌う意味が分からなかった。そこで桓武天皇は稲荷神社の二代目宮司の荷田生成にこの原因を調査せよと命じていた。生成は馬に乗ってお供2名を連れて稲荷神社から建設中の羅城門から朱雀大路を北へ、この平安京の南北の中心となる四条通りの北東角にはもう官営の年貢を納める役所が営業していた。この時期には長岡京かこの造成中の都か近いほうに年貢を納める制度になっていた。

この朱雀大路と四条の交差点から西へと馬を走らせている。この四条通りもここからが道路の幅という杭は打ってあるものの道路というほど土は踏み固められていなかった。やがて西大路に入るがこの辺りから大きな石や砂利ばかりの河原になる。鴨川が現代のように東山に沿って南へ直線に流れを人口的に変える前は都の中心の北東から南西に斜めに鴨川があった為でこの辺りが本流の深みであったことからここに山の砂利が流れ付き堆積したものであった。この河原は幅100m長さ500mほどでやはり斜めになっている。

さらに10分ほど馬を走らすと都の西の端の葛野大路になる。ここも境界の印として杭があるだけで整備はなにもされていなかった。そこからさらに西には紙屋川（天神川）の橋があり、それを超えると西の洛外で梅津村に入る。この梅津村は1400年前に帰化人の秦一族が嵯峨嵐山に住みついた後に開発された村で秦一族の守り神松尾神社の氏子になっていた。その先の桂川を超えたところに松尾神社がある。

生成は松尾神社の宮司秦信麿に挨拶をした後に、

「桓武天皇の命により都の右京があまりに人気がないので調べろと言われて来た」というと信

磨は、

「それね～あの賽（西院、さい）の河原に毎夜、妖怪というのか？奇妙な化け物がでるとい
ので...」

「それは、噂か？」

「いや、それは噂ではなくてこの松尾村や梅津村の農民が何回も見ている。それにワシも牛ほど
ある奇妙な動物に追いかけられたことがある」

「ほう、その賽の河原とは？」

「これは宗教でもないなんかの呪いで、早くして死んだ子供や子供を亡くした母親、またその反
対に早くして母親を亡くした子供が亡くなった母を供養するために河原の石を積み上げて供養塔
にして拜むというものだが、その供養塔ができる寸前に鬼が来てその供養塔をつぶすというも
のだ」

「それで河原のあちこちに石の塔があったのか？、しかし、それならその化け物は？」

「ささ、それが鬼となっている。しかもあの賽の河原は右京の中心地ということから右京には鬼
が棲んでいるという噂が広まり...」

この話を聞いて帰る途中にお供で神職に化けていた狐二匹が、

「生成さま、その鬼の正体を探ります」

そして、その2匹の狐は賽の河原でお供を離れた。

3日後にこの狐は報告に来ている、狐は、

「生成さま、あの化け物の正体は狸でした。その狸は春日の森に長年棲んでいました。ところが
付近の沼や雑木林が刈り取られて餌がなくなり、そこであの賽の河原の石を取り除けばその下
にはまだ水があり、そこには狸の好物のエビやカニ、それに貝のしじみ、タニシ、からす貝など
がいてそれを食べていたそうです。その取り除いた石があので供養塔になったのです」

「ほう、なるほど...それであの妖怪とか化け物は？」

「それは、人間が夜に近づいてくると脅かしのために化けていたのです」

早速、生成は春日の森の狸の親分に狐を通じてアポを取っていた。その狸の親分とは豆吉という
可愛い名前だが、名前に似合わず獰猛な顔をしていた。生成は、

「都の造成で豆吉さんらには大変ご迷惑をかけている」というと豆吉もこの人間は獣の気持ちが
わかると気を許していた、そして、

「いやいや、これも時代の流れです...」

「そか、狐に聞けばあの賽の河原の石の下の生き物も減っていると聞く、そこで天皇の領地で北
白川に瓜生山という標高300mほどの山がある。そこには谷も池もあり他の先住動物もいない
という。その瓜生山を豆吉さんら一族200匹に貸し与えるという桓武天皇の書状がここにある
」

「はい、そのお話をありがたくお受けします」

こうして豆吉一族は瓜生山に引っ越しをした、その後ここは狸谷と命名されて狸谷不動院が建立されている。桓武天皇はその賽の河原に高さ3 mはあるという石の子安地蔵を祀り、小さな子供とその母親の供養をしている。その賽も現代は「西院、さい、さいいん」と地名が残り、この子安地蔵も西院交番所の東の「高山寺」にある。ちなみに狸が棲んでいた春日の森は「春日神社」となっている、そしてその前の道路は「佐井通り・さい」となっている。

📷 賽の河原、子安地蔵、





養の河原の子安地藏

高山寺

瓦職人のストライキで大極殿と東寺。西寺の建設が大ピンチ!。今熊野神社は鴨川より100mも上にある

瓦職人のストライキで大極殿と東寺。西寺の建設が大ピンチ!。今熊野神社は鴨川より100mも上にある

都を造営するには木材が重要な役割をするが、もう一つ宮殿や羅城門、それに官寺の東寺と西寺に使われる瓦が必要になる。この瓦は重くて遠くで製造すれば都までの輸送の手間が半端ではなかった。そこで都の近くで良質な粘土が取れる山はないかと瓦職人に聞けばいいが、その瓦職人は奈良から離れたくないとストライキを起こしていた。これは平安京に限らず長岡京への遷都の際も奈良の瓦職人は天皇に協力をしなかった。

瓦職人の言い分は長岡京は仮の宮でいずれ瓦を使った宮殿や大寺院は取り壊される。京の都は三方を山に囲まれているから有力寺院の多くは山の中腹にお寺を建立する予定だが、そんな山の上にまで重い瓦を運ぶのはかなり重労働になる。さらに高い山の中腹のお寺の屋根では転落の危険が付きまとう。結局のところ長岡京ではこの瓦職人がいなくて宮殿も寺院も檜皮葺の屋根しかなかった。(この瓦職人の背後には桓武天皇に反対する勢力があったという説もあるが、これはいづれ...)

そこで桓武天皇は奈良の瓦職人組合と瓦製造組合に罰として当時の税金(住民税)であった年貢を労役で支払うようにと命令をしていた。それによると瓦職人及び瓦製造業の職人の成人男子(20～60歳)に対して労役年120日としていた。これは水害などの災害があった年でも年60日ほどだから相当厳しい労役だった。もちろんこれは天皇の命令だから逆らえばすぐに武将が兵を連れてやってくる。(労役、年貢を土木工事などの日数で払う。弁当と交通費は自弁になる)

さすがの瓦職人組合と瓦製造組合もこれには降参して京の都への移住を決めていた。そこで桓武天皇は稲荷大学の学生らに東山で瓦にできる良質な粘土はないかと相談をしてきた。これを受けて稲荷大学の夜間部の狐の学生が調査をしていた。この狐は元々穴を掘って暮らしているのだから、どこの山が花崗岩、どこの山が粘土質かは簡単で一か月ほどすると稲荷神社の宮司で学長の荷田生成に狐の学生が報告にきた。

学生は、

「東山で二ヶ所の粘土ポイントを見つけました。Aポイントは、九条大路～七条大路の山の中腹に瓦に適した良質の粘土があります。Bポイントは、七条大路～五条大路にかけてはAよりさらに良質の粘土でこれは陶器に向いています」

「ごくろう、それぞれの粘土の埋蔵量は？」

「ここの粘土は三層にも五層にもなっていますから人間がここ100年間掘っても大丈夫です。」

それに山の中腹ですから瓦を焼く登り窯も簡単に作れます」

「釜を焼く薪は？」

「これは粘土質の中腹から鴨川までの間にある雑木林で十分ですが、都造成中の原木からでる端材も利用できます」

「ふむ、その粘土を取った山、それに雑木林を取った後はどうなる？」

「これは簡単で東山の麓の東大路、または新大和街道として整備できます。中腹の山こそその後には泉涌寺、今熊野神社、智積院、三十三間堂、清水寺、高台寺、八坂神社、知恩院、1100年後には第一日赤病院、国立博物館、などを建立すればいいのです」

「ほう、そなたは未来の京都の歴史も読めるのか？」

早速、生成はこのことを天皇に報告すると天皇は、

「生成、ごくろう、それではAポイントを官営の瓦工房にする。Bポイントは民間の清水焼の工房地区にする」

「天皇、その東大路から官営の西寺、東寺、羅城門へ瓦を運ぶのには鴨川に九条の橋が必要になります。その橋も山の中腹から九条大路へと架けるのですが、これは木材では強度が、そこで石の橋を造りたいのですが？」

「そか、ではその橋を「大石橋」と命名する」

こうして奈良をはじめ大阪の枚方、四国からも瓦製造職人、瓦職人、それに陶器職人までが新しい都に引っ越しをしてきた。こうなるとこれらの職人が住む家も必要になる、そして日ごろの日用品、それに食料を売る店も全国から押し寄せて都は活気づいてきたが、これらはすべて朱雀大路から東の左京に集中していた。

元々洛中には畑は許されていたが、水田は許可されていなかった。しかし、都に人が増えるにしたがって米や野菜の不足が目立ち始めていた。そこで右京に限り水田を許可された。灌漑用水は生成が掘った西高瀬川がある、それに都の中だから都人の百姓という優越感もある。また若者たちも繁華街に近いということで全国から農民の移住が増えていた。それが壬生村、西京極村、西七条村、八条村、唐橋村となる。東大路から九条大路への大石橋は今でも石の橋、それに地名にもあります。

...東山には36峰あるといわれているが、実際には大小併せて100以上あります。その標高100mくらいの峰の頂上は今熊野神社の境内にそのまま残っているの也有ります。この神社と前の東大路こそが瓦の粘土を取った後になります。戦後の住宅不足にはさらに上に掘られてその掘られた跡が東大路から山までの住宅地になっています。

 今熊野神社



峰の頂上



ここが東山の峰々だった証拠で山の高さは5mほど…

今熊野神社

近江八幡の牛追い少年が社長・日本初の運送業「日本通運」の許可は1200年前から...年貢を運ぶ日通の牛貨車・JR西日本の敷地内にある、赤手拭稲荷大明神・牛ヶ瀬・荷田伊織...

近江八幡の牛追い少年が社長・日本初の運送業「日本通運」の許可は1200年前から...年貢を運ぶ日通の牛貨車・JR西日本の敷地内にある、赤手拭稲荷大明神・牛ヶ瀬・荷田伊織... 21話

朝から稲荷神社の境内では神職や巫女が大騒ぎしていた。その原因は団体のお参りがあったが、それが少年一人と大きな牛が7頭も本殿に向かって一列に並びお参りしていたからだ。二代目宮司の生成(いなり)もこれには笑っていた。

生成はこの少年に茶店で朝飯を食おうと誘ったら少年は満面の笑みで頷いている。牛は1本のロープに繋がれているだけでそのロープの先を松の木にくくると牛らは行儀よく休息をしていた。

生成はこの少年に、

「どこから来た？」

「はい、近江の近江八幡から来ました」

「なんのために？」

「それが〜とりあえず稲荷神社へ行けという父母の遺言で...」

「遺言？家族は亡くなったか？」

この少年は牛吉といい10歳だという。この家族は8名でなにやら流行り病で牛吉を残して全員亡くなっていた。この近江八幡では20歳以下の家長は認められていなかったのも牛吉は養子に出される予定になっていた。ただ、その養子先の親戚が牛を売買する「ばくろ」でこの少年が育てた牛が売られることになる。それが嫌で家出してきたのだという。生成は、

「ほな、なぜ？父親はここに行くようにと聞いた？」

「父は15歳の時から3年間ここで勉強をしていたのです、だから私も父と同じように勉強をしたいのです...」

「ほう、父親の名前はなんていうのか？」

「はい、百姓の留吉といいます」

「留吉、おお〜たしか〜稲荷大学農学部を卒業してから親の農家を継ぐとっていた男だ!」

この留吉は水田もしていたが、牛など生き物が好きで牛を飼ってそれを農家に貸していた「牛借」もしていた。つまり、農繁期の牛のリース業であった。この頃は戸籍登録がなければ都で農業も商売もできなかった。そこで生成はこの牛7頭で東寺建立の材木を運ぶ「運送業」の免許を桓武天皇に申請していた。そして牛吉を生成の養子ということにして運送会社の社長にしていた。この申請はすぐに認められて日本最初の運送業の免許が認可されていた。(この7頭で許可されるが、この7台のトラックでの運送業の許可台数はは今も同じ)

桓武天皇は、

「そか、10歳の少年が牛を7頭も追ってよくぞここまで来た。その少年の牛の牧場に桂の下津林の草原を与える、その牧場の地名を「牛ヶ瀬」とする。運送会社の名前は「日本通運」とする。それに宮司の養子となるのに牛吉では...そう、伊織、荷田伊織に命名する」

この桂の下津林とは山陰街道の荷物の中継所になっていた。ここには丹波(兵庫県北部)、丹後、それに山陰地方からの年貢のすべてがここに集まる。ここで米、絹布、金、銀、銅、貨幣などに分類されて官営の倉庫に入る。これにはもう一つの意味があって年貢は原則その地の者が都まで運ぶことになってはいるが、その人夫に紛れ込んで無戸籍者の都への不法侵入を防止する役目もあった。たとえここから逃げて目目の前にある流れの早い桂川をそう簡単には渡れないからだ。

そしてここから桂大橋を渡って都にある倉庫まで日本通運の牛貨車で運ぶということだが、このアイデアももちろん生成になる。この牛ヶ瀬牧場で牛を繁殖させて調教するのも生成の養子の伊織の仕事で伊織の30歳の時はもう牛が200頭に増えて、運搬牛、農耕牛、そしてなにより貴族の牛車を曳く牛と大活躍していた。

現在の書物を読むと東寺の造成には稻荷山の木が寄進されたとなっているが、それは間違いで当時の稻荷山の木は先代が植林したものでまだ建材としては使われていない。その木は藤ノ森の木で樹齢500~600年の木であった。その木を寄進したのが稻荷神社と東寺の古文書に記載されたが、それを稻荷山の木と現在の学者が間違った解釈をしたらしい。しかし、いずれにしても東寺まで木材を運んだのはこの牛吉の牛であったことには間違いはない。

またこの牛ヶ瀬という地名は稻荷神社の血縁の松尾神社の宮司が夢の中で桂川の下津林で溺れているときに牛が現れて牛の背中に乗って助けられたということから「牛ヶ背」という地名になったという説もあるが、いずれにしても松尾神社の宮司と稻荷神社の宮司の話の中のことが生成の頭にありこういうアイデアが生まれたというのが真相らしい。

 牛車、牛ヶ瀬、



JR東海道本線 ↓



牛ヶ瀬・ここに牛の牧場があった

勸進橋は民衆の力(労役)で作られた。荘園制度で苦しむ奈良の農民が京へ大移住、そして桓武天皇の暗殺計画

勸進橋は民衆の力(労役)で作られた。荘園制度で苦しむ奈良の農民が京へ大移住、そして桓武天皇の暗殺計画 22話

官営の東寺造営の木材は藤ノ森から切り出すことは決まっていたが、その木材を東寺まで輸送するルートは決まっていなかった。藤森神社と稲荷神社の前には奈良に通じる大和街道があったが、ここからはどうしても鴨川を越えなければならない。その橋は最短距離でも五条大橋になる。その手前の九条大路に石の橋を建設する計画はあったが、それは屋根の瓦を運ぶ目的でまだ竣工すらされていない。

ただ五条大橋経由では費用もかかる。そこで稲荷神社の宮司荷田生成は藤ノ森から西へ東寺までまっすぐ線を引くと竹田村と九条村の境に橋を造れば最短の距離になると結論した。幸いにこの辺りは鴨川が右にカーブしているために流れも川幅も橋を造るのに適していた。しかし、稲荷神社にすれば東寺に木材を寄進するのが精いっぱい橋を自前で作る余裕はなかった。

そこで夜間の狐大学の学生らにこの問題を解決するようにと提起した。この狐らは全国の狐に連絡を取って情報を集めたら勸進橋制度というのがあって橋を利用する農民から寄付または労役を募り橋を造る制度がある。もちろん金、労役をだした農民はこの橋を渡れるが、金も労役を出さなかった農民は一回につき稲束一束、または米0、5合というのがあるという。これを聞いた生成は、

「そうか～なにもお上だけが公共工事をするのだけではないに、そこを利用する民が橋を架けたり、道路を整備するのか」

そこで生成は稲荷信仰をしている信者のすべてにこの伏見稲荷勸進橋に寄付をしてほしいという手紙を出した。そしてこの橋を造る労役の農民を募るとこれも南の洛外、西の洛外からも3592名の応募があった。それも稲荷神社、藤森神社、松尾神社、上賀茂、下鴨神社、向日神社の氏子の壁もなく、そして寄付はこの橋を二つ作るほど集まった。

今までの労役というのはお上から命令された辛い役目だった。農繁期の時期に男子が強制的に割り当てられたらその農家は女子と年寄りと子供で稲刈りをしなければならない。しかし、今回はお上の強制では絶対ないのにこれだけ農民が集まるということに対して生成は民衆の力というのは天皇より強いと感じていた。

やがて勸進橋は人海戦略で開通までには一か月もかからなかった。この労役というのは交通費、弁当は自弁というのが相場だったが、生成は信者からのお供えを募り、昼飯の炊き出しを行って

いた。そして開通式の儀式ではこの工事に携わった橋の設計士、大工、土工、人夫、炊き出しの女子の名前までを読み上げていた。その数5000名にもなるので儀式は4時間もかかり、読む生成も大変だが、自分の名前を読まれた人は感無量になりそれがまた稲荷神社の人気にもなっていた。

ところがこの稲荷神社人気に真っ向から反対していたのが、桓武天皇の皇子の安殿親王だった。この安殿親王は奈良仏教の崇拝者であったが、これは仏教者のほうが皇子を利用しようとしていた。元々、桓武天皇が平城京を捨てて新天地を探そうとするきっかけになったのがこの奈良仏教の間違った権力に嫌気がさしていたからだ。長岡京もそうだが、今造成中の平安京でも奈良からの寺の引っ越しを例外なく認めていなかった。仏教寺院というのは官営の東寺と西寺で十分という思想だったからだ。

京の都の噂や情報ははすぐにでも奈良の農民や民衆に流布されている。奈良ではまだ荘園制度が色濃く残っていた。これは各村ごとに年貢を納める大寺院があってこれらの生活を農民の年貢で賄っていた。この年貢高も20～30%と豊作時の収穫予想の固定になっている。これだと不作やなんらかの原因で飢饉になると収穫の半分、またそれ以上にもなり米を作っても米を食べられない農民もいた。さらに労役も60日以上で農繁期も労役の命令が容赦なくきた。

一方の京の都の年貢は自分で水田を開墾すると年貢米は5%と安い。移住が認められて水田を政府から借りても年貢米は10%程度で奈良の半分になる。しかも労役の命令は農繁期は原則ないということになっている。しかし、これでも奈良の仏教会はまさか農民たちが自分の水田と家を捨ててまで京の都に移住はしないと思っていたが、わずか2年ほどである村は戸数が半分程度になっていた。そうなると荘園の年貢も半分にしかない。

そこで奈良の仏教会の考えた策略というのが「桓武天皇を暗殺してその皇子を天皇にしてその天皇が再度、平安京から平城京に都を遷都する」という自分らの都合のいいシナリオを考えていた。これを聞いた生成は稲荷大学二部の狐の学生らに長岡京と奈良と長岡京をいったりきたりしている奈良仏教会の幹部と安殿親王の行動をすべては把握するようにと要請していた。

この狐探偵団というのは穴を掘るのが得意でどんな頑丈な門構えがある屋敷でも穴を掘って狐道を造ればすぐに屋敷の中に入り様子はうかがえる。しかも、こういう天皇を暗殺するという悪事の相談は夜に行わるものだから狐も人目につかない。その狐探偵団の調査ではやはり「天皇を暗殺して時期の天皇に安殿親王を祭り上げる」というもので、すでに51代天皇の名前は「平城天皇」と決まってるというものだった。

これを桓武天皇に生成が報告すると天皇は、
「安殿親王を稲荷神社に蟄居する」

という命令をだされたのでさすがの安殿親王もこれには逆らえずにしぶしぶ稲荷神社に建てられた仮の宮殿に引っ越しをしてきた。それでも奈良の仏教会の手先が安殿親王と連絡を取ろうと稲荷神社の周辺に近づくがこれは狐探偵団にすくに察知される。そして狐に化かされて奈良の坊主が肥溜めの風呂に入っている姿を参拝者に目撃されその話も稲荷神社名物話として奈良どころか日本中に広がり奈良仏教会は世間の笑いものになった。

 明治44年ごろの勸進橋

明治44年ごろの勧進橋・チンチン電車が伏見稲荷大社まで開通



<http://web.kyoto-net.or.jp/people/toyosima/bunkazai/kanjinbashi/kanjinbashi.htm> より

平安京の兵役の軍隊は高校生だった!...そして国立の大学として「京都大学」ができた。
入学試験は戦争という実戦 23話

平安京の兵役の軍隊は高校生だった!...そして国立の大学として「京都大学」ができた。入学試験
は戦争という実戦 23話

長岡京時代も平安京へ遷都が決まったころでも国内には敵はいなくなっていた。そして他国からの侵略も皆無で都を守る武家も貴族化していた。農民や民衆からの労役は年30～60日はあったものの兵役制度はなくなっているのと同じだった。しかし、桓武天皇の皇子の安殿親王と奈良の仏教会との密約「桓武天皇の暗殺計画」が暴露されたことからこの兵役制度が再び始まっていた。

このころになると農民は裕福になり子供が沢山生まれている。一応、制度では男子が成人(20歳)になれば国司から水田が1枚割り当てられるようにはなっていたが、水田の開墾が追い付かず三男～以上については特別兵役として18歳から徴兵されるようになっていた。これは実際には軍隊ではなく農民への一般常識を教える今でいえば高校になる。したがって公務員ではないので給料はでないばかりか弁当も交通費も自弁になる。しかし、一方では成績優秀なる人物に対しては準公務員や公務員、はたまた武将にもなれるというエリートの養成所にもなっていた。

そうなるに裕福な農民、職人、工人、商人たちはこぞって子供をこのエリート養成所に入れたがるのは当たり前になる。もちろん兵役だから武術や乗馬の訓練もありそれなりに訓練はされており、都を守る軍隊としての役割をしていた。そしてこの兵役の任務は3年でさらに上を目指すものは稲荷大学に入学を許されていたが、これには政教分離の問題があった。

稲荷神社の二代目宮司荷田生成は桓武天皇に、

「公家や貴族には国立の「大学院」があるが、民間人はさらに高度な学問を学ぼうと思っても学ぶ場がないのは国家の損失になります」

「そか、しかし、平民が公家や貴族と同じ立場ではそもそも国が成り立たない」

「稲荷大学としては民間の学生を受け入れてもいいが、その学生が政府の役職に就いたりすれば「政教分離」の原則から違反していると奈良の仏教会からの難癖も予想されます」

「そか、仏教と神教はこのごろ仲が悪いから...それなら民間人も入学できる国立の大学を吉田の森に造ればよい。その大学の名前は「京都大学」と命名する」

この強制徴役だった兵役制度も志願兵の軍隊となってその数も1500名になっていた。それに元々の武家やその家来が1000名。それに警察組織の「平安騎馬隊」が60名となると奈良の仏教会の僧兵(約1000名)も下手に武力での平安京から平城京への転覆大作戦はできなくなっていたが決して諦めてはいなかった。

この吉田ノ森とは神楽岡という標高100mほどの西側の丘の裾野にある。この岡は単独の丘で東山とは別の山になり人は住んでいなかった。この丘の北側は山中越という峠の京都側の出入口になる。この山中峠は西近江から比叡山の麓を通り京の都に入る街道になっていたが、ここにいつからか山賊がでるようになっていた。桓武天皇はその山賊の棲みかこの神楽岡にあるということで新しくできる国立の大学の入学を希望する志願兵（高校生）を組織してこの山賊退治を命じた。

いわば高校の卒業試験と大学の入学試験も兼ねていた。この新青年軍隊組織には天皇の軍隊である武將は誰1人参加せずすべて学生が作戦を練ることになっている。つまり、相手が少数の山賊であっても殺されるか？殺すかの戦争になる。しかも山賊と戦う武器と弁当は自前というからこれらの学生の親は子供が殺されないようにということもあるが、なにより出世をしてほしいという願いから弓矢から刀、槍まで親が都の武器商に武器を買うために殺到していた。またある豪商は三男に馬と鎧兜一式を揃える者もでてきたからこの高校生による山賊退治は都人の最大の関心と呼ぶことになっていた。

指令本部と兵舎は大学が建設される予定地に置かれた。この軍隊は自弁のためにこれまた親が三食の弁当を運ぶが、洛外や宇治、八幡から来ている学生用にと大八車に弁当を積んだ弁当屋というのもこの日本で初めて出現した。また、この戦争を観るための見物客も花見弁当ならぬ陣中弁当を持って洛中、洛外からも押しかけてきた。夜は松明やかかり火が焚かれて今でいうライトアップも行われていた。稻荷大学の在學生もこの新国立大学を希望しているので学長の生成も陣中見舞いとして酒樽を持ってきた。

この学生の軍隊は総勢258名、対して山賊は32名、しかしながら山賊は旅人を何人も殺している経験者でたとえ戦いに勝っても学生側に被害者がでるのは間違いがなかった。そこで生成は女子の狐が人間の若い女子に化けてこの山賊らを丘の上から裾野の大学予定地までおびき寄せる作戦を練っていた。さっそく稻荷神社から選りすぐりの美人狐を20匹呼んで作戦を実行した。

山賊らは強奪した酒で酒盛りをしていた。そこに綺麗な衣装の美人が20名も現れたから我先にとその女性を追いかけ始めた。美人狐らは作戦通りに丘を下って学生が隠れている森におびき寄せていた。そして学生の司令官が「かかれ～」と命令を出すと同時に258名が飛び出し山賊を全員生け捕りにしていた。

桓武天皇はこの258名全員を入学試験の合格者とする。そして若者の入学金、授業料を免除する。しかし、学舎はこの吉田ノ森の木を伐りだして自分らで作れと命令されていた。こうして日本最初の国立の「京都大学」が誕生していた。この京都では山賊や強盗団のことを「鬼」といった。後にここにできた吉田神社は今もこの学生らの鬼退治のことを忘れないために節分には「

鬼は外～」の豆まき神事が続いています。

📷 京都大学、吉田神社

🍺 昨日、この写真を撮るために自転車で行った。距離は往復で約18キロほど...気温は37度。しかし、街中のアチコチで外人のカップルやファミリーに出会います。特に御池通周辺では日本人より外人の方が多い!...ぜひ、この伏見稻荷大社の物語も外人の方々に読んでほしい。これを出版してくれる出版社を募集しています。



最澄が天台宗を立ち上げる、そして比叡山仏教大学を創設・比叡山～京の都の公道、雲母坂(きららざか)

最澄が天台宗を立ち上げる、そして比叡山仏教大学を創設・比叡山～京の都の公道、雲母坂(きららざか) 24話

このころはまだ比叡山延暦寺ではなく比叡山寺と呼ばれていた。住職は最澄といい25歳である寺で得度はしたものの奈良の仏教会からは僧侶の資格を認めてもらえなかった。それは当時仏教の僧侶の資格は国家試験でその国家試験を主催していたのが奈良の東大寺であった。この東大寺らの奈良仏教会と対立していたのが桓武天皇になる。

桓武天皇と最澄はなぜか?ウマが合い、稲荷神社二代目の生成(いなり)を最澄に紹介していた。平安京のオープンまで2年となった792年には最澄が稲荷神社を訪れている。そして生成に、

「この神社には神職の免許を取得している神官は何人いるのか?」

「一応、稲荷大学神学部を卒業したものは約200名、それに神楽部(巫女・雅楽)を卒業した男女も約200名ほどいるが...」

「それすべてここで働いているのか?」

「いやいや、ここでは経理事務も含めて神職は100名在籍している」

「残りは?」

「そら～神官の免許はどこでも有効ですから各地の稲荷神社やその他の神社で活躍しているそうです」

「それを奈良の仏教会はなにもいってこないのか?」

「そらも～先代の時代には何回も奈良の僧兵が武器をもって100名単位で押しかけてきます」

「ほう、それで?」

「その都度、稲荷神社は政教分離の教えを柱にしています。どこで誰がどんな宗教を立ち上げようが国家は介入してはいけないと反論しています」

「なるほど...宗教の自由か!」

この話を聞いた最澄は奈良の仏教会を無視して「天台宗」という宗派を立ち上げた。そして稲荷神社と同じように比叡山仏教大学を創設して全国から修行僧を大募集していた。これに対して奈良仏教会はあの天台宗の坊主は国家試験も受けていない偽坊主だと宣伝したが、その肝心の奈良仏教会所属の坊主らも比叡山で修行すると大量の脱退者がでていた。

京の都では仏教寺院は官寺の東寺と西寺しか認められていなかった。この比叡山は京都から丸見えだが、山城の国ではなく近江の国であった。桓武天皇はこの最澄のアイデア(実際には生成の話がヒントだった)を大歓迎して比叡山の修行僧のみ都での布教の許可を下された。この比叡山の門

前町は近江の坂本になるが、この坂本經由京の都ではかなりの遠回りになるので比叡山から直接都に入るルートはないかと最澄は生成に相談していた。

生成は比叡山に詳しい白狐で女狐の「雲母」(きらら)に相談すると雲母は、


「比叡山の狐が都に入るには北白川の赤山、そして修学院村に至るルートを利用しています。この道は他の獣も利用していますから獣道のように動物にとっては整備されたいい道です」

この雲母の話早速に天皇に報告すると、

「そか、その道を比叡山～京の都の公道として認め、比叡山の修行僧のみ通行を許可する。そそ、それにその道の名前を「雲母坂」と命名する。

こうして桓武天皇は都に官寺以外の寺は認めなかったが、天台宗の布教にはかなりの協力をしてきた。この最澄の佛教大学での修行の期間は5年と決められていた。そうすると卒業生にはお寺が必要になるのは誰でもわかるが、まずこの比叡山仏教大学を卒業した僧侶を紹介します。

法然(浄土宗の開祖)・栄西(臨済宗の開祖)・道元(曹洞宗の開祖)・親鸞(浄土宗の開祖)・日蓮(日蓮宗の開祖)、空海のようにここで修行したが卒業をしていない僧侶など...歴史に「もし」はないが!、もし、桓武天皇が最澄に生成を紹介していなければ、最澄は国家資格のないニセ生臭坊主で終わっていたかもしれない。

 ...私も若いころ小学生の娘二人を連れてこの雲母坂を比叡山から修学院まで歩いたことがあります。道はかなり険しいが転落するかの危険な場所はなかったような気がする。ほとんどが谷底の道で雨でも降れば大変なことになる心配はある。

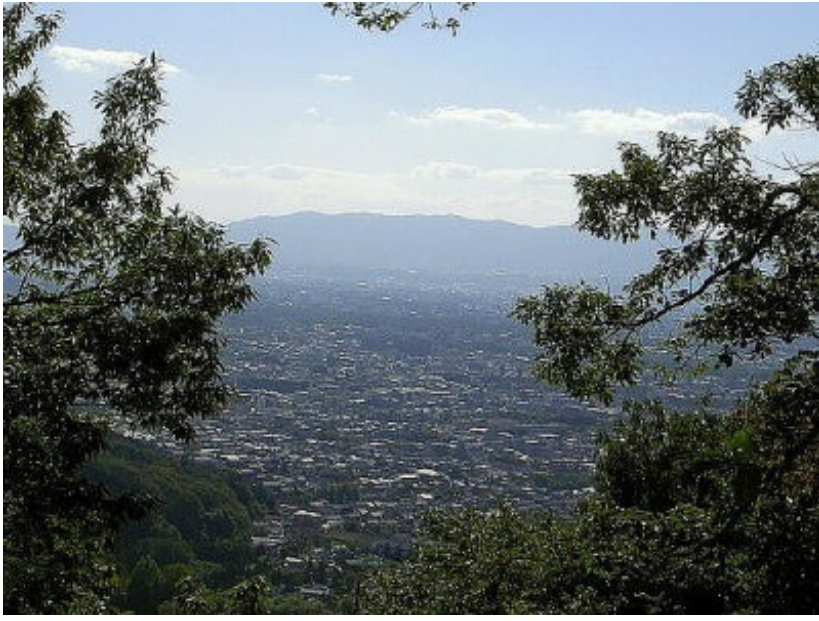
この時は京都駅から比叡山行の路線バスに乗ったが、各駅停車で時間はかかった、それに比叡山ドライブウェイの左右の揺れにはまいったことを覚えています。歩いた時間はゆっくりかけて約3時間ほど...山道から舗装された道を歩いた瞬間にこのアスファルトとの固いこと、硬いこと、足がガクガクいうほど山道とアスファルトの差を感じた。本来ならこのコラムのために現地で写真を撮らなければならないが、もうそんな体力はない、今回のみ画像をお借りしました。

 [かげまるくん行状集記より](#)

<http://www.kagemarukun.fromc.jp/page009i.html>

かなり険しい雲母坂の谷底の道・雲母坂から京都市内を展望





日本で初の「京都職業訓練学校」(現・京都教育大学)・一億総活躍社会とは1200年前の桓武天皇のお言葉 25話

日本で初の「京都職業訓練学校」(現・京都教育大学)・一億総活躍社会とは1200年前の桓武天皇のお言葉 25話

平安京は南北5,2キロ、東西4,4キロの面積だが、ここには土塁も堀もなく南北は九条大路、一条通り、東西は葛野大路、そして鴨川の内側が洛中とされている。したがって道路を渡ればそこは都で出れば洛外になる。一応、山城の国としての国境には簡単な関所はあったが、そんなに厳しくなかった。

ただ、誰でも山城の国、そして都には入れるが無戸籍者には仕事も農地の開拓もできなかった。そうなるとうホームレスになるか、犯罪を犯すしか人は生きてはいけない。また山城の国の国籍(戸籍)を取得する方法もあるが、これはまず住所が必要になる。これは現在でもたとえば生活保護を申請しようと思ったらまず住民票がなければ申請すらできないのとまったく同じになる。

農民の場合はたとえば奈良の農民が京の都に移住する場合はまず先に来ていた農家が保証人になってこの農家に家族の人数が同居するという申請をすれば許可される。ただ、これと同時に年貢(労役、兵役を含む)の義務が発生していた。そしてこの家族が農民として独立すると申請すれば開墾の荒地を指定されるか、空いている水田を貸してくれる。

しかし、これとて保証人がなければどうにもならなかった。それでも農民はまだいいほうで職人や商家で働いていた人にとっては戸籍を取得する手段さえなかった。そこで稲荷神社の二代目宮司生成は都の入り口の峠の山賊や強盗団を退治しても退治してもきりがないとこれらの職業訓練所を造ることを桓武天皇に提案していた。桓武天皇は、

「しかし、そんなことをすれば日本中からややこしいのが入ってくるのでは？」

「たしかに、それもあるが、人は職があつて裕福になれば誰もが一般常識や教養を身に付けるものです」

「しかし、その一般常識や教養を誰が教えるのか？」

「天皇の許可さえいただければ稲荷神社職業訓練所を開設したいと思っています」

「なら、その費用は？」

「これは昨今、稲荷神社の信者も農民から商工の大店が増えています。そのどの大店も職人や技術者が不足しています。そのものたちが金を出すといっています」

「そか、お主の稲荷神社は忙しいの～それでもう何社になった？稲荷グループは？」

「はい、稲荷建設、稲荷土木、稲荷設計事務所、日本通運、フォックス警備保障、それに学校法人の稲荷大学です」

「ほう、お主～まさか～宗教法人だからといって年貢を誤魔化しているのか？」

「天皇、それは誤解です。我が稲荷グループは経理をすべての社員にオープンにしています」

「おいおい、生成...予の冗談がわからないのか?~ホホホ」

校名は「京都職業訓練学校」(現・京都教育大学)と天皇に命名されてその校舎も官営の東寺造営の木を伐りだした後の土地を利用した藤ノ森と決まった。ここは藤森神社の裏山になり奈良にも近かった、多くの無戸籍者は奈良出身ということで都に入る前の職業紹介所としての役割もあった。その学校は全寮制で入学金と寮費は奨学金として働いた後の返金になっているから体一つでここに入学できた。

この中には平安騎馬隊や京都大学の学生らに逮捕された元山賊、強盗団も入学を許可されている。そもそもこの学校に入る資格は無戸籍者だから都人にはまったく怖い存在にしかならなかった。そこで生成は、この授業の年間の半分を労役(ボランティア)として羅城門から宮殿までの朱雀大路の整備、そして左京の下水道の整備に派遣していた。これは無戸籍者を一か所に集めるのではなく積極的に都人と接して差別や偏見を取り除く作戦だった。

雨が急に降ったり昼飯時の弁当を食べたりする場所がなかった時には商店や工場から場所を貸すという申し入れがあった。ここで都人と無戸籍者の接点ができる人柄がいい青年などにはぜひ雇用したいという申し入れが学校にあった。この場合は即卒業として雇用され山城国の戸籍が与えられていた。そして労役以外の半年は徹底して読み書きと算盤、それに「一般常識と教養」の勉強をさせられていた。

平安京のオープンが数か月と迫ったころにはこの京の都の経済はバブルかと疑うほどの好景気だった。特に織物業、鍛冶屋、大工に左官は人手不足でこれらの商店主や工場経営者は青田狩りとしてボランティアで働く無戸籍者に積極的にアタックして人柄を確かめていた。もちろんこれらの選ばれる側の無戸籍者も一生けん命働く姿と一般教養と一般常識をそれとなしに披露しているから元々の無教養の都人の若者より信頼されるようになっていた。

またこの学校では毎日の3食の給食はローテーションで学生が作るようになっていた。これがいつのまにか一部の生徒の専門分野になり料理部になる。、それに元々農家の出身者ばやはり農業の分野に興味があった。そこでこのボランティアも一律ではなく各分野ごとに派遣先を選べるようになっていた。たとえば、稲刈りのボランティアで農村に派遣されたが、その家族に気に入られて婿養子になったという話が生成と桓武天皇にも届いた。

天皇は、

「そか、そんなに職業訓練学校の人気がいいのか?」

生成は、

「はい、人を育てるのにはその環境が必要になります」

「いや、それならこの都の役所も人が足りないという悲鳴が届いているが、こればかりは公家、貴族の子息ではないと...」

「天皇、天皇もご存じだと思いますが、私の父も奈良の都を追われた元は無戸籍者でした」

「そうか～それなら貴族の下働きとして下級役人制度を作るか～それで成績優秀者には貴族の位も...」

「そうですね～一生懸命働けば豊かな暮らしができるという夢があってこそ国は成り立ちます」

「そか、一億総活躍の社会を作るのは我らの仕事になるのか、生成？」

「はい、天皇の今のお言葉は1200年先の権力者もきっとお使いになられます」

📷 藤森神社、藤森稲荷神社、





藤森神社・音川伊奈利
2016年8月23日

長岡京から平安京への大引っ越し作戦。この行列が京都の三大祭の「時代祭」になる。
引っ越しの日通

長岡京から平安京への大引っ越し作戦。この行列が京都の三大祭の「時代祭」になる。引っ越しの日通 26話

平安京への引っ越しだが、長岡京の大内裏(宮殿)から平安京の大内裏までの距離は15キロほど、道は西国街道でよく整備されている。ここを天皇と公家、そして貴族に武家の屋敷の家財道具をすべて引っ越しする大作戦を日本通運の会議室で練っていた。

日本通運は荷田の養子の荷田伊織が社長をしているがまだ12歳になったばかりだ。この伊織の牛7頭では到底都の引っ越しはできないので近江の国や丹波からも牛と馬を借りることになっている。この伊織の作戦ではまず長岡京の屋敷の荷物の梱包と大八車への積み込みは長岡京周辺の労役者が行う。そしてそこから5キロを牛貨車、馬の背、それに大八車で運ぶのはその地域の労役者、そして次にバトンタッチするリレー方式を採用した。つまり、梱包する班、輸送する3班、そして荷卸しする班と分けて効率よくした。

また荷物を降ろした帰りの空車の便もこれと同じで牛を扱う牛方、馬方、人夫も5キロを往復(1日3往復)するだけでかなり楽になる。またその地域の間人であるから道路の状態を一番よく知っているので事前に橋や道路整備もできる利点もあった。これを夜明けから日が落ちるまでの作業だったが約一か月もかかる予定と伊織は見積もりをしていた。

平安京のオープンは794年10月22日と決まっていた。これは稲刈りが9月下旬で済むという計算から来ている。つまり、9月下旬からこの引っ越しをすれば農民達も助かるという桓武天皇の配慮だった。この労役なにも農民だけでなく商人や学生の成人男子(20歳以上)にも義務化されている。もちろん大工は大工の仕事、造園師は造園などの専門職となっているが、ほぼ一般市民は引っ越しのお手伝いになる。

この引っ越しで一番大事なのが天皇家の引っ越しだが、これは金、銀、財宝のすべてになるがとりわけ大事なものは日本国の歴代の歴史の書物になる。この取り扱いには十分配慮もいるし雨で絶対に濡らせない。またこれらの警備も重要で天皇家の引っ越しの3日間は平安騎馬隊の60頭の馬で警備をする計画になっている。

この引っ越し大作戦の計画書を12歳の伊織日本通運社長は桓武天皇に見せた、天皇は、「おお、あの時の少年か(21話参照)~たった2年でたくましくなった。それにこの計画書は伊織が書いたのか?」

「はい、見積もりもそうです」

「ふむ、お主はこんな勉強を誰に教わった」

「はい、父親の留吉です。父は3年間稲荷神社の大学で読み書き、算盤を徹底して教えられたのです。それを父は私にすべて教えてくれました」

「先代の宮司の伊呂具か...あれがこの京の都の地が1000年繁栄が続くと予言してくれた。そのおかげでこうして都への引っ越しの日取りが決まったのじゃ~千年目の1年目だ」

「はい、私どもの日通も一千年の繁栄を願っています」

このころ官営の西寺、東寺はまだ造営中だったが、真っ赤な朱塗りの羅城門はもうできていた。引っ越しの隊列はすべてこの羅城門から都に入るようになっていた。この荷物はともかく公家、貴族、武家、そしてそれに使える官女ら約800名の女子のすべても歩いての入城になるのでこの綺麗処を一目見ようと洛中、洛外どころか丹波の国、近江の国、浪速の国、そして奈良からも男女の見物客が羅城門から朱雀門、そして大極殿までの5、2キロの朱雀大路を埋め尽くしていた。

こうなると民衆の中でも宮殿に出入りしている男が「あれは菅原氏のお姫さま」「次の行列は藤原氏の奥方」「この列は源氏の武家のお姫さま」と解説するものだから、それが口コミで次々伝わっていた。そしてこの日が10月22日だったことからこの絢爛豪華な行列は1200年後の今も「時代祭」としてやはりこの日に行われている。

この引っ越し大作戦も幸い大雨にも大風にもあわずに予定通りに成功していた。そして桓武天皇は稲荷神社二代目宮司とその養子で日本通運の社長を大極殿に呼んでいた。天皇は

「見事な引っ越し大作戦をありがとう、伊織の日本通運には「宮内庁御用達」のか鑑札を与える。そして伊織には「正七位上」の位を与える」

この正七位上というのは大学教授、中ぐらいの国の国司(県知事)と同じ位になる。この当時に民間というより元農民の出身で、たとえ荷田生成の養子だとしてもこれは異例中の異例だった。しかも、伊織は12歳というからこれも都中のホットな話題となって先の時代祭行列とともに平和な都の幕開けだった。

...この「宮内庁御用達」という制度はなくなったが、今でも政府や公共の引っ越しには日通が多く使われています。また伏見稲荷大社の祭の神輿の輸送も1200年間も日通が運んでいます。こういう歴史こそが外人観光客の人気になっているのかもわかりません。

は西国街道、



京の都に造り酒屋がオープン・武器を持つての戦争より経済戦争を選んだ桓武天皇・薬子の不倫の乱 28話

京の都に造り酒屋がオープン・武器を持つての戦争より経済戦争を選んだ桓武天皇・薬子の不倫の乱 28話

平安時代の酒(当然日本酒)は白酒だったが製造方法は今とはそんなに変わってはいない。奈良で当初は寺で作られていたようだが、これはすぐに日本全国に広がっている。奈良の酒は朝廷が厳重に管理して造酒司、または酒部という役人の部署ができていた。この造酒屋の長岡京や平安京への引っ越しは酒を醸造する陶器製の瓶(かめ)が二石～三石(360リットル～540リットル)と大きくて移動が難しかった。さらにこの奈良の造酒屋組合は東大寺らの奈良仏教会と共謀して再び都を奈良に遷都すると目論んでいる一派だった。

そこで桓武天皇は京の都の洛中でこの造酒屋ができないかと稲荷神社の二代目宮司生成(いなり)に相談をしていた。生成は稲荷大学の二部の狐部の学生にこの調査を依頼していたが、これは簡単で京の都として整備する土木工事で地下の水脈は手に取るほど狐の学生らは把握していた。

この平安京では下水の心配はあっても上水の心配はなかった。まずどこに井戸を掘ったら水がでるという確率はほぼ100%の成果で稲荷大学地質学部は全国的に有名だった。そしてこの学部を創設したのが後に東寺の管主になる空海だった。ただ、酒造に合う水となるとこれは別になる。

そこで狐の学生らは奈良の狐に応援を求めた。その奈良の狐は奈良の有名な造酒屋数か所の水を味と匂いで覚えて洛中の土地を色々探した結果、大極殿の西側(丸太町七本松上、現マンション)、四条高倉北(現大丸)、四条河原町南(現高島屋)の三か所がいいと生成に報告をしてきた。それを桓武天皇に報告すると、

「ほう、また稲荷大学の狐の手柄か!」

「はい、狐は元々イヌ科の動物で嗅覚は人の1000倍といます」

「そか、ほな醸造用の大きな瓶はどうする?」

「これは清水焼の陶工が作ってくれます。それに奈良のは最大三石ですが、五石の瓶を焼いてくれます、そして十石(1800リットル)の瓶にも挑戦したいとっています」

「ほう、たくましいの～それなら米はどうする?」

「奈良の米は酒には合わないと奈良も近江米、丹波米を使っているようですが、この米をこちらに回してくれます、しかも杜氏も来てくれます」

「ほう、それなら奈良の酒造は...壊滅か?」

「はい、奈良の酒造組合が奈良仏教会の資金源の一つとなっていますから...」

「そか、もはや武器を持つての戦争より経済戦争を仕掛けるのか?生成?」

こうして桓武天皇は三つの造酒屋の許可をして経営者を募集したところこれも奈良の酒造業者が応募してきた。奈良にまだあった政府の役所の「酒部」を奈良から引き揚げて洛中の御池二条に新たに開設していた。もちろんこの酒には税金がかけられて平安京を潤わしたが、奈良の酒造組合は米も酒を造る職人「杜氏」も京の都に奪われて奈良の仏教会及び坊主は火が消えるように静かになった。

奈良の仏教会とともに平城京再遷都の計画を企んでいた桓武天皇の皇子の安殿親王は奈良の衰退に嫌気がさして女遊びに狂っていた。貴族の中でも最高クラスの藤原種継の娘を愛妾にしたのだが、その母親の薬子まで手を出していた。その薬子は中納言藤原縄主の妻で子供も五人いたので不倫だが相手が皇太子ということでこの不倫を誰も見て見ない振りをしていた。

薬子にすれば次期の天皇になるのが間違いない安殿親王との不倫は火遊びというより出世の糸口になるばかりか子供ができれば皇太子の母、いずれ天皇の母にもなれる可能性があったからだ。そして正妻が何かの事故で亡くなったら...つまり、そうなればファストレディーの道もある、その道をひたすら歩み安殿親王の公の愛妾の自分の娘も敵にしていた。もし、この娘に男の子でも生まれれば不倫相手の子供より皇太子になる確率が高かったからだ。

この作戦は同じ貴族で弟の藤原仲成も共謀していた。この藤原仲成と奈良の仏教会とが手を握ったが、これは奈良の仏教会の朗報となり薬子、仲成、奈良仏教会のトライアングル共闘ができた。薬子の夜のサービスがよっぽど良かったのか？、ウマがあったのか？安殿親王は5歳も年上の薬子オンリーになって薬子のいうことをすべて聞くようになっていた。他の有力貴族も次期天皇には逆らえずにこれらの薬子の不倫は桓武天皇の耳には入らなかった。

ある時、北野森の狐の族長が生成に面会を求めてきた。その狐は、北野森のすぐ近くの一条御前にある藤原仲成の屋敷に毎夜坊主が現れてその姉の薬子と密会をしているようだと言っている。

。

「ほう、薬子といえば安殿親王の愛妾の母親だというのが、もう歳で厚化粧だろう...」

「はい、私もそれが気になって屋敷に忍び込んで二人の話を聞きました」

「ほう、お主も...なかなか...で、その話とは？」

「はい、なんでも一日でも早く安殿親王の子供がほしいと～」

「ん？その相手はその坊主だろう～」

「そうですよね～ただ、その坊主は比叡山の坊主ではなく、奈良の仏教会の坊主とか？」

「ほうほう、そうか～奈良の陰謀か～それに薬子は安殿親王ともできていたのか」

早速、生成は桓武天皇に報告にすると、天皇は薬子それに弟の仲成を逮捕しろと命令を下された。それぞれ官位をはく奪され薬子は丹後の間人に仲成は佐渡島にそれぞれ隔離されている。しかしながら女が一度権力の魅力を知るとそう簡単に諦めないのが世の常になる。この薬子も桓武天

皇の崩御後に再び権力の表舞台に立つのだから、この1200年後の東京でも同じようなことが起こるとはお釈迦様でも予想ができなかった。

📷は洛中の造酒屋



[このコラムへのご意見等は「音川伊奈利の掲示板」にお書きください。尚、HNは必ずお書きください。](#)

平安京で最初に建立された寺院は広隆寺、国宝第一号も広隆寺の弥勒菩薩になる。 28話

平安京で最初に建立された寺院は広隆寺、国宝第一号も広隆寺の弥勒菩薩になる。 28話

桓武天皇は平安京の仏教寺院は官寺の東寺、西寺しか認めていなかった。それは天皇が奈良の仏教会と対立していたからだ。しかし、近江の国の比叡山の比叡山寺の最澄とは仲がすこぶるよかった、これは最澄も奈良の仏教会と対立していたのが原因かも知れない。この二人とともに仲が良かったのが、稲荷神社の宮司生成(いなり)と松尾神社の宮司秦酒丸(はたのさかまる)だった。

平安京の引っ越しも奈良の仏教会の妨害もなく無事に終わったある日、この4人は宮中で酒を飲んでいて。最澄は、

「おかげさんで比叡山仏教大学も5年が経ち無事卒業生がでることになった」

天皇は、

「そか、もう5年か...卒業生が山を下りるとなると寺がいるの～」

「はい、東寺と西寺が完成していればそこの塔頭を使えるが...」

そこで松尾神社の酒丸が天皇に、

「いきなり洛中に寺院を認めるとまた奈良からクレームがきます」

「そか、そういうことなら洛外ならいいということになる」

「そこで天皇、我ら秦一族の寺として蜂岡に寺を建立するというにしていだけたら...」

「秦一族といえお主の松尾神社があるが、やはり寺も一族には必要になる」

「はい、これは宗派を決めずに単立寺院とすれば奈良の仏教会も文句がいない」

「そか、それならその住職には「空海」がいい、空海はまだどこにも所属していないから」

生成は、

「その寺の御本尊には「聖徳太子」の木像にすれば奈良の仏教会もとやかくいうことはできない」

天皇は、

「そか、生成、お主のいうことには理がある」

こうしてこのお寺の名前は「広隆寺」という天皇の命名でスタートしていた。しかし、京に官寺以外の寺が許可されたということで奈良の仏教会の有力寺院からも京に本山を置きたいという申し入れが連日宮中に届いていた。これは当然で都に本山があるからこそ全国に布教の営業活動ができるが、それに各寺院というのは公家や有力貴族の後ろ盾がないと格式さえないと信者が増えない仕組みになっていたからだ。

今の現代でもどこのどんな社寺仏閣にいても〇〇天皇ゆかりの寺、〇〇天皇お手植えの紅葉、〇〇院寄進の寺、〇〇家菩提寺という宣伝文句がまず一番に書いてあることをみても明らかである。さらに菊の御紋がない神社、寺院はないといっても過言ではない。つまり、社寺仏閣にとっては京の都に本山があるというのは天皇家に認められたという証にもなっていた。

そこで京の都に本山を置きたいという寺は有力な公家や貴族に接触して接待、賄賂で、はたまたお色気大作戦でこの面でも賑やかで活発な都になっていた。このころになると長岡京で使っていた宮殿や公家の屋敷、さらには貴族に武家屋敷の解体、そしてその木材を京の都に輸送する作業が始まっていた。これは今でいうエコで貴重な木材は板切れ一枚も無駄にはしなかった。


桓武天皇はこの木材を最澄の比叡山仏教大学の京都分校に使っていいという命令を下された。しかし、これはあくまでも寺院ではなくて学校であるというものでまず分校の第一号は法然上人に許可されてその分校の名前を「比叡山仏教大学浄土教室」として洛外の鹿ヶ谷に創設された。この教室には一般市民も勉強ができてここで法然の授業を受けている。そして月謝として月々支払うのが教室の運営資金になっていた。つまり、生徒を増やせば増やすほど教室が大きくなるという作戦だった。

そしてこの中でできのいいのが僧侶、いやもとい、先生としてさらに末教室として京の都ばかりか他府県まで生徒を求めて進出していた。しかし、これはどこから見ても法然が浄土宗という宗派を立ち上げたとみるのが妥当だが、天皇はこれは学校の分校であると言い切っていた。当然ながら奈良の仏教会は猛反発をしていたが、天皇は奈良の仏教会を806年に亡くなるまでは認めていなかった。しかし、天皇が亡くなったころには比叡山仏教大学を卒業した若い僧侶が都の民衆のすべてを檀家に抑えていたから物理的に奈良の仏教の進出はほとんどできなかった。

...ただ例外もある。桓武天皇も奈良仏教の重鎮で鑑真の寺、唐招提寺からの申し入れには無視できなかった。もしこれを無視するなら奈良仏教のメンツの問題で日本は真っ二つに割れて宗教戦争になるからだ。そこで天皇は鑑真の高弟の鑑禎に人里離れた鞍馬山に鞍馬寺を作ることを許されている。それが平安京から2年目の796年だった。

さらにその2年後の798年に奈良の興福寺の僧「堅心」に清水寺の建立を許されてはいるが、この地は谷底の地で堅心はやむなく崖に突き出た舞台を作っている。鞍馬寺、清水寺のいずれにしても奈良仏教系列であるので、奈良から都への移住者も奈良仏教の嫌な権力を知り尽くしているから信者は少なく寺の経営も楽ではなかった。

...広隆寺といえば国宝第一号指定の弥勒菩薩が有名になる。この弥勒菩薩は603年に秦河勝が譲り受けたとある、そしてこの仏像が広隆寺の初期の御本尊にはなるが、ここに来る前は各地の寺を約200年近くも巡礼して794年前後に広隆寺にやってきた経緯はわからない。

 は広隆寺



太秦広隆寺

第50代桓武天皇柏原陵・まだ存命中に陵墓の建設が...そして1200年後の平成天皇の陵墓も...大林組が施行 29話

第50代桓武天皇柏原陵・まだ存命中に陵墓の建設が...そして1200年後の平成天皇の陵墓も...大林組が施行 29話

800年桓武天皇は64歳の誕生日迎えていた。京の都は毎年人口が20%ほど増えて経済も順調で公家も貴族も武家もこの平安京遷都のおかげと喜んでいて、他の外国の侵略もなく国内も平定していたが、少し気になるのは奈良仏教会との軋轢だけだった。武家はその役目の戦争もないからと貴族化してこのころには馬にも乗れない武家の子息もいた。

洛中、洛外の農民も政府の農業用水の整備で豊作が続いていたから村単位で鎮守の森に村社が建立されてどの村も豊作の祭に酔いしれていた。一方の仏教のほうも比叡山の坊主の布教のおかげで各宗派の信者獲得争いでホットな戦いをしていて、このころから豊作や自然科学に関することは神社、葬式などの行事、それに関わる先祖供養はお寺と分業されてそれがほぼ確立していた。

桓武天皇もそろそろ自分の墓がどこにできるかという興味もあり、稻荷神社二代目宮司の生成(いなり)に酒の席での話だとして相談をしていた。生成は、

「天皇の望みの地に埋葬して差上げます」

「そか、お主が祈祷で決めてくれたこの京の都も大成功で公家も民衆も喜んでいて、どうせなら世の墓もお主が祈祷で決めてくれ」

「天皇、まだ64歳です。それにまだまだ元気で...なにやら宮中のウワサではまた新しい愛妾ができたとか?」

「いやいや、それは誤解だ!、その墓だが、都の北北西にある宇多野の丘が皇子の安殿親王がいいといっているが...」

「そうですね~あの丘なら京の都が眼下に見えますから」

「生成、その丘の歴史を調べてくれ~」

こうして生成は天皇亡き後の御陵予定第一号地を調べることになった。この宇多野から双ヶ岡、御室にかけては古代の豪族の古墳が多数あるからだ。ただ稲荷神社もまだこの地にきて89年にしかならない、書物も残っていないからこれは古墳を調べるしかないと稲荷大学二部の狐の学生に調査を依頼した。その調査の結果を狐の学生は、

「宇多野の古墳の数か所に穴を掘って調べましたが、あの古墳群の埋蔵物から判断すればどうも騎馬民族の賀茂族の墓という結論がでました」

「ほう、上賀茂、下鴨神社の賀茂族の先祖だったのか?、しかし、賀茂と宇多野はかなり遠いが?」

「はい、なんでも賀茂族では西の丘に墓を作るという風習があったようです。その墓と集落の間

が獲物の狩場になっていたそうです、それにその墓が西の縄張りの境界線になっています」

「そうか～賀茂族にはこの都を造成するときもかなりお世話になった、その先祖の墓を荒らすのは...」

これを聞いた安殿親王は激怒した。安殿にすればそれなりに天皇のためにと御陵地を考えていた、それをキツネごときの獣の話で予の計画に水を差すのは無礼であるというのが安殿皇太子の言い分であった。そして部下に命じて宇多野の古墳を壊し始めた。そしてそのころからあんなに平和だった都に不審火が多発したり、流行り病がで多数の死者がでていた。民衆はこれは安殿親王が賀茂族の墓を壊したことへの祟りだと信じて疑わなかった。そしてあんなに豊富に湧いていた宮中の井戸や池、それに農業に必要な天神川の水までが枯れていた。

このことがあって桓武天皇は生成に賀茂族との和解の使者に任命して交渉をした。もちろんこの不審火や流行り病には上賀茂、下鴨神社も関与していないのでこの交渉は儀式として円満に解決した。と、その日から嘘のように井戸の水も池の水も滾々と湧いてきた、そして流行り病も京の都から消えていた。

そこで生成は第二の墓の候補として伏見の山を見つけていた。この山は東山連峰とは違い、藤森から木幡までの独立した山というより小高い丘になっていた。この山裾を大和街道(国道24号線)が通っている。この場所は京にも近くて奈良から京への一級国道でもありこの丘から京と奈良を監視できるという意味もあった。...余談だが、この丘には秀吉の指月城、伏見城、そしてその後には明治天皇桃山御陵も建立されているが、その理由にはやはり生成がいう京と奈良を監視するという意味があった。

桓武天皇は生成に陵墓の設計と土木工事はお主の稲荷設計事務所と稲荷土木が請け負ってくれ。そして、

「墓はなるべく簡素にしてくれ」

「し、しかし...天皇はまだ64歳です。墓の工事は少し早いのでは?」

「いやいや、墓を先に造っておくということはいつ死んでも政情に変化をもたらせないということになる。予が死んでも墓があれば葬式はすぐにできてすぐに平常な都に戻る」

「たしかに～武家も力を持ち過ぎて何かと政治に口をはさんでいますから...」

「その通り、彼らは武器を持っている、我らには民衆の支持がある。だから簡素な葬式をしてほしい」

生成はとはいうもののあまりの簡素なものではこれまた民衆の支持を失うと墳墓の設計をしていた。この丘は平地より50mほど高くなっている、その丘の頂上を平らにして直径80mの円を描いた。その円の通りに高さ30mを残して周りを削ることにした。つまり、30mもの土を盛ったのではなく周りを削り結果的には平地に高さ30m、周囲240mの円墳ができていた

。ここに横穴のトンネル、中央に石室と石棺を置けばいいという簡素なものになった。

この話は都中どころか近江、丹波、奈良まで広がりこのまだ生きている桓武天皇の墓の中を見学しようという民衆で連日賑わっていた。天皇もこの墳墓を立ち入り禁止にしないばかりか天皇本人もこの石室で酒を飲むという粋なパフォーマンスをするので民衆は桓武天皇への好感度をさらに上げていた。

ただこの円墳には一つ欠点があってこの墳墓の上の広場に植物の種が飛んできて雑草が茂るということになった。そこでこの地域の農民らがここの草刈を進んで申し入れてきた。そして陵墓の周りには天皇が好きな桃の木を植えたことからこの地域を桃山ということになった。

...そして1200年後の平成天皇もまだ存命中だが、「簡素な墓にしてくれ」ということで陵墓の工事を「大林組」が請け負い現在建設中でもある。もしかしてこの大林組は稲荷土木の流れかもわからない、ちなみに2010年の伏見稲荷大社社務所の増築工事を大林組が受注している。

 桓武天皇の陵墓



桓武天皇の陵墓

伏見稲荷大社の「おせき大神」...元は奈良仏教会の刺客を監視する関所だった。狐の合図は「コンコン」のために咳に聞こえた 30話

伏見稲荷大社の「おせき大神」...元は奈良仏教会の刺客を監視する関所だった。狐の合図は「コンコン」のために咳に聞こえた 30話

奈良と京の都との宗教戦争は桓武天皇の配慮で一応表向きは避けられていた。しかし、奈良には約1000名の僧兵が待機していつでも戦闘準備をしているようだ。天皇の軍隊の武家とその家臣も約1000名とこれも均等を保っている。それと農民や町民、それに国立京都大学の学生らも兵役の制度もあり戦えば京都側が勝つのはわかっている。

奈良の町の過疎は止まることがなしに人々は奈良脱出の機会を待っていた。農民はせっかく耕した水田と家を手放すのは大変なことだったが京の親戚を求めて約半分は奈良を脱出していた。商人や工人は京の都に支店を出すという名目で徐々に都に家族の移転を進めていた。この商人や工人の本店こそが奈良の仏教会の資金源でもあった。

聖徳太子ゆかりの法隆寺を囲む土塀も雨風で塀の役目がなくなるほど傷んでいた。そこから農民が侵入して勝手に畑を耕しやがてその塀そのものがなくなり境内の約半分ほどが畑という事態になっていた。この有力寺院の法隆寺でもこうだから他の寺では狐や狸の棲みかになっていた。その奈良の寺の狐が稲荷神社二代目宮司の生成に面会を求めてきた。

その狐は、奈良の町では稲荷神社の祠が坊主の手で壊されて住むところがないという。そして、「奈良の仏教会の幹部は桓武天皇に入れ知恵をしているのは稲荷神社と知っている。そして稲荷憎しで奈良の町の稲荷神社を壊すともっています」

「坊主憎れば袈裟まで憎いということはあるが、稲荷憎けば狐まで憎いのか?奈良の坊主は」

「いえ、そればかりか生成さまさえいなければと生成さま殺害計画を企んでいます」

「そうか~しかし、京に兵を出せば戦争になって奈良はもっと衰退する」

「そうですね~だから坊主の刺客を組織して密かに命を狙ってきます」

その狐の話によると刺客は山科の荒れ果てた古い寺を拠点に稲荷山の裏山から侵入するという計画でもう20名ほどの刺客が集結しているという。そこで生成は山科からの道の脇に関所を作った、その関所の名前は「お関大神」とした。その関所にはフォックス警備保障の狐のガードマンが警備するようになった。怪しい人物をここを通ると狐が「コンコン」と鳴く合図であったが、この「コンコン」の鳴き声が人間には誰か風邪をひいて咳をしていると聞こえることからここを「おせき大神」と呼ぶようになっていた。

その刺客らは昼間は参拝客を装って境内の見取り図や生成の屋敷を探っている。生成の屋敷は神

社の社宅の社家で桜門の南側にあつて10段ばかりの石積みの上に頑丈な塀もある。そればかりか狐のフォックス警備保障が24時間警備していた。しかも、この狐らはこれも参拝客の人間に化けてこれらの刺客の行動を完全にマークしていた。

そんなことを知らない奈良の坊主刺客は任務を遂行して上司の坊主に逐一報告をしていた。もちろん刺客らは真剣に生成の命を狙っているが、これを見ている狐たちは笑いが止まらず色々な悪戯を仕掛けていた。狐のピン子は若い美人の巫女さんに化けて千本鳥居の途中でお腹を押さえてうずくまっていた。それを見た坊主刺客は、

「これ、その巫女さん、どうかしたのか？」

「はい、少しお腹が痛くて…」

「それはそれは大変、ほら拙僧の背中に…」

こうして巫女さんは坊主の背中に乗ったが、これが重たくて重たくて坊主がヨロヨロして歩いていると、前から来た参拝者が、

「これ、何をしている石のお地蔵さんを背中に担いで…」

えっ？、と刺客が背中を摩るとそこには石のお地蔵さんがいた。またある刺客は千本鳥居をくぐって山科の隠れ家へ帰ろうとしたが、その千本鳥居は千本どころか歩いても歩いても鳥居が永遠と続き朝まで歩いていた。

さすがの刺客もこれは狐の仕業とわかっていたがこれへの対抗手段はなかった。かといって生成の首を取らずして奈良にも帰れず途方に暮れていた。それを知った生成はこの坊主20名を稻荷神社に呼んで色々質問をしていた。この刺客のリーダーは東大寺の戒本といい奈良仏教会の僧兵の諜報部の部長もしていた。配下の19名のいずれも東大寺仏教会系の国家試験を受かった僧侶だった。生成はこれらに、

「どうだ、全員奈良から脱奈良して京の都に亡命しないか？」

「坊主が亡命ですか？」

「そうだ…このまま奈良に帰っても全員肅清されるだろう～こうなれば立派な政治亡命になる」

「しかし、それではまた我々が奈良の刺客に狙われる」

「なら、奈良へ帰るか？」

こうして刺客20名は警察組織の平安騎馬隊に一時拘束されて奈良仏教会の動きのすべてを取り調べられた後に比叡山仏教大学に収監された。その後、彼らは比叡山の僧兵の組織を立ち上げ指導していた。奈良が時には桓武天皇の命令に逆らう背景にはこの奈良の1000名という僧兵組織があったからだ、生成がこのリーダーの戒本を信じたのは巫女に化けた狐に、

「これ、その巫女さん、どうかしたのか？」


「はい、少しお腹が痛くて…」

「それはそれは大変、ほら拙僧の背中に…」

この狐と戒本との会話こそが仏教の心だと思ったからだ。

...この話が解決して山科からの道にある関所の「お関神社」もいつの間にか「おせき社」として咳の神様になっていた。これから900年後の江戸時代この話を聞いた歌舞伎役者が南座の顔見世興行に出演することになったが、初日の前日に急に喉が痛くなって咳が止まらないということでこの「おせき社」に参ったところこの咳はその日のうちに治って無事初日を迎えられたという逸話から一気にこの「おせき社」が有名になっていた。

...このおせき大神には郵便受けがあり全国から咳、喉の治癒祈願、そして治癒したお礼の手紙が毎日のように来ています。宛先は「伏見稲荷大社・おせき大神」様のみで来るようです。ちなみに本殿からここまで徒歩で1時間、この山でもすれ違う参拝者の約80%が外人でした。

は伏見稲荷大社の・おせき大神・音川伊奈利



おせき大神・音川伊奈利

2016年9月2日

官寺・東寺は左京を守る寺で比叡山系、西寺は右京を守る寺で奈良仏教系の対立は農民、庶民まで、31話

官寺・東寺は左京を守る寺で比叡山系、西寺は右京を守る寺で奈良仏教系の対立は農民、庶民まで、31話

官営の東寺は左京を守る寺、西寺は右京を守る寺とされていた。平安京オープンの794年10月22日ごろからやっと東寺の建設用木材が森から伐られて東寺の工事現場に着いたばかりだった。一方の西寺の方は設計図はできていたが建設の業者も政府の施工責任者も決まっていなかった。

左京と右京とは羅城門から大極殿までの朱雀大路(幅80m)の東を左京、西を右京としていた。しかし、なぜか都への移住者は公家も貴族も商人も左京を選んでいった。この原因は左京を守るのは東寺だか、この東寺の別当(住職)には噂ではあるが、比叡山系の僧になる、それも「空海」だということが洛中に広がっていた。一方の西寺の別当には奈良仏教系の僧になるという噂があった。

この都の住人というのは元々は平城京から長岡京と都が変わるごとについてきた人が半数になる。つまり、奈良仏教会のあまりにも強い権力にいじめられてきた人となる。その奈良仏教系が守る右京というのはまた農民や民衆を年貢や労役でこき使うという心配があったからだ。

この東寺の別当の予定者は空海で東寺が完成するまでは空海と最澄に遣唐使の役目を桓武天皇は命令された。これは官寺ともなれば日本国を代表する寺であり唐の国への外交上のお披露目にもなる。もちろん西寺の別当にもこの条件を満たさなければならないが、奈良仏教会からは遣唐使の候補者というより、そんな危険な仕事に手を上げるものはいなかった。しかし、東寺が比叡山なら西寺は奈良仏教系の僧にすることは当然と横やりを入れてきた。

この問題の奈良仏教系の使者は空海とともに比叡山で修行した大安寺の勤操だった。この大安寺というのは三論宗という宗派で奈良の実力者になる。そこで比叡山佛教大学卒業という学閥でこの勤操を西寺完成までの奈良側の責任者とした。桓武天皇がこの件で妥協したのはあくまでも奈良との戦争はたとえ勝利するとしても避けたかったからである。

こうして官寺の東寺と西寺の工事が着工されて農民や民衆にこの工事のための労役が政府から発表されていた。東寺への労役の村と西寺への労役の村は洛中、洛外ともに平等に割り振りされて日数も30日と決まっていた。これには西寺の工事に充てられた奈良の農民は一斉に反発をした。同じお寺を作るなら「空海」の東寺がいいという希望があるためだ。やはりこれらの農民も奈良仏教会から逃げて苦勞して洛外の水田を開墾した経緯があったのになんでその奈良の寺を作る

のに動員されるのか?という疑問もある。

桓武天皇は例によって生成に相談していた、

「生成、西寺の工事の労役者を説得してくれないか？」

「天皇、それは少し難しいと思います。なにも労役には反対していません。もし警察や軍隊が出動して無理やり工事をして民衆からの支持は絶対に得られません。それにその混乱を利用して色々過激な勢力がそれを利用してきます」

「そか、それなら西寺はどうなる？」

「それは奈良の問題として奈良の勤操が農民を説得するまで西寺の工事はストップするというだけです」

「そか、空海や最澄が唐から帰ってくるのが806年になる。東寺と西寺の完成予定はまだそれから10年もある。予はもう死んでいる」

「それはともかく、天皇が民衆の命と財産を奪う奈良との戦争を避けたことが歴史に残ります」

「歴史の～もう予の墓も完成したから...生成、そんなに物事を真剣に考えず、ゆっくり東寺の完成を待つか～」

「そう、先に東寺が完成したらきっと西寺の必要性が民衆にもわかります」

一方、奈良仏教会の西寺建立の責任者の勤操は頭を痛めていた。まさか農民や民衆から「奈良の敵を京の都で討たれる」と思っただけではなかったからだ。これがもし奈良なら労役に反対する村があったなら村の共同責任として年貢を3倍ぐらいに上げてそれでも従わなかったら村長は打ち首だろう～。勤操は生成にこのことを打ち明けて過去の愚かさを謝っていた。

この天皇の決断力が民衆にも好感を呼び、農民らはなにも奈良仏教会に協力するのではなくて我々は桓武天皇が建立される官寺を作るお手伝いをするのだ。それにもし悪い坊主が別当になったらきっと天皇はその坊主を罷免するはずという話を稲荷大学の二部の狐が人間に化けた姿の数百匹単位で農村や稲荷神社の信者にそれとなしに大宣伝をしていた。

...決まったことだからと強引に機動隊や軍隊をだしても民衆は反発するばかりです。この天皇のようにものごとはゆっくり考えれば双方からいい考えというのが浮かんでくるものです。解決するまでの時間が「対立する時間とゆっくりする時間と」もし同じならゆっくりするほうが双方とも金も労力も楽になります。

...やがて南北朝時代の争い、応仁の乱、戦国時代、明治維新、日清戦争、世界大戦と日本人は愚かな戦争を続けてきた。そして沖縄基地問題、北方領土、原発問題、竹島、尖閣列島、最近では「築地市場の豊洲移転」の戦争をしているが、これらはいずれ解決をするのは絶対間違いがないとすれば、桓武天皇のように戦争を避けるにはどうしたらいいのかを考えるべきです。

は西寺址



西寺址・講堂の礎石

東寺栄えて、西寺衰退の無常

御池の君・日本初の御池奉行所、祈祷師の登録学校制度・強い者には規制強化、弱い者には規制緩和の桓武天皇の政策 3 2 話

御池の君・日本初の御池奉行所、祈祷師の登録学校制度・強い者には規制強化、弱い者には規制緩和の桓武天皇の政策 3 2 話

平安京の10周年記念の804年の都は好景気と豊作に沸いていた。公家は公家らしく、貴族は貴族らしい遊びを考えて連日連夜の歌会や宴会、それに恋や愛に狂っている平和な日本であった。桓武天皇は都のど真ん中にある湧き水が豊富な神泉苑に離宮を造り昼も夜もこの離宮で過ごしていた。この池は大極殿から徒歩10分、池の周囲は1500mと広くここの島に龍神さまを祀っていた。

そしていつのまにかこの池のことを「御池」と呼ぶようになっていた。たとえば天皇は「御池」におられますというようになり天皇に面会を求めることを「御池詣」とした。また隠語でも天皇のことを「御池」となりこれは庶民にまで広がっていた。庶民の暮らしが良くなってくるとこれまた色々な悩みや相談事ができてくる。これらの相談に気軽に応じていたのが地域の神社の宮司や神官になる。このころ稻荷神社二代目の生成も天皇からも国の祈祷者と呼ばれていた。

そして祈祷や呪い、占いを専門にする者もでてきた。人々の悩みは今とそう変わらず女性なら不妊、病気、恋や愛などの恋愛、夫の浮気、夫の暴力、子育て、男性なら仕事や出世の悩みなどでいずれも長屋、神社の片隅の小屋で商売をしていた。その中でも「よく当たるという評判」になれば行列ができる祈祷師もいたという。もちろん悪質な祈祷師もいて不妊に悩む女子に悪戯をしたという訴えもこの御池にあった。

桓武天皇はその祈祷師の生成をこの神泉苑離宮に呼んでいた。そして、

「祈祷師の生成の前でいうのはなんだが、祈祷師というのは信用ができるのか？」

「ささ～それは～ただよく当たるというのはかなり科学に基づいたもので、それを演出で祈祷のように見せかけていることが多いです」

「そか、それなら予の命は後何年じゃ～？科学的に答えよ！」


「はい、激務の上、夜は運動もしないで酒ばっかし飲んでいきますから...それに顔色も悪いし長くても2年ぐらいかと思えます」

これはもちろん天皇と生成の酒の席のいつもの冗談だったが、これをたまたま聞いていた官女の一人が絶対いわないと口止めをした上で吹聴したものだからこの天皇死亡2年説が都に広がるのには3日もかからなかった。しかし、桓武天皇の死去の後の第51代天皇は皇子に決定しているからなんら政情に変化はなかった。

だが、こうして祈禱師を天皇も信用されているのだからと悩める人々は祈禱師に殺到していた。そこで天皇は神泉苑の一角、西側にこれらの庶民が悪質な祈禱師に騙されたりすれば訴える「御池奉行所」を造っていた。これが日本で最初の奉行所になるが、この場所は江戸時代が終わるまでここに「東町、西町奉行所」があったことからしても1200年の歴史があることになる。やがて人々は悪いことをしたら「御池にいうで～」になったが、これは天皇もしくは奉行所に訴えるという意味になる。

そしてこの祈禱師（加持祈禱師、呪い師、占い師、おがみ屋等）は政府の登録制として制度化した。そしてその祈禱師の学校も国立京都大学内に造られた。これは名目は祈禱師だが内容は気象学、自然科学、薬学（漢方）、医学の専門分野を3年で教わるというものだ。それにこの学校を卒業しなければ神官の免許をもらえないために村の鎮守の小さな神社の宮司もここで勉強しなければならなかった。そしてこの免許がない祈禱師はニセ祈禱師として奉行所に逮捕されるという政策も桓武天皇は作っていた。いわば強い者には規制強化、弱い者には規制緩和とメリハリをつけているのが桓武天皇の政策だった。

...そして1200年後の今日も「御池詣」はある。が、これは神泉苑ではなく寺町御池にある京都市役所のことになる。悪質な業者が御池の君(市長)や市議、役人に取り入ろうと「御池詣」に力を入れるという意味に使われている。また京都市長選挙の時などは市の職員労組を「御池選対」と呼ぶ場合もある。いずれにしても平安時代の「御池にいうで～」は庶民の味方だったが、今日の「御池」とは庶民の味方とはとてもいいがたい。

...神泉苑は周囲1500mと大きい池だったが、この池にスッポリ入る二条城ができて池は今のようにこじんまりしている。ここに二条城ができた理由としてこの池は湧き水が豊富なために掘りの水の確保ができたという。このコラムでは掘りの西側に「御池奉行所」があったとされるか、江戸時代にもこの同じ場所に「西町奉行所」があった。明治43年この場所に日本最初の映画の撮影所「二条城撮影所」ができて日本映画の父と言われる牧野省三(1878～1929)が尾上松之助(1876～1926)とコンビを組み、最初の作品「忠臣蔵」を撮影したとされる。その後、市立中京中学になった。



現在の神泉苑、元の十分の一ほど

日本最初のハイヤー、タクシー会社・旅客牛車運送事業、認可第一号は「日本京都交通」・笑う密談

日本最初のハイヤー、タクシー会社・旅客牛車運送事業、認可第一号は「日本京都交通」・笑う密談

京の都のオープンから10年の804年ごろには牛車が公家や貴族の便利な乗り物になっていた。ただ、この牛と車というのはかなり高価で今の価格で牛は一頭500～1000万円、曳く車も200～300万円ほどしたので正四位以上の高級貴族しか乗れなかった。またこの牛車には二人の牛方がつくのでその人件費や牛の餌代もかかった。

現在も金持ちのステータスとして高級外車に乗るが、この平安時代もまったく同じで貴族の藤原〇〇が2人乗りの牛車を買えば、そのライバルの藤原〇〇が4人乗りの牛車を、またそのライバルが6人乗りを買うという見栄を張りあった。外装や内装にも金、銀、漆、螺鈿と金をかけて豪華絢爛さを競うのも同じであった。

京の道路は朱雀大路などはよく整備されていたが、一步道を入れればかなり狭い道が多い。その狭い道で牛車がかち合うとどちらかが道を譲らなければならないが、これは官位の上が優先した。したがって牛方が二名いるというのはその一人がかち合った牛車の牛方と交渉をする。

「このお方は正一位の奥方で従四位の紫野の君だ！」

「何をおっしゃる、このお方は少納言さまそのものだ！早くバックして道をあけなさい」
こうして位の下の者は道を譲っていた。

この牛車の床は畳にすれば二畳ほどある、それに窓には簾がかかっているために外からはまったく見えない。そこで貴族らは愛人、もしくは不倫相手とここで逢引をするというのが大流行していた。特に桜や紅葉の季節、そして月見の季節にはこの牛車で観光地の駐車場は満車になったという話まで桓武天皇の耳に入ってきた。

その話を酒のあてにして天皇と稲荷神社二代目の生成は神泉苑で酒盛りをしていた。天皇は、「のう、生成よ！平和な日本もいいが、ここまで風紀が乱れると庶民感覚としてはどうか？」
「まあね～公家さんも貴族の方々もそれなりに要職を持って働いておられるから...」
「ただ、牛車の維持費が高かつきある貴族なんかは位を上げてほしいと愚痴をいっているらしい」
「それに牛の価格が高騰して日本通運の牛も足りない」と社長の伊織もこぼしていました」

そこで生成は天皇にこの牛車を配車をする牛車旅客運送事業を認めてはくれないかと相談していた。これは月に数回しか使わない牛車と牛方2名をなんぼ貴族だといっても個人で所有すると

というのは贅沢の極みになる、必要な時に配車をすれば安く便利になる。そしてその牛の仕事のないときは日本通運の牛貨車に使えます。天皇は、

「そか、それなら正一位以上しか牛車は個人で所有してはいけないという法律を作ろう」

「はい、それに正一位以下の貴族が持っている牛車は適正価格で引き取ります。それに牛方も雇用いたします」

こうして天皇の命名により「日本京都交通」(社長は日本通運の伊織)という旅客牛車運送事業の会社が設立された。そして牛舎は御池二条(現JR二条駅)に置かれた、これは公家や貴族の屋敷がある大極殿にも近い、それに稲荷神社の生成が丹波の木材を嵐山から都へ運ぶ運河を掘ったが、これの最終地点がここになる。ここには広大な木材置き場があってここから牛貨車で現場まで輸送できるからだ。いわば、一頭の牛でタクシーと運送業ができるという生成のアイデアだった。

正一位以下の貴族が所有していた牛車は34頭にもなった。それに牛方68名も雇用していたから即戦力になる。そしてそれぞれ牛車には特徴があるから、その特徴を見れば今日の客の位も把握できる、そして乗客の走るコースもわかるので牛車同士がち合うこともなかった。これには位の下は喜び上位の貴族の牛車に道を譲って待つという屈辱もなくなるからだ。

またこれを喜んだのが貴族の奥方で昼間はこの牛車をチャーターして歌会や買い物と使うことが女性貴族同士のステータスとなり競い合いにもなっていた。そして牛方に口止めのチップを渡して不倫相手の若い貴族を同乗させてこれまた風紀が大いに乱れることになった。当時の貴族は今のよう夫婦同居ではなく夫が嫁の家に通うという通い婚だったことから結婚3年もすれば夫がこない日が数週間も続くこともある。これでは女として生殺しになるので不倫に走るというのはこの時代さほど罪にはならなかった。これは夫のほうでも同じだから不倫という字が当てはまらない程度のお遊びになっていた。

日本京都交通ではこの乗客の氏名、位、行先、同乗者等の日報をつけている。この日報は毎日のようにフォックス警護保証の幹部が点検に来る。つまり、これらの貴族の生活ぶりを点検しているのだが、これはプライバシーの問題があるから公にはなっていないので秘密裏になる。ある日、この日報を見ていると従四位の貴族が東山にある「吉田山荘」に行っている。そして同じ日にこれも従四位の貴族もここに行っている。しかも乗客は本人一人ということからこれは怪しいと調査を始めていた。

フォックス警備保障というのは狐が運営している警備会社で主に稲荷神社の警備をしているが、それは表向きで国の諜報機関でもあった。早速、この狐らは吉田山荘の近くにある「竹中稲荷神社」でこの貴族らが密談をするのを待っていた。貴族2名は別々に牛車をチャーターして集まってきたが、問題はその密談の相手になる。もうこのコラムを読んでいる方々は相手が奈良仏教会の諜報部員とはわかつて思うがこれはやはりそうだった。

そしてこの密談をスパイしていた狐が生成に報告をしている。狐は、

「生成さま、笑っちゃいました...」

「ほう、そか?笑う密談か?」

「相手は二人でやはり奈良の坊主だったが、この坊主は奈良男色家協会の幹部で貴族の二人もやはり京都男色家協会の幹部でした。話では奈良と京都は争っているが、我々男色家は仲良く団結しようというものでした」

「そうか~ま、仲良くすることはいいことだ」


「そそ、それにこの都の腐れきった貴族の女どもより男のほうがいいということを日本中に広めようともいってました」


「腐れ切った女どもか...わかる気がする...そして?」

「はい、この密談の後は4人で乱交パーティーをしていました」

「そか、今の日本は平和だが、これも長くは続かない、油断をするな!」

「はい、生成さま、今後もいかなる些細なことでも報告をします」

 現在のタクシーも当然日報はある、それに車載カメラで室内の様子は音声も含めてかなり鮮明に撮られています。なにか事件があると真っ先に刑事がタクシー会社の日報を調べにくるが、もちろんこれらの日報や記録SDカードは個人情報なので厳重に管理されている会社もあれば、ずさんな扱いのタクシー会社もある。ずさんというよりこれを労務管理の一つとして社長や管理職が毎日チェックしている悪質なタクシー会社はかなり多い数になる。さらに隠しカメラで室内を撮影してそれをネットでライブしている運転手もいる。平安時代もかなり風紀は乱れていたが、1200年後の今もそれは変わらない。

 は牛車(ハイクラス)



官営・京都獣医師大学、付属京都動物病院・狐が見つけた薬草が人の命と動物の命を救った・牛の背に乗った馬頭観音

官営・京都獣医師大学、付属京都動物病院・狐が見つけた薬草が人の命と動物の命を救った・牛の背に乗った馬頭観音 34話

稲荷山には狐が300匹ほどいるが、長生きする狐は20年ほどになるが平均すれば寿命が7年ほどにしかならなかった。そのほとんどが伝染病と怪我で早く死ぬというものだ、特に生後1年未満にかかるジステンパーは脅威で死亡率は100%になっていた。成狐でもバルボウイルスにかかると半分ほどが死んでいた。それに崖からの転落での骨折も多かった。その問題を狐の全国連合会の会長でもある白狐の七代目白藤と稲荷神社二代目宮司の生成と話し合っていた。

生成は、

「いや狐もそうだが、京の都には武家所有の馬が約50頭、警察組織の平安騎馬隊にも馬が60頭、それに日本通運の貨車牛が80頭、日本京都交通の客車牛が34頭もいる。どれも怪我をしたり病気になるのは同じだ」

「生成さま、馬でも牛でも脚を骨折すればすぐに殺されるというのは無常ですよね...」

「その通り、牛でも馬でも狐でもこの都には絶対に必要なものだ、それを...」

このことを例によって酒の席で桓武天皇にいうと、天皇は、

「その通りだ、もしお主のフォックス警備保障の狐がいなかったら、もうとっくに都では権力争いが起こっている、それに奈良の坊主も都に兵を出している」

「そこで～たしか、遣唐使の帰りの船に唐の僧侶で獣医師の宋徳さんがいましたが、その宋徳さんは今いずれに？」

「ああ、あれは比叡山で修行していると聞いているが、なんなら宋徳を貸すが？」

「それはいいですね～それに宋徳さんに学長になってもらい官営の獣医師学校とその付属の動物病院を造りたいのですけど...」

「ほう、また学校か？お主は学校が好きじやのう～」

こうして天皇の命名で京都獣医師大学と付属動物病院が日本で初めて認可されていた。学校と病院の場所は稲荷山の北の端で九条大路の大石橋の東の山、ここは羅城門や東寺、西寺の瓦を焼くために粘土を掘った跡地でここにきまった。学生は入学金、授業料は奨学金制度で3年間は無料、そして獣医師、または開業した時から返済するというものだった。

学生は獣医師というので貴族の子息は数名だったが、農民や一般町民の三男以上が多く入学してきた。これは農家の三男ともなると水田がなかなかもらえなかったこともあるが、農民も町民も生活がかなり楽になったので三男からは官営の仕事についてもらいたいという希望もあったからだ

。 獣医師大学の学長になった宋徳は天皇から「従七位」の位を与えられたが、これは外国人には初めてのことで遣唐使を通じてこのことが唐の国々伝わり、唐の医者はもちろん学者まで日本国にあこがれを抱いて日本に来るようになっていた。806年には最澄と空海が日本に帰ってきたが、この船には唐の医者や学者が10数名も乗ってきたという。

獣医師は学長の宋徳一人しかいない。そのために入学した学生は即怪我で運ばれてきた狐や牛の手術の助手をするが貴族の子息らは血を見るだけで卒倒していた。さすがに農民の子息らは家畜の怪我の手当てや食料の鶏を料理しているから慣れたものである。また動物の下痢や発熱の薬は人間用の漢方薬を使うがこの服用の量などを入院患者で動物実験をしていた。

ただ牛であれ馬であれこれには必ず持ち主がいるが、他の狐などの動物には持ち主がいないために入院費や治療の金がなかった。稲荷神社に所属している狐は稲荷神社共済組合に加盟しているから治療費はここから支払われる。そこで学長の宋徳は狐や狸それに鹿の治療費は漢方の薬草を摘んでもってこい、または薬草が自生している場所を探してくればよいとすることを生成に報告していた。生成は、

「学長、ありがたいお言葉感謝いたします」

「いやいや、漢方薬の原料の薬草は人間にも大量に必要だが、これの栽培も考えなければならぬ。それには唐から種を輸入しなければならないが、その薬草の種や苗木を積んだ遣唐使の帰りの船団4隻のうち2隻が大嵐で沈没をした。沈没した2隻にこの種が...ま、幸いその船に乗っていた最澄と空海は無事に助けられている」

こうしてこの薬草の種類の見本市が稲荷神社の境内で開催されていた。これには全国から狐、狸、鹿が参加して形状や味、匂い、またこれに紛らわしい毒草などを宋徳は狐などの動物にレクチャーしていた。その近江の狐の一匹が、宋徳に、

「この約30種類のうち半分以上の20種類が自生している山があります」

「ほう、20種類もあるのか?これに間違いがないのか?」

「はい、私は伊吹山の狐ですが、冬になれば食べ物がなくなりやむなく食べられる草や根、球根を探して食べています」

「ほう、それがこれか?」

「はい、狐の嗅覚は人間の1000倍もありますから絶対に間違いはありません」

こうして宋徳と学生らは伊吹山に薬草の調査に入ったが、これは狐のいう通りであって質、量ともに日本一の薬草の山だった。早速、桓武天皇にこのことを報告すると、天皇は、

「そか、伊吹山をお主の京都獣医師大学に与える、そそ、それに全国の狐の治療費については全額無料にする」

こうして狐の寿命は平均してわずか7年であったが、この10年後には平均寿命が10年になったというお話しでした。それにその狐の見つけた薬草でこの1200年の間に助かった人間というのはもう天文学的な数字になっている。

 は珍しい牛の背に乗った馬頭観音、京都中央第二市場

馬頭観音



珍しい牛に乗った馬頭観音
京都中央第二市場

奈良のテロ国家樹立にストップ・狐につままれた奈良仏教会・荘園制度の廃止で喜ぶ奈良の農民 35話

奈良のテロ国家樹立にストップ・狐につままれた奈良仏教会・荘園制度の廃止で喜ぶ奈良の農民 35話

平安遷都10年目の洛中、洛外でも村単位の寺が建立されていた。その村といっても約30戸～50戸の小さな村だが、農民たちは収穫した米を出し合い、それで柱や板、それに瓦を物々交換して物資を集めていた。ある程度集まると農民らが土木工事も組み立てもする、それに井戸を掘って便所も作るが、これは元々、農民らも自分の家は自分らで作っていたからお寺といっても基本的には変わらなかった。

この時点ではまだ寺の宗派も住職を誰にするかは決まっていなかった。そこで比叡山で修行して比叡山仏教大学を卒業した若い僧侶たちが村々に布教のための説法をしにきていた。そして気に入った宗派と住職を村の総会で決めていた。

奈良仏教会の使者で西寺建立の責任者の勤操はこの村の民主主義というのか寺を民衆の力で造るバイタリティーに強く感動をしていた。勤操の奈良では寺の建立は仏教会が決めて農民は一切口出しができずに農民をこき使う労役としてしか見ていなかった。しかも宗派も住職を決めるのも仏教会でこの寺を造るための年貢も強制的に割り振られていた。

その奈良は農民も一般市民も半減して過疎の国となっていた。有力寺院の東大寺、興福寺、大安寺も資金不足で僧侶の食事もままならなかった。しかし、これはすべて桓武天皇が悪い、その陰の稲荷神社のせいだとして過激派の僧侶は宮殿と稲荷神社に火をつけるなどのテロ計画も考えていたが、相手が貴族化した武家ならともかく稲荷神社の狐では勝ち目がないと東大寺の長老が勤操に桓武天皇との和解を仲介してほしいという手紙をだしていた。

勤操は稲荷神社二代目宮司の生成に相談をしていた、そして勤操は、長老の手紙を見せてから、「生成さん、奈良の農民や商人までが、水田や家を手ばしてまで京の都に移住してきた意味がやっとわかりました」

「そうか～しかし、奈良の坊主にはそれがわかってはいない」

「それは...私がなんとか努力して奈良を教育します」

「それで、奈良の要求はなんだ？」

「はい、今回の1年だけ大和の国で集めた年貢を朝廷に納入することを免除していただきたい」

「ふむ、年貢を使い込んだのか、それは国賊になる。国賊は死罪が相場だ！もしそれを許したら全国に波及する、それが一番の心配になる」

「そこをなんとか生成さま～」

「もし、これが受け入れできなかつたら？」

「はい、奈良の僧侶はヤケクソになりもう北朝鮮のように暴走する僧侶、またゲリラ、テロに走る僧侶がでるかもわかりません」

こうして天皇と勤操、それに生成の三者会談が神泉苑離宮で開催された。天皇は、

「そか、それなら1年だけ年貢を免除する。しかし、それにはなにかこれに変わるものを差し出せ」

この要求が天皇からでるのはわかっていたから生成と勤操は打ち合わせをしていた。そして勤操が、

「はい、まず奈良の僧兵制度を廃止して仏教本来の姿に戻ります。それに武器についてはすべて朝廷に差し出します。さらに農民からは政府への年貢以上の割り増し年貢(荘園)の要求はしません」

「そか、それだけか？」

「あっ、はい、？」

「生成もこれに1枚かんでいるようだが、これでいいのか？」

「はい、それなら奈良には農民が放棄した水田が数百枚もあります。これを元僧兵に耕してもらい1年免除した年貢の米を何年かけても朝廷にお返しします」

「あいわかった、書記、これを書面にして奈良仏教会との和解書とせよ」

この話は奈良どころか日本全国に広がるのは3日もかからなかった。奈良に残っていた農民は政府の年貢が10%、それに各寺の荘園になっているのでそれにプラス10~20%も年貢を納めなければなかったが、それが廃止になってこれで一気に生活が楽になると喜んでた。奈良の坊主も僧兵と武力という権力を失ったが、京都に逃亡した農民が残した数百枚の水田を耕す権利を得たのでとりあえずは国への年貢を返済した後は荒れ果てた寺の復興に明るい光が見えた喜んでた。

勤操はこの「すべて三方善し」の天皇の采配に関心していたが、ふと頭の中に浮かんだことがある。それは「ひょっとして狐につままれたのか？」という不思議な感覚だった。「それは年貢を免除するというが、これは返済するのだから免除ではなく猶予」だと、それに僧侶が荒れた水田を耕して米を作るが、それにも朝廷への10%の年貢がかかる。つまり、農民が1000名も増えたことになる。そもそも生成との打ち合わせでは「僧侶が米を作る」という話はでなかった。

そか、

「天皇と生成のできレースだったのか!」

と、悔やんでいたがそれは後の祭りだった。

...桓武天皇など歴代の天皇は戦争を極力避けていた。そのために20回もの遣唐使（遣隋使を含む）は唐のご機嫌をとるための貢物を時の権力者に贈ったとされる学者もいるが、しかし、そ

の帰りの船には中国(隋、唐、宋)の文化と人材をごっそり積んで帰ってきている。これを日本の発展に使ったからこそ日本は中国よりその後強く（経済、軍事力）なっていた。

...今でいえば憲法九条を守ったのが桓武天皇だとして解釈すれば中国、ロシア、北朝鮮への外交にもこれを前面に押し出す外交をすればむやみに戦争という道は選べない。しかし、反対に憲法九条を変更すれば「日本は軍事大国」に逆戻りしたということで武力が背景の外交になるのは間違いない。したたかな外交とは遣唐使のようなものだと私は思っています。(憲法9条もあるし自衛隊という防衛力もある、したたかな日本)

📷 荒れた奈良の寺(イメージ)、これを書いている音川伊奈利



イオンタイムセール 440円の記念写真



真っ暗闇の男女の秘め事は五感を刺激する貴族の遊びだった。灯明と透け透け襦袢でさらに...和江瑠(ワコール)が貴族社会に進出

真っ暗闇の男女の秘め事は五感を刺激する貴族の遊びだった。灯明と透け透け襦袢でさらに...和江瑠(ワコール)が貴族社会に進出 36話

奈良時代から神仏用の灯明と照明用の油は製造されていた。主に荏胡麻の油は灯明、菜種油は照明用に使われてはいたが、やはりこれは高価なもので農民や一般庶民には縁がなかったものだ。というよりも朝は夜明けと同時に働いて日が落ちると寝るという文化があり照明そのものの必要性がなかったからだ。この時代には唐から蠟燭が輸入されていたが、これは高価なもので蠟燭を日本で作る技術はまだなかった。

これは天皇家も公家も貴族も同じで夜は寝るものでわざわざ照明をつけて仕事をする者もいなかった。このころの空は空気も綺麗で高いビルも街灯もなく屋敷の奥の部屋ではそれこそ真っ暗闇の世界になる。ただその分だけ月や星の光というのは現在よりも数倍明るく感じていた。庭に面した部屋などはこの月の光だけで十分な照明になっていた。また雪に反射した月の光などは銀座のネオンより明るく感じるほど輝いていた。

ただ昼間でも神社や寺での本堂の中では真っ暗闇とはいかない、なぜなら灯明、蠟燭の明かりや灯籠の明かりが神秘性を生み出すばかりか仏様の顔が見えなければ信心そのものが成り立たなくなるからだ。ゆらゆらと揺れる光の中で観音様の顔はより優しく、怖い顔をした仏像はさらに迫力がでるといえるものだ、稲荷神社でも夜の参拝者用に表参道には灯籠を、社殿の中には灯明、蠟燭を一年中切らさなかった。

貴族の寝所は屋敷の奥にありここには月の光も届かないからそれこそ真っ暗闇になる。そこでの男女の二人は目の前一寸さえ見えない、衣擦れの音さえ普段の3倍ほどに聞こえる。相手の息遣い、匂い、仕草に全神経が集中していることになる。その相手の指が腕の内側をす〜と撫ぜると全神経がここに集まり快感が暴発しそうになる、また背中を指で摩られると悶絶するほど感じる。しかし、これがたとえば時計の文字盤の蛍光塗料一つで光っていれば腕と背中を触られただけにしかない。

腕、背中ですうだから彼の唇と指が本格的になると...しかし、これはかなり疲れる行為であって新婚や不倫の場合はまだいいが、慣れた女房にはチトしんどくなる。そこで疲れないように部屋に照明用の油をつけていた。そうなるともた違う刺激がほしくなるのがこれまた人間の欲と性になる。

都の左京に東市という市場がある。その室町通りには公家、貴族向けの高級ブティックがあった

。そのブティックは和江瑠(ワコール)という屋号で主に女性下着の長襦袢を売っていた。これは絹でできていたが、その絹の一番細い糸で織っているから透け透けの織物だった。色もピンク、赤、白、銀ラメ、黄、黒と色鮮やかで貴族の女性はこれを買うために牛車で押しかけて店の前は牛車の行列ができていたという。

神泉苑離宮では満月の日の恒例の月見の宴が開催されていた。ここには公家の他に高級貴族も招かれている。もちろん稲荷神社二代目宮司の生成も招待されている。部屋の照明はなく満月とその月が池に映った月光だけでもけっこう明るい。宮廷の雅楽の演奏もされてムードは最高潮になったころ、若い女性が5人も池を背に出てきた。そして舞を披露しているが...

その女性らは全員素肌に色それぞれの長襦袢を着ているがそれは透け透けのもので満月の光で色白の肌がシルエットで鮮明に浮き上がっていた。招かれた客は全員男だが目を点にしていた。そして一曲目が終わったときに天皇が、

「この色気のある長襦袢をお主らの妻や妾が着て夜を待っていると巷では噂になっているが、この長襦袢の流行をどう思うか率直な意見を聞かしてほしい」

こういう場合はまず位の一番高い貴族が天皇に対して言葉を述べるが、その貴族は頭の中が混乱して言葉がでないようだ。そこで天皇は生成を指名していた。生成は、

「これが噂の和江瑠の透け透け長襦袢ですか、たしかにセクシーで私はいいと思います。しかし、一方では都の風紀が乱れという意見もあります。ところで、私の稲荷神社でも夜の参拝者が増えています。これは夜は寝るだけの文化から楽しむ文化へと移行しています。それは闇の世界から視覚を楽しむという生活の余裕から来ていると思います。庶民が夜の時間を楽しめれば経済活動が活発になり税収も増えることになります」

天皇は、

「そか、夜は寝るだけの文化から楽しむ文化になるのか？」

「はい、この月見の宴も公家や貴族だけの専売特許にせず、庶民にも広げることが日本の発展にもなります」

「そか、それなら照明用の荏胡麻や菜種の油が大量に必要なが...」

「はい、それが大山崎の山崎屋という油商がなんでも種から油を採る鉄の機械を発明したそうで、これで油を抽出すれば油の値段も庶民に手が届くようになるそうです」

「そか、それなら蝋燭はどうなる？」

「はい、これも国産で製造できるように稲荷大学の学生が研究しています」

この天皇と生成との話を聞いていた客らも頷いていたのでもう誰も和江瑠の長襦袢を批判できなかった。そして宴のメにもう一度雅楽の演奏があり、やはり透け透けの5人の舞が始まったころには貴族の顔もかなり緩んでいた。この天皇のお言葉「夜は寝るだけの文化から楽しむ文化」が世間に広がるのは3日もかからず稲荷神社のライトアップ参拝にカップルが押し寄せ、やがて

結婚、そして子供ができてこの時期に都の人口も一気に増えていた。

...本当に真っ暗闇な世界を体験したことがあります。それは清滝に通じるトンネルの中で少しカーブの一か所だけ真っ暗闇があったのです。その時は子供と手をつないで歩いていたのですが、その瞬間に子供が消えてしまい恐怖というものはこれだと思った。災害などで土砂に埋まって助けを待っている人たちもこの恐怖を味わったと思うと...ここの読者も一度真っ暗闇を体験してください。

は長襦袢



コスプレ衣装通販

<http://www.sales->

[pia.com/variety/1000619857.html](http://www.sales-pia.com/variety/1000619857.html)

「朝宮茶」380年間秘密にされてきたお茶のルーツは唐の狐だった。その狐は「伊右衛門」と命名された。...37話

「朝宮茶」380年間秘密にされてきたお茶のルーツは唐の狐だった。その狐は「伊右衛門」と命名された。...37話

桓武天皇が神泉苑離宮をこよなく愛した理由はこの池の湧き水がお茶にすこぶる合い旨かったからだった。このころのお茶は唐の国から輸入された完成したお茶の葉でまだ日本ではこのお茶の栽培は成功していなかった。630年の第一回遣唐使が持って帰ってきたお茶は奈良時代から各天皇に好まれ第一回からこの時代の804年第十八回目まで続いていた。そして毎回このお茶の種も輸入していたが、まだ一回も栽培に成功していなかった。

前回の十七回目の遣唐使が持って帰ってきたお茶の葉がそろそろ切れると天皇は焦っていたが、しかもそのお茶の葉っぱを積んだ第十八回目の船が難波したというからこれで日本の国からお茶の葉っぱがすべて消えることになった。その最後の葉っぱを飲むお茶会が神泉苑で開催されていた。客は稲荷神社の二代目の生成(いなり)、松尾神社の宮司の秦酒公、それに唐の僧で獣医師で京都獣医師大学学長の宋徳だった。

天皇は、

「これから茶の湯の茶道というのを確立したかったが、残念ながらこれで茶の道も消えてしまった」

宋徳が、

「このお茶は漢方薬としても大事なもので私が唐から持ってきた種が少しあるが...」

「ほう、しかし、それがその種を撒いて仮に芽がでたとしても収穫までは5～10年はかかるという」

「天皇、私の比叡山の自坊に実は唐からペットして持ち込んだ狐がいます。その狐は浙江省の茶畑で穴を掘って棲んでいたという話を聞いてその狐に持ってきたお茶の種を渡したことがある。しかし、それはもう8年前にもなるが...それに芽がでたということの確認はしていない」

「そか、宋徳...でかした!」

こうして稲荷神社の狐が比叡山の宋徳の坊を訪ねるとそこにはその狐がお寺の留守を預かっていた。そしてそのお茶の種を植えたとされる山を案内してもらったところそこには見事に青々したお茶の木があった。その唐の狐は、

「このお茶の木は栄養過多になると育たない、かといって窒素が好きでそれが切れると枯れるというやっかいなもので冬の寒さに弱く、それで比叡山の山裾の坂本の南側で琵琶湖の湖面に反射した太陽の光が当たるこの地を私が探して種を植えました」

「そうか～唐の狐も日本の狐も穴が好きだから土壌のことはよくわかる」

こうして坂本の農家の協力もあって804年5月2日にお茶摘みの儀が桓武天皇の出席のもとに開催されていた。以後、この坂本のお茶の成木をもらった栄西は建仁寺、また明恵は高山寺と比叡山仏教大学の卒業生にわけられて各地のお寺の近くの山で育てられそれがお茶の日本での歴史になった。しかし、それはこれより約380年後のお話になるからこの唐の狐が栽培したお茶が日本最古のお茶になる。が、なにせ狐が栽培したとは朝廷の書記も歴史書には書けずこの話は1200年間も隠されてきた。つまり、歴史にお茶が登場するまでの鎌倉時代までは歴代の皇室と稲荷神社、松尾神社のみがお茶を飲めるという秘密の飲み物であった。

このお茶を栽培した唐の狐を神泉苑に招待してお茶会が開催されていた。天皇は唐の狐に、

「お主の名前は？」

「はい、それが...ご主人の宋徳さんが名前を付けてくれず、ただ、キツネと呼ばれていました」

「そか、それでは予が命名する。狐に縁がある稲荷神社の初代の名前が伊呂具といった。その伊を取って「伊右衛門」とする。その伊右衛門に従八位の位を与える。そしてこのお茶の銘柄は「朝宮茶」とする」

この皇室以外に流失禁止の禁断の飲み物のお茶を使ったお茶会はしばし神泉苑離宮で開催されていたが。それは皇室の伝統行事になりこの坂本のお茶畑も一般人立ち入り禁止の茶園となりフォックス警備保障が厳重に警備していた。従八位の伊右衛門狐もこの茶園に勤務、今後、遣唐使が持ち帰る茶の種を栽培研究する「日本茶研究所」の所長に抜擢されていた。

♥...お茶といえば千利休となる。この利休がお茶会にデビューしたのも当時の天皇が主催したお茶会であった。それが1589年になるがこの坂本の「朝宮茶」というお茶が発見されたのが804年とすればこれから785年後のことになる。そしてその後、430年後の現在、この気の遠くなるような歴史が日本に当たり前のようにあるが、昨今、伏見稲荷大社が外人観光客の人気度が3年連続1位になったが、この人気の一番の要因がこの日本の長い～歴史と文化がそのまま残っているのが最大の魅力となっているのかもわからない。

📷は遣唐使の船、朝宮茶



Festive Boat - Wikipedia より
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%81%A3%E5%94%90%E4%BD%BF>



朝宮茶・・・絶景！お茶の香りとその風味。

http://blog.goo.ne.jp/sugichan_goo/e/c9dde684c7c5573370dfabcf7f9b39b5 より

桓武天皇の生前葬儀と桃の花見大会、一般庶民参加の大宴会～桃山柏原御陵・朝宮茶・駒札 38話

桓武天皇は御前会議で突然「予の生前葬儀を開催する」ということを言い出した。この天皇はいだしたら聞かないのでこの通りになったが、朝廷の事務方はなにせ歴代天皇でこんな生前葬儀をしていないので困り果てていた。そして天皇の命令で洛中、洛外の主要な辻に葬儀の内容を駒札に書いて提示していた。

それによると「桓武天皇の生前葬儀及び桃の花見大会を805年3月3日に桃山御陵でとりおこなう。一般庶民、農民も平服で参加できる。香典及びお供えものは固く辞退する。尚、茶と酒をふるまうが、身分を問わず陶器の器と弁当を持参すること」とある。

この駒札が東九条村の辻に立ったのが1月の月初め、東九条村の村長の長谷川喜六はこれに喜んだが、喜六の家にもこの陶器の器というものがなかった。当時飯を食うのも土の素焼き、もしくはわ木の目地がでた椀のみだった。村長の喜六でもそうだから農民を問わず一般庶民もこれには困っていた。それにお茶なんてものは高級貴族以上の位の者しか飲めず、そのありがたい茶をいただくのにはやはり陶器の器が必要になると人々は清水焼の店に殺到していた。

このころになると清水焼の窯元が30数軒もできていたので窯元もこの天皇の行事に賛同して陶器の茶碗を格安で販売していた。またこの話を聞いた瀬戸の窯元、四国からも業者が茶碗に限らず、皿や徳利、御猪口、それに壺まで持って清水寺の参道に陶器市ができていた。もちろん稲荷神社の参道にもこの陶器の店が数軒できていた。稲荷神社二代目宮司の生成はこの天皇の意図が分かっていた。そして天皇に、

「生前葬儀とは考えましたな～天皇」

「いやいや、生成、いつもお主にアドバイスを貰ったままで予も天国には生きづらい...農民や庶民の生活に文化をと思った」

「陶器もそうだが、なんぼ平服でいいといってもそこはそこで農民もお洒落するだろう。そうすれば絹や木綿の生産、それに織物業に染物業者にまで豊かになります」

天皇が生前に造った桃山御陵は円墳で高さが30m、直径80m、周囲が280mある。そこに横穴を掘って中央に石室と石棺が置かれていた。その円墳の周りには桃の木数百本が植えられたことからこの地を桃山といった。この円墳の屋上にも木の階段が作られて誰でも上がれようになりはなっている。この上から下界を見ると南には奈良の山並み、南西には大阪湾、そして六甲の山、天王山から嵐山の西山連峰、愛宕山～比叡山の北山、東寺に西寺、そして羅城門から大極

殿までが手に取るようにわかる。そこに少しお洒落して手には陶器の器を持った農民や庶民が上がって楽しんでた。

満開の桃の花の下での桓武天皇主催の「生前葬及び桃の花見大会」は稲荷神社の雅楽と巫女さんから30名のショーで始まっていた。周囲280mの墓の上も超満員で平安騎馬隊の隊士らが1人10分で降りなさいと声を張り上げていた。そして天皇が眠る石室も公開されてこれもまた長蛇の列ができていた。

天皇は「予が生きている限り毎年ここで生前葬儀と桃の花見大会をする」と宣言されていた。この日が3月3日だったことからこの日の桃の花見大会を記念して「桃の節句」と呼ぶようになった。そして2回目が開催された直後の806年4月9日に第50代桓武天皇は亡くなっていた。

この農民らが飲んだお茶というのは朝廷の近江の国坂本の茶畑で栽培されたものでこれより380年後に栄西は建仁寺、また明恵は高山寺にてお茶の栽培に成功したと歴史書にはあるがこの茶とはまた違う「朝宮茶」というものだった。天皇崩御後は都の公家も貴族もそして農民、庶民に至るまで3年間のお茶断ちの儀が行われたと同時にこの禁裏の茶園も歴史から消えていた。ちなみにこれから793年後に秀吉が醍醐の花見大会を開催するが、これはこの桃山の花見を真似たものになる。

⚠...この現の京都でも内外からの観光客を誘致する大作戦を展開している。それは観光客が金を落としてそれが回り回って京都市民も豊かになるという発想になるが、その誘致をする資金は京都市民の税金でまかなうが、それを回収するのは大手の東京資本になるので市民に残るのは交通渋滞と市バスの満員でしんどい目をするだけになる。

🚫...この桓武天皇のように資本を投資するのはまず農民(年貢わずか10%など)や庶民に直接投資してそれが回り回って国の経済が良くなるという発想にはなかなかならないらしい?...そのためには派遣労働法を全廃して働けば必ず正社員になるという夢を国民に与えなければならない。それにやむなく労働者本人の都合でパート、アルバイトの場合でも賃金は同程度にしなければならない。こうなればデートもできるし、結婚もできる、さらに子供も増える。そんなことをすれば我社はつぶれるというアホ社長もいるが、そんな会社はもう社会に必要がないのです。

📷は駒札



東九条村の駒札…この地を札ノ辻
という。竹田街道札ノ辻角(宇賀神
社の参道)

鮎は大阪湾から遡上して60～70キロの清滝や八瀬まで...日本で初めての漁業協同組合・スーパー堤防、霖原堤・台風18号の嵐山氾濫(2013年9月16日)

鮎は大阪湾から遡上して60～70キロの清滝や八瀬まで...日本で初めての漁業協同組合・スーパー堤防、霖原堤・台風18号の嵐山氾濫(2013年9月16日) 39話

このころ(805年)の公家、貴族の避暑地といえば八瀬、清滝、嵐山になる。どれも鮎が遡上する川で八瀬にもなると大阪湾から淀川、鴨川、高野川を泳いで天然の鮎がやってくる。もちろん洛中、洛外の川でも鮎は獲れるが、やはり上流の鮎ほど希少価値が高くて桓武天皇は清滝の鮎がことのほかお気に入りだった。

この清滝の鮎も大阪湾からだが、途中の桂川、鴨川、宇治川の三川合流地点から桂川を選んだ鮎で渡月橋をくぐり、さらに保津峡からその支流の清滝川で捕獲されたものでこれも大阪湾から約60キロの旅をしてきた。この清滝は愛宕山の登山口で清滝川の急流の崖の上に料理旅館が10軒立ち並んでいる。

この一軒に宮内庁御用達料理旅館の「愛宕屋」というのがある。この清滝は夏の蒸し暑い都より5度も涼しくて、それに都から牛車で1時間ほどと近い避暑地になる。この清滝の鮎は「朝廷献上の鮎」としても有名だった。この愛宕屋に稲荷神社の2代目宮司の生成(いなり)が招待されていた。

天皇は生成に、

「こうして旨い鮎や鰻を食べるのは我ら一部の特権階級だけだ、本来この川の恵みは国民みんなのものだ!」

「天皇、この都には魚が豊富な河川が3本もあります。その支流を含めれば無数になります。ただ、この魚を専門に獲る漁師がいないだけです」

「ふむ、川の漁師か?海ならわかるが?」

「この下の桂川も数年に一度は氾濫して左岸の嵯峨村、霖原村、梅津村、西七条村にも甚大な被害がでています。その堤防を造る資金にするために漁業権を民間に譲渡すればいいのです」

「そか、その漁師はどこから呼ぶのか?」

「これは各村の農民の三男以上を農民から漁民へトラバーユさせるです」

こうして漁師が募集されていたが、これは農民そのものもお上に内緒でアルバイト的に川での漁業をしていたのでいわば公認の漁民になっただけだった。そしてそれぞれの川で「〇〇漁業協同組合」が結成されていた。その獲った魚は右京の公営の西市で取引されていた。この川魚はもちろん各家庭の主婦も買えるが、なにより洛中の料理店がこれを喜び夜の客も増えて各地の寺や神社の前には小さな繁華街ができていた。

この漁業権の年貢(税金)は魚が売れた価格の10%と労役年50日(公共工事の人夫など)でこれも農民の米の年貢と同じだったことから新しい京都産漁民はかなり豊かな生活ができていた。そしてこの漁業税の金はすべてその川の治水対策に使われたから一石二鳥の政策になっていた。この税金を使って最初に工事されたのが、萩原村の堤防でこれは嵐山から梅津までの約4キロで土を約6~8mも盛った頑丈なスーパー堤防でまだ1200年間一度もこの部分での決壊はしていない。

こうして洛中に魚卸売市場ができると各町内に魚屋ができて庶民の台所まで魚が届くというのが、桓武天皇のお言葉の「こうして旨い鮎や鰻を食べるのは我ら一部の特権階級だけだ、本来この川の恵みは国民みんなのものだ!」になる。こうして洛中、洛外に約15の漁業協同組合ができたが、その治水のための堤防の距離は右岸、左岸で約100キロを超えるという。

⚠...それから1200年後の2013年9月16日の台風18号で嵐山の桂川が氾濫したというニュースは全国版になった。しかし、それは渡月橋付近のみでそれから下流の左岸ではこの萩原堤のおかげで氾濫はなかった。これは大阪湾の満潮と桂川その他三川から流れる水が衝突して湾に流れず渋滞したのが原因だった。市内の西高瀬川でも水が下流に流れず池のように水が停滞していた。ここから大阪湾まで50キロもあるが、川の水が流れず停滞するというのも私は初めて経験したことでした。

📷は嵐山渡月橋氾濫の日の西高瀬川

西高瀬川・氾濫寸前・
台風18号(2013、9月、16)で嵐山
の桂川が氾濫した日になる。

国道171号



下流



平安時代の貴族の女性は風呂嫌い?...日本初のスーパー銭湯は稲荷神社の「窯風呂」だった。現存する最古の窯風呂 40話

平安時代の貴族の女性は風呂嫌い?...日本初のスーパー銭湯は稲荷神社の「窯風呂」だった。現存する最古の窯風呂 40話

このころの貴族は占いをかなり信用して風呂には入らなかったとされる歴史学者が多い、だから体臭を隠すためにお香を焚くというものだ。しかし、あの長い髪と十二単を着た女性が仮に一か月も風呂に入らなかったらどんな匂いがするのかと想像するだけでも寒気がします。

しかも恋多い女性などは現代のフリーセックス状態で真っ暗闇の部屋でのHでは嗅覚は3倍ほど敏感になるので到底お香をバンバン焚いても臭うだろう...その貴族の女性達も稲荷神社のファンで二代目宮司の生成と面会して都で一番とされる祈祷師のお祓いを受けている。そしてお茶の時間には部屋で懇談をするが生成はまだ一度もこの貴族の女性が臭いと思ったことがない。

またこの稲荷神社には人間の千倍の嗅覚を持つ狐もいるが、この狐達もこれらの貴族はかなり清潔だといっている。この稲荷神社には若い女性の巫女が30名在籍している。この巫女は信者を神楽殿に座らせてその前でお祓いをして神楽の舞を舞うが、もしこの巫女が風呂に入ってなくて臭かったら稲荷神社の信頼は地に落ちるだろう。だからこそ稲荷神社には参拝者及び神職用の窯風呂があった。

ただ一部の悪い占い師たちが貴族の女性に風呂に入ると毛穴から悪霊が入るといって迷信を流布していたので生成はこの貴族の女性たちに、

「そもそも、神様にお参りするときは手を洗い、口を濯いで清潔な体で拝まなければならない」

「そうですわね～だから私達もここにお参りする日の朝は蒸し風呂に入ってくるのです」

「その悪い占い師は御池奉行所の認可を受けていない占い師ですからもうすでに平安騎馬隊に逮捕されています」

この稲荷神社の窯風呂とは矢背（八瀬）にある窯風呂を真似たもので陶器を焼く窯の形で広さは六畳ほどでその窯の中に薪を入れてまず土の窯そのものを焼く。そして焼けたら土の壁に水をかけて蒸気を発生させるが、蒸気が少なくなるとまた水をかけるという構造になっている。それでも1回の窯焚きで約8時間は持つ。床には稲わらが曳かれてその上の布（風呂敷）に座って藻俵（わらを叩いて柔らかくした物）で体の垢をこするという仕掛けになっている。女性は浴衣を着て入る場合が多い、これは男女混浴のために女性のたしなみでもあったが、これが現代の夏の浴衣（ゆかた）になっている。そして最後の仕上げに瓶にある湯を体にかけるというもので薪の量が節約できるというものになっていた。

貴族の屋敷ではさすがにこの窯風呂はなかったが、木の狭い風呂場で湯を沸かしてその蒸気で蒸し風呂にするという原理は同じになる。その窯風呂の銭湯を稲荷神社は境内の外の大和街道に「稲荷スーパー窯風呂」を造り、参拝者や旅人にも利用させていたが、残念ながら混浴ではなく二つの窯風呂に分けられていた。ただ農民や庶民にはやはり贅沢なもので日ごろは井戸、川の水で水浴していたが、さほど現代とかけはなれた不潔な体ではなかった。

このスーパー窯風呂には料理屋がありすぐ近くの鴨川で獲れる獲れる鯉、ふな、うなぎ、夏なら鮎と新鮮な川魚が食べられた。この鴨川の漁業権は天皇にあったが、特例として15歳以下の子供の漁業は認めていた。子供たちはその魚を獲って持って稲荷神社の児童館にすれば昼ごはんが無料で食べられるということだったが、これは昼食が目的ではなく子供が読み書きや算盤を勉強をするという小学、中学の役割をはたしていた。子供が持ってきた魚は稲荷神社直営のお茶屋や料理屋で料理して出すが、それを児童館の資金にしている。

例に寄って天皇と生成は神泉苑で酒盛りをしていた、天皇は、

「のう、生成よ！お主の稲荷神社は五穀豊穡の神様でなかったのか？」

「はい、まったくその通りでございます」

「だが、世間では金儲けの神さん、商売の神さんと悪い噂があるが...なんでも子供を使って鮎を獲らしてそれを旅人などに高い値で売っているならまだしも、スーパー窯風呂なる風俗業にも手を出しているのか？」

「いやいや、それは大きな誤解で、私は国民の健康を願って銭湯を...」

「そか、それなら予もそのスーパー窯風呂に招待してくれ」

天皇がスーパー窯風呂に行幸されるのは805年10月15日の日帰りと決まった。この日は銭湯は休日にして二階の大広間に急遽天皇が休憩する寝室を用意していた、そして生成は深草村の村長に、

「天皇の接待をする女性を探してほしい」

「いや～百姓の娘にそんな公家の仕来りを教えることも...」

「いやいや、ただ風呂の世話をするだけじゃ、それに天皇は若い女性は好みではなく子供を1人産んだぐらいの三十前後の色白で小柄な後家が好みだと聞いている」

「ほう、それなら私の娘が離婚して帰ってきています」

「ほう、それぞれ、その娘を差し出せ～！」

「しかし、もし、子供でもできれば...」

「それならその子供は天皇の皇子になる、村長も貴族にデビューできる」

こうして桓武天皇のスーパー窯風呂の視察は終わったが、その後、偶然か偽りか、村長の策略かは神のみ知るが、この村長の娘が妊娠したという。そしてこの娘が妊娠したということは天皇に伝えられたが、それは無事生まれた上でのこととなり、その6か月後の4月9日に天皇は崩御さ

れてこの妊娠の話は歴史から抹消されていた。しかしながらこの生まれた女の子はいずれ宮中の侍女となり嵯峨天皇の子供を宿ることになる。

 は現存する最古の窯風呂

現存する最古の窯風呂・平八茶屋HP
より



スッポン和尚・スッポン寺...広沢の池...スッポンのパワーが桓武天皇の命を救った。帰化人秦氏の末裔が稲荷神社の宮司 4 1 話

スッポン和尚・スッポン寺...広沢の池...スッポンのパワーが桓武天皇の命を救った。帰化人秦氏の末裔が稲荷神社の宮司 4 1 話

806年正月の15日新年の行事に疲れたのか桓武天皇は寝込んでしまったのです。宮中の医師団も奈良時代からあったが、まだまだ呪術や加持祈祷の方が信頼があったようです。呪術は病気の原因である悪霊を体から追い出すという呪い。加持祈祷は仏や神の力で病気を治すというもので科学的根拠はまったくないが精神的には効果が少しはあったようです。

結局のところ天皇は医師の診察と漢方薬を処方され、さらに呪術のお祓い、そして加持祈祷での神頼みとなった。そして最後に祈祷師で稲荷神社二代目宮司の生成を枕元に呼んでいた、天皇は、

「生成よ!お主もたしか祈祷師だったが、予の病気は治せるのか?」

「いえ、医者ではありませんからそれは無理です」

「ほう、それなら予の受けた呪術や加持祈祷は無駄だったのか?」

「いえいえ、天皇が治ると信じるならそれなりに効果はあります」

「ほう、それなら予が生成の祈祷を信じれば治るのか?」

「祈祷というより天皇の顔色を診ると激務からくる過労とストレスが原因になります、少しは仕事をセーブして何か食べたいものを頭に浮かべてゆっくりしてください」

「ふむ、食べたいものか~そういえば昔食べた「すっぽん鍋」がほしくなった...」

そこで生成は京都漁業協同組合連合会の鴨川漁協の会長に「すっぽん」を天皇に献上してほしいというお願いをしていたが、このすっぽんというのは他の亀と違って肺活量がいいのかめったに水の上に顔を出さないという。たまたま偶然に甲羅干しをしているのを捕獲するというがそれは年に数匹ですぐには無理だという。そこで生成は稲荷神社の「フォックス警備保障」の狐にこのスッポンの情報を集めと指示していた。この警備会社は表向きは稲荷神社を警備する会社だが、裏の顔は天皇直属の諜報部だった。

この狐の情報によると嵯峨の広沢の池でスッポンを養殖している坊主がいるということがわかった。そしてこの坊主を人間に化けた諜報部員が訪ねてると少し驚いた表情になったのでこれは怪しいと任意で質問攻めをしていた。この当時の坊主の資格は国家試験で奈良の仏教会の試験か比叡山の試験を受からなければ坊主の資格はなかった。

「そこで貴殿はどこのお寺で修行したのか?」

「はい、私は奈良の唐招提寺で修行していました」

「なら、どうしてここに草庵を?」

「いえ、ここはお寺ではなく私の家です」

「ほう、ならそこの観音様の仏像はなんとする？」

「これは私の趣味の手彫りの仏像でこの地で布教活動はしていませんので違法にはなりません」

「しかし、この北嵯峨の村の住人はお主のことをスッポン寺のスッポン和尚と呼んでいる」

そこで諜報部員は本題に入った。ところでこの池でスッポンを養殖していると聞くと、この魚の養殖は漁業協同組合の許可があるが、どの漁協に加盟されているのか？

「いえ、このスッポンは養殖しているのではなく、たまたま私が嵐山で夫婦のスッポンを見つけてこの池で飼っているだけです」


「ふむ、そうかたまたまか？それならこのスッポンを数匹譲ってほしい」


このスッポン鍋を食べた天皇は大いに喜びそして元気になってこのスッポンを手に入れた経緯を色々生成から聞いていた。生成はその狐の報告をそのまま天皇に報告している、そしてその坊主は奈良仏教会の生き残りの諜報部員だったということも、天皇は、


「そか、その坊主はどうしている」

「はい、御池奉行所で取り調べています。が、本人は都をスパイなどしていないということです」

「そか、それなら無罪放免してやれ。そして広沢の池でのスッポンの養殖を許可する。それにその池守としてのスッポン寺を許す」

...この広沢の池というのはその昔、秦一族が嵯峨一帯の水田用の溜池として作った人口の池だった。当時はまだ小さな池だったが、この池守のスッポン寺の後に「遍照寺」が建立されて池はさらに周囲3キロと大きくなっている。この池の水の源流はさらに山奥にある菖蒲池になるが、この水がやがて有栖川となって大覚寺の大沢の池、そして広沢の池に流れ込んでいる。この二つの大きな池も人口の池で貴族が船を浮かべて遊んだ場所になる。

...この広沢の池ではもうスッポンの養殖は行われていないが、これは鯉に変わって毎年正月前に「広沢の鯉上げ」という冬の風物詩になってこの鯉はその場所で売られている。それを各テレビ局は毎年放映しているからこの読者も知っていると思うが、この池が1400年前に帰化人の秦氏が人工的に作った池とはそんなに知られていない。この秦氏の末裔が伏見稻荷大社の宮司でもあります。

は、広沢の池



ある日のこと より

<http://www.mizuho-web.com/kyoto-shiki/2007-okuribi...>

平安時代の週刊文春か?...伊奈利の源氏物語・日本初の出版会社が登場・貴族のサロンの噂話が裏本になる。42話

平安時代の週刊文春か?...伊奈利の源氏物語・日本初の出版会社が登場・貴族のサロンの噂話が裏本になる。42話

京の都に遷都されてもう11年になる。洛中とその周辺の村を含めた山城の国の人口は16万人を超えていた。これに対し事務方の公家や貴族は1600人と少なく、その上に彼らは仕事が大嫌いで宮中には朝の7時ごろには出勤するが、昼ごはんを食べに自宅に帰ると午後は出勤する人はまずいなかった。つまり、仕事は午前中とする文化があった。それは夕方まで仕事をすると遊ぶ時間がなくなるからでもあった。現在ではアフターファイブというが、それは夜に電気があってこそでこの時代の夜は遊ぼうと思っても真っ暗闇では遊びの種類がアレしかない。

やはり健康のために運動的な蹴鞠や歌会、舟遊びは昼間しかできない事情があったからだ。しかし、それでは当時の日本の人口約400~500万人の中央本庁としての事務は多すぎるので下級公務員制度を作り1000人を雇用していた。ただこれは男子ばかりで貴族も庶民も女性は専業主婦というより洗濯機も掃除機もない時代だから働きには行けない事情もある。

それでも役所が人手不足のために桓武天皇は貴族の五位以下の位の娘、妻たちを事務方の仕事の応援するようにと命令された。その数は約100人で主な仕事は書記が書く日本の歴史書、天皇が発令した命令書、遣唐使が持ち帰った経典、全国の年貢の経理などをさらに書き写して写本、製本にするというものだった。これは原本だけを保存した場合火事や地震、それに戦争などで焼失する場合があるので数冊作って別々の寺や貴族の屋敷に保存するということがあった。まだ木版などの技術がなかったので書き写すというのが最大の印刷だった。

元々、貴族の女たるものは読み書きは子供の時から教えられて貴族の女としての最低の条件でさらに和歌、笛や琴という楽器まで名人級にならなければ位の高い貴族の嫁になれないという出世の条件でもあった。こうして男ばかりの役所社会に女性が進出してきたが、やはり女が100人集まれば話題というのは今と同じでファッションや男と女の噂話だった。つまり、今まで貴族の屋敷の奥にいた女が一堂に集まるというサロンができたからここは宮中全体の情報の集積の場所になる。

やはりこの臨時公務員の女たちも昼で仕事を終えて自宅に帰ることになる。そしてある女性が宮中の噂話をヒントに小説を書いたが、それが人気があって貴族の女性たちに回し読みされていた。そうすると、私も女流作家になりたいという女性が多く現れるのは現代と同じになる。こうして宮中では女性が物語を書くということも教養の一つとなっていた。ただ、これらの小説は写本も木版印刷もされないまま宮中の中のみで原本はいつかなくなっていた。

その原本を一部手に入れて読んだ稲荷神社二代目宮司の生成(いなり)は、あまりにも生々しい貴族の風紀の乱れに驚いていた。しかも、仮名だが実在の人物とわかる、それに官位までそのまま書かれているのでこれはやばいと思って桓武天皇と相談をしていた。天皇は、

「その原本は知らないが、予の読んだのもかなりおもしろくて笑った」

「はい、なんとというか女どもから我ら男を観察すればこうなるのとか私も少しは反省しています」

「ふむ、貴族の女を事務方に召集した予が悪いのか？生成？」

「いえ、こうなればこういう写本をお認めになった上で著者を書くというルールにすればこういう無署名の裏本は減ってくると思います」

「そか、もう遅いのか？しかし、写本にすれば貴族ばかりか庶民までこれを読む」

「それにプロの女流貴族有名作家が続出するかもわかりません」

結局のところ結論は出なかったが、この裏本に書かれると娘や妻ばかりか男も出世に響くと貴族社会の不倫文化はかなり下火になっていた。しかし、不倫が下火になると時間が余る五位以上の貴族の娘や妻はこれまた今まで知り得た、また噂話や言い伝えなど五位以上の高級貴族社会のことを書き始めていた。これは天皇が「著者を書けば写本もいい」といったと理解してペンネームで書いていた。その原本を元に今度は五位以下の女性が宮中でこれをアルバイト的に写本と製本をしていた。

この製本された写本は一冊米1斗=10升（約15kg）現在の約5000円で売られていた。しかし、それでは農民や庶民は買えないのでこの写本を手に入れた商人はこれまたこれを手本に写本の民間アルバイトを募集して大量生産したおかげで庶民に読めるようになっていた。さらに、奈良の経典を木版で印刷する技術者を雇ってこの高級貴族女性の暴露本を大量印刷していた。これが日本で最初の出版会社となる。

このころ大ヒットしたのが「梟の森」というタイトルで著者は「藤式部」というだけで誰かはわからなかった。これは小納言の藤原実盛という架空の人物が、中納言の藤原兼吉の妻に夜這いで通ったが、実盛があまりにも愛撫が下手だったでその妻がHの手ほどきをしたというお笑いともいえる性描写が描かれていた。しかしながらこの小説を読めばこの実盛が誰だとわかるので小説の中の実盛はこの小説の出版差し止めを天皇に願っていた。天皇は小納言に、

「これはお主のことなのか？」

「いえ、こんな位の高い中納言さまの妻の貴子さまとは関係がございません」

「ほう、この小説の相手は貴子だったのか～なるほど...」

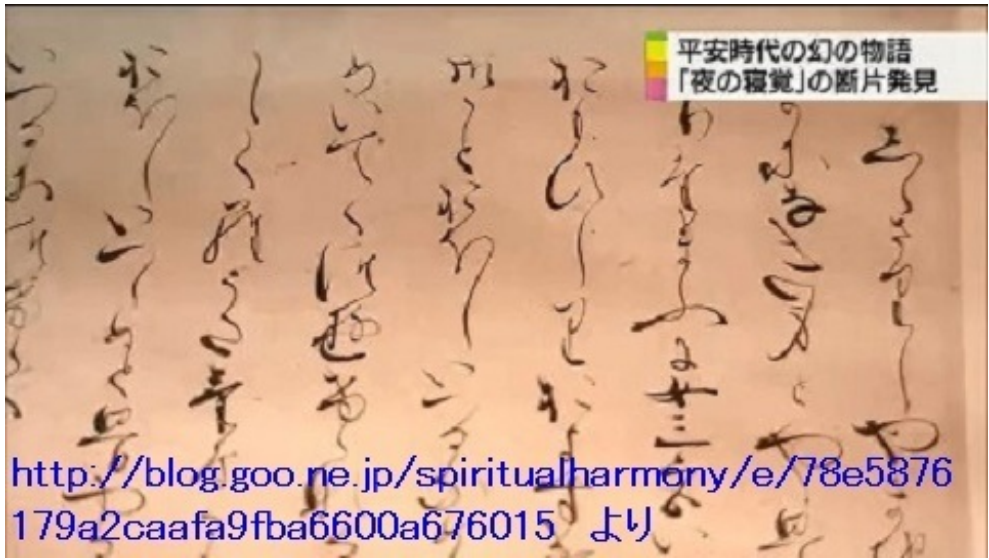
「いえ、それはその小説のことで私は何も関係がございません」

「そうか～関係ないというお主がこの本をどうこういう資格はない！」

♥...このお話は806年の2月ごろのお話しになるが、ここまで読んでこれは「紫式部の源氏物語」「清少納言の枕草子」と感じた方々も多いと思う。しかし、これらの小説はこの200年後のことになるから、もう200年間も貴族の間では小説や随筆が書かれてその写本を元にしての集大成を紫式部や清少納言が仕上げたと私は思います。それから1000年の時を経て現在では「週刊文春」が貴族ではないが、政治家、有名人、知識人の不倫などのスキャンダルを書いているが、これも懲りない人々のおかげだと週刊文春は喜んでいるような。

📷は平安時代のイメージ、借り物

平安時代の幻の物語
「夜の寝覚」の断片発見



<http://blog.goo.ne.jp/spiritualharmony/e/78e5876179a2caafa9fba6600a676015> より

梅干しは青谷の黒焼きに限る・その梅は梅の黒焼きに加工されて百薬の長黒梅「青谷の薬梅」となった。紀州の南高梅 43話

梅干しは青谷の黒焼きに限る・その梅は梅の黒焼きに加工されて百薬の長黒梅「青谷の薬梅」となった。紀州の南高梅 43話

京の都に集まる年貢は米だけではなく米の価格に換算したすべての農産品と絹糸、絹織物、塩、砂糖、塩干物、工業製品、獣の皮にまで及んでいた。これとは別に全国の名産品を朝廷に献上するということがあった。これは天皇や高級貴族が食して「これは美味である!」という言質を取ることによってその商品が天皇、もしくは皇室に認められたいという証拠になってこれを宣伝したものです。

したがって朝廷には全国からの献上品が届くが、ただ届けたというだけで「皇室献上の品」というインチキ商売も出てきた。これら全国から届けられた商品は従五位以上しか入れない大内裏の献上の間に集められて貴族が思い思いの品物を屋敷に持ち帰っていた。当然ながら人気のある商品は取り合いになるが人気のない商品は破棄処分になっている。

天皇の口に入るのはほんの一部で調理部が厳重にチェックした上に毒見の検査まで行われている。このところの天皇は医師の診断では過労だが、食欲もなく顔色もさえない。その天皇がなんか旨いおかゆと紀州の梅干しが食べたいという。医師の玄庵は調理部に朝廷の食料倉庫にある梅干しをと命令したが、その食料倉庫には梅干しはもうなかった。そこで玄庵は稲荷神社のお供え物の中にあると信じて馬を走らせていた。

稲荷神社二代目宮司の生成(いなり)は医師の玄庵が馬に乗って来たことで天皇の容態を察していた。そして玄庵に、

「天皇は...具合がそなに悪いのか?」

「はい、もうここ一週間は何も食べたくないとおっしゃっています」

「そか、それなら神社にある梅干しだが、あることはあるがこれは紀州の梅干しではなく奈良に近い青谷の百姓が作った梅干しになる」

といって生成が出してきた梅干しは貧弱な小ぶりの梅干しで紀州の梅干し半分ぐらいしかなかった。そこで玄庵はこれを細かく刻んでおかゆに入れれば天皇も気がつかないかもということで生成も玄庵と同じように馬を飛ばして神泉苑離宮に向かった。

玄庵は弟子らにこの梅干しを炭でこんがり真っ黒になるまで焼かしている。その梅干しの黒焼きの実の部分だけをすり鉢で粉にしているが、これは食べ物というより漢方薬の黒い炭の粉末状でとても食欲をそそるものではなかった。弟子がこの梅干しの黒焼きを作っている間に玄庵は天皇

にこの梅干しの効能をレクチャーしていた。

「天皇、これからお出しする梅干しは残念ながら紀州の梅干しではありません。しかし、この梅干しには天皇の病気でもある胃のただれ、または腫瘍、これが悪化しますと胃ガンになりますが、この原因の多くは胃の中にいるピロリ菌だといわれています。そのピロリ菌と戦い殺してしまうという強い殺菌効果がこの梅干しにはあります。さらに天皇の持病でもある高血圧、糖尿病、脂質異常、動脈硬化、うつ病にもよく効きます。さらに抗菌、解熱、疲労回復、生活習慣病、そして加齢による耳、眼の病気にも効果があります」

「ほか、しかし...玄庵、それでは世の中にある病気のすべてに効くというのか?」

「はい、天皇は世の中のすべての病気をお持ちですから、この梅干しの黒焼きだけですべての病気が退治できます」

「ほか、予の身体は病気のデパートか?しかし、玄庵がそんな万能薬を発明したとなるとお主はノーベル賞ものだな」

そうこうしている間に「梅干しの黒焼きおかゆ」ができてこれを天皇は食べている。

「ふむ、見かけは悪いがよい塩梅の塩加減だ!それに胃がなぜか軽くなった」

「天皇、体の奥深くから気力が湧いてはきませんか?」

「ふむ、気力というか、体中が熱くなってきた」

「はい、それは胃の中で梅干しの黒焼きとピロリ菌が戦っているからです」

「そか、それなら玄庵も生成もこれを食べよ!」

こうして天皇、玄庵、生成の3人でこのおかゆを食べていたが、天皇は、

「久しぶりに生成とも会えた、ついでだから酒を飲もう」

生成は、

「いや~病気のデパートの天皇と酒を飲んでも...ね~」

「いや、予はもう玄庵の薬で全快じゃ~」

「それなら天皇、この梅で作った梅酒をお持ちしました」

「おう、それはいい、それとこの梅の梅干しはないのか?」

こうして出された梅干しは小ぶりで貧弱であったが、それを酒のアテにして梅づくしの宴会が始まっていた。天皇は生成に、

「ところでこの梅はどここの梅なのか?」

「この梅は奈良の近くの城陽青谷村の梅林の梅ですが、紀州の梅より少し小ぶりの種類になっています」

「そか、紀州の梅は食べるものじゃ~この青谷の梅は百薬の長の梅として「薬梅」と命名する」

このころの青谷の梅園といっても百姓の梅吉が荒れた土地では梅の木ぐらいしか育たないと梅を

十数本植えただけだった。ところがこの天皇命名の「薬梅」の話が青谷の村に伝わると我先にと梅の栽培がおこなわれていた。その梅は梅の黒焼きに加工されて百薬の長黒梅「青谷の薬梅」として全国の薬問屋から注文が殺到していた。

後日、生成は医師の玄庵に、

「あの梅の黒焼きの効能は本当なのか？」

「いや、そのすべてが本当ではないが、弱っている天皇の脳に活力を入れただけだ...」

「ほう、それは催眠術か」

「そういわれれば催眠術にもなるが、生成さん、医師というのは時には詐欺師にも魔術師、催眠術師にもならなければならない。患者から信頼されていればのことだが...」

「そか、私もあの時は玄庵さんの催眠術にかかっていたのか？」

「そら～集団催眠のほうがより効果はあるわいな～ハハハ」

 は青谷の梅園



青谷梅林 城陽市梅まつり HPより

日本初の相撲は松尾神社、向日神社が発祥の地となる。相撲が日本の国技に!・貴族女性に大人気・相撲茶屋「とり米」44話

日本初の相撲は松尾神社、向日神社が発祥の地となる。相撲が日本の国技に!・貴族女性に大人気・相撲茶屋「とり米」44

平安京遷都12年目の都の朱雀大路から東の左京はほぼ公家や貴族の屋敷と民家で埋まっていた。あれだけ人気のなかった朱雀大路から西の右京も四条大路から北の地域には鍛冶屋、大工、それに染物屋、造酒屋という工場や倉庫が必要な商売人が移住してきた。そしてその工場で働く人々の長屋ができていた。

こうして都に人が集まれば集まるほど都の経済は豊かになりこの恩恵はこのような田舎からでてきた庶民まで届き桓武天皇の人気は益々上がっていた。また都に近い農民も米の消費量があがって米や野菜も高く売れるということで農家の家も掘っ立て小屋からそれなりの家構えになってきた。

そして農民も娯楽を楽しむようになってきたが、これの一番人気は村対抗の力自慢で最初の頃は俵一俵を持ち上げてどちらが長く持ち上げているかの競争だった。これからさらに進化して土俵の上での相撲になる。この相撲の土俵が最初にできたのが東の松尾神社になるが、さらにこれに対抗して西の向日神社にも土俵ができた。この松尾神社、向日神社の氏子というのは桂川から水を引いた水田を持ち山城の国はもちろん近畿の水田のトップをいく収穫高の多い農村地帯で生活にかなり余裕ができきっていた。

向日神社の横綱は「山響」という久世村の力士で松尾神社の横綱は「嵐山」という西七条村の力士の二人になる。この両横綱の優勝決定戦が桓武天皇も観戦する天覧試合が3月に松尾神社で開催されていた。これには天皇はともかく公家も高級貴族も百姓も町民も分け隔てなく同じ観客席で観戦するしかなかった。なぜなら、この大相撲の主催は農民の実行委員会であるからどんな高級な公家でも同じ扱いだった。さすがに裸に近い男の相撲には貴族の女性らは観戦していなかったが、天皇にお供した官女、従女らがこの相撲の様子を宮中で流布したものだから貴族の女性らは弱くて青白いナヨナヨした男しか知らなかった世界だけにこの力士の力強さに夢惚れたのは当然になる。

天覧試合での優勝者は「山響」となり桓武天皇は土俵の上で賜杯を山響に手渡していた。そして山響に従七位の位を与える、そしてこの相撲を我が国の国技とすると宣言されました。こうなると政府からも援助があり、東に松尾部屋、西に向日部屋という相撲部屋が設立されていた。それぞれの神社の一角に相撲部屋があり力士は半農半力士としていたが、政府の年50日の労役は免除されて相撲の稽古を続けていた。

こうなると東西の力士のプロフィールが書かれた写本まで販売されていた。また有力貴族の間では屋敷に土俵を作り有力力士を招待して屋敷巡業の興業までしていた。そこには高級貴族も招待されていたが、相撲については女性の方に人気があった。しかし、その観客の女性の品定めをするために相撲観戦をする男の貴族も多かった。今でいえば合同コンパの役割もしていたことになる。

こうして村相撲から国技となったお披露目として桓武天皇も参加した宮中で東西の両横綱と三役ら20人の宮中相撲が開催されていた。取り組み表は事前に発表されて貴族の妻や官女、従女らは土俵下に陣取りトーナメントの相撲を満悦していた。さすがに貴族の女性は黄色い声を張り上げての声援はしなかったが、力士の力強い腕、胸、禪の尻にはかなり興奮をしていた。

優勝したのはやはり西の横綱「山響」でその取組後に正一位の藤原吉兼の妻で従二位の中宮百合子さまから和歌が書いた一通の文を受け取っていたが、なにせ従七位といってもつい最近までは農民で和歌の意味どころか字もまともに読めなかった。その相撲後の宴会で横に座っていた稻荷神社二代目宮司の生成に山響は内緒でこの和歌を手渡して翻訳してほしいと頼んでいた。生成はこれを読んで、

「横綱、これはそなたのことが好きで、今夜の月を一緒に見たいといっている」

「ほう、今夜といってもこの通り曇っている、だからそれは無理というものです」

「いやいや、これは困った。...つまり、横綱と今夜一緒にすごしたいといっている」

「ほう、いや～もうこの通り酒は腹いっぱい～」

「よ、横綱、横綱は何歳じゃ...それに嫁は？」

「はい、私は19歳で嫁などまだ...」

「そか、それなら夜這いの経験は？」

「そんなもの...相撲一筋で～」

「そうか～たしか～吉兼の妻は初物食いが趣味で...若い貴族の多くが犠牲になったということが女流貴族の写本に書いてあった」

生成はこの話を聞いてかなり悩んでいた。この世界は階級社会で正一位の妻で従二位の貴族に誘われて従七位の横綱が無下に断るということは失礼の極みになるからだ。生成はこんな下世話など趣味ではなかったが、横綱を吉兼の妻の屋敷まで連れて行きその門の脇の小門から入り庭に面した寝所へと案内した。部屋ではほんのり明かりがついているからこの部屋には間違いがない。生成は横綱に、

「ほい、あの障子を開ければいいだけよ～ほな、ワシは帰るで」

「生成さま、ワシは...ご遠慮しますので...生成さまよかったですらどうぞ...」

「おいおい、ワシはあいにく厚化粧には弱い...」

このことはそのあくる日には宮中の女どもに知れ渡っていた。それは国技でもありその横綱と恋に堕ちたという貴族社会の女性の独特の自慢でもあった。それから貴族の妻や娘どもは私も百合子さまのように自慢したいと松尾神社にある相撲部屋の稽古の見学に押し寄せるのは当然になる。そしてその貴族の見学者の休憩所として門前の鳥居の横に料理旅館の「とり米」ができて昼も夜も繁盛したという下世話なお話しでした。

は松尾大社の相撲場



松尾大社の相撲場

稲荷神社三代目宮司の伊蔵（いくら）の襲名披露祈禱パフォーマンス、雷封じ込め大作戦、雷劇場・北野天満宮 45話

稲荷神社三代目宮司の伊蔵（いくら）の襲名披露祈禱パフォーマンス、雷封じ込め大作戦、雷劇場・北野天満宮 45話

長岡京への大阪湾からの物資は淀川の山崎港で水揚げされていたが、この港から平安京の都までは西国街道を通過して約10キロはあった。そこで桓武天皇はこれより都に近い淀に港を開き、そこから北にまっすぐ都の入り口の羅城門まで延びる淀街道の建設を稲荷神社グループの稲荷土木に造れと命令されていた。

この稲荷土木の社長は稲荷神社二代目宮司の生成(いなり)の長男でこの荷田伊蔵(いくら)は35歳になっていた。この伊蔵は嵯峨嵐山の秦一族の秦建設に15歳で入門させられて20年の修行が終わって実家の荷田家に帰ってきていた。この荷田家というより多くの有力商家の息子は15歳で他人の飯を食う修行に出されていた。その間に結婚して子供も育てるがよほどのことがない限り実家には帰れなかった。そしてこの淀の港を造る工事が伊蔵のデビューでもあった。

生成はこの息子の伊蔵とともに桓武天皇に挨拶をしていた。天皇は、

「ほう、初代の伊呂具とそっくりの男前じゃ～お主の祖父の伊呂具の祈禱でこの地を都に選んだが、そちは祈禱はできるのか？」

「いえ、土木と造園の20年間でしたから...」

「そか、しかし、予ももうそう長くはないが、この生成も60歳を超えている。いずれ稲荷神社の三代目になるのだが、やはりこの都での公家や貴族に一目置かれなければこれまた悪い祈禱師や陰陽師が幅を利かすことになる。この工事も大事だが、予が活着ている間に世間をあっという間に脅かす予言でもなんでもいいが、祈禱のパフォーマンスを見せてくれ」

つまり、天皇が言いたかったのは稲荷神社の後ろ盾に桓武天皇がいたからこそ他の新興祈禱師集団は手も口も出せなかったが、天皇が変わればチャンスとばかりに次の天皇や貴族に取り入るのが目に見えていたからだ、そこで伊蔵に対してこの信仰勢力を黙らせる演技をしなさいという意味だった。これには父親の生成も伊蔵も頭を使いかなり悩んでいた。

そこで稲荷大学二部の狐の学生らと伊蔵でこの問題を研究しようと取り組んでいた。これは狐が人をだますが、人を騙そうと思えば人間そのものの心理がわからなければ騙しようがないと伊蔵は思ったからだ。狐らは人間でも特に公家や貴族の大嫌いなもので恐怖に怯えるものは何かと話し合っていた。結論としては「火事」とその原因にもなる「雷」が最も怖がるものと結論していた。

ある狐の学生がそれでは雷を利用したパフォーマンスで伊蔵さまがこの雷を自由に操れる祈禱師という触れ込みがいいのではないかと提案していた。たしかに雨乞いの祈禱はあるが、雷の封じ込めの祈禱はないが、しかし、それをどうするかが問題になった。

やがて半月が経ち北の森に天神稻荷神社という社が建立された。この北の森は小高い丘で西側の崖は紙屋川まで約50mもある。東側1キロ先には大内裏がある、それを囲むように公家、貴族の屋敷が数百軒もあり、大納言藤原義嗣の屋敷は北の森から南の100mほどにあった。そしてこの神社は雷が公家や貴族の屋敷に落ちないように願う神社であるということを洛中、洛外に大宣伝していた。

京都で一番高い愛宕山という山があるがここにはかつて空海が設立した稲荷大学の気象学部の教室がある。ここからは大阪湾、瀬戸内海方面、そして山陰方面からやって来る雨雲を監視できる。この狐の学生は徳島付近にある雨雲が約2時間後には都に到着すると計算していた。そしてその合図を狼煙で稲荷山の頂上で観測している狐に知らせた。そして伊蔵は馬に乗って天神稻荷神社に向かった。

伊蔵は羅城門から都に入ったが、そこで平安騎馬隊の騎士ら20騎と合流して都大路を21騎で爆走していた。都の人々は地震か？それとも戦争か？と朱雀大路に出てきた、その辻々には人間に化けた狐が「あれは稲荷神社三代目になられる伊蔵さまで、これから嵐になるために雷封じの祈禱をされるために天神稻荷社に向かわれた」と吹聴していた。人々は一斉に空を見上げたが雲一つない3月の青空だった。しかし、人々は我先にと北の森に向かって伊蔵の祈禱の見物をするために集まっていた。

そして伊蔵が天神稻荷社に到着したと同時に西の空から真っ黒な雲が都に入り、嵯峨嵐山方面では雷が数発落ちていた。雷の大嫌いな公家や貴族は布団を被りわずかな隙間から空を見上げていた。そこに強烈な稲光と同時に雷が落ちたが、そこは天神稻荷社だった。しかも、次々と連続7発も落ちたのだから北の森も天神稻荷の社も火災になるがそこには何も被害はなかった。

この天神稻荷から100mほどしか離れていない大納言藤原義嗣はこの光景を目の前で見っていたのでこれを宮中で吹聴していた。義嗣は「あの雷は宮中や我が屋敷に落ちても不思議はなかったが、伊蔵の祈禱ですべての雷をあの社に封じこめてくれた」という評判は宮中どころか近畿一円に広まるのには3日もかからなかった。しかも、もし伊蔵に逆らったら屋敷に雷を落とされるという「おまけ」の噂まで付いてきた。

伊蔵をけしかけたのは桓武天皇だが、この天皇も伊蔵の超能力に脱帽して伊蔵と生成を宮中に招いていた。そして天皇は伊蔵に、

「伊蔵、ようやった。が、なぜ？7発も雷が落ちたのに火災はなかったのか？」

「はい、あれは避雷針といって北の森の杉や椋木を7本選んでその一番上に3メートルほどの銅の棒を括り付けてその銅の棒から約100mのこれも銅のワイヤーロープを垂らして紙屋川に沈めたのです」

「ほう、それで？」

「元々、あの北の森は小高い丘になっています。そして約20mの木の上ですから宮中の屋根より約70mは高いのです。雷はエレキですから金属を探してそこに落ちてきます。本来なら洛中に落ちる雷が北の森の銅の棒を発見してここに落ちたのです。そのエレキは銅のワイヤーロープを伝って紙屋川に流されます」

「ほう、さすが伊呂具の孫じゃわい...すべて科学的かつ理論的になる。しかし、それは伊蔵の祈祷で雷を封じ込めたということにする。そしてあの北の森の天神稲荷神社は雷を封じ込める神で北野天満宮として正一位の位を与える」

こうして稲荷神社の三代目になる予定の伊蔵は大掛かりな雷劇場の成功で公家も貴族もそして都の庶民も認める大祈祷師としてのお披露目とデビューを成功させていた。その伊蔵はまだ稲荷土木の社長兼土木技師で天皇から命令された淀の港の開発と淀街道の整備に汗をながしていたが、なんせあの全国区の人気伊蔵の下での労役で働きたいという農民らが続出してこの大工事も予定の半分の期間で完成していた。

★桓武天皇の巻(完)...次回から平城天皇の巻



51代・平城天皇

作者不詳

桓武天皇から平城天皇へ、祈禱師も稲荷神社の荷田氏から上賀茂神社の賀茂氏へ・稲荷神社の三代目伊蔵(いくら)の就任式 46話

桓武天皇から平城天皇へ、祈禱師も稲荷神社の荷田氏から上賀茂神社の賀茂氏へ・稲荷神社の三代目伊蔵(いくら)の就任式 46話

806年4月9日に桓武天皇は崩御された。次の51代天皇は桓武天皇の第一皇子の安徳親王にすでに決まっていたので跡目相続の醜い争いは表面化はしていなかった。天皇の名前は「平城天皇」となり806年6月8日に即位の儀が執り行われていた。桓武天皇の葬儀では中心的な役割を果たしていた稲荷神社の二代目の生成(いなり)はこの即位の儀式には招待されていなかった。

即位式では本来祈禱師が座る場所には賀茂氏の祈禱師集団の長賀茂道臣が座っていた。つまり、稲荷神社は朝廷からお払い箱になったという意味だが、これはどんな組織でも長が変われば人事が一心されるのが世の常となる。この賀茂道臣は平城天皇から従四位の位を授けられたが、この従四位とは宮中のどこの部署の部屋に入れるという位になり、いわば宮中の事が自分の目で把握できるという高級官僚になったという意味でもあった。

これは祈禱師だけではなく仏教もそうだった。桓武天皇が亡くなった一か月後に第18回の遣唐使から帰国した比叡山の最澄、空海の両名がその報告の時期を宮中にお伺いを立てたが平城天皇は会うことをしなかったばかりか即位式にも招待の知らせがなかった。その代わりに奈良の仏教会から十数人の高僧が招待されていた。

そこで空海と生成、それにフォックス警備保障の隊長の狐の3人で対策を練っていた。狐の隊長は、

「平城天皇からは朝廷直属の諜報部を解任されたが、朝廷の地下には狐の通り道がそのまま残されており自由に出入りしています。そこでスパイしたことですが、どうも奈良仏教会の僧兵から押収した1000人分の武器、武具を天皇は奈良に返すそうです」

空海は、

「そんな物を返すとまた奈良はまた僧兵制度を作ってその維持費の年貢を農民から取ることになる」

生成も、

「平城天皇はその名前にこだわったのは、そもそも都は奈良でなければならないという思想で再び奈良に平城京を遷都するという意味がある」

「その武器はどこにある？」

狐の隊長は、

「それは栗田口の罪人処刑場の倉庫に保管してありますが、ここは武将の管理地になっています」

そこで生成は堀川一条の征夷大將軍で中納言坂上田村麻呂の屋敷を訪ねた。生成は、

「奈良に武器を渡せばどうなるかは中納言さまもわかっているはず」

「生成、武將というのは政治に口を出せばやがてその武力で政治をコントロールしたくなるものでそれは危険なことだ」

「たしかに日本の歴史そのものだ、しかし、今回の武器が国を超えて他国に渡ることを阻止するのも武將の役目になるが...」

「ふむ、お主もワシも先の天皇にはお世話になった。こういう場合に桓武天皇ならどういう決断をなさるか生成、それを答えよ!」

「ふむ、あれは武器ではなく鍬や鎌などの農機具を作るための鉄のスクラップであって、それを古鉄商に払い下げたと答えます」

「そか、それならそれを比叡山...ではなく、近江の坂本の古鉄商に払い下げることにする」

こうして粟田口の倉庫から大八車50台分の古鉄が坂本の古鉄商に売られた。それを1000名を超える比叡山の修行僧が比叡山の武器庫に運んでいた。そして比叡山の僧兵1000名が組織されたが、これに対して奈良の仏教会は征夷大將軍中納言に猛烈な抗議をしたが、たかが従四位の奈良の坊主などとは位が違うと無視していた。

比叡山の空海も平城天皇に無視されていたが、なにせ桓武天皇時代にはもう比叡山系の寺が洛中、洛外には約100寺もあって桓武天皇がこよなく愛していた神泉苑離宮を真言宗の寺としてこの住職をしていたが、奈良からはなんの横槍もなかった。その背景にあったのが約1000名の僧兵の力だが、そのまた背景には稻荷神社の生成、そして奈良仏教会が一番嫌う天敵の「狐」がいた。

桓武天皇の崩御から六か月の喪の期間が明けた10月10日に稻荷神社の三代目の就任式が神社で開催されていた。三代目は生成の長男で35歳の伊蔵(いくら)だった。この就任式には比叡山の本澄、空海、それに僧兵姿の坊主が1000名も参加していた。この1000名の僧兵は比叡山から「雲母坂」を下って修学院、そこから一条通りの宮中の前で立ち止まり氣勢を上げていた。

そして朱雀門、羅城門へと都大路を大デモンストレーションをしていた。これは平城天皇が「平城京に遷都」するということに対して比叡山は反対しているというデモでもあった。僧兵は山法師といわれている白の裏頭(かとう)の被り物と黒の袈裟で手には奈良仏教会から頂戴した刀や長刀をむき出しにしての行進に奈良を嫌い、桓武天皇の農民や一般庶民のファンはやんややんやの拍手を贈っていた。

 は比叡山の僧兵・弁慶



みちのく紀行・藤原の郷』より

<http://4travel.jp/travelogue/10399591>

比叡山の僧兵(1000人)に続いて神社武装集団(神人・じにん)が稲荷神人騎馬隊を結成 47話

比叡山の僧兵(1000人)に続いて神社武装集団(神人・じにん)が稲荷神人騎馬隊を結成 47話

平城天皇は桓武天皇が設立された警察組織の平安騎馬隊まで解散させる命令を出された。この組織は元々京都盆地の原住民で騎馬民族の藤族で組織されたもので当時全国から年貢が京の都に集まるが、その京都に入る峠の逢坂山峠、老坂、京見峠、渋谷峠、蹴上峠などで山賊などの強盗団にその年貢を略奪されていた。これは峠ばかりではなく深夜に洛中の商店などに押し入る強盗、火付け、女性への暴行、はたまた若い女性の拉致などが蔓延していた。

そこで桓武天皇は稲荷神社初代の宮司伊呂具と相談されてこの藤族の馬60騎で都を守る警察組織の平安騎馬隊を結成された経緯があるが、この騎馬隊の10年の活躍でこの都の周辺での強盗団は全て逮捕、または解散させられていた。この騎馬隊は深夜にも洛中のパトロールを続けているからここ3年でただの一度の火付けが原因の火災は起こってはいない。そして洛中、洛外にも町内に一つは稲荷神社の祠があってその地下の穴には狐が棲んでいる。狐は夜行性でなにか怪しいことがあればすぐに騎馬隊に連絡をする狐番(KOBAN)の役目もしていた。

この解散命令で渋谷街道馬町にあった平安騎馬隊本部も立ち退きを命じられていた。そこで稲荷神社の三代目宮司の伊蔵(いくら)はこの旧平安騎馬隊を稲荷神社の武装集団神人(じにん)として稲荷神社に引き取っていた。そして名称は「稲荷神人騎馬隊」として本部は堀川通り東寺道に置いた。この土地は元々、稲荷神社のお祭りなどで使う「御旅所」になる。

しかし、このことに腹を立てた平城天皇は征夷大將軍中納言坂上田村麻呂に稲荷神人騎馬隊を国家反逆罪として討ち取れと命令されていた。この命令を受けた田村麻呂は稲荷騎馬隊の倍の120騎で攻めると宣言していたが、この馬に乗る、または乗れる武将が数名しかいなかった。これは長岡京から平安京までの間に戦争もない平和が続いて武将そのものが貴族化していたから急に武将になれといっても無理だった。仮に120頭揃えたとしてもつい最近まで現職だった騎馬隊に勝つということは100に一つもなかった。

さらに比叡山からはもし田村麻呂が稲荷神人騎馬隊と戦うなら比叡山の僧兵1000名は稲荷側に味方するという宣言もしていた。この話は近畿はもちろん全国に広がっていた、この平安騎馬隊のおかげで都を追われた強盗団は各地で地味に活躍していたが、その中でも大江山に逃げていた酒吞童子の一味が再び都に出没し始めていた。平城天皇は田村麻呂に、

「これ、田村麻呂、夕べも丹波の国から年貢として納められようとしていた丹波栗が老坂峠で山賊に強奪された」

「ほう、老坂峠といえばその昔、大枝山の酒吞童子を平安騎馬隊が壊滅したと聞いているが...」

「いやいや、また大枝山に戻ってきたらしい、田村麻呂...即刻退治せよ!」

「天皇、我々は天皇の軍隊でこの国に侵略する外国の軍隊、または国内の国家反逆罪の軍隊とは戦いますが、この事案は警察の仕事になりますから我が日本の軍隊は出動できません」

「な、なに～田村麻呂は予に逆らのか?」

「いえ、これは我が国の憲法にも明記されています」

「それなら、国家反逆罪の稲荷神人騎馬隊となぜ戦わない?」

「いえ、これは戦いますが、もう少し準備が...あと少しお待ちください」

神泉苑の南側には桓武天皇が設立した御池奉行所があったが、これも平安騎馬隊が解散したと同時に比叡山の僧兵に占領されて僧兵の御池駐屯地になっていた。ここにも常時200名の僧兵が配置されてここより北1キロ先にある宮中を睨んでいた。つまり、奈良仏教会は天皇を手に入れたが、武力は天皇の意のままにならず手も足もでなかった。

806年10月20日の秋だというのに台風が都を襲った。幸い風はたいしたことがなかったが、雨と雷が数時間続き雷は建立中の西寺の五重塔に直撃して火災が発生していた。さらに、最も身分が高い公卿の屋敷を狙い打ちするかのよう落ちていた。参議の藤原憲明の屋敷は火の海となりそして憲明とその家族が死んでいた。これは平城天皇が稲荷神社を粗末に扱ったので伊蔵が怒って公家や貴族の屋敷に雷が落ちるように祈祷したからだという噂が乱れ飛んでいた。

そしてこの秋から正月には全国から年貢が続々都に届くが、これらの年貢がことごとく都に入る寸前の峠で奪略されていた。ただ不思議だったのはこの峠には油商、織物商、米穀商、乾物商などの一般貨物も昼夜を問わず峠を通るが、この隊列の荷物は山賊は決して襲わなかった。これには訳があってこれらの豪商、商社などは稲荷神社の信者で稲荷神社から「道中安全お守りの木札」を授与されていた。その木札を大八車と牛車の荷物に張り付けていた。それを見た山賊らはこの貨物には手をださないという決まりができていた。つまり、稲荷神社の信者及び氏子を襲うとあの恐ろしく強い「稲荷神人騎馬隊」が出動することになるからだ。

稲荷神人騎馬隊としては当然のことで信者、氏子からのお供え物で経営しているのだから、これは神を守るためであり正義の武装集団になる。したがって国家反逆罪には当たらないという理屈を征夷大將軍中納言坂上田村麻呂に酒を飲みながら伊蔵は話している。伊蔵は、

「中納言さま、この度は天皇の命令を待っていただきありがとうございます」

「いや、こちらこそ...戦争なんかするより桓武天皇の時代のように農民も商人も花見や月見を楽しんでほうが楽しい」

「そうですね～桓武天皇の12年間はみんな夢を持っていた。そしてそれが実現して都の犯罪発生率は世界の都市でも一番低いといわれています」

「それはお主の平安騎馬隊とフォックス警備保障のおかげだと私は思っています」

「ところで年貢の荷物が山賊に次々襲われていますが、どうします中納言さま」

「そんなものほっとけ...どうせ平城天皇なんかは3年ももたない」

「ほう、えらいことを耳にしてしまった...」

「ま、ワシとお主の酒の席の上でのたわごとだ!」

「はい、中納言さま、しかし、どうしても中納言さまと戦わなければならないことになったら?」

「はい、お主の稻荷神人騎馬隊とワシの騎馬隊で帽子の取り合いの騎馬戦をしたらいい」



建設業者の大ストライキ・第二皇子の賀美野親王が警察庁長官に、これが源氏の武將の始まりだった。48話

建設業者の大ストライキ・第二皇子の賀美野親王が警察庁長官に、これが源氏の武將の始まりだった。48話

平安京への遷都から14年、桓武天皇崩御から3年が経っていた。宮中の屋根も廊下も傷みがひどくて雨漏りはもちろんのこと少しの風でも雨戸の板も飛んでいた。これは公家の屋敷も貴族の屋敷も同じボロボロだった。洛中には宮内省御用達の建設業の二社があった。一社は神社や寺を扱う宮大工専門の秦建設、この秦建設は帰化人の秦氏の末裔になるが松尾神社の有力な社家になる。もう一社は稲荷建設、稲荷土木、稲荷設計事務所、それに牛車で建設の木材を運ぶ日本通運などの稲荷グループになるが、これは名前の通り稲荷神社の直営企業になる。

この秦建設の松尾神社も稲荷建設の稲荷神社も桓武天皇の時は宮内庁御用達企業だったが、平城天皇に代わったときにこれを取り消されていた。この二社とも平安京の造成にはすべての建物、すべての社寺に関わりをもっていた。そして現在建設中の官営の東寺と西寺の工事も完全ストップしている。洛中の建設会社はこの2社しかない、天皇として農民や庶民を年貢という労役に強制労働させられるが、仮に人夫が一万名動員されても設計者や大工に測量技師などの専門技術者がいなければ小屋程度しか作れなかった。

一方、これらの建設会社は比叡山系の寺社の建立に忙しく宮内庁御用達を取り消されてもなにも被害はなかった。公家の中でも公卿といわれる超高級皇族の屋敷の塀は板張りではなく土塀が多かった。その土塀も雨風に侵されてところどころ穴が開いて盗賊団の被害もそろそろでてきた。その盗賊団を取り締まる警察組織の平安騎馬隊も稲荷神社系として平城天皇に解散させられていた。

さすがの平城天皇もこれには頭が痛くてついに寝込んでしまった。その天皇の病気を診る御殿医の「玄庵」とその診療所の医師らも御殿医の認可を自ら放棄して桓武天皇からいただいた伊吹山に漢方の研究所を設立して都から退散していた。

洛中や洛外の別格本山などの寺院は宮中より立派になり、また豪商の屋敷よりも宮中はみすぼらしくなっていた。全国各地からの年貢もことごとく山賊の餌食になり位の低い貴族などは米の飯も食えないほど落ちぶれていた。そこで平城天皇の弟の賀美野親王が神泉苑寺を訪れ空海と面談していた。この賀美野親王は桓武天皇の第二皇子だったが、兄の平城天皇にはすでに皇子が2人いるために次期の天皇の候補にも上がっていなかった。

その賀美野親王は、

「空海、兄の政権はもう長くはもたない。それになにやら奈良仏教会と密談をしているらしい、それに桓武天皇の暗殺計画に関わった薬子とその兄の藤原仲成を免罪して都に呼び戻すとしている」

「親王、もう都では平城天皇を支持する公家も貴族も皆無です。したがって我らは賀美野親王を第五十二代目の天皇と期待している」

「しかし、予はその目はないと学問をサボリ、武芸ばかり鍛錬してきた」

「そうか～親王は皇子であるのに馬にも乗れるし弓の名人ともいう。それならここは一つ、元の警察組織の平安騎馬隊の長官として活躍すれば宮廷の見方も変わる」

こうして日本の歴史には異例の第二皇太子が姓は源氏を名乗り名は神野として「源神野」(みなもとのかみの)として私設警察の長官となった。これが源氏という武士の発祥の瞬間でもあった、この話はすぐさま日本中に広がり、この話を聞いた峠の山賊も洛中の盗賊団も次期天皇候補が長官の「平安騎馬隊」の復活、それも背景に空海、そして稻荷神社の伊蔵と狐がいるとすれば山賊も盗賊も都から逃亡するか廃業する道しかなかった。

とりあえずは年貢も都に届き強盗団の火付けや女子の強姦、拉致は源神野警察庁長官(賀美野親王)の采配で落ち着いていた。この平安騎馬隊復活はなにより農民や庶民が喜んでいたが、その理由は先の天皇、桓武天皇の考えとこの賀美野親王がまったく同じで馬から降りてなにか?困ったことがあるかと農民であれ庶民であれ笑顔で接していた。

ただ、宮廷や公家、貴族の屋敷の修理については都中の大工がストライキを起こしたままでこれから寒い冬を迎えようとしていた。そこで平城天皇は賀美野親王に、

「最澄と空海からはまだ18回遣唐使の報告を聞いていないのでここに来るようにと伝えてほしい」

「天皇、お言葉ですが、最澄も空海も、それに伊蔵の官位をはく奪していますから、宮中には参内できません」

「そか、だからといって簡単に復権を許したらしたら予のメンツが立たない」

「しかし、薬子と藤原仲成は復権して元の従四位で宮中をわが物顔で色々政治に口出しをしています」

「ふむ、しかし、その空海や伊蔵とお主は密会しているそうだが、それはどうなる」

「いえ、騎馬隊の件でしたら、あれは自主的に私が洛中の警備をしているだけでなんら意味はありません」

「それにお主は「源神野」と名乗って武士団を結成したというが、それは国家反逆罪になる」

「それも征夷大將軍中納言坂上田村麻呂に許可をもらい、その配下としての平安騎馬隊ですから天皇を守る軍隊にもなります」

「ほう、警察から軍隊になったのか?」

「はい、武将としての「源姓」を今後は名乗りたいと思っています」

平城天皇は最後の望みとして空海らと和解を試したがこれが失敗した。この数日後に平城天皇は薬子と仲成の一味を連れて奈良の東大寺に行幸したが、それっきり京の都には帰ってこなかった。やがて天皇不在のまま三か月過ぎたある日、宮中で天皇抜きの参議が開かれて公卿全員の承諾で「第52代目 嵯峨天皇」が誕生していた。この嵯峨天皇こそ賀美野親王であった。歴史にもしはないが、もし、平城天皇がメンツを捨てていたら平城天皇の政権は長く続いて嵯峨天皇が誕生することはなかったことになる。



[比叡山の僧兵\(1000人\)に続いて神社武装集団\(神人・じにん\)が稲荷神人騎馬隊を結成 47](#)

話



[新・京のいけず石・いけず石・古典のいけず石、背丈80センチ、駐禁ダメ押し、花壇風の上
品な、ど根性いけず石...](#)



昨日のお買い物...年金暮らしの生活の知恵?

GU...10周年記念の特売 Gパン2480円→990円(いずれも税抜き)

これは安い!2枚も買った。これは10日までの特売

ちなみにワシが着ているものは↓画像...笑ってください。

本体価格=3000円

シャツ
250円

Gパン
990円

リプラスシューズ 2000円



嵯峨天皇即位と皇后の嘉智子・「薬子の変」に嵯峨天皇自ら「源神野」という武将と名乗り初陣を果たす。 49話

嵯峨天皇即位と皇后の嘉智子・「薬子の変」に嵯峨天皇自ら「源神野」という武将と名乗り初陣を果たす。 49話

809年5月18日嵯峨天皇は第52代目の天皇に即位された。天皇はすでに結婚をされており皇后は貴族の名門橘家の橘嘉智子(かちこ)さん。この天皇は23歳で先の平城天皇には皇子が二人もいることから天皇の目はないと学問はそっちのけで武将の道を選んでいた。そしてその武将の家の創立の氏を自ら「源の氏で名前は神野(かみの)」と名乗っていた。この神野が武将の道を歩み始めた直後に平城天皇の職場放棄という事件があって天皇となっていた。

その嵯峨天皇が最初にした仕事は平城天皇が位をはく奪した比叡山の最澄、空海、それに稻荷神社三代目の伊蔵(いくら)、松尾神社の宮司秦三酒(みき)への復権だった。この復権には二つの意味があって一つは荒れ果てた宮殿や公家、貴族の屋敷のリフォームの大工事だった。二つ目は洛中、洛外の治安の問題で平安騎馬隊を再び警察組織として政府公認にした。またこれは秘密裏にだが嵯峨天皇直属の諜報部をこれも再び「フォックス警備保障」を再任していた。

つまり、平城天皇の3年前の桓武天皇の体制に戻っていた。一方の奈良に逃亡していた平城天皇は奈良の仏教会がこの日のために元の平城京の宮廷を保存していた。ここで平城天皇は、

「予は嵯峨天皇に皇位を譲位した覚えはない、したがって我が国の天皇は私になる」

さらに、

「その天皇である私が平安京から平城京に遷都する」

ということを宣言していた。

この宣言を受けて奈良仏教会は奈良の本山の末寺が多くある奈良は当然だが、三重、愛知、大阪、和歌山の末寺のある村の村長に「年貢は平城京の平城天皇に収めること」という命令をだしたことが発覚した。実際には平安京から各県に派遣された国司が年貢の京の都までの輸送方法を決めるが、しかし、まだ新聞もテレビのない時代では京の都の騒動は聞こえず、寺からの通達で年貢は奈良の都にと輸送する村もでていた。

その時すでに平安京から奈良に派遣されていた国司は奈良仏教会の刺客に殺され奈良から京への年貢のすべては奈良の仏教会の資金源になっていた。こうなればもう立派な国家反逆罪で嵯峨天皇は征夷大將軍中納言坂上田村麻呂に奈良征伐の命令を下された。ところが嵯峨天皇はこの戦いに、

「予も参加したい」といいだされた。

これには宮中も田村麻呂も猛反対されていたが、天皇は田村麻呂に、

「予は天皇としてではなく、武将の源神野として初陣をしたい、もちろん征夷大將軍中納言の部下の武将でいい...」

「し、しかし、歴代天皇で武将になられた方々はいない、それに日本の歴史書にどう書けば？」


「そんなものを書くために予は戦いに行くのではない！」

これも桓武天皇と同じで一度言ったら後にはひかない性格だった。こんなことは外に漏れるのが早いものでそれなら空海も僧兵1000名を引き連れ参戦する。さらに平安騎馬隊まで参戦すると急ピッチで戦争の準備がなされた。本隊は征夷大將軍中納言坂上田村麻呂の総勢500名、後には僧兵が千名、最後尾には平安騎馬隊の60騎で総勢1560名の出陣式が朱雀大路一条で開催されていた。


この隊列が羅城門をでて大和街道の観月橋まで進むと先陣のフォックス警備保障の諜報部員から連絡が入った。それは、

「この出陣を知った平城天皇は頭を丸めて仏門にはいった。薬子とその兄の仲成は自害した。さらに、奈良の仏教会の幹部は全員辞職した上で下俗したという」報告だった。(薬子の変)

そしてこの隊列は再び凱旋門でもある羅城門から入城して勝利の凱旋パレードをしていた。わずかに出陣してから半日で勝利した。もちろんこの先頭で田村麻呂と並んで馬に乗っている武将が嵯峨天皇だということは農民も民衆も知っていたが、この歴史は朝廷の歴史書には記録はされていない。

...余談だが、この嵯峨天皇はかなり女好きで皇后との間に子供が7名もいる。その他にも5名の12名がいると朝廷の歴史書には記されているが、これだけではなく宮中でなく外にも7~10名はいるとされている。この天皇の12番目の子供の源融が源氏物語で有名な「光源氏」とされている。嵯峨天皇は天皇が武将になりたかった夢を子供らに託して「源氏」を名乗らせてその源氏が平安時代の武将の名門にやがてなっていく。(このコラムも新源氏物語になるかもわかりません)



 [新・京のいけず石・いけず石・古典のいけず石、背丈80センチ、駐禁ダメ押し、花壇風の上品な、ど根性いけず石...](#)

官営の寺、東寺、西寺が完成・西寺管主守敏の連日連夜の乱交パーティー・あさぎま だら 水尾(京都府)撮影者 新谷哲夫 50話

官営の寺、東寺、西寺が完成・西寺管主守敏の連日連夜の乱交パーティー・あさぎまだら 水尾(京 都府)撮影者 新谷哲夫 50話

官営の寺、東寺と西寺の工事も嵯峨天皇になって急ピッチに進んでいた。そして着工20年目でやっと完成した。嵯峨天皇は東寺を空海に西寺を守敏(しゅびん)に与えられていた、この東寺も西寺も羅城門から東、西と同じ規模で金堂、講堂、食堂の巨大な伽藍が並び、そして高さ55メートルの五重の塔がある。

境内には塔頭用にと20もの敷地が確保されている。東寺の塔頭の寺と宗派を選ぶのを空海に一任していたが、奈良仏教系の西寺は守敏から推薦があった宗派、僧侶を高級貴族従二位右大臣の清野夏野が選ぶということになっていた。これはまだ天皇が奈良仏教会を信用されていないという意味で元々奈良からの貴族であった夏野にこの選考を任せていた。この清野家は代々奈良の唐招提寺の檀家総代で先祖の墓も奈良にあり奈良の宗教界をよく把握していたからだ。

元々、京の都に住む住人の約半分は奈良から、または奈良～長岡京経由の住人になるので奈良仏教会の強権に腹は立っていたが、先祖代々からの宗派や墓は奈良にあった。その宗派の寺が都の西寺の塔頭としてあればそれは便利になるからだ。それは奈良の寺も同じで西寺に寺さえ確保されれば檀家を一から探さなくても寺はそれなりに栄えることになる。

その奈良の寺もまずは管主の守敏に気に入ってもらわなければ夏野にお伺いを立てる推薦の書類さえ書いてもらえないことになる。そこで奈良の各寺院は守敏を攻略する大作戦を立てるのだが、衰退した奈良の寺のそれも本山でもない中堅の末寺だから金についてはなかった。そこで守敏の酒好き女好きを利用しての接待を計画していた。ある坊主は自分の娘を、またある坊主は自分の愛妾を京都に連れてきては守敏の世話をし始めた。幸いに西寺には部屋は数多いからそれらの坊主一家の数組を住まわせて夜は守敏とその女たちとの乱交パーティーが連日連夜開催されていた。

その様子をフォックス警備保障の狐が稲荷神社三代目の伊蔵(いくら)に報告していた。狐は、「伊蔵さま、人間っていうのは一皮めくると皆同じですね～私は狐に生まれてきてよかったと思っています」

「そか、そんなに見苦しいか?、その奈良の坊主どもは守敏になにか賄賂か物でも?」

「はい、手土産に酒の1升でも持っては来ていますが、3日も4日も奈良の坊主とその女も寺の飯を食べています」

「そか、それなら収賄にもならない...ところで朝のお勤めや坊主らしきことはしているのか?」

「はい、それは全員5時に起きてお勤めをしています。昼はなにかと働いています」

「ふむ、夜の乱交だけか?それなら天皇にいうのも...」

「伊蔵さま、それはなぜ?」

「いや〜お主がいったように人間は一皮めくれば皆同じだ。天皇もその〜女好きじゃ〜」

そして塔頭の数20か所のところ奈良の宗派8派70の寺から応募があってその最終選考に選ばれた30の寺の選考が一か月に渡り西寺であった。審査員は夏野で毎晩西寺でその応募の寺の坊主と面接だがなぜか?若い娘が同席していた。夏野はその応募の動機などを一応坊主にしていた、そして同席の女性にも質問をしていた。夏野は、


「そちの名前はなんというのじゃ〜?」

「はい、真紀子と申します。年は17歳です」

「そうか〜かわいいの〜私のことはどう思う?」

「はい、夏野さま〜気品があって素敵です」

もうこの会話で夏野の審査は終わっていた。一方、夏野のタイプでない女性の寺は落選をしていた。もちろんいうまでもないが、一か月の審査の内、夏野は20回も西寺に泊まっていた。これも狐の警備員は把握していたが、これを伊蔵に報告しても無駄だと報告をしていなかった。

...ちなみにこの時代は性に関してはまったくの男女平等で「不倫」という言葉さえなかった。それに「処女」という言葉もなく処女信仰も当然ない。しかしながら現在より女性は栄養の関係で年を取るのが早くて30過ぎればもう誰も相手にしなかった分、女性は若い時からHの回数を重ねなければならないからそんなに男を選べない宿命でもあった。ここの狐がこの平安時代の風紀の乱れに嘆いていたが、それは狐の世界の男尊女卑の考えで現在の日本の男の考えにも近かった。



あさぎまだら

京都府水尾・2016年10月4日...羽に「水」という文字と9月?日XXXXXの記号

撮影者の新谷哲夫さんの話では「水」の標識はこの地の水尾のことでここで確保されてまだ旅にでていないかと考えています。



あさぎまだら

撮影・京都府水尾・201610月4日 新谷哲夫

西寺管主の守敏(しゅびん)の大出世・奈良仏教会を考える会発足・空海と守敏のお話し 2題 51話

西寺管主の守敏(しゅびん)の大出世・奈良仏教会を考える会発足・空海と守敏のお話し 2題 51話

官寺・西寺の管主の守敏(しゅびん)は奈良生まれで三輪宗石淵寺で勤操(ごんそう)の弟子となる。この勤操は比叡山で空海らとともに真言密教の修行した仲間になる。この縁で西寺完成までの別当(責任者)を任せられ、また奈良仏教会との窓口の僧侶にもなっていた。やがて西寺が完成してこの寺の管主に勤操となる予定だったが、勤操は高齢のために辞退していた。

そうするとやはり奈良の歴史ある唐招提寺、東大寺、薬師寺、大安寺の高僧を招聘しなければならなかったが、「薬子の変」でこれらの高僧のすべてが責任を取って奈良仏教会幹部を辞任したばかりか僧侶をやめて下俗していた。勤操も幹部だったが、京にいたためにその責任を免れた石淵寺の勤操しかいないことになる。そこでその弟子の守敏程度しかいないが、やむを得ず嵯峨天皇は守敏に西寺を与えた。

この官営の東寺、西寺といえば我が日本国の最大のシンボリックな寺だがその西寺の官長にまだ一度の住職の経験もなく、最澄や空海のように遣唐使をも経験がないいわば無名の僧侶が抜擢されたのには理由があった。まず奈良仏教系の全国の末寺は2500寺だが、比叡山系の末寺はまだ125寺ほどでそれも洛中、洛外の近郊に限られていた。

天皇が決められた法律や決まり事は各県の国司(県知事)に伝えられてそこから各村の寺に伝達されている。まだインターネットどころかテレビも電話もない時代ではこれが最も早い伝達方法だった。また国司は災害の復興や公共工事の労役(人的年貢)の各村への割り当てや日数などの連絡事項もこの寺に連絡すれば国(県)中に広まることになるが、この寺の協力を拒否されたらもうお手上げになるという意味があった。

その各県の末寺の元締めでもある奈良仏教会の代表をどうしても国営の西寺の管主にしなければ全国2500の寺というネットが動かなくなることになるからだ。そして栄誉ある管主に選ばれた守敏もそんな荷の重い役目を喜んではいなかった。東寺と西寺は同じ官営で立場も五分にはなるが、なんせ全国人気の空海、それと比べられたら自分でも認める格下も格下で横綱と十両ほどの開きがあった。

西寺の塔頭を運良く手に入れた奈良の各宗派から派遣された首都中央出張所の寺の住職も幹部が総辞職した後のその他大勢の坊主が派遣されてこれも守敏は頭が痛かった。一方の東寺は空海人気で門前には朝市が立ち並び参拝客も多かった。これでは西寺どころか奈良仏教はさらに衰退すると守敏は奈良仏教会を考える会を立ち上げて塔頭の住職20名とともに頭を使っていた。

その講師に稲荷神社三代目の伊蔵(いくら)になってほしいと守敏は素直に頭を下げている。伊蔵は、

「いやいや、もったいない西寺の管主にわざわざご足労を願って...」

「なにをおっしゃいます伊蔵さま、伊蔵さまもご存じのとおり私は奈良の田舎者でこのような大役に往生しています」

「しかし、今や民間の神社とは違い国営の管主ですからもっと偉そうにしてください」

伊蔵はこのことがあってから守敏とはなんとなく気が合っていた。そして奈良仏教を考える会の講師を引き受けていた。講演会は講堂で行われて聴衆は西寺の僧、それに塔頭の坊主の約100名だった。伊蔵は、

「神職、僧侶もそうだが、我々は物を人さまからいただき生活をしているが、物の生産はなに一つしていない。農民は米を作り、漁民は魚を獲っている、工人もこの農民、漁民のための道具を作っている。商人はこれを市場で売っている。遊んでいるように見えている役人も国の事務を仕事にしている。なら、我々も物は生産できないが、何か人さまのお役になる仕事をしなければならぬ。その仕事はなにか?というディスカッションをしたい」

伊蔵は100人の坊主を見渡して根性のある坊主を指名していた。ある坊主は、

「それは国民の幸せを願って仏さまを拝むことです」

「そか、それなら奈良の国民の生活はかなり良くなったのですね」

「いえ、それは...干ばつもあり、そして水不足で、少し雨が降れば水害に、このために米の生産高も全国平均を大きく下回っているからです」

「ほう、原因がわかっているのにお主は仏さまを拝むだけでいいのか?」

「そ、それが僧侶の仕事になります」

「ほう、その米を誰からもらってお主は生活をしている」

「それは...」

そこで伊蔵は、

「坊主というのは、米を作るための学者にならなければならない。雨が降らなければ溜め池を作る。水不足なら農業用水を作る。それに治水も大事になる。米の病気の研究など、それには気象学から土木、ありとあらゆる学問を身につけてこれが御仏さまの心だとして農民や庶民のために働かなければならない。農民が働いている時間の間はこれらの勉強をしてその成果こそが神、または仏さまのご利益になるのです。つまり、お供え物というのは生産に協力した分け前だと考えれば僧侶も農民も国も一石三鳥になるというものだが、これに意義のあるものは申し出よ」

この後、参加した僧侶らと酒を飲んだが、僧侶らは学問とは唐からの御経を写経するものだと思っていたが、それらの書物には米の生産方法は書いてはいない。それを聞いた伊蔵は、

「いやいや、それも立派な仕事だが、それは農民らが豊かな生活をした後に宗教や信心そのものを教える大事な勉強にはなる。しかし、その前にまず農民の物理的な生活の応援をするのも僧侶の仕事になる」

そして最後にこの西寺の僧侶は明日から洛中、洛外の桓武天皇や空海が開発した水田を視察することになった。この水田には奈良のように水不足はまずない、仮にあっても溜池がある。生産量はここが100とすると奈良は75以下になる。しかも年貢は奈良は20~30%(各社寺への荘園分を含む)、都は10%とかなり安い。その差で各村には仏教が広まり瓦屋根の寺が必ず一つはある。これらを勉強して奈良に持ち帰ってほしい、それが日本の発展にもなる。



歴代天皇は離宮がお好き・嵯峨天皇の嵯峨離宮、大覚寺、大沢の池、人口の滝は日本で初めて名古屋の滝 52話

歴代天皇は離宮がお好き・嵯峨天皇の嵯峨離宮、大覚寺、大沢の池、人口の滝は日本で初めて名古屋の滝 52話

桓武天皇は神泉苑離宮をこよなく愛していたが、第52代目の嵯峨天皇も離宮の候補地を探していた。嵯峨天皇というからには嵯峨がいいと結論されて大沢の池よりさらに山側にその離宮の建設が始まっていた。建設業者は秦建設でこの秦氏は丹波の大井川から保津峡、そして桂川までの筏の航路を開拓した帰化人の秦氏の末裔だった。そして人口の池でもある大沢の池を作った実績もあった。そして大沢の池より大きい池ということで天皇はこの池の名前を「大沢池」と命名された。

嵯峨天皇は書院造の御殿はともかくこの大沢池の庭園に滝を作ってほしいというが、この滝には山から落ちる高さが必要になる。しかし、この北嵯峨の山はかなり北側にあり地形的には無理な注文になると社長の秦川成は頭を痛めていた。大沢の池の予定地から北の山まではゆるやかな勾配で約500mほどありその山の山奥にある菖蒲池から有栖川が流れて大沢の池に水を溜めているが、この水を先に池に引けばいいが、川の底から池の面までは1mほどしかなくこれでは滝とはいえない。

そこで川成はこの山からの有栖川を高さ約2mの土塁を作りその上に水路を作る計画を考えていた。これだと高さ2mの滝だが滝壺を2mと深く掘れば合計3mの立派な人口の滝になるという設計になる。そしてこの滝から深さ1mの川を作りその水は庭園中を曲線に通り大沢池に入るという案を嵯峨天皇に示していた。

天皇は、


「そか、しかし、高さ2mの土塁となると莫大な費用もかかるが？」

「それはこの川の東側、西側には広大な雑木林があります。それにこの林は山に向かってゆるやかな勾配で段々畑の水田に適しています。水はこの土塁水路にふんだんにあります。ただ田植え時期にはこの滝の水が少々少なくことも承知していただければ...」

「そか、その水田からの収益で賄えるのか？」

「はい、先に土塁と官営水田の開墾を同時にして2年後には米の収穫があり、その金で池の土木工事と滝の石組と庭園を造ります。その工事は2年を予定しています。さらにこの大沢の池の下流には嵯峨村、梅津村の水田があり、その溜池として利用できます」

「ほう、4年後には嵯峨離宮ができるのか...川成、そちの考えた人口の滝を「川成滝」（この滝は江戸時代からは名古屋の滝となる）と命名する。

...余談だが、この工事の予定期間は4年になるが、4年先といえば東京オリンピックになる。その工事の計画も費用が当初予算の数倍から10倍にもなるといわずさんな計画が露呈した。こんな1200年前の重機も計算機のない時代でもすぐれた建設会社と決断力のあるリーダーで嵯峨離宮御殿(後に大覚寺)の建設、それに滝のある庭園や池を作り、さらにその費用の捻出、そして水田と農業水路、溜池というレガシーまである。少しは現代の日本の政府も東京都も見習ってほしいものだ。

さて、また本題にもどるが、天皇、皇族は離宮、〇〇院、〇〇宮、貴族は別邸、別荘、ともいうが、別荘といえば前東京都知事の舛添要一氏が公用車を私物化して1年に50日以上も湯河原の別荘の足として使ったことで有名になった。東京都知事は皇族でも貴族でもないが、どうやら自分自身が天皇と錯覚して公用車を使うのは当然と開き直ったことはまた記憶に新しい。

平安時代でも後白川天皇が造営した鳥羽離宮(1073年ごろ)、後水尾天皇の修学院離宮(1653年ごろ)、八条宮の桂離宮(江戸時代)、光源氏の六条河原別邸、武将でも平清盛の八条御殿(1147年ごろ)、室町幕府3代将軍足利義満の金閣寺、室町幕府8代将軍足利義政の銀閣寺ともこれ別荘であった。その他の離宮や別荘、それに公家の〇〇院というのも含めると洛中、洛外には平安時代400年の間に約1000ほどもあったといわれている。

天皇が宮殿で仕事をするのは古くからの伝統行事(即位式など)や政府幹部との正式会議だけで月の半分は離宮での生活というのが多くなる。しかし、これは遊んでいるのではなく宮廷ではできない正式以外の政策などの立案や秘密裏に進めなければならない案件はすべてここで処理されている。それともう一つの理由は宮殿には官位がない人間は入れない。しかも大極殿には従四位以上しか参内できないという決まりもあったからだ。

しかし、この離宮にはそんなことがないので官位従四位以下の従七位の最澄や空海、それに稻荷神社の伊蔵らと会おうと思えば離宮しかなかったことになる。もちろん無位の商人、女性などもここには自由に出入りできた。この離宮外交こそ嵯峨天皇の父親の桓武天皇が得意としていた分野になる。昼間は何かと忙しいが、夜は庭園の巡る季節の桜や紅葉、それに菊、月見の宴ぐらいしか楽しみはない。とはいってもこの楽しみのために離宮を造るというのが天皇、公家、貴族らの本音になるのかもわからない。嵯峨天皇は皇后との間に5名の子供がいるが、この他にも朝廷の歴史書に記されている子供は7名にもなる。この7名の子供はこの嵯峨離宮での仕込みになるが、さらに外には7~10名はいると伏見稻荷大社の社史には書いてあるという。(この件の詳細は次回からになる)

は、大沢の池

京都観光Navi : 名勝 大沢池 より

[https://kanko.city.kyoto.lg.jp/detail.php?](https://kanko.city.kyoto.lg.jp/detail.php?infokin...)

[infokin...](#)



嵯峨天皇は仮の離宮の六条河原離宮(後の光源氏の別荘・枳殻邸)を造成・ 53話

嵯峨天皇は嵯峨離宮のできるまでの4年間のために仮の離宮の六条河原離宮(後の光源氏の別荘・枳殻邸)を造成されていた。この地は元々沼であったが湧き水も豊富で池泉回遊式庭園にするにはもってこいの土地だった。周囲はほぼ東西、南北とも200mで天皇の離宮としては少し小さいが仮の離宮として建設が進んでいた。

建設業者は稻荷建設で社長は稻荷神社宮司3代目の伊蔵の弟で荷田伊豆(いず)だった。ほぼ敷地の半分は庭園になるので書院造の寝殿も少し小さく全体にコンパクトに設計されている。天皇はそれでも不満を言わずに月の内の半分はここで仕事をしていた。先の52話で天皇は皇后との間に5名の子供、それに朝廷が認知するの子供が7名、そしてこれ以外にも子供が7~10名いるとしたが、これは何も天皇が夜な夜な祇園のクラブやお茶屋で芸妓や舞妓、ホステスを口説いてできた子供ではない。

この離宮という性格上高級官僚以外にも一般の商人や天皇への献上物を差し出す地方の豪族も天皇の許可さえあれば自由に出入りができた。ある日、山崎の豪商で油問屋の「山崎屋」が洛中に油専門店が集まる地域を指定してほしいという陳情があった。この山崎屋は桓武天皇時代から宮内省御用達の商人であったからその陳情を許していた。山崎屋は孫娘の種子とともに離宮にきた。そして、

「天皇、ごぶさたしています、山崎の山崎屋です」

「ほう、久しいの〜で、今夜はなんの陳情になるのか？」

「はい、御存じの通り、油問屋は長岡京があったころから山崎にありました。そのころは宇治川の港が山崎にあったのですが、今般淀に港ができて洛中にも近くなりました。それで油問屋が集まる油小路を定めてもらうと便利になります」

「そか、それなら左京の堀川より一本東の道を使え」

「はは〜ありがとうございます。そしてもう一つお願いがあります。それはここに控えています孫娘の種子をどうかこの離宮で教養を身に付けるために奉公させていただきたいのです」

「ほう、この離宮もなにかと女子の仕事も多い、あい、わかった」

こうして種子は離宮とはいえ雅かな職場の従女としてデビューしていたのです。この山崎屋の思惑はもし種子に天皇の子供でもできれば皇子の母の祖父になる。もし天皇の手がつかなくても孫の女子としてのキャリアは想像を超えるものがあつた。種子は16歳で色白でまだ幼さが残るが、この時代では立派な大人で天皇が未成年の少女を犯したとはならないし、また、種子も積極的に天皇にアタクするのは当たり前になる。

ただ、この離宮にはすでに官女32名、そして80名の従女がいるためにそう簡単には天皇には近づけない女の戦いの場でもあった。この種子は相当運がよかったのか、天皇の好みだったのか？山崎屋が種子を連れてきたその日の夜に天皇から指名されていた。その夜は、官女、従女のすべてが天皇の寝所で今繰り広げられている場面を想像して嫉妬に妬みありとあらゆるジレンマに陥っていた。

天皇は種子とよほどウマが合ったのか？それとも肌が合ったのかはわからないが、種子を自分の娘のように可愛いがっていた。こうなれば離宮の新参者でも官女も従女も無視はできず「種子さま」と呼び種子の部屋も当てがれていた。これでもし妊娠でもすればもうこの離宮の女帝になるのは間違いはなかった。

しかしながら他の女性もそれなりの魅力があり天皇を色気で攻略する場面はしばし見られていた。天皇も天皇で離宮の秩序を保つためには種子ばかりでは具合が悪いと判断してなるべく順番に相手をして離宮の平和を守っていた。ある日、稲荷神社の伊蔵が稲荷名物の「若狭の鯖寿司」を手土産に離宮を訪ねてきた。そして、

「天皇、少し顔色が悪いが...?」

「ほう、伊蔵、ちと聞くが...そちは月の内、何回するのか?」

「はっ?何を何回?」

「おいおい、男がするといえば...あれだろう...」

「ほうほう、あれですか?妻とは月に数回です」

「ほう、ほな愛妾とは?」

「て、天皇、私は仮にも人の模範になる神職です。そんなものはありません」

「ほう、予がやりすぎるのか?」

「はい、なんでも山崎屋さんの孫娘が天皇の子を身ごもったと洛中、洛外でも噂されています」

「ふむ、なんで予の知らないことを先に伊蔵は知っているのか?」

こうして天皇と伊蔵は酒を飲んで楽しんでいたが、ついに天皇は酔ったのか?伊蔵に、

「のう、伊蔵よ、今夜はこの離宮に泊まって予の代わりにしないか?」

「えっ、もう今夜の予定の女性が決まっているのですか?」

「はいな~もう彼女らが勝手に一か月分のスケジュールを決めているらしい?」

「それなら天皇、今夜は朝まで私と飲み明かしましょう...それなら1回パスできます」

「ほう、予は伊蔵がうらやましい~ついでに天皇も代わるか?伊蔵」



…この時代まだ避妊の方法も考えられていなかったので天皇の子供が多いということは決してこの嵯峨天皇がアメリカ大統領候補のトランプ氏のように女好きの権力者ではなかったことを1200年後の今、私が天皇の名誉を守るためにここにコラムとして書いておきます。

嵯峨離宮道(一条通り)...大將軍神社・下の森の妖怪・京都一条・妖怪ストリート、妖怪グッズの店もある 54話

嵯峨離宮道(一条通り)...大將軍神社・下の森の妖怪・京都一条・妖怪ストリート、妖怪グッズの店もある 54話

・
造成中の嵯峨離宮への道は宮殿の正門の前の一条通りを西へ真っすぐ行けば地図上は約5キロで嵯峨天皇を乗せた牛車でも約2時間で行ける。しかし、その西への一条通りは御前通りで終わりその先は道がない下の森になっている。ここから北嵯峨への道はもう1本あることはあるが、そこは下立売通りという名前はあがあるが幅1mほどの農道だった。

そこで朱雀大路を南下して三条通りを西へ行けば嵐山になる。そこからUターンする形で嵯峨離宮に入れば距離は倍の10キロ、牛車では4時間もかかることになる。そこで最短距離の一条から真っすぐ西への新道を造ることになった。施工は稲荷土木、設計も稲荷設計事務所が請け負うことになった。まず紙屋川に橋を架けて下の森を切り開き衣笠山、御室山、宇多野山の麓を削るという大工事になった。

この下の森はこれより北の森とつながっている大昔の森になるが、この森には妖怪が棲んでいるという噂で労役（米の年貢とはまた別で農民は公共工事の人夫として年30日～50日駆り出される）の農民がまったく集まらなかった。しかし、もしこの労役を拒否したならば国賊として天皇の軍隊（武将）が武器をもってやってくるばかりか、その集落の村長は処刑された上にその村の共同責任として年貢も3倍という重い罪が課されていた。

稲荷土木の社長の荷田伊豆（いず）はその妖怪の噂の真相がわかれば人夫が集まるとフォックス警備保障に調査を依頼していた。そこで狐の隊員らは下の森の御前通りより東の住人にもこの妖怪の話聞いていた。その住人らは、

「そら～わしも何回もその妖怪に追いかけられたことがあるので絶対に噂ではない」
また別の住人も、

「あの森の南側は赤松の森で秋になれば松茸がぎょうさん獲れるので森に入った瞬間に辺りが真っ暗になり頭が二つ、足が一本の妖怪や顔は亀で背中に土瓶を背負った三本足の得体の知れない物がでてきよる。ただ、森から一步でるとなにもなかったように静かになります」

「ほう、人間のできそこないの妖怪か？」

「はい、中には顔が超美人で首から下は蛇というものや、顔は坊主で首からしたは真っ裸でその～女そのものもいました」

「ほう、まさしく妖怪だな！」

このフォックス警備保障は表向きは稲荷神社の警護をしている警備会社だが、実は嵯峨天皇直属

の諜報部員で隊員はすべて狐でそれが人間に化けていた。早速、その夜狐の隊員ら5名で下の森の妖怪の調査をしていた。やっぱり隊員が森に一步入っただけで顔は女の子で首から下は一本足の小坊主、それに茶釜に手足がついている文福茶釜の妖怪もでてきたが、その妖怪に狐は、
「おいおい、お前らの親分に話がある」
「話があるって～お前らも人間に化けた狐やんか～それを何を偉そうにいつてんねん...」
「まま、そう怒るな、お前らが狸だというのは最初からわかっている」

こうして狐と狸の親分の会談が始まっていた。狐は、

「それにしても狸の化け方は下手だのう～昔から狸は人間や物の観察力がまったく不能でそこの目についたものを寄せ集めて人間に化けているから奇妙な妖怪になるのだろう～」

「いやいや、これでもこの森に人はもう数百年も近づけてはいない」

「そうそう、この森を切り開いて嵯峨天皇の嵯峨離宮への道路を作りたいが、お主らも日本の狸なら天皇に協力するのは当たり前になるが？」

「そらま～平安騎馬隊のことも稻荷神社が我々動物に協力的だということは知っているからやぶさかでもない」


「そか、それなら近江の国に元信楽の宮というのがあった。そこは広大な土地で山も谷もなんでもある。ここにこの下の森の狸に与えると嵯峨天皇はおっしゃっているが、どうか？」

「それは承知したが、しかし、お主ら狐は人間に仕えて狐としての誇りはないのか？」

「たしかに、しかし、我らの狐の寿命というのは子供の病気や怪我、それに栄養不足で平均7年ほどしかなかった。それが今では官営の動物病院まであって平均寿命は13年まで伸びた。中には20年を超える長寿狐もいる。子孫繁栄というのは地球上の動物と人間が仲良くなることだ」

この下の森の一条新道は作られたが、その丁度真ん中辺りに嵯峨天皇は妖怪を鎮める大州軍八神社を建立されている。その1200年後の今でもこの大將軍商店街では「妖怪」を町おこしに使うばかりか、白梅町から嵐山までの京福電鉄北の線の電車の車内ではこの「妖怪」を売りに妖怪電車を走らせている。

こうして一条の妖怪は狸の仕業とわかって労役の人夫も安心して工事ができたというお話でした。その後、この下の森の狸は信楽に移住しても信楽の農民とは争わずに人間と仲良くなった。そして、それがこうじて狸の置物を作る陶器産業が発展したのもこのフォックス警備保障の狐たちの功績だったことは朝廷の歴史書にも記載はされていない。

 ...一条妖怪ストリートは北野天満宮から南へ5分ほど歩いた一条通りから西へ紙屋川の橋まで続いている。各商店の軒先には妖怪がいる、また妖怪グッズの店もある。ここより西へ約5分歩けば京福電車の白梅町駅があり嵐山への便利な足になる。

 ...大將軍八神社と一条妖怪ストリート

狐の面を被って稲荷神社の夜参り、男は女物の着物を着て日本最初の女装が誕生していた。日本初の女装コスプレ 55話

狐の面を被って稲荷神社の夜参り、男は女物の着物を着て日本最初の女装が誕生していた。日本初の女装コスプレ 55話

信仰とは奇妙なもので誰かが仕掛けなくても大流行するものもある。初代稲荷神社の宮司伊呂具のときは稲荷山の土を持って帰ると願いが叶うと大流行したこともあった。その後、それが日本初の玩具として土人形(土人形)が大量生産され稲荷神社名物のお土産として販売されているが、これが博多人形のルーツにもなっていた。

そして今度は夜に狐の面を被ってお参りすると願いが叶うということが大流行していた。女子はそのまま狐の面を被るが、なぜか男はその面を被り着物は女物を着なければ御利益はないと信じられていた。つまり、男は女装してお参りするということが日本で最初の女装となった。

午後7時ごろになると静かだった境内も賑やかになり狐の面を売る夜店なども数軒でていたので、これがまた人を呼びさらに賑やかになってきた。神社は年中灯籠や行燈に火を入れてライトアップをしていたが、さらにかがり火などを追加して神秘の世界を演出していた。。神社直営のお茶屋も夜まで営業をつづけて若いカップルの夜のデートコースの人気ナンバー1にもなっている。

この奇妙な夜参りの原因は実は私たちにあると稲荷山の狐が宮司三代目の伊蔵に狐が報告をしていた。狐は、

「実は...私たちの若いまだ未熟な狐が人間に化ける練習を夜の境内でしていたのです。ところが顔が一番難しく時には目が一つや三つ、たまに四つの顔になるのです。で、そんなものを人間の参拝者に見せたら腰を抜かしてしまうので練習中は紙粘土の狐のお面をつけていたのです」

「ほう、それはそうだ、稲荷神社に妖怪がでるといふ噂になれば大変なことになる」

「はい、それで境内にかなり多くの面をつけた狐に化けた人間がいたので人間の誰かがそれを見習って狐の面をつけて拝んだところ願いが叶ったといふ噂になりました」

「ほう、流行ってのそんなことから始まるのか？。しかし、男が女の着物を着て女装するのはなぜなのか？」

「はい、それはここの神さんは女の神さんでカップルが仲良く手をつないでお参りをすると、その神さんが妬み、嫉妬してこのカップルを別れさすといふ噂になったらしいのです。そこで神さんにやきもちを焼かれないために男が女の着物を着て女性同士だと見せていたのです」

「ほう、たしか千本鳥居でもカップルが同じ道を二人で歩くと別れるといふジンクスがあるが、あれか？」

「はい、これを知っている人は左右に分かれている鳥居を別々に歩くと末永く幸せになると信じ

られています」

この流行は洛中、洛外にも知れ渡り、古着を扱う東市の市場では女性の着物が飛ぶように売っていた。しかも、普通の着物や浴衣だけではなく花嫁衣裳や巫女さんの衣装までも品切れ状態だった。それに、紙粘土の狐のお面も製造が間に合わず、つ、ついに男がそのまま女の化粧をするようにもなっていた。こうなれば稲荷参道フィバーでこれを見物する参拝者でこれまた夜の稲荷神社参拝は大いに賑わっていた。

これを宮中の噂で聞いた嵯峨天皇まで夜の稲荷神社参拝をしたいといただいた。宮司の伊蔵は「しかし、夜の外出は危険になります。それに警備にも金も人も入ります」

天皇は、

「おいおい、伊蔵...六条河原離宮から稲荷神社まではほんの1時間で行けるではないのか？」

「はい、しかし、これは妖怪のようなオカマも沢山いますから、決して見て楽しいものではありません」

「いやいや、予はこの国の天皇で国民がどんな遊びを楽しんでいるかを視察するのも大事な仕事になる」」

この天皇は一度言い出したら聞かないので伊蔵は観念して、嵯峨天皇の稲荷神社への行幸の準備をしていた。10月22日の午後6時に離宮を出発した豪華絢爛な天皇を乗せた牛車は竹田街道を南下、勧進橋から稲荷神社参道に入り大和大路から表参道の巨大な鳥居をくぐると桜門まで300mの間には約300名の女装？それとも妖怪、オカマ？とも取れるコスプレ女装が大歓声と拍手で嵯峨天皇を迎えていた。

本殿にお参りした天皇はその後お茶屋で休息をしていた。このお茶屋は高級で今でいうなら祇園の高級クラブのようなものだ。そこには神楽舞台があり巫女さん10名が笛や太鼓、それに琴の演奏で神楽を踊っていた。天皇は酒を飲みながら、伊蔵に、

「ほう、伊蔵もこんな美人に囲まれていい思いをしているな～オホホ」

「天皇、天皇はどの巫女がお好みで？好きなものを選んでください」

「おほ、そうか～それなら前列左側の背の高い巫女が予の好みになる...」

「それは目が高い、あのものは禰宜の吉左といいます」

「ふむ、禰宜...吉左...これ伊蔵、あれも女装か？」

「はい、今夜はオールスペシャルバージョンになっています」

「そか、それなら帰りの牛車で予と吉左の二人だけで酒を飲むことにする」

こうして嵯峨天皇の稲荷神社への行幸は無事終わっていたが、なぜか？神社の神職で禰宜の吉左はよほど天皇に気に入られたのか六条河原離宮の近くの六条稲荷神社の宮司になっていた。この六条稲荷神社は後にここで生まれた文子という女性が菅原道真の乳母になったことから「文子天

満宮」になっている。

📷は、重要文化財のお茶屋、狐のお面





大阪の警察官が「シナ人」「土人」と差別発言...これらは1200年前の平安騎馬隊も「土人」「河原人」と差別があった。56話

大阪の警察官が「シナ人」「土人」と差別発言...これらは1200年前の平安騎馬隊も「土人」「河原人」と差別があった。56話

京の都の洛中、洛外にはもう人口が20万人を超えていた。この天皇の宮殿がある山城の国で働く農民はもちろん住人のすべては戸籍がなければ働けない仕組みになっていた。これは特に男性には厳しく男のみ16歳から60歳までは年貢、それに兵役と労役の義務がありそのための戸籍調査になる。もちろん旅行者や短期滞在の者は除外されてはいるが、不法滞在は後を絶たなかった。

これらの不法滞在者は商店や工場でも働けないので犯罪予備軍になる恐れがあった。そこで先の先の50代天皇の桓武天皇がこれら無戸籍者の職業訓練学校を作っていた、都で就職できるように簡単な読み書きと計算を勉強、それに好きな職業の職業訓練もあった。しかし、この厳しい生活を嫌い自由気ままに生きたいという人もかなりいた。

この無戸籍者は河原の小屋、または山で穴を掘って住んでいることから「河原人」とか「土人」とか蔑視されることが多かった。これでは到底真面目な仕事に就けず畑の野菜を盗んだりして生活をしていた。当然ながら何か犯罪が起こると警察組織の平安騎馬隊がこれらの者を取り調べていた。

ある時、米問屋が襲撃されて番頭が殺害される事件があった。この件で騎馬隊が竹田街道の勧進橋の下で暮らしている無戸籍者約30名ともみ合いになり、ある騎馬隊員が、これらに向かって「こら、河原人」そして「土人が...」という言葉を使っていた。これに反発したこの勧進橋グループの30名が稲荷神社にデモをして抗議文を稲荷神社の三代目宮司の伊蔵に手渡していた。この勧進橋グループのリーダーは留三といい50歳前後の男だった、その留三は伊蔵に、「たしかに我々は無戸籍者で都の法律を守っていないかも知れないが、あの米問屋の奪略にはなにも関わっていないのに高圧的に犯罪者呼ばわりされて、その上、差別語で我々の名誉を傷つけた」

「そか、それは私も平安騎馬隊が悪いと思う。このことを嵯峨天皇に報告するが、それまではこの事案を私に預けてほしい」

「いや～もったいない、宮司さまにそんな言葉をかけていただくとは...」

「しかし、留三さん、それはそれとしてやはり我が国の国民があんな橋の下で暮らしているというのは問題がある、色々相談に乗るが、この都の無戸籍者の数とか要求を一つにまとめてほしい」

「はい、つまり、私に無戸籍者のスパイになれと？」

「いやそれは違う、人間というのは一人では生きられない、そして誰でも生きる権利はある、それを組織としてまとめてほしいのだ」

「それなら、無戸籍者としての権利を認めてくれるのか？」

「当然だ!、窓口がいっぱいあれば話の一つもできない。それに我々も平安騎馬隊は元より、庶民にも差別の啓発を進めることにする」

「ありがとうございます。お礼といっはなんですが、あの米問屋を襲った一味は七条大橋のグループだと思いますのでそれらに自首を勧めます」

「そか、自首するなら死刑だけは許してほしいと天皇に進言する」

嵯峨天皇は伊蔵に、

「そか、あれら無戸籍者の組織を立ち上げたのか、それで洛中、洛外には何名いるのか？」

「はい、勧進橋の留三が長に選ばれて調査した結果、洛外は農民の自警団が強くていないそうです。洛中には7グループ約450名でそのうち女子供が100名ほどです」

「そか、それにしても伊蔵は人を束ねるのが上手い!」

「いえ、私の祖父の初代宮司も奈良を追われた流れ者です。あのまま人の情けがなかったらやはり家族を食べさすためには悪いことをしていたと思います。犯罪防止は処罰ではなく人が人の生きる権利を認めることです」

「そか、しかし、無戸籍者の権利といっても国として何ができるのか？」

「それは...彼らが今後どう生きるかを考え、それを要求書として提出してきますからそれから考えましょう」

一方の平安騎馬隊の隊員が彼らに「土人」「河原人」と発言した若い隊員2人に伊蔵は嚴重注意していた、

「この騎馬隊は元々藤森の原住民の「藤族」で君ら2人の親もそうだった。藤族は騎馬民族で鹿や猪、それに熊を獲っていた。そのころ都は奈良にあってその獲物や皮を奈良の都に売りにしていた。動物を殺生する稼業という事で都人からも農民からも仏教の教えに背くとしてかなりの差別を受けていた。その後、京の都になり藤族の狩場がなくなり生活もままならなかった。そんな折、桓武天皇がこの藤族の村ごと平安騎馬隊として警察権力を与えたのがこの警備隊の始まりです」

その差別発言した隊員2人は、

「はい、その話も父親や仲間からも聞いています」

「そうか~なら、今後その警察権力を我が国の国民に使うときはそのものが自分の親や家族と思って接しなさい、そうすれば差別発言なんてものはでてこない」

「はい、権力者とは弱いものには優しくしろと隊長からもいわれています」

「そか~この件の処分はあの留三からも嘆願書がでているので嵯峨天皇も不問にするといわれている」

こうしてこの件は解決をしたが、もし、この時天皇や騎馬隊の隊長が「出張、ごくろうさま」などという言葉が発していれば、この無戸籍者との対決はもっと激しくなり被害も大きくなっていたと伊蔵は胸をなぜおろしていた。大阪府警の長は大阪知事になるが、この知事は隊員にどのような言葉をかけたのか聞きたいものです。

🦋関連コラムは、

🌈[京都先住民、騎馬民族の藤族～京の都の治安を守る「平安騎馬隊」へ、狐の交番・藤森神社駈馬神事」警察狐、狐の狐番・17話](#)



伏見稲荷大社ネタ探しの旅...外人観光客の中に独り孤塁を守る伊奈利・宝玉堂のいなり煎餅、小ぎつね、鈴せんべい(おみくじ入り) 57話

伏見稲荷大社ネタ探しの旅...外人観光客の中に独り孤塁を守る伊奈利・宝玉堂のいなり煎餅、小ぎつね、鈴せんべい(おみくじ入り) 57話

この伏見稲荷へは子供のころチンチン電車に乗って行ったのが最初でそれからもう100回は参拝しています。一番の思い出として娘と一緒に本殿から鳥居を数えて中腹の四つ辻まで798もの鳥居があったことを覚えています。また「よし、作家になろう」と決意して最初に決めたのがこのペンネームになります。その伊奈利とはこの伏見稲荷大社が建立された711年ごろのこの稲荷山の元の名前が伊奈利山だったことからです。

このコラムも56回を迎えて少しネタが切れましたので新たにコラムの神様(伊奈利姫)からありがたいヒントのお告げをもらいに参拝してきました。しかし、表参道も裏参道も外人観光客に占領されて日本人に合うのは100人に1人ぐらい...英語も中国語もできない私はついに私自身の記念写真を撮ってもらうチャンスがなく孤独な気分になった。

この稲荷神社のご神体は元々は山と岩そのもので奥の院からお山一周のスタートになります。この奥の院の社の真裏に鳥居がありますが、実はこの鳥居から拝むことが山の神様に一番近い場所になります。しかし、漠然として山を拝むというより本殿を作ってそこに神話の神様を祀ったほうがお賽銭も集まりやすいし、なんとなく厳かな気分になることから本殿にお参りすることが本流になったと思います。

さて、今回は雨も降ってきたのでお山一周参拝はやめて下山してきました。稲荷神社へはまずJR稲荷駅前の表参道から、帰りは裏参道のお土産小路を歩くのがベストになります。その土産店の最後辺りの京阪電車の伏見稲荷駅に近い(お山に向かって右、南)場所に「稲荷煎餅発祥」の看板がある「宝玉堂」という「いなり煎餅」の老舗があります。

この店の名物は白味噌入りの煎餅で形は「ぎつね」それにおみくじ入りの「鈴せんべい」が店の前で焼かれています。その1日に千枚は焼くといわれていますがそれが飛ぶように売られています。その店の真裏のにある大きな「琵琶の木」(宝玉堂さん所有)の実を私の子供のころから無断でまたは声をかけてもらっていました。もうそろそろ、死ぬことを考えなければならない年になっても子供のころの楽しい思い出というのは残っているものです。

その店の真裏側が日本最初のチンチン電車稲荷線の駅があった場所になります。この電車は明治10年ごろ琵琶湖から京都まで疎水を造り(総建設費10万両)、運河、飲水道水、それに発電をしてその電気で日本最初のチンチン電車を走らせたのです。その電車は北野天満宮線と伏見稲荷

線だったのですから当時から伏見稲荷信仰は庶民に根付いていたのです。それが外人に占領されている姿はなにか物悲しくとも感じます。

ちなみに私も稲荷煎餅の小ぎつねを3枚(350円)、それにおみくじ入り鈴煎餅(5個400円)を買いました。そのおみくじには「末吉・波に浮き草流れの身でも少し実のなる花も吹く」とあったが、まったく当たっているような気がしました。

📷...画像は、





日本初の小麦を使った饅頭に煎餅...天ぶらのルーツは袈裟揚げだった。空海を袈裟揚げにして食うかい 59話

日本初の小麦を使った饅頭に煎餅...天ぶらのルーツは袈裟揚げだった。空海を袈裟揚げにして食うかい 59話

歴代天皇で馬に乗れたのは明治天皇と嵯峨天皇だけだった。嵯峨天皇は兄の平城天皇には二人の皇子がいたために天皇継承の目はないと信じて武将になる夢を持っていた。そのために剣術は元より弓、そして馬術は征夷大將軍の坂上田村麻呂とは互角の腕だった。

その天皇が天皇になってもストレス解消なのか馬での遠出が好きだった。もちろん警備には平安騎馬隊の10騎がお供していた。ある時、それに稻荷神社三代目宮司の伊蔵もお供していた、一行は北白川から近江への峠の山中峠を越えて琵琶湖畔の旧大津京の三井寺で休息をしていた。

この三井寺は天智天皇・天武天皇・持統天皇のゆかりの寺で天台宗門宗祖の円珍が建立した寺になる。この三井寺の特別室に案内された天皇と伊蔵は酒を飲みながら琵琶湖の光景を楽しんでいた。そして帰るために馬屋に行くがそこには青々とした稲によく似たものを馬がうまそうに食べていた。天皇は、僧侶に、

「これは何を食べているのか？」

「はい、これは遣唐使が持ち帰った唐の「小麦」というものです。唐ではこれを米の代わりとして食べているようですが、この実の殻が固くて、それに米のようにこのまま焚いては食べられません」

「ほう、それにしてもこの馬たちはよっぽど旨いのかパクパク食べている」

「はい、これは実のなる前で葉っぱに栄養がかなり豊富なために馬がよく太ります」

「ほう、しかし、唐で食べられているものが、なぜ？日本では食べないのか？」

「それは、この外側の殻、それに内側の薄殻をむくのには手間がかかります。それにこれを粉にする石臼が農家にはないからです」

そこで伊蔵が、

「その実があるのなら少しくれないか？」

こうして伊蔵はこの麦の実を持ち帰り稲荷大学の農学部と工学部にこれを食用にできないかという宿題をだしていた。三か月ほどたったある日、その研究報告があった。まず農学部の学生が伊蔵に、

「この小麦は稲の収穫が終わった畑に種を撒き、その種が越冬して春に芽が出て育ちます。その小麦を収穫した後にまた稲を栽培すれば二毛作と同じ収穫が見込めます」

「そうか～それなら農民が豊かになって喜ぶが...何か？問題が？」

「はい、その小麦に実が付く前の青葉が馬や牛の飼用に高く売買されますから無理して育てなく

ても十分な収入になるからです」

「そうか～しかし、小麦を育てて収穫をしたほうが高値により売れるのでは？」

「はい、それに収穫した後の麦わらも日よけの帽子、それに日用品の材料にもなります。さらに、粉と分離した「ふすま」は牛、馬の飼料になるばかりか畑の肥やしにもなります」

そこで工学部の学生が、

「宮司、それがこの小麦の薄皮(ふすま)を取る技術がまだ見つかりません。そこで薄皮の付いたままで石臼で粉にして焼いて食べましたが、なんかザラザラして旨くはありませんでした」

「ふむ、しかし、旨くはないが、食料にはなるのか？」

「はい、そこでこの薄皮と小麦の粉を分離する細かい金網を作りましてこれでふるいにかけてのがこれです」

そこに出されたのは真っ白な粉で、これを砂糖で味付けして焼いたのがこの煎餅、それに蕎麦より太めの饅頭があった。

「これが唐で食べられているのか？」

「はい、遣唐使から帰ってきた僧侶にも食べてもらいましたが、これによく似ているとっていました」

「そう、これは「うどん」というのか？これなら売れるかも…」

「しかし、これを粉にする石臼そのものが都にはそんなにありません。この石臼に使う石は硬くなくてはなりません。そこで調べたのですが、尾張の国の岡崎みかげ石ならこれに適しています」

「そか、それなら岡崎みかげ石の手配をする」

伊蔵はこの小麦粉を持って六条河原離宮の従女たちに料理を教えていた。そして小麦料理のフルコースができたので天皇にお出しした。天皇は、

「ほお～いい匂いがするが…」

「はい、これは小麦を水状の衣にして鶏肉と鯛、それに松茸や季節の野菜を菜の花油で揚げたものです」

「ほう、これは食材を衣に包んで揚げるものか？」

「はい、中身は決して坊主ではありません」

「おいおい、伊蔵、高野山の空海がくしゃみをしているが、これの名前は「袈裟揚げ」と命名する」

こうして天皇は袈裟揚げ、うどん、煎餅を美味そうに食べていたが、伊蔵に、

「しかし、こんな旨い小麦を馬や牛の飼料とはもったいないが、なぜ農民はこれを食べない」


「はい、これは脱穀や製粉に時間と手間がかかるのですが、その前に実が成る前の青葉が高く売れるためにです」

「しかし、そんな高いものをいったい誰が買うのか？」

「はい、それが～高級公家、貴族の方々の飼ってる牛や馬の飼料にするためです。それに軍隊の馬100頭もです。ちなみに平安騎馬隊の馬60頭は予算の関係で食べさせてはいません」

「なに～犯人は身内にいたのか～わかった伊蔵、その青葉買いに50%の年貢をかける」

こうして天皇は全国の農民に小麦の栽培を勧めたうえで小麦には年貢をかけない。しかし、この青葉を売った農民に50%の年貢をかけると発表されました。この小麦の栽培は水田に限らず、畑や荒れ地にでも育つために飢饉や水害、それに稲の病気の大流行などに備えて保存できる命の白い粉として日本中に広がりました。

 また比叡山や高野山の僧兵が不穏な動きをすると公家や貴族はこの「袈裟揚げ」を食べて僧侶を退治する呪いにもなったとか？その時の呪いの言葉が「空海の袈裟揚げでも食うかい…」でした。尚、袈裟といえば坊主、坊主といえばお寺、お寺といえばポルトガル語で「テンプラ」という。

火焚祭、平安時代の収穫祭・庶民の暮らしが楽になると夜の遊びが大フィーバー、そこで規制緩和となった。60話

火焚祭、平安時代の収穫祭・庶民の暮らしが楽になると夜の遊びが大フィーバー、そこで規制緩和となった。60話

秋の収穫が終わるこの時期には洛中、洛外は元より、遠くは北陸、和歌山、四国からも豊作のお礼にと穀物や特産品の献上が稲荷神社に届く。これを神職や巫女が手分けして引き取り記帳した上で本殿での祝詞をしてその献上品を運んでくれた農民、村単位にお礼のお祓いと「五穀豊穡」のお守り木札を授与していた。

農民らは去年授与された古いお守りの木札をお返ししていたが、このお守りや絵馬が溜まる一方だった。そこで稲荷神社三代目宮司の伊蔵はこれらの古いお守りを千本鳥居横の多目的広場で燃やすことにした。これはただ燃やすだけではなく遠い所から数日もかけて献上品を運んでくれた人たちへの夜の暖にするというアイデアでもあった。

この819年11月8日は木枯らし一号が吹き荒れた日でのこの献上品の検品と記帳は深夜まで続いていたからだった。これが「火焚祭」の最初の日だったが、このことが毎年11月8日に行われると言う事で若いカップルの夜のデートの場になるのは当然で、さらに木札に「恋や愛」「家内安全」などの願いことを書いた物を「火焚串」というがこれを買ってもらいそれを燃やすことで願いが叶うということも大流行していた。

この稲荷神社は日本で只一つの官からは何一つの援助を受けていないまったくの民間の神社で100名を超える神官や巫女の人件費や諸費用のすべては信者からの賽銭、寄付、献上品、そしてお守り札の売り上げだけだから相当なご利益がなければこのように全国から信者の献上品は集まらないことになる。

初代宮司の伊呂具の考えは「農民が豊かになれば国が栄える」ということで農民の暮らしのためにこの寄付や献上品のすべてを水田の開墾、農業用水の開発や溜池の整備をしてきた。こうなればさらに献上品が集まり、この事業は果てしなく拡大してきた。神様といえお祓いでなにかも解決できるということではなく伊呂具は唐の農業、土木、気象、天文を科学的に取り入れてきた学者でもあった。

この火焚祭を機会に庶民は稲荷神社への夜の参拝から夜遊びのための参拝に変化してきた。元々、夜間の参拝者のためにほぼ朝まで表参道には灯籠、行燈などでライトアップはあったが、これは悩みが多い庶民の信仰のためのもので遊びではなかった。

ところが農民も庶民も暮らしが豊かになってくると夜は寝るだけのものから夜は楽しむものということになってきた。つまり、この京の都で夜に明かりがついている場所とはここしかなかった、それに神社は拝観料もいらない、賽銭も強制されないから若者にとっては夜のレジャー施設と同じになる。いえいえ、これは若者だけではなく人妻の不倫の隠れ蓑にもなっていた。

ある大店の妻が手代の若者と恋に堕ちた。妻は夫の両親の病気の願をかけるという理由で週に1回は夜の参拝にきていた。するとどこからかその不倫相手の手代が現れて千本鳥居横の広場で愛し合っていた。これが1組や2組ではなく多い日は10組にもなりその異様な雰囲気各組のカップルはさらに燃えるという凡そ信仰とはかけ離れたお山になっていた。

そこでこの神社を警備するフォックス警備保障の狐の隊員は人間に化けてパトロールをしていた。あまりにも若いカップルには隊員が説教をしてその幼い女性を家まで送っていた。しかし、自己責任で不倫している大人のカップルに対しては説教する権限はなかった。

そうこうしているうちにこの話が洛中、洛外に伝わるとこのカップルの性態を覗きに来る若者でさらに夜の神社は賑わっていた。そうなる则需要と供給の関係で覗てほしい願望のカップルが現れるようにもなった。その興奮した若者を相手に年増の後家さんまで厚化粧で現れて若者の精気を吸い取る山姥まで現れてこれが天皇の耳に入った。

嵯峨天皇は伊蔵を呼び、

「お主の稻荷神社は最近風紀が乱れているというが...」

「はい、まったくその通りで困っています。一応、フォックス警備保障の隊員を増やして未成年は午後6時以後は立ち入り禁止。さらに売春などの商売女は即逮捕、覗きの若者にも注意しています」

「そか、風紀の乱れに予がとやかくいう資格はないが...昼は一生懸命仕事をして収穫の後の夜のひと時の娯楽も必要になる」

「はい、その通りと私も思います、権力がたとえ不倫だとわかっているとしてもそれをとやかくいうことはできません」

「しかし、この風紀の乱れのきっかけを作った稻荷神社の火焚祭というのには責任がないのか？
伊蔵」

「それは～夜の遊び場が規制されているからです。たとえばお酒をだす茶店の夜の営業を認める規制緩和をすれば店への年貢(税金)、それに酒の酒税も入ります」

「そか、しかし、夜の営業ともなると高い照明油代がいるが...」

「これも油商の山崎屋が荏胡麻や菜種から鉄の機械で油を搾り取るのに成功しました。そして価格も約半分になったそうです」

「そか、それなら夜の茶店の営業を認める。しかし、茶店は庶民のものだが、我ら貴族の夜の店はないのか？」

「はい、それなら高級料亭の夜の営業も認められたら？」

「そか、それなら公家も貴族も武将も、そうそう、あの生臭坊主らも反対はしない」



...この平安時代でも「農民が豊かになれば国が栄える」といったが、これの反対語は「公家や貴族が豊かになれば農民も豊かになる」となる。現在は「まず金持ちが豊かになれば庶民にも金が回るという」という小泉、竹中理論で賃金の安い派遣労働者が認められていた。それから十数年にもなるが、庶民には格差は広がったが豊かにはなっていない。



...火焚祭 11月8日



松茸、京の松茸は牛や馬も食わないほど豊作だった。天皇の「旨い!」の一言で松茸の大ブームになった。形のいい松茸こそ不作の原因 61話

松茸、京の松茸は牛や馬も食わないほど豊作だった。天皇の「旨い!」の一言で松茸の大ブームになった。形のいい松茸こそ不作の原因 61話

京の都は三方を山で囲まれているが、なぜか?東山には松茸の採れる山はなかった。ところが北山の松ヶ崎、宝ヶ池、衣笠山、御室、嵯峨、それに西山の嵐山、松尾山～山崎には松茸が豊富に採れていた。しかし、当時は松茸そのものはそんなに珍しくもなくそれに牛や馬の家畜もそんなに喜んで食べなかった。それ故市場にも出回らなかった。

ところが嵯峨天皇が小麦の衣で揚げた「袈裟揚げ」(江戸時代から、天ぷら)が美味しいという言葉が独り歩きして庶民も松茸を食べ始めた。この松茸を採るのは山裾に住んでいる農民だけだった、このころは質より量で松茸の傘がころよく広がったころが収穫の時期になる。大きな傘は直径30センチを超えるが、これを適当に裂いてそれを焼いて塩を付けて食べるのが主流だった。

その袈裟揚げの衣にする小麦のほう松茸より高くなっていた。それより少し前に最澄、空海も参加した第18回遣唐使が持ち帰った唐の「醤油」というのを稻荷大学の学生が研究して日本初の国産醤油ができたと稻荷神社三代目宮司の伊蔵が嵯峨天皇に持ってきた。伊蔵は、

「これは大豆を発酵させた調味料になります。これを数倍に薄めれば塩とはまた違う風味になります。また味噌の大量製造も同じ工程になります」

「ほう、これが醤油か?前の遣唐使が持ち帰った「魚醤」とはどう違う?」

「あれは魚を発酵させたもので日本人の口には合いませんでした」

「そか、この醤油を使った食べ物はあるのか?」

「はい、北海道から献上された昆布というのがありますが、これと豊富に採れる松茸とを煮たものがこれです」

伊蔵が天皇にお出ししたものは今でいう「松茸塩昆布」だった。天皇は一口食べて、

「ほう、これは昆布が柔らかく松茸に合うの～それに匂いもいい」

「はい、これは何年も保存ができ栄養価も高いものです」

「しかし、その大豆は大量生産はできるのか?」

「はい、この大豆は連作を嫌うので農民もそんなに喜びませんが、天皇が「醤油は旨い!」と一言いってもらえばそれが火付けになって醤油の大ブームになります」

この当時は歌舞伎もまだなく庶民の憧れのスターは派手な演出で雨を降らした空海、それに祈禱師の伊蔵、写本で有名な紫式部、そして禁裏のトップスターの嵯峨天皇だけだった。実際にこの天皇の一言で京の都の大豆は高騰して米一辺倒だった農家も大豆を作るようになった。そうなる

と醤油はもちろん味噌の生産の工場までできて農民でもない商人、職、工人でもない一般労働者というのが誕生していた。つまり、家内工業から大量生産製造工場へと変わった。

こうなると工場で働く人の人手不足になるが、これは民間企業で農民を労役として狩りだすわけにはいかない。そこで各地から都に流れてきたいわゆる「無戸籍者」の就職先としての受け皿にもなった。この醤油工場と味噌工場の敷地内に労働者用の長屋の建設を天皇が認めたことで住所が確定して各無戸籍者から立派な都の住人として家族ともども約450名が登録されていた。

そこで天皇は再び無戸籍者の集団が住みつかないように平安騎馬隊に無戸籍者らしき者を見つけたらただちに確保することを命じていた。これは確保して罪にすることではなく一定期間は収容して仕事を斡旋するというものだった。つまり、犯罪予備軍を事前にキャッチするという作戦になる。このことが大成功して京の都は世界の中でも都会の犯罪発生率の少なさではトップになっていた。

もちろんこのアイデアは伊蔵発だったので天皇は酒を飲みながら伊蔵に、

「またお主のアイデアが成功して真夜中でも女子が一人で歩ける安心か？、こんどは貴族の女性が好きな男に夜這いをかけているという。そもそも、平和になるのはいいが、お主の政策はなぜか？最後には風紀が乱れる」


「いえいえ、火付けに強盗、それに内乱も外乱もない世の中なんてものはそんなに長続きはしません。これから戦乱の世になる前のひと時の休息だとすれば少々の風紀の乱れは許せます。その風紀の乱れはリトマス試験紙にもなります。内乱の前には風紀の乱れもなくなりますからそのほうが怖いのです」

「そか、それにしてもこの太くて形のいい松茸は歯ごたえも香りも最高にいい」

「ささ、その形のいい松茸はまだ蕾で傘を開いて胞子をまき散らしてはいけません。そうすると来年には不作になります」

「そか、松茸も風紀の乱れがなかったら豊作にはならないのか」

一方で天皇が「松茸は旨い！」という一言から都中の人々がピクニック、または山歩き気分北山、西山の山へ松茸狩りに押し寄せていた。しかし、人々は我先にと松茸を見つけ、それもまだ傘が開いていない蕾の状態から胞子が飛び散らないうちに採取したのでその山の次の年の松茸はほとんどできなかつた。農民が質より量として傘を開くのを待って収穫していたことが、松茸の豊作につながっていたことになる。

...私が幼稚園のころでも松茸はそんなに高いものではなくて松尾の親戚やら長岡の親戚から松茸の季節になると届いていた。やはりこれも傘の開いたもので焼いたり塩昆布に祖母が料理していたことを覚えています。その幼稚園の弁当にこの焼いた松茸が一面に並べてあったが、そんな松茸より卵焼きのほうが高価な時代だった。

 ...画像は松茸

韓国大統領の民間女性への機密漏洩...嵯峨天皇も民間の稲荷神社に国家秘密を教える、さらに呪いで政策、立案の不正 62話

韓国大統領の民間女性への機密漏洩...嵯峨天皇も民間の稲荷神社に国家秘密を教える、さらに呪いで政策、立案の不正 62話

京都盆地に最も古くから住んでいる原住民に「賀茂族」がいる。この一族は秦氏(松尾神社、稲荷神社)のような帰化人の末裔ではなく2000年前の縄文、弥生時代からの集団になる。これらは藤族の藤森神社と同じく騎馬民族で上賀茂、下鴨神社を部族の神としていた。

794年に京に都が遷都されたが、それより10年も前から桓武天皇に協力して当時沼地だった京都盆地を人が住めるような更地にしたことからこの一族は朝廷に仕えて有力貴族を多数輩出している名門になっていた。特に秦氏の末裔は土木、建設、造営儀容が多いがこの賀茂族は学問の世界の道を選んでいった。桓武天皇から「賀茂氏」の氏を許されていた従五位下の賀茂忠森は天文学の権威で天文博士で官営の天文大学院の学長をしていた。(この賀茂氏の100年先の弟子が安倍晴明になる)

元々、天文学、暦道、気象学、陰陽道は別々の学問だったが、忠森はこれを一つにまとめて「陰陽学」としてそれを占う人のことを「陰陽師」と呼ぶようになった。この他にも祈祷師、呪い師、予言師という名称があったが、忠森は朝廷などの呪い事のすべてを「陰陽道」として他の呪い師らにこの陰陽道、陰陽師という名称を使わせなかった。

つまり、朝廷に属する公家や貴族に対しての祈祷は陰陽師が請け負う。そして農民や庶民などへの祈祷は稲荷神社や松尾神社が請け負うという意味になるが、嵯峨天皇はそれはそれとして個人的な祈祷のすべてを稲荷神社三代目宮司の伊蔵に任していた。これが面白くはないと忠森は天皇に直訴していた。忠森は、

「天皇、天皇は我らの陰陽道を信じていないのですか？」

「いやいや、そうではないが、伊蔵の稲荷神社とは桓武天皇、平城天皇、そして予ともう三代のお付き合いをしているので祈祷師というより親友になる」

「しかし、国の大事な未来をそんな民間の呪い師に任せていては国の恥になります」

「そか、しかし、稲荷神社は稲荷大学を経営している。そこには神学、天文学、暦道、気象学、農業、土木、建設、設計の各学部があり、その研究のすべてを我が国のために使ってくれたからこそこの平和な日本がある」

「それは朝廷にも各部門に大学院があります」

「しかし、それはこの日本の歴史や国を治める法律、年貢や唐の国との外交、防衛などの専門分野になる。つまり、高級官僚の役所的な仕事には伊蔵はなに一つ口出しをしていない」

「しかし、お隣の韓国では大統領が民間の女性に国家機密を流失させた大きな問題になってい

ます」

こうして話し合いに結論はでなかったが、なぜか？朝廷内部ではこの忠森と伊蔵の祈禱合戦をして勝負をつけたらどうかという話になってきた。天皇は伊蔵の祈禱というのは科学に基ずいたものだということを理解していたが、それは天皇の胸の内に収めて世間体には「摩訶不思議な祈禱」という演出をしていた。これは宗教界全体も同じで「悪いことをすれば仏さまの罰が当たる」ということにもつながっていた。権力者とはこういうことを利用しなければ国はもたないということを経典の桓武天皇からも厳しく教育されてきた。

このことで天皇は悩んでいた。こんなたわいない小さな火種でもこれを消し忘れたら大火事になることもある。それに忠森がいった「韓国では大統領が民間の女性に国家機密を漏洩...」ということもあるので天皇は当面の間は伊蔵に六条河原離宮にこないようにと手紙を出していた。伊蔵もこれを了承していた。

やがて一か月ほどたったある日、フォックス警備保障の諜報部員からの報告があった。狐の隊員は、

「伊蔵さま、あの陰陽師の忠森は夜中に従二位の藤原勝則の妻の佳子の屋敷に出入りしています」

「ほう、佳子とはそれは大物の貴族になるが」

「はい、もちろん不倫の関係ですが、どうやらインチキを仕込んだ祈禱を考えて伊蔵さまに挑戦状を叩きつけるようです」

「そうか～あのものは手品を祈禱といい箱の中の物を見事に当てるというが、それは簡単なマジックだろう」

「そうです、祈禱でも呪いでもありません」

「しかし、その手品をあばいても忠森が恥をかくばかりか祈禱そのものの信頼が無くなる恐れがある」

「そうですね～元々、そんな非科学的な奇跡が起こるなんてことはありませんから...」

「そうだな～ま、狐が人を騙すぐらいのことはあるが」

「あっ、それ...狐が人を騙すことを利用して忠森を脅かしてみましよう」

忠森の屋敷から佳子の屋敷までは堀川を西に渡ったところにあり歩いて5分もかからなかった。その堀川の橋は10mほどですぐに渡れる。その橋を忠森は歩いてきたが、いつもより橋が長い気がしていた。しかも歩いて歩いて橋の上で前へは進まない。ところが後ろから歩いてきた町民は忠森をなんなく抜かして前へ進んでいた。そして次の町民を忠森は呼び止めて、

「ちと聞かすが、この橋は堀川一条の橋と思うが」

「はい、そうですが、お武家様はさっきからこの橋の上で足踏みをしていなさるが、なにかの呪いですか？」

「いやいや、一生懸命歩いているが、ちっとも前へ進みません」

「ああ～それはこの橋の守をしている「一条稲荷神社」の祟りです」

「な、なんと稲荷神社の祟り...？」

「はい、なんでも稲荷神社に逆らう人はここで死ぬまで足踏みをさせられるそうです」

「な、なに...死ぬまで...」

忠森はそれでも橋を渡ろうと歩いていたが、夜明けが近づいて観念したのか、

「稲荷大明神さま、もう、稲荷神社とは張り合いません、それに祈祷の挑戦状もだしませんからお許してください」

と、これを言うと同時に忠森の足が動いてなんなく橋を渡ることができた。

もちろんこれは狐の仕業だが、忠森はこれを信じて嵯峨天皇に心底詫びを入れていた。天皇は、
「そか、忠森の祖父の上賀茂神社にはこの都の造成に大変世話になった。これは稲荷神社も松尾神社も同じになる。予にすれば国を思う心を持っているものは全て仲間と考えている。その仲間同士がいがみ合っては国が栄えない、今後は仲良くやってほしい」

「はは～ありがたいお言葉をありがとうございます」

「ところで忠森、勝則の妻の佳子はどんな味がした？」

「はあ？なんのことです...」

「おいおい、すべて一条稲荷神社の神は知っているぞ～忠森」

「はは～恐れ入りました」



お香は女の命・東福寺唐木のイブキ、白檀の木が22本あったことから嵯峨天皇の嘉智子皇后が東福寺の建立を認めた 63話

お香は女の命・東福寺唐木のイブキ、白檀の木が22本あったことから嵯峨天皇の嘉智子皇后が東福寺の建立を認めた 63話k

奈良時代や長岡京時代の朝廷は水には苦労していた。とくに長岡京時代は西山の丘に都があり井戸を10mも掘っても水脈には届かなかった。朝廷といえども公家や貴族の女性の風呂なんでものは贅沢の極みで月に1回ほど風呂に入ればいいほうだった。それも湯船ではなく蒸気を狭い風呂場に溜めてサウナ効果で垢をゴシゴシ落としていた。

そこで体臭などの匂いを消すためにお香を焚いていたことは歴史でも有名な話になる。この水を求めて歴代天皇は各地を転々と都を遷都していたことになるが、まだ奈良に都があったころ稻荷神社初代宮司の伊呂具の祈祷と予言で長岡京から京都盆地への遷都がベストだということを聞いた桓武天皇は京の都に遷都を決定していた。

この京都盆地は東山、北山、西山の裾野には原住民はいたが、盆地そのものは沼の湿地帯だった。だがそのおかげで井戸水にはまったく困らなかった。いわば大きな瓶の水面に浮いた浮島が京の都と考えれば地下には大きな水瓶があるのと同じになる。風呂を沸かす薪も三方に山があるからこれも同じく困らなかった。つまり、女性らは毎日風呂に入れる環境になっていた。

公家や貴族の女性たちは以前は匂い消しの消臭剤に使っていたお香はそれこそ洒落のためにはなくてはならないようになっていた。このお香の元は白檀（びやくだん）、沈香（じんこう）伽羅（きゃら）などの自然木が原料になるが、これらは国内にはなく遣唐使が唐の国から持ち帰っていた。その遣唐使も唐と宋が戦争をしているために19回目以降は情勢待ちとなっていた。

嵯峨天皇は皇后の嘉智子から皇后が一番好きな白檀の香木を手に入れてほしいと懇願されて弱っていた。そこで稻荷神社三代目の伊蔵に、

「伊蔵よ～皇后が白檀の香木をほしいといっている」

「はい、たしか～初代の日記を読んでいると60年前の遣唐使が持ち帰った白檀の成木～苗木22本を稻荷山から北へ約2キロの山中に植えたということが書いてありました」

「そか、たしか～東大寺の僧と興福寺の僧から二つの寺の名前を取った「東福寺」という寺を建立したいという申し入れがあったが、その寺の建立の予定地かもわからない」

「ほう、その寺は認めなかったんですね」

「そうだ～ただ、その予定地には将来のために大きなイブキという木が目印として植えられた聞いている」

伊蔵は天皇から白檀の見本として5センチほどの欠片を貰った。その白檀の木を探してもらおう

とフォックス警備保障の隊長を部屋に呼んだが、その隊長は部屋に入るなり、

「いい香りですね～これは白檀ですね」

「ほう、わかるか？」

「はい、狐はイヌ科の動物で嗅覚は人間の千倍もありますから」

「そか、それならこの木を探してほしい」

「いや、その木は大和街道の山の中にあります。街道を通っていると風向きで匂ってきますから。それに目印としては雷が落ちたのか北半分が焼けて白くなった唐木のイブキという大きな木の下に約20本はあるとおもいます」

伊蔵はこの白檀の木を見つけていた。その木は22本もあり樹齢60年以上で幹回りの太さも約150センチもあった。一緒に同行していた宮大工の兼良も、

「これなら皇后さまの入る風呂場でも作れます」

「そか、白檀の風呂とは国宝物だな」

「はい、他にも仏壇や寄せ木の仏像、それに数珠等の仏具、そして扇子の骨にもできます、おそらくこのいい香りは100年は持つとおもいます」

「しかし、この木をすべて伐採するとなると…」

「いえいえ、周りを見てください。この木は他の植物に半寄生して子孫を残します、アチコチに5年物、10年物の若木が育っていますからもう絶えることはありません」

こうして嘉智子皇后に白檀の風呂場と仏壇、それに仏具一式と扇子が稲荷神社より献上されていた。皇后はあまりのいい香りに感動をして伊蔵を月見の宴に招待していた。そして皇后は、

「伊蔵、褒美はなにがほしいか申してみよ…」

「はい、それは私にではなくあの香木を将来のために植えて保存した奈良仏教会の東大寺と興福寺の僧にあげてほしいと思います」

「ほう、たしか～伊蔵は奈良仏教会が嫌いではなかったのか？」

「はい、それは昔のことで奈良も精進してやっと農民の事を考えるようになりました」

「それなら…どんな褒美を？」

「はい、60年前に桓武天皇にお願いした「東福寺」の建立を認めてほしいのです」

「ほう、60年前のお願いがまだ生きているのか？」

「はい、桓武天皇は保留したという朝廷の記録があります」

「保留か～それなら私が東福寺の建立を認めます。そして白檀の香木で掘った仏像を私が東福寺に寄進いたします」

その後、伊蔵は嵯峨天皇からこの真意を聞かれて、

「天皇、比叡山の延暦寺、高野山の金剛峯寺、この二大勢力はいずれも天皇に忠誠心がありますが、いずれ天皇も最澄も空海も亡くなり代が変わります。この天皇制を末永く1千年後まで繁栄させようと思えば東大寺や興福寺と天皇家の固いちぎりが必要になります」

「そか、伊蔵は千年後のことを考えているのか？」

「はい、それが東福寺や皇后が寄進された仏像が物をいうことになります」

「そか、そのちぎりとは他にはあるのか？」

「はい、奈良は東福寺建立の許可を記念して東大寺の管主の一人娘の鹿子(かのこ)を皇后さまの従女として仕えさせると申しております」

「またそれか～伊蔵の考えもそろそろワンパターンになってきたのう～」

「あらら、天皇、それは勘違いされています。鹿子さまは皇后さまの従女です」

「ほう、伊蔵も予の性格がわかってきたのか？」

「いえ、それは私には何の意味かもわかりません？」

こんなトンチ問答を天皇と伊蔵は繰り返していたが、1年後には皇后との間の7人目の子供が、時同じくして鹿子も天皇の朝廷内の13番目皇子を産んでいた。そこで伊蔵は宮大工の兼良の言葉を思い出していた。兼良がいった言葉とは、

「いえいえ、周りを見てください。この木は他の植物に半寄生して子孫を残します、アチコチに5年物、10年物の若木が育っていますからもう絶えることはありません」

📷 東福寺のイブキ、白檀の木





東福寺の唐木 イブキ

菅川伊奈利

卑弥呼の邪馬台国は長岡京にあった!卑弥呼の墓こそ「元稻荷古墳になる」という長岡京説 64話

卑弥呼の邪馬台国は長岡京にあった!卑弥呼の墓こそ「元稻荷古墳になる」という長岡京説 64話

稻荷神社の初代宮司の伊呂具の父も祖父も平城京の役人で歴史を研究していた。その研究では邪馬台国は長岡にあって卑弥呼の古墳は向日丘陵にあるというのが結論だった。これは伊呂具の父らの考えだけではなく当時の歴史家の間でも定説になっていた。そしてこの長岡の邪馬台国は仮の国であっていずれ京都盆地(京の都)に移転する予定だったとも指摘している。

この伊呂具の父と祖父は平城京内部の権力争いに巻き込まれ牢獄に収監された。それより少し前に伊呂具は父から一族を連れて奈良から逃げろ、そして行先は長岡でこの先都が奈良から長岡京に遷都されるが、それより前に移住せよという命令で伊呂具は一族23名で奈良から夜逃げしていた。

伊呂具ら一行は卑弥呼の古墳(元稻荷古墳)にお参りしてからその同じ山にあった村社の向日神社の宮司を訪ねた。宮司の話ではやはりこの古墳の主は卑弥呼という。

「そうです。これは私の祖父からというよりこの長岡村として長年言い伝えられている話を誰もが信じて疑ってはいません」

「ところで今から何十年後には奈良の平城京からこの長岡に遷都されるという歴史学者で祈禱師の父が申していました。そしてその10年後に京都盆地に京の都ができるということも…」

「ほう、それは卑弥呼の予言とまったく同じでここにあった邪馬台国も仮の宮で10年後には国を京都盆地に遷都すると伝えられています。ところが卑弥呼が亡くなったすぐ権力争いの戦争で国のすべてが焼け野原になって人々は淀川を下って難波や大和の国に逃げたとも聞いています」

「それらの証拠の物はありますか？」

「いや～なにせ子から孫への言い伝えですから証拠といえはこの卑弥呼の古墳とそれらの一族の古墳が点在しているだけです」

伊呂具らは向日神社の集会所に一晩泊めてもらった。その夜、伊呂具は夢を見た、その夢には卑弥呼が現れて、

「私は邪馬台国の女王の卑弥呼です。私はこの元稻荷山古墳に眠っているが、私の夢はここから真下に見える京都盆地に世界一の都を造成することだったのです」

「はい、私は奈良から流れてきた伊呂具といいます」

「伊呂具は私の夢を叶えてくれる人物としてここで700年間も待っていました。どうかそちの手で私の夢を叶えてほしい」

「はい、私も父や祖父からこの長岡に行けといわれた意味が今夜わかりました」

「そか、それならそちはこの山の真東にある伊奈利山で稻荷神社の宮司となれ」

「はは、しかし、私は奈良では土木と建設しか学んではいません」

「そんなもの...私がこうして夢で指導いたします。それに私と交われば私の靈感がすべてそちの脳に移動して都一の祈禱師になれます」

「はい...しかし、交わるといっても...」

「あ主はじっとしてればいい...」

伊呂具は今まで知り得なかった快感が体中を走り回り女王卑弥呼の靈感を受け取っていた。

こうして朝を迎えた伊呂具はこの夢の話向日神社の宮司に話した、宮司は、

「ほう～それはいいお告げだ。あの東の山は藤森神社の社領地で宮司は私の親戚筋になるので手紙を書くのでそれを持っていきなさい」

「はい、なにもかもありがとうございます」

「いやいや、私も代々この卑弥呼の古墳を守ってきたかいがありました」

藤森の宮司は伊呂具の人柄を信じて藤森神社の北の伊奈利山にある小さな祠「藤社」を無期限無料で貸してくれた。伊呂具一族は藤社を祖神様としてお祀りしてその横に「伊奈利神社」の祠を作り信者を集めていた。伊呂具の目的は卑弥呼と約束したまらず平城京から長岡京に仮の都を作り、その10年後に京の都を造るという壮大な夢だったが、それには卑弥呼の協力が不可欠で週に1回ぐらいはあの強烈な快感とともに授かる靈感を元に農民が喜ぶ農業用水の土木工事、近江と奈良、浪速への一級国道大和街道の整備などを一族でボランティアしていたので信者は倍々ゲームのように増えて10年後にはお稲荷さん参りの講が全国的になっていた。

この稲荷神社の人気を聞いた桓武天皇が稲荷神社に行幸されたことから天皇と稲荷神社の歴代の宮司との三代に渡るお付き合いとなっていた。そもそも、天皇と同席できるという身分は朝廷でも従4位以上で話をできるのは従二位以上になるが、いわば奈良から流れてきた無位の伊呂具が天皇と話ができるというこそこそ奇跡になっていた。その桓武天皇は伊呂具に、

「この神社にお参りせよと命じたものがありここに来た」

「はは～それはありがとうございます」

「それを命じたのは実は...夢で...その人物は邪馬台国の女王の卑弥呼だった。その卑弥呼がいうには稲荷神社の伊呂具に会えば日本の将来が発展するともいっていた」

「あっ...はい、卑弥呼さまですか？」

「その卑弥呼はお主のことを褒めちぎってはいたが...なにか?関係があるのか？」

「いえ～関係があるといえばあるし...ないといえばないし...」

「おいおい宮司、歯切れが悪いがなにか予に秘密をしているのか？」

天皇と伊呂具は京都盆地が見渡せる茶店で酒を飲んでいた。伊呂具は、

「この真西が卑弥呼が眠る元稲荷山古墳になります。そしてその麓に邪馬台国がありました、あの卑弥呼はここは仮の宮にして10年後には比叡山と愛宕山の真ん中の京都盆地に京の都を造営

したいと考えていたようです。ここは三方を山に囲まれて都の防衛には適しています。しかも、桂川、鴨川の水運を利用すれば大阪湾まではすぐです。さらに、琵琶湖を利用すれば北陸、東北、北海道迄の海路を延伸できます。いわばこの地こそ日本のど真ん中になり、日本の中心になります」

「そか、卑弥呼もそんな予言をしていたと何かに書いてあった。その卑弥呼の夢を予が実現させたいが、伊呂具は協力してくれるか？」

「はい、喜んで」

「ところでお主と卑弥呼の関係とは？あれか...そのなんていうか夢の中で...」

「ほう、天皇もですか？」

「はいな～あれは癖になる快感じゃ～しかし、これは予と伊呂具の秘密にしとこう」

「はい...卑弥呼の霊能でよい日本を作りましょう」

📷...元稲荷古墳、卑弥呼



全長94メートルの前方後円墳
元稲荷古墳

卑弥呼



GYAO!ストア

伏見稲荷大社の奉納演奏... 1200年前からあった秋の収穫祭・新人巫女さんの発表会「820年・稲荷17巫女ダンサーズ」65話

伏見稲荷大社の奉納演奏... 1200年前からあった秋の収穫祭・新人巫女さんの発表会「820年・稲荷17巫女ダンサーズ」65話

稲荷神社ではそのころの奉公年齢の15歳になると神職と巫女さんの学校に全国の宮司、神官の子息が入学してくる。2年の全寮制の短期専門学校だがここを卒業しなければ全国の稲荷神社は元より村社のような神社でも神官にも巫女にもなれなかった。

秋の収穫の終わるこの時期の毎年11月26日に来年の3月に卒業する神官と巫女の雅楽の演奏と舞が披露されている。これの人気は巫女さん17名のグループの「稲荷17巫女ダンサーズ」だった。この17というのは巫女の年齢だが稲穂の17にもなり縁起物として老若男女にも大人気になっている。

もちろん若者には熱狂的な人気で奈良や和歌山、それに四国からも収穫したばかりの新米を一斗(10升、約15キロ)を小分けして持ってくる。これはまだ通貨がそんなに回っていない時期で米が貨幣にもなっていたからだ、ほとんどの若者は野宿で都にくるが旅籠に泊まっても米2升～3升で夜の食事と朝の食事、それにおにぎり二つと漬物の弁当を付けてくれる。それに茶店での昼飯も米2～3合で食べられた。

木版のメンバー紹介3色カラーバンフは米1合と高いがこれが京の都のお土産にもなっていた。この秋の収穫祭の「稲荷17巫女ダンサーズ」の入場料は無料だが、そこは律儀な青年が多くて米を一升をお賽銭代わりとしてお供えしていた。つまり、米10升で和歌山だったら3泊4日ぐらいの旅ができていた。そしてこれも収穫が終わった後ということで結婚ラッシュでその新婚旅行にもこの稲荷神社への観光コースが大人気だった。

鳥居前の大和大路には素泊まり宿から高級旅館までが軒を並べて看板には「徳島稲荷参拝講宿」「越後稲荷参拝講宿」などと書かれてこの稲荷神社の人気がわかる。1200年後の今は旅館こそ1軒もないが、世界中から外人観光客が訪れて外人観光客の人気度ナンバー1に3年連続になっているが、このナンバー1というのは当時(日本国内の観光人気)とまったく同じになる。

この巫女さんの舞はお祓いをしてほしい信者(米3升以上の有料・1、5キロ～)が一定集まると神楽殿に信者を座らせてその前で雅楽の演奏とともに巫女さんの舞が始まる。ただ、これは一般参拝者も神楽殿の前で観ることができるのでこの巫女さんを目当てに朝から陣とっている若者も大勢いた。

それぞれパンフを手に持ちあれは「リーダーの紗耶香」、「右端の巫女さんは17番の里佳子」などと声援を贈ってはいたがその都度警備員に「静かにするように」と注意を受けていた。しかし、若者は増えるばかりで稲荷神社三代目の宮司の伊蔵は頭を痛めていた。そしてフォックス警備保障の隊長に相談していた。狐の隊長は、

「伊蔵さま、今朝も若者が朝から100名ほど来ています」

「そか、それは嬉しいが、巫女はあの神楽だけが仕事ではなくて神事の受付やお守りの販売もしている。それを観ようと押しかけるから人気の巫女の前には人の垣根ができて一般参拝者の迷惑にもなっている」

「それに巫女になりたいという若い女性に一日に何回も応募方法を聞かれて私らも困っています」

「そか、だからといって若者に参拝するなとはいえない」

そこで考えられたのが若い新人巫女を集めたユニットを組んで年に一回だけ披露する。その代わりにこの日以外は参拝時間を規制することになった。つまり、表参道から本殿、それに千本鳥居までの通路にロープを張り一方通行で立ち止まれば警備員が注意して歩かせるという方法になる。これでは目当ての巫女さんとなかなか巡り合わないのでも若者は諦めてこの11月26日の奉納演奏を待つことになった。

この公演の2日前からはお山のすべてを開放して全国からの若者の野宿も許されていた。そして神社からは朝は温かいおかゆ、昼はおにぎりの無料接待、夜は暖をとるために火焚祭も行われていた。もう開演時間の午前11時30分前には約8千人の若者が外拝殿の舞台の前に集結していた。そしてこの「秋の収穫祭・奉納演奏会」が開催されお目当ての「820・稲荷17巫女ダンサーズ」のショーが始まると多くの若者が熱狂のあまり失神するものが続出していた。フォックス警備保障の人間に化けた狐の警備員もこの熱狂ぶりに驚いて狐から人間に戻る狐もいてさらに観客はこれにも驚いて失神していた。


伊蔵は、

「なにはともあれ失神者は多数だが死亡や重症の怪我人がでなくてよかった。フォックス警備保障の隊員に厚くお礼を申し上げます」

「いや～それにしても正月の3が日で約200万人もの初詣客で慣れていると思ってはいたがあれらの若者の熱気には負けます」

「それに演奏会が終わった後には若者がゴミ拾いをしているのが嬉しかった」

「そうですね～神聖なお山にはやはり神聖な心が宿るようです」

...その「奉納演奏」が今年も開催されます。11月26日午前11時30分で無料。出演者は「凜ひとえ」剣舞「今野永華」尺八「大山貴善」ベース「虎之」...「SHAMI-RAGA」 「Novom」の皆さん

📷...伏見稲荷大社 奉納演奏のポスター・おたべちゃんの双子の妹の巫女ちゃん

伏見稲荷大社 奉納演奏

1300年にわたって、人々の信仰を集め続け、
もっとも身近な神社といえる「お稲荷さん」。
その総本宮である伏見稲荷大社の国指定重要文化財 外拝殿にて
奉納演奏させていただきます。

出演
凜ひとえ
剣舞 今野氷華
尺八 大山貴善
ベース 虎之

SHAMI-RAGA
Novem



11/26²⁰¹⁶ (土) 11:30 ~ (観覧無料)
伏見稲荷大社 外拝殿 (楼門の奥)



♥[京都の老舗生八ッ橋の人形、おたべちゃんの出生の秘密](#)

[おたべちゃんに双子の妹が...巫女ちゃん〜どす。。。。](#)

トランプ氏は70歳で大統領に...アンノン族から小池百合子新党まで、いずれ泡と消える運命・伏見稲荷大社は1305年...見習え! 67話

トランプ氏は70歳で大統領に...アンノン族から小池百合子新党まで、いずれ泡と消える運命・伏見稲荷大社は1305年...見習え! 67話

もうトランプ氏は金もある名誉もあるのにどうして過酷な大統領選挙、それに激務であろう大統領としての仕事を選んだのかはわからない。政治とは恋や愛のゲームと同じで人の心を盗むという最高の心のお遊びとすれば納得がいく。これは日本の政治家も同じで人の心を盗むというポピュリズムに長けた政治家が国民から支持を受けることになる。

一時ブームになった新自由クラブ、日本新党、小泉改革、それに民主党が一時にせよ政権を取った。さらに維新の会の大ブームとなる。また小池百合子氏の政治塾に多数の政治家を目指す人々が集結しているそう。これもみなポピュリズムのなせる業になる。しかし、すべてが泡と消えていく運命になっている。

オバマ大統領もこの部類に入るが、あのオバマブームの半分でもあればクリントン氏が大統領に当選していたかもわからない。わずか8年でこうなるとはお釈迦様で予想できなかったと思う。この一時的ブームになんら影響されずに711年から現在の2016年まで1305年もの長い間に国民から信仰を受け継いできた伏見稲荷大社への信頼はポピュリズムではなく真からの国民の支持があったからだと思います。

ただこの伏見稲荷大社だって外人観光客の3年連続日本一と大人気だが、これはアメリカの新聞が「伏見稲荷大社」特集をしたことから火が着いたものであくまでも観光であって長く続く宗教心ではまったくない。またアジアの中国、台湾、韓国人などにも大人気になっているが、これもSMSの影響になる。

京都でも1970年代中期から1980年代までの「アンノン族」というブームがあった。この「アンアン」「ノンノ」という女性週刊誌が取り上げた「〇〇寺」なんかもこれと同じで若い女性が大行列を作ってお土産屋さんや茶店もできたが、このブームが去った後は店どころか人影もない寂しい寺になった。政治も商売も一時のポピュリズムでの盛況は必ず泡と消えるものと私はそう信じています。

この1305年も盛況を続けてきた伏見稲荷大社にあやかろうと思ってペンネームを「伊奈利」としてもう25年の月日が経った。私はトランプ氏よりは若いもうそんなバイタリティーはない、それに根気もやる気も一時から比べたら半減してきた。そんな中で人生最後の作品としてこのコラム「伏見稲荷大社の物語」を書いています。

しかし、トランプ氏は70歳、小池百合子氏は64歳、やる気満々の姿をテレビで拝見しているとなにか?こちらも元気が湧いてきます。これからも毎日のようにこの両氏がテレビのニュースに登場しますのでこの両氏がやはりポピュリズムで脚光を浴びた、そしてやがて泡と消える運命まで見届けると決心した次第です。

これも私の人生の最後の政治劇場ショーになると思うのでしっかりテレビを拝見させていただき何年後か先に「ほら、いったやろ」という優越感に浸り人生を終えたいと思っているが、これこそ長生きできるコツかも知りません。しかし、100歳まで生きるとなるとこのトランプ氏と小池百合子氏だけではチト足りない気がするが、そこはそこでまた新たなポピュリズムの政治家が出て来るかも知れない...それにしても稲荷神社の伊呂具、生成、伊蔵はすごい人物だと思う。日本の政治家にもぜひ読んでほしいと思い、このコラムはまだまだ続きます。



...画像は特にこのコラムとは関係はありません。



宮川町 がみや ツイッターより

天皇の生前退位・嵯峨天皇から第五十三代目の淳和天皇へ、嵯峨天皇の皇女を弟の淳和天皇の嫁にする贈呈婚... 68話

天皇の生前退位・嵯峨天皇から第五十三代目の淳和天皇へ、嵯峨天皇の皇女を弟の淳和天皇の嫁にする贈呈婚... 68話

嵯峨天皇は820年の暮れに嵯峨離宮が完成する823年の春に天皇を退位すると宣言されていた。この時代は天皇の考えが最優先されていたのでこれから1200後の平成時代のように男子直系のみとか、「皇室典範」がどうのこうのという議論はまったくなかった。それに女子の皇位継承もあり得るのでこの意味では男女同権にもなる。しかも、退位した後でも再び天皇の代としては変わるが再び天皇になることもあった。

天皇が3年先としたのはもし天皇が急に崩御した場合には必ず権力争いが勃発して朝廷内に派閥ができるのを防止するためでもあった。嵯峨天皇と嘉智子皇后との間には直系の男子が6名もいる。さらに異母兄弟については10名とも12名ともいわれている。本来なら第一皇子の正良親王になるのだが、親王は810年生まれの10歳にしかならないので天皇は皇子の皇位継承を認めなかった。

皇子らの次の皇位継承者というのは嵯峨天皇の兄弟になるが、天皇の兄は平城天皇、そして第二皇子が嵯峨天皇になる。その下の皇子は6名にもなる。その皇子のすべては源の氏を許され第三皇子は源信、第四皇子は源常、第五皇子は源弘、第六皇子は源定、第七皇子は源大、第八皇子は源融(光源氏)と名乗りそれぞれ嵯峨源氏の武将として天皇に仕えていた。

源氏の武将の他には桓武天皇の兄弟系の平氏と力関係は互角で共に桓武天皇の子孫で権力争いはなかった。つまり、この時代の武将、これは軍隊だが平氏も源氏も仲が良く、それに外敵も内乱もない平和な時代が続いていたために軍隊というより儀式に華を添える儀仗隊のような役割で戦闘能力はそれほどなかった。

いずれにしてもこの源氏の武将の6名の中から次期の第53代天皇を選ばなければならない。そこで嵯峨天皇は稲荷神社三代目の伊蔵に祈祷で選んでもらおうと伊蔵を六条河原離宮に招いていた。天皇は、

「823年に嵯峨離宮が完成するというので予は生前退位を決意した」

「はい、世の中は平和というがこの平和に並々ならない努力をされたというのは大変なことでしたね～お疲れさまでした」

「はいな～人の世の権力争いを封じ込めるためには信頼できる武将と伊蔵のようなブレーンが必要になるが、次の天皇のブレーンにもなってくれるか...伊蔵」

「はい、それで誰が天皇に？」

「そそ、それぞれ、その6名の弟たちの誰1人も天皇にはなりたくないとダダをこねている」

「ほう、やはりここは一番若い源融さまとすれば...」

「いや～あいつは政治より性事が大好きでこの六条河原離宮の後釜に住んでハーレムを作ると張り切っているらしい」

「はい、なんでも女流作家たちに自分の女遍歴を物語にするようにと命じています」

「まま、予の兄弟だから...その点は血筋だのう～」

それから1年も経ったが時期の天皇は決まっていなかった。そこで伊蔵は第七皇子源大の屋敷を訪ねた。屋敷は御所から遠く離れた西院(西大路四条東北角)にあり東隣は高山寺という寺だった。そこで伊蔵は大に、

「どうか嵯峨天皇の第一皇子の正良親王が成人するまでのワンポイントリリーフとして第五十三代の天皇になってほしい」

「しかし、私は政治には関わりたくない。それにそんな器量も度量もない」

「しかし、もし天皇が他の公卿(宮家)から出るとなるとそれこそ権力争いの戦争になって京の都は焼け野原になってしまいます」

「伊蔵と天皇との関係は私も知っているが、私の代になっても仕えてくれるか？」

「はい、もちろんこれは桓武天皇と稻荷神社の固いちぎりとして先祖代々まで継承されます」

こうして第五十三代の天皇は源大に決まり名前も「淳和天皇」と内定していた。ところがこの次期天皇は一度結婚をしているがその妻が死去してからは再婚はしていなかった。これでは子孫を残せないと高級貴族から「我が娘」をと見合いの話が西院の宮に連日のように舞い込んできた。しかし、次期天皇はすべてこの話を断っていた。そこで巷では次期天皇は男色家(ホモ)ではないかの噂が乱れ飛んでいた。

そこで伊蔵はフォックス警備保障の隊員に調査を命じていた。その報告によるとたしかに次期天皇は屋敷の隣の高山寺の若い坊主の純正と仲が良く毎晩のように酒を飲んでいるという。伊蔵は狐の隊員に、

「そうか～やはり噂は本当だったのか？」

「はい、お寺というのは男社会でこの男色は珍しくはないということです」

「しかし、そんな噂があるのになぜ？高級貴族の娘らは縁談を進めるのか？」

「まあ～子供さえ生まれればその貴族一家は軒並み位がアップしますから、いわば男色家であろうが...」

「しかし、皇室の法律に天皇は必ず皇后がいなければならないということはない」

「そらま～ね、それに天皇には前妻の男子の他、皇位継承者はもう30名は超えているから血筋が絶えることはありませんよね～」

嵯峨天皇は伊蔵からこの話を聞いて、

「そか、それならそれでいいが、しかし、やはり皇后がいなければ唐の国など外交も上手くはいかない。そこで伊蔵よ...なにかいいアイデアはないのか?」

「はい、それなら形だけの皇后がいいかと...それには正子内親王はいかがか?」

「ほう、正子内親王は予の朝廷内唯一の皇女になるが、それに予の弟と結婚することになる」

「はい、異母兄弟になりますが、朝廷の歴史をみてもこれはよくあることです」

「そか、それなら予の皇女の正子内親王を淳和天皇に贈呈する」

この贈呈婚というのも珍しいが、この天皇から贈呈された花嫁に対しては天皇並みの待遇(屋敷、官女、従女)が必要になるので高級貴族といえども嫁にはほしくないというのが本音になる、つまりこの正子内親王は売れ残っていたことになる。それを伊蔵は利用して男色家の次期天皇に押し付けたのかもわからない。しかし、なぜか?この正子内親王(後の皇后)が妊娠して皇子を産んだ。つまり、生まれた皇子の父は淳和天皇、母は嵯峨天皇の皇女、祖祖父は桓武天皇、祖父は嵯峨天皇、叔父には夫である淳和天皇、嵯峨天皇と平城天皇という皇室のスーパーサラブレッドになっていた。

...画像はこのコラムとは関係がありません。



ロコール本社前の桜の紅葉

2016年11月15日

お賽銭や願いことのお礼は願いが叶った後の後払いになるというのが千本鳥居のルーツになる。千本鳥居の1本目 66話

お賽銭や願いことのお礼は願いが叶った後の後払いになるというのが千本鳥居のルーツになる。
千本鳥居の1本目 66話

平安時代の初期はまだ貨幣が十分流通していなかったので物々交換が市場の原則だった。稲荷神社もお賽銭の箱はあるが、これはほとんど利用されなくて信者達は米や野菜、それに海産物、絹糸、絹織物などをお供えとしていた。ただこれらは重くて持ち運びに不便になるので願をかける、または祈祷やお祓いを受ける時には持参してこなかった。

まあいわば無料で先に神様にお願いしてもそれが叶ったらその時には大八車にお礼のお供え物を持ち込むか、日本通運にお願いして輸送するかの手段が一般的になる。つまり、神様としてはこれらのお願いごとに応えなければその分、神社へのお供えが減るという真剣勝負にもなる。しかし、これがもしお供えの前払いだったら神様も手を抜くし、また忘れることもある。

人の世界というのは悩みが途切れないから一つのお願いが叶ってもまた次の悩みや相談事ができるもので先のお願いのお礼として米を一升〜一俵お供えしてた上で次の悩みや願いことを神職に相談していた。この悩みを聞く神職は10名ほどいるが、やはり一番人気は稲荷神社三代目の宮司の伊蔵になる。ただこの宮司の占いや祈祷はすべて予約制でもう2年先まで予約でいっぱいだった。

今日の伊蔵の予約者は塩問屋で豪商の「播磨屋」だった、この播磨屋は伊蔵に、

「都の塩の需要は毎年倍々ゲームで増えています。ところが赤穂から船で大阪湾の淀川河口、ここで三十石船に積み替えて淀川を上がり淀の港に着きます。そこから京街道(鳥羽街道)を牛貨車、または大八車で東市まで運ぶのですが、これが高くつき塩の値段が下がりません」

「そうか〜最近、野菜の保存食として「京つけもの」が大流行だが、これには安い塩が大量に必要になる」

「はい、それで東市(朱雀大路松原付近)から撤退して油小路(油の問屋街)のような塩小路を淀に近いところに作れば便利になります」

「しかし、播磨屋は卸問屋だからそれでいいが、今度は塩の小売店が淀まで塩を取りにいかねばならない」

「そうですね〜そこでどの場所がいいのか占ってほしいのです」

伊蔵はこれを占っていた、そして結果を、

「それなら淀港からまた船に積み替えて鴨川を上がってくればいい」

「しかし、鴨川は水量がそんなになく船の底が…」

「そう、だが、この水量に合わせて船底を平らにすればいいことになる」

「な、なるほど発想の転換ですね...」

「そう、船着き場は七条辺りにしてその船着き場を塩小路とすれば洛中の塩小売商も近くで便利になる」

「つまり、塩を降ろしたその場所が塩問屋街になるのか...」

「それに帰りの船には「京つけもの」や「酒、味噌、醤油」を積んで浪速の国などにも売れる」

この船は底が平らで十石ほど積めることから塩10石船(約1500キロ、後に高瀬舟)と呼ばれていた。この船は川船仕様の簡単で底が平らということで安価、なおかつ大量に造船できる。播磨屋は伊蔵にお礼は何がいいかと尋ねている。

「そうだな～もし播磨屋さんがこれで儲ければ鳥居を一つ寄進してほしい」

「はっ?鳥居でいいのですか?」

「そうだ、商売繁盛の願いが叶った場合には鳥居を一つ寄進していただけたら、それが1000年後にはこの稻荷山のすべてに鳥居が建つことになる」

こうして千本鳥居の1本目が建つことになった。この話を聞いた嵯峨天皇は伊蔵に、

「ほう、わずかな水量の川でも荷物が運べるとは伊蔵も頭がいいのう～」

「いえいえ...ただこの船を鴨川に沿って上流まで運河(高瀬川)を作れば宮中まで直接船が入れます」

「ほう、ではその運河の近くに酒や味噌、醤油の工場を作れば画期的な流通になる」

「はい、それは今後の事として考えてみます」

京に都が遷都されたころは都で消費される食料や酒、絹織物や日用品まですべて他国からの輸入に頼っていたが、わずか遷都から26年で洛中には工場ができて今度は各地に物資を輸出するという発展国になった。そこで淀港までの陸運からこの高瀬舟になり鴨川から淀川、そして大阪湾から全国に物資が運ばれるようになった。これで儲けた商人はお礼にと稻荷山に鳥居を寄進したというお話しでした。ちなみにこの千本鳥居の数は私の調査では山の中腹の四つ辻までは798本、全体では約2万6千本と推定しています。

...画像はこのコラムには関係はありません。



寒い～～神も仏もないね～～この世は！

唐芋のルーツは狐だった。禁断の食料として1200年も前にもあった薩摩芋、TPPもこれを読んで考えてほしい 69話

唐芋のルーツは狐だった。禁断の食料として1200年も前にもあった薩摩芋、TPPもこれを読んで考えてほしい 69話

遣唐使の船は大阪の住吉神社の近くの住吉港から出発していた。船は4隻の船団でその一隻の荷物の中に紛れ込んだ一匹の狐がいた。そして無事蘇州港に着いた狐も首都の長安の町の調査をしていた。そしてその船団が帰国するというので狐は食料として畑に生えていた芋を蔓ごと船に持ち込んでいた。

その帰りの船団のうち一隻が嵐で転覆していた。三隻の船は海に投げ出された乗組員や役人を必死に助けようとするがなにせ真っ暗闇で見当もつかない、そこで夜でも目が見える狐が人間の乗組員に化けて探して当てて一人の犠牲者もでなかった。助かったこの船の最高責任者の菅原道常(菅原道真の祖父)は、水を飲みつかまる板切れもなくもうだめだと思った時に真っ暗な海に吉祥天女が現れて浮遊物の方に誘導してくれたおかげで助かった。また他の乗組員も同じことをいていた。

そして夜目がきく乗組員に礼を言おうと探したが、これに該当する乗組員はいなかったのは当然になる。住吉港に帰って来た遣唐使の船から狐は降りて稲荷神社に帰ってきた。そして稲荷神社三代目の宮司の伊蔵に唐の旅の報告をしていた。この狐はフォックス警備保障の隊員で嵯峨天皇直属の諜報部員だった。狐は、

「いや～一隻が転覆しまして大変な目に遭いました」

「そうか～聞けば犠牲者が一人もでなかったのは吉祥天女のおかげだといっていたが、それはお主の仕業か？」

「はい、たまたま長安の寺で船の安全を守る「吉祥天女」の絵を見つけていたので、それに化けました」

「それはいいことをした。で、唐と宋の戦争の気配は？」

「はい、どうやら戦争は避けられそうもありません。それに唐の政治は民衆に嫌われて宋の国が政権を取ると私はみました」

「そうか～それなら唐の国への遣唐使はもう中止にして遣宋使の準備をしなければ...」

それから半年後の821年の秋になにやら狐が人間に化けて稲荷神社の多目的広場で落ち葉を集めて何かを焼いていた。そこを通りかかった伊蔵に狐が、

「宮司さん、もうすぐ唐芋が焼けるから食べていってください」

「うん...唐芋?初めて聞く芋だなあ～」

「はい、あの遣唐使の狐が体に巻き付けて持って帰って来た芋の蔓を植えたところ見事な芋がで

きました」

「ほう、これはいい匂いだ...」

早速、伊蔵はこの焼いた唐芋を持って六条河原離宮の嵯峨天皇に献上していた。天皇は、

「ほう、これはほくほくして旨い、それに砂糖のように甘い...」

「はい、それにビタミンC、でんぷんも豊富で栄養価の高いものです」

「そか、しかし、この唐芋の栽培は難しいのか？」

「いえ、それが蔓から次々芋ができます。それにかかなりの荒地でも栽培できます」

「ほう、それなら飢饉の時にはこれを主食にしたらいい」

「天皇、それがそうはいきません。実はこの芋が市中に出回りますと米の価格が一気に暴落します。そうなれば日本の経済が立ち行かなくなります」

「ほう、農民思いの伊蔵とは思えない考えだ...」

「米は日本の主食は元より、米と金銀、それに物々交換の交換レートの基軸になります。米は長く保存できるが唐芋は腐ります。それにもしこの唐芋が何かのウイルス性の病気で全滅してから再び米の生産をしても間に合いません」

「そか、稲作が日本に根付いたのが1000年前の縄文時代だとすればこの稲作のさらなる発展のためにはこの唐芋は邪魔になるのか...伊蔵」

「はい、その通りです」

こうしてこの唐芋は根こそぎ焼かれて消滅したが、そこはそこで稻荷山の一角にある「禁裏畑」では天皇家のためだけに秘密に栽培されていた。そしてこの唐芋が日本の国に再び現れるのがこれから600年後の1400年～1500年ごろになる。そして唐芋は薩摩芋として薩摩藩の門外不出の芋となりこれも約200年間も秘密裏に栽培されていた。

もしこのとき嵯峨天皇がこの唐芋を認めていたなら日本の主食は「唐芋」になっていたかもわからない。実際にはこの芋などを主食にしている国は20か国にもなるがこれは全て発展途上国になっている。TPPで安い食料が日本に入ってきて国民は喜ぶというが、この唐芋を安くて栄養があって栽培は簡単と手放しで喜ばなかった伊蔵の考えを日本の政治家も少しは見習ってほしい。

...この画像はこのコラムとは関係がありません。

武御前社...巫女の女剣劇真希一座の誕生、これが江戸時代には歌舞伎となった。赤ちゃんの額に、大は男の子、小は女の子 70話

武御前社...巫女の女剣劇真希一座の誕生、これが江戸時代には歌舞伎となった。赤ちゃんの額に、大は男の子、小は女の子 70話

稲荷神社に神職、巫女の大学が設立されたが、その後、私立の稲荷大学となり農学部を主体に気象天文学、地質学、土木、建設、設計の部ができてもう100周年になっていた。この大学を卒業した男女の若者は2万人を超えて出身地など各地で活躍していた。

巫女の多くは稲荷大学で教わり、また稲荷神社の巫女として働いた経験を持って全国の神社に勤めたりたり後輩の指導に当たっていた。隠岐の国の出雲大社で巫女として働いていた真希という巫女は出雲大社を30歳で解雇されていた。その理由は巫女というのは若いから巫女で30を超えたら巫女という名前を使ってはいけないという就業規則があったからだ。

この当時の30歳といえはやはり今より10~15歳は老けていたが、この真希はこれに対して憤慨して稲荷大学で教わった巫女の舞と雅楽を教える塾を設立していた。しかし、この真希と出雲大社の対立からこの塾を卒業した巫女の就職先がなかった。そこで真希は巫女さんの一座、真希一座を立ち上げて全国の巫女さんのいない村の神社に出張する興行巫女となった。

これが大評判を呼び、神社ばかりか国司(県知事)やその土地の貴族、豪族の屋敷に呼ばれてこの巫女の神楽を披露していた。一座は出雲に本拠地を置いて出雲大社から解雇されたいわば年増の巫女を積極的に雇用してその数も50名を超えていた。これらの巫女を3班に分けて1組10名~15名の一座で相手側の予算に応じて一座を組んでいた。

そのA班の座長は武御前(たけのごぜん)という巫女でまだ20歳と若い。そのA班が中立売の酒問屋の豪商、伏見屋に呼ばれて伏見屋の屋敷で舞と雅楽の演奏をすることになった。この真希一座のボスの真希は稲荷神社出身ということで稲荷神社三代目の宮司の伊蔵、それに松尾神社の宮司の稲公が招待されて観客は15名だった。

舞台は大広間で和蠟燭が50本ほど灯され庭にはかがり火が焚かれてる。それに池に反射した満月の明かりのライトアップ。雅楽は8人編成でこれに巫女の舞と誰もが予想していた。ところが出てきたのは美少年だった。いえ、巫女が少年に扮して剣を振りかざして踊っている。それはドラマ形式で主役の美少年(武御前)に6名の男が襲いかかるチャンバラになっていた。

役者の声の台詞はないが、雅楽の特に太鼓と笛の音に合わせて踊る武御前の妖艶さに観客は酒を呑むのも忘れていた。舞台が終わった美少年らは巫女の衣装に戻り15名の観客の前でお酌をし

ていた。席主の伏見屋は松尾神社の稲公が口を開けて武御前の剣舞に見とれていたのを察知して武御前に今夜稲公を特別接待してほしいと口添えをしていた。

稲公は松尾神社の5代目で妻はいるがこの武御前に一目惚れをしていた。伏見屋はこの松尾神社の社家の筆頭株をしていたので武御前を稲公のための愛妾として身請けをしていた。この真希一座というのは巫女集団だが、芸能神楽以外にも要請があれば別料金で夜の接待も兼務していたのでこれはそんなに珍しいことではなかった。

この武御前の屋敷は七条御前下がるの松尾神社西七条御旅所の敷地内に新築をされていた。ただ、この稲公の妻の徳子はこれを認めずもし武御前に男の子が生まれただちに離縁すると徳子に脅迫をされていた。それもそのはずで徳子は松尾神社4代目の娘で稲公は婿養子だった。

やがて武御前は稲公の子供を産むがそれが男の子だった。しかし、この子を女の子として育てようといっていたのは武御前だった。元々この武御前も女でありながら美少年をウリにしていたのだからこの考えには無理がなかった。そこでこの赤ちゃんのお宮参りの時に赤ちゃんの額に女の子の証拠として「小」の字を口紅で描いていた。これは松尾神社の氏子の習わしになるが、これを見た徳子のスパイは女の子と確認して徳子に報告をして稲公は無事婿養子の席を守った。

♥...余談だが、この真希一座の女剣劇が有名になって今度は男が女になるという一座も誕生していた。これが江戸時代には歌舞伎になった。そして昭和の時代には宝塚歌劇団となった。ちなみに赤ちゃんの額に男の子は「大」女の子は「小」という風習は今のお宮参りにも残っています。その後この武御前の屋敷は「武御前社」として今もあります。下京区七条御前下がる。この御前(おんまえ)通りというのはこの武御前からきているという伊奈利の説になる。一方の説は、菅原道真公を祀る北野天満宮の前の道、それに道真が生誕した吉祥院天満宮から宮中への通勤道からきているという説。さらに、平清盛の八条御殿の西門の前の道というこれも伊奈利の説。さて、あなたはどの説を信じますか？

📷...画像は武御前社



狐がタイムマシンで現在の伏見稲荷大社へ・日本がテロの標的になると狐の諜報部員の報告・「伏見稲荷大社の物語」... 7 2話

狐がタイムマシンで現在の伏見稲荷大社へ・日本がテロの標的になると狐の諜報部員の報告・「伏見稲荷大社の物語」... 7 2話

伏見稲荷大学には夜の二部がある。学生は全員が狐で昼間と同じ勉強をしている。その科学部の部長で嵯峨天皇直属の諜報部員のポン吉狐は伏見稲荷神社三代目宮司の伊蔵に、

「伊蔵さま、5年もかけて研究してきたタイムマシンが完成しました」

「ほう、そうか、ついに未来の稲荷神社へ行けるのか？」

「いえ、未来にはいきません。それは歴史上の人物が急病で亡くなったり、また戦争が勃発して歴史が度々変わるからです」

「ほう、ほなどおして未来に行けるのか？」

「それは現在が1200年前の過去だと設定すれば2016年後から過去の私たちが今住んでいるここへは来られます。そして過去の今から現在の2016年には帰れます。つまり、私たちが研究したタイムマシンで過去と現在が往復できます」

「ほう、ここは現在ではなく過去なのか？」

「はい、2016年からすればそうなります」

こうしてポン吉狐はタイムマシンに乗って現在の伏見稲荷大社に無事到着していた。着いたのは稲荷山の中腹でたまたま現在の狐の棲みかの穴の前だった。このポン吉はその狐らに現在の日本の情勢、そして世界の情勢などを3日3晩ほとんど寝ないでレクチャーを受けていた。当然人間に化けて現在の稲荷神社の様子も調べて過去の稲荷神社に無事に帰ってきた。そしてその報告を伊蔵にしている、

「伊蔵さま、稲荷神社は伏見稲荷大社と名前を変更して大層賑わっています。なんでも世界中から日本に年間2000万人もの観光客が訪れてその外人観光客の日本での人気ナンバー1に3年連続になっているようです」

「ほう、そかそか、それは嬉しいことだ...それに天皇家はどうしている？」

「はい、それも京都から東京に遷都されて126代目の天皇が元気で働いておられます」

「ほう～それはそれはいいことばかりで目出度いことだ」

「しかし、少し気になることがあります...伊蔵さま」

ポン吉狐は現在の狐から教わったことを伊蔵に話をしている。それは中東で宗教戦争が起きてもう数万人の一般市民や女子供まで犠牲者がでていいる。このテロ集団**ISIL**（イスラム国ないし**IS**）が、アメリカやフランスで同時爆発テロを起こしてこれも数千人という犠牲者が出ていいる。これでアメリカもヨーロッパもテロの対策をしているが、おかげさんで日本にはテロリストがまだ入っ

てきてはいません。

伊蔵は、

「ほう、世界中がテロに怯えているのか？」

「はい、先に伏見稲荷大社は外人観光客に人気があるといいましたが、私も3日ほど調査をしました。京阪電車やJRの稲荷駅から本殿までの表参道、裏参道は外国人であふれて日本人は100人に1人ぐらいしか見ません。さらに本殿から千本鳥居にかけては人の渋滞まで発生しています」

「ほう、日本人は100人に1人とは信じられない」

「本当です。しかし、境内にはテロ対策の警察官どころか警備員の1人とも配置されてはいません。それにこの境内へは四方八方から自由に出入りできます」

「ほう、日本は島国だから安心しているのか？」

「テロ組織の人間は武器も爆弾も持たずに日本にとりあえず入国さえすれば爆弾の原料はホームセンターやスーパーにも大量に売っています。それに外国からの観光客ですから大きなリュックやバックでも誰も怪しみません」

「そうか～しかし、テロ集団が日本でテロ行為をする必要性はあるのか？」

「はい、あります。それはこの伏見稲荷大社で爆弾を爆発させれば被害者が数百名もでます。その被害者の1%は日本人だが、残りの99%は外国人になります。つまり、数十か国の国民が被害者になるのですから全世界がこのビッグニュースを取り上げます。それがISIL（イスラム国ないしIS）の最大の宣伝になります」

「そか～しかし、日本の政府はなにもしていないのか？」

「はい、日本の政府は外人観光客の現在の2000万人を4000万人にするのだと金儲けしか頭にはありません、さらにカジノを誘致するなど頭が狂っております」

「しかし、日本でテロが起きればその外人観光客も伏見稲荷大社どころか日本にはこなくなるが...」

「そこが島国だから島国の所以になります、まったく日本はテロには無警戒になっています」

ところでお主の子孫の狐らは元気にしていたか？、

「いいえ、もう稲荷山には狐が十数匹しかいません。それでも全国狐連合会の会長で女狐の白藤の350代目の会長は健在でした」

「ほうほう、白藤の血も1200年も続いていたか、それはそれは嬉しいことだ」

「それに藤族の「平安騎馬隊」も京都府警で活躍しています」

「ほう～ほう～ところでポン吉はなにかいいことがあったのか？」

「はい、白藤の娘と仲良くなって...」

「そか、お主もやるのお～」

「はい、天皇やこの国の風紀の乱れに感化されて私もとうとう不倫をしてしまいました」

「おいおい、嵯峨天皇や松尾神社の稲公はともかく私はそんなことには関係がない」

[.....]



坊主カジノでテラセン(寺銭)を稼ぐ...宿坊、水茶屋など、統合型リゾート**temple**、テンプラ・これに反対したサガノミクス(嵯峨天皇) 72話

坊主カジノでテラセン(寺銭)を稼ぐ...宿坊、水茶屋など、統合型リゾート**temple**、テンプラ・これに反対したサガノミクス(嵯峨天皇) 72話

822年平安遷都から28年目の京の都は戦争も大きな犯罪もない平和な街になっていた。都は活気にあふれて商人も職人も、それに農民も奈良時代や長岡京時代から比べると所得も軽く倍になっていた。それまでは昼は仕事夜は寝るだけの生活から余裕ができたのか夜の産業が発達していた。

これは照明用の油、それに蝋燭が安く流通するということが最大の理由になる。夜は現在よりは空気も綺麗で月明りだけでも夜の街を不自由なく歩けるという環境もあった。それに犯罪が極めて少なくこのころの世界の都市と比べても犯罪率の発生率が少ないほうのトップになっていた。

夜の遊びといえはお茶屋(居酒屋)と水茶屋になる。この水茶屋とは女性が店員で酒のお酌などしてくれる店から横に座ってくれる店もあった。しかし、このお茶屋の経営は誰でもできることではなく検非違使庁(警察)の許可がいる。

その許可されるのは小さなお寺が多かった。これは寺の信者に対して昼間有料でお茶、それに軽い食事をだしたことから始まっている。その延長線上で夜になると酒と料理を出して近所の若い娘をパートに使ったことからこの夜の水茶屋の大ブームになった。そうなるに洛中の寺も儲かるので我も我もと居酒屋がオープンした。これはこれで庶民の楽しみが増えたことでまたこれらを取り締まる検非違使の役人もお目当ての若い女子店員に足しげく通っていた。

このお寺のお茶屋組合も結成されてそれなりの秩序もあった。そのお茶屋共同組合から検非違使庁官(警察庁官)の従4位の藤原晋造と従4位上の右大臣藤原維新の連名で嵯峨天皇に「**IR統合型リゾートtemple**」(テンプラ)の許可申請が届いていた。その申請には、

- 1、お寺の部屋を使つての宿泊(宿坊)施設の設置許可。
- 2、お茶屋の営業時間を現在22時までを午前2時までとする。
- 3、賽子(サイコロ)による丁半バクチ場の設置許可。

しかし、この要求以前にはもう7か所の寺でこれと同じことが行われていた。しかも宿坊と称して水茶屋の女との売春、それにバクチも公然と行われていたから後付けの申請許可になっていた。このことを天皇は稻荷神社三代目の宮司の伊蔵に相談をしていた。

伊蔵は、

「先に書面でこのことを伝えてもらっていますからフォックス警備保障がこれらの寺を調べてまいりました」

「ほう、そか、さすがに伊蔵は仕事が早い」

「はい、その7か寺になりますが、どの茶店も水茶屋でその女性を客に斡旋して宿泊料として寺が売春代を徴収しています。それに丁半バクチですが、これは奈良から博打の専門家を雇用して客から1回の勝負につき掛け金の10%の金を取っています。寺はこれを寺銭というお布施だと誤魔化しています」

「ほう、しかし、こんな法律違反のIR統合型リゾート templeの許可をどおして検非違使庁官は認めようとしているのか？」

「はい、この長官の藤原晋造とお茶屋組合との癒着になります。なんでも政治献金と称してワイロが、それに維新もグルです。さらに浪速の国司(知事)が黒幕です」

「そか、それなら晋造は更迭、浪速の国司は解雇、維新は官位を一つ下げろ、それとお茶屋組合の組合長を即刻逮捕しろ!」

この7か寺はお茶屋の許可を取り消されたが、奈良から博打打ちとして雇用された連中らは別の闇博打組織を作っていた。平和だった京の都だったが、めったに見られなかった自殺者が23件、それに大店の倒産、それに夜逃げまででてきた。そして強盗、空き巣、暴力行為などの犯罪が急激に増えて夜の都から活気が消えていた。これを内々に調べてきた嵯峨天皇の直属諜報機関のフォックス警備保障の狐らと平安騎馬隊との協力で全員逮捕していた。

その報告を伊蔵は天皇にしていた、天皇は、

「そか、それはごくろうであった。しかし、庶民の娯楽を奪ったという批判もあると聞いているか...」

「はい、それはありますが、こういう博打というのはギャンブル依存症にもなります。それを国民に啓発しなければならない検非違使庁、また国家が税金が入るからといってギャンブルやカジノを許可するということが国の権威を消滅します。金のでどこがどこであれ経済が活性化すればそれがサガノミクスの成果と思われれば嵯峨天皇の恥、そして国家の恥になります」

「そか、予は伊蔵のような占い師がいてよかった。もし伊蔵がいなかったら高級貴族の藤原維新や中納言藤原公明のいいままになっていた」

「はい、その判断はきっと国民がしてくれると思います」

... 

...  ドレミちゃん、↑の記事とは関係がありません。

ドレミちゃんブログ (アメーバ)より



日本最初の郵便・稲荷神社参拝の講が全国←→京の都に手紙が届くシステム・講はインターネットの役割もしていた 74話

日本最初の郵便・稲荷神社参拝の講が全国←→京の都に手紙が届くシステム・講はインターネットの役割もしていた 74話

稲荷神社がここ伊奈利山に建立(711～822年)されて111年にもなる。その間に全国に約2万分祀の祠ができ、それぞれの国を代表する〇〇稲荷神社もあった。そして全国から本社の稲荷神社にお参りする講もできていた。この講とは地域単位、村単位で積み立てをして年に1回約5～10名の村の代表者が順番に参拝に来るというものでいわば村民旅行のようなものでこれが農民の楽しみでもあった。

そしてもう一つの目的は稲作に関するあらゆる情報がここに集まるのでテレビも電話もない時代では最大の情報源だった。集まった数組の講のメンバー全員は参拝講の講堂で稲荷神社三代目の宮司の伊蔵にこの1年間の成果を報告していた。もちろん冷害や稲の病気、農業用水の不足なども訴えていた。それに対して伊蔵を始め稲荷大学の教授、学生らが知恵を出し合いその問題の解決策をアドバイスしていた。農民らはその情報を持ち帰り村や地域に活かしていた。また売れ筋の野菜、果樹などの種も購入していた。

この講というのはたとえば越後地方のある村なら稲刈が終わった10月の2日に京へ出発、またある村は11月5日出発と日を決めていた。それが農繁期を除き1年中続くのでほぼ毎日のようにどこかの講の参拝があった。そこで伊蔵はこの講のメンバーにその講が出発する地域から、または帰る時に通る地域への書簡を預け配達をしてもらっていた。

たとえば各県の国司(県知事)が天皇に報告する事案があればその手紙を稲荷神社参拝講に託せば必ず稲荷神社へは早く安全に着くと考えていた。そのために各地の参拝講の出発の日を決めていた。その予定表を全国に配布すればたとえば新潟のある村の講は我が富山の国の近くを通るのは11月8日ごろになるとすればその街道で待っていればその講が来ることになり朝廷への手紙を託していた。手紙には宛先が書いてあり稲荷神社からその宛先に配達されていた。そして天皇からの指示や返書もその帰りルートで配達されることになる。もちろんこれには所定の郵便料金が発生するがこれは講の連中のお土産代、酒代になるので一石二鳥のアイデアだった。

それまでは1人の飛脚が手紙を配達していたが、これは山賊や強盗に襲われることもしばしばあった。また急病や崖から転落死などもある。ところがこの講は5～10名の団体に襲われる危険は少ない、もし襲われてもその情報が次の講によって都に届く利点もあった。つまり、全国の街道のすべては稲荷神社に通じる当時ではかなり早いインターネットの役割をしていた。

朝廷の情報局の局長の従4位の藤原通信は稲荷神社経由で全国の国司(県知事)から届く手紙の記録、情報を整理して天皇に報告していたが、あまりにも多い情報に音を上げていた。通信は天皇に、

「天皇、情報局の書記官及び下級役人の数を増やしてください」

「ほう、そんなに全国から情報が集まるのか？」

「はい、連日のように講が稲荷神社へ来ますから、その都度約100件の各国司からの訴えがあります。それを吟味して返事と指示をするのですから...」

「そか、しかし、お主らは朝こそ7時出勤と早いが、仕事は12時まででそれから家に帰り食事をして午後からは遊んでいると聞くが？」

「はい、これはもう奈良時代から200年もの慣習になっていますから...今さら変更はできません」

「ほう、農民や町民は朝から夜遅くまで働いているが、その年貢(税金)でかなり高級な給料をもらっていることを忘れているのでは？」

「はい、しかし...これは貴族の既得権益ですから...」

「そか、それなら高級貴族の給料を半分にするか、明るいうちは働くか？どっちにするか決めろ...通信」

「いや～それならせめて土曜日ぐらいは半ドンにしてください」

この話は官女、従女からすぐ巷に広がり、その情報が稲荷神社の講が配達した手紙で全国に広がるのには一か月もかからなかった。天皇は伊蔵に、

「お主の考えた講を使つての郵便は大成功している」

「はい、全国に赴任している高級役人もこの話を聞いて1日仕事をしているそうです」

「そか、さぼればすぐに都に情報が早く届き出世に響くから役人も大変じゃのお～」

「はい、それに地方に点在している豪族も武器を捨てて農民いじめをやめたそうです。そして稲荷神社の参拝講が倍々ゲームのように増えています」

「ほう、そか、それならお主も儲かるが、それは予のおかげであるが、何か予に飛びつきり美人の褒美をくれないのか...伊蔵」

「はっ？、まだあっちのほうは元気ですか?...天皇...」

...画像は↑この記事とは関係がありません。

残り1枚の桜の葉っぱ

もう葉の落ちた後には小さな芽が

冬を越せば

春が必ず来るよネへ♪



忠臣蔵と伏見稲荷大社・大石内蔵助と白狐、白藤との恋・討入48番目の義士は狐だった 伏見稲荷大社の物語 75話

忠臣蔵と伏見稲荷大社・大石内蔵助と白狐、白藤との恋・討入48番目の義士は狐だった 伏見稲荷大社の物語 75話

大石内蔵助は京都山科の山中で隠棲生活をしていた。この屋敷の裏山は京都市内側から見ると東山三十六峰の最後の山の稲荷山になる。隠棲生活としているが京都所司代や浅野家のスパイからは見張られていた。この内蔵助が幕府の役人から仇討ちなど毛頭考えていないという証なのか連日祇園のお茶屋「一力」に入り浸りだっという話は有名になる。その山科から祇園へ通う道は今でも大石街道とされている。

しかし、これは江戸時代の作家が書いたもので実際には伏見の榎木町遊郭「万亭」に連日連夜通っていた。この山科から榎木町への道は小栗栖街道（明智光秀が殺された場所）から大岩街道へと稲荷山の裾野をぐるりと回ることになる。当然ながら幕府の間者もついてくることになるから仲間らとの連絡も容易ではなかった。

そこで内蔵助は裏山の険しい獣道を駆け登り伏見稲荷大社の奥の院～千本鳥居～本殿～表参道～大和街道～榎木町遊郭への道を選んでいく。内蔵助は狐の好物とされていた油揚げを数枚奥の院に毎日献上していた。そして主君、浅野長矩（内匠頭）の仇討ちが成功するようにと願をかけていた。もちろん幕府の間者も浅野家が雇ったスパイもついてはくるが、なぜか？毎回道に迷い、時には崖から転落して死ぬものもいた。

本殿から表参道への脇に参拝者のためのお茶屋(現・国の重要文化財)があったが、夜は営業はしていないはずなのに薄っすらと灯りがついて店の前には白い着物を着た女性が内蔵助に頭を下げて「どうかこの茶屋で遊んでください」という、その女は色白で背は内蔵助よりも高いしなによりも美形だった。元々、この筆頭家老の内蔵助は赤穂の城下でも有名な女好きだったからこの妖しい誘惑に負けていた。

女は白藤といい生まれも育ちもこの稲荷山だという。内蔵助は夜が明ける前にはこのお茶屋から屋敷に帰っていた。そしてその後このお茶屋が赤穂浪士との秘密の深夜の会合場所になっていた。そして数日後に江戸への仇討ちの旅にでることになったことを白藤に報告をしている。白藤は、

「この伏見稲荷大社は稲荷神社の総本宮で全国に約3万社あります。その神社には必ずお使いの狐が住んでいます。その全国の狐に内蔵助さまをお守りするようにと手紙をだしています。もし、道中になにかがあればその地の稲荷神社に駆けこんでください」

「白藤...お前は...狐だったのか？」

「はい、奥の院に毎日油揚げを献上していただきありがとうございました。そのお礼のつもりでしたが、私は内蔵助さまを好きになりました。それに...内蔵助さまの赤ちゃんが...」

吉良邸は両国の松坂町、回向院の裏にあったが、その回向院の片隅に両国稲荷という神社があった。その神社の狐も総本宮の白藤から手紙をもらっていた、吉良邸とは地下の狐道を通じて自由に出入りしているので吉良邸の動向などは手に取るように分かっている。それをそば屋に化けた赤穂浪士に人間の姿に化けた狐が報告している。後にこの赤穂浪士は48人と数えられていたが、後1人の正体は歴史的にも不明になり47士となった。この1人こそ両国稲荷の狐になる。

♥大石内蔵助と白狐の白藤との子供は「東丸」と命名された。

主君の仇討のために江戸へ旅立つ前日に白狐の白藤からお腹に内蔵助の子が宿っていることを打ち明けられた大石は以前から懇意にしていた荷田春満にその日のうちに相談していた。荷田の屋敷は伏見稲荷の本殿のすぐ近くにあり父親はこの稲荷大社の社家で羽倉信詮という。

この夜は大石と同じように江戸に向かう荷田晴満(朝廷の学者)も家で送別会を開いていた。大石からこの話を聞いた羽倉信詮はもしその子が男の子だったら神官に育てる、女の子だったら巫女にすると約束をしてくれた。ただ、その子の父親が大石内蔵助にすることには色々幕府の目もあるので父親は荷田春満にすることになった。この夜のこの密談を縁にして江戸に出た2人は色々連絡を取り合い吉良邸討入の日時を決定する根拠になったという古文書もある。

赤穂浪士の吉良邸討入事件が京の都に届いたころに白狐の白藤は奥の院の祠の下の穴で立派な人間の男の赤ちゃんを産んだ。白藤はその子を社家の羽倉信詮の門前に置くと同時に門の中から羽倉が出てきてその子を受け取っていた。その子は荷田東丸(あずままる)と命名された。その東丸は神道は当然ながら国学、漢字、歌学までをなんなくこなす武術、馬術もすぐれていた。

当時の伏見稲荷大社の宮司は大西家が代々世襲していたが、後継ぎが途切れて筆頭社家でもあった羽倉家の孫の東丸にへと白羽の矢が飛んできたがこれには羽倉も義父の荷田も悩んだ。それはそうだろう~この東丸は表向きは荷田の子だが、本当の父は大石内蔵助で母は狐だとは口が裂けてもいえないことだった。

そしてこの話は羽倉が社家から抜けるということで落ち着いた。こうなると羽倉家に収入がなくなるが、そこでこの羽倉家の屋敷を「東丸神社」として伏見稲荷大社から独立することになった。そして現在も伏見稲荷大社の本殿の目の前に東丸神社はあるが、実はこの神社は伏見稲荷大社からは独立した宗教法人であることは誰も気が付かない。当然ながらこの神社の御利益は「学問の神様」になります。

📷 画像は東丸神社、境内にあるお茶屋 尚、この小説は再掲載で2話を「伏見稻荷大社の物語」の75話に編集したものです。





重要文化財のお茶屋

伏見稲荷大社の物語...「同じ金でもカジノで使うより神様に使うほうが品があると「お塚」が建立された」...マイ神様1万基76話

伏見稲荷大社の物語...「同じ金でもカジノで使うより神様に使うほうが品があると「お塚」が建立された」...マイ神様1万基76話

全国狐連合会の第25代会長の女狐の「白藤」が18歳で亡くなっていた。この狐の寿命は10年前後ほどしかないからこの白藤は長寿命だった。墓は稲荷山の中腹にある四つ辻の近くに建立された。当時は仏教では墓になるがこの稲荷神社では「お塚」と呼ばれて石組の台の上にさまざまな形の自然石に亡くなった人の名前ではなく神名を掘ってこの白藤の場合は「第25代白藤大明神」という神様として祀られていた。こうして建立されたお塚に稲荷神社の神官がお祓いをすれば一つの神様として認められていた。

これが洛中の商人たちに広がり本来は死体を埋葬する墓だったが、それが墓の役割としていたお塚ではなく私的なマイ神様へととなっていた。もちろんこの神様のお塚は稲荷神社の末社となり本社はあくまでも稲荷神社になっていた。たとえば豪商で油商の山崎屋が建立した神社は「山崎油大明神」としてこの一族の家内安全、商売繁盛、無病息災等の守り神となり建立した日をお祭りの日として一族郎党でこのお塚にお参りお塚の前で宴会をしていた。

これが空前の大ヒットになり稲荷山への私的マイ神様建立の願いが殺到していた。しかし、これには社家の多くが反対していた。筆頭社家の大西は稲荷神社三代目の宮司の伊蔵に、

「神聖なるお山にそんなパカパカ私的な神様を作ってもらってはお山が穢れます。今でもう30基ほど建立されていますが、中には意味不明なものまであります。たとえば、「金玉大神」、それに「お豆ちゃん大明神」とあるがこんなものを宮司は許されたのですか？」

「大西そう怒るな...この世はありとあらゆる人たちが思い思いの信仰を持つのは自由になる。我らの先祖も太陽を拝んだり、大きな岩、樹齢数百年の木をご神体としてその生命力に憧れていた。またこの稲荷山もご神体として拝んできた。初代稲荷神社宮司の伊呂具は奈良を追われた無国籍者で神様とはなにも縁がなかった。しかし、一族を養うためにここに新興宗教を立ち上げた。いわば食うために神様をデッチあげたといっても過言ではない」

「しかし、それは初代の伊呂具さまの人格があったこそです」

「それならこのお山に「お塚」を建立したいという信者には人格がないのか？」

「それは...しかし、お山には秩序というものがあります」

「お塚といってもこの石は四国や九州から船で運ばれてくる。それを石工が加工して山の上まで運び建立するが、この費用というものは莫大な金額になる。その過程というのが経済活動になり国が栄えることになる。博打を誘致してそのテラ銭を成長戦略とするどこかの国とは大違いだが、大西は博打場誘致とお塚建立とどちらを選ぶのか？」

「そういわればそうなりますが...」

こうして正式に「お塚」は認められていた。この稲荷山は標高300m弱の小さな山で山全体は花崗岩でできている。岩が風化して地形も複雑になりアチコチに小さな滝ができていた。そのお塚の建立場所もこの滝のある場所が人気になっていた。稲荷山の境内近くでは石材商、それに石の加工、それを山の上に運び設置する土木業者が数社集まってきた。伊蔵はこの業者に、

「石工、それに土木の作業員は京都職業訓練学校の生徒を積極的に雇用することを頼んでいた」

この京都職業訓練学校とは各地から都にあこがれてきた若者やなにかの事情で国を追われた者（無戸籍者）を一時保護する施設でここで一般常識や一般教養、それに希望の職種の訓練ができるというものになる。全寮制で食事などの費用は奨学金制度で就職が決まってから返済をしていた。

この無戸籍者を見つけて保護するのが警察組織の「平安騎馬隊」だった。この京の都というのは洛中、洛外の堀もなくどこからでも都に侵入できた。しかし、無戸籍者はどこにも就職できない決まりで食うに困り犯罪を犯していた。それらの犯罪を事前に防ぐために騎馬隊が無戸籍者に対して任意同行を求めてこの職業訓練学校で保護していた。その結果、世界の都市で犯罪が少ないほうのナンバーワンに日本はなっていた。

今まで稲荷神社に願をかけてそれが願ったら鳥居を奉納するというので千本鳥居ができた。今度はその願いを拝む私的なマイ神様の建立が許可されたので洛中、洛外は元より日本全国からこのお塚の建立の願いが届きもう建立まで3年待ちの繁盛になっていた。その噂を聞いた嵯峨天皇は伊蔵に、

「伊蔵...お主また新しい金儲けを企画して大儲けをしているというが...」

「いえいえ、それは誤解です。なんでも北陸から日本海側の東北にかけて冷害と稲の病気で米が不作になっています。そこで稲荷大学農学部の教授を5名、学生ら100名で5班の調査チーム作り、それを派遣して対策をするその経費を捻出したかったのです」

「そか、それではその報告を待って年貢も少し加減してやってもいい」

「ほう、天皇、最近お優しくなられたのですネ...」

「いや、もう予もそろそろ引退で何かいいことを残したい」

「はい、ありがとうございます」

「そか、しかし、もう神様は八百万もいるというのにまだマイ神様が必要なのか？それにそのお塚を建立してまだもっと金を儲けたいという商人たちの根性はそれでいいのか？」

「はい、その商人たちから稲荷神社へ金が回り、その金が庶民に回り、雇用も拡大されます」

「そか、それであのバカ高いお塚や千本鳥居を認めたのか？」

「はい、同じ金でもカジノで使われるよりは神様に使ってもらったほうが品がありますから...」

...画像はお塚



平安時代のお菓子とは唐菓子で果物、木の実の乾燥した物...日本初の本格的お菓子は「かりん糖」...79話

平安時代のお菓子とは唐菓子で果物、木の実の乾燥した物...日本初の本格的お菓子は「かりん糖」...79話

平安時代の貴族は甘いもの大好き人間の集団で全国から甘い果物と甘いお菓子の献上品をことのほか喜んでいた。この献上品とは年貢などではなく皇族や貴族に試食してもらい嵯峨天皇に「これは旨い」という一言をもらいそれを宣伝に使っていた。一番名誉なことは皇族に商品を納入する権利でもある「宮内省御用達」の看板を店頭飾ることであった。

この宮内省御用達の商人は宮中に自由に出入りができて各皇族や貴族にその扱っている商品のセールスができるという利点があった。ただ宮中には自由に出入りはできるものの窓口は下級役人を通じて中級役人、そしてさらに有力貴族に口利きをしてもらわなくては天皇にまでは届かない。そうなるここにワイロが発生するのは現在とまったく同じになる。(東京都の頭の黒いネズミ)

822年のこのころの唐菓子といえば果物になる。しかしこれは季節に関係があるから年中は食べられない、そこで干し柿、栗のような保存が利く甘いものを唐菓子と呼ぶようになった。稲荷神社三代目の宮司の伊蔵は神社の土産品にこれらを売ろうと思ってはいたが、これらは高価なもので一般庶民には手が出なかった。そこで伊蔵は稲荷大学の成長経済部の学生に安価で日持ちがする甘い日本初のお土産お菓子を研究してほしいと要請していた。

学生らはこの研究に没頭してやっとできたのか伊蔵に報告をしていた。

「伊蔵さま、米粉と小麦粉を半々使い、これを長さ10センチの丸い棒状に延ばして荏胡麻で揚げました。それに甘葛(ブドウ科のツル性植物)のツルを煮詰めたものをさらに水分を飛ばした甘い汁をからましたものですが...」

「ほう、これはいい匂いがしてなかなか美味だが、なにか問題があるのか?」

「はい、これはそのまま食べるのにはいいですが、なにせお土産ともなると信者の旅人が背中に背たろうて何日も歩かなければなりません。そうすると折れたり、形が崩れて商品価値がなくなってしまいます」

「そか、それならこの棒状の物からひねり、ねじりをかければ表面面積が多くなりその分固くなり表面にも甘味料がよくからむ」

「はい、そうですね~それならこの棒を3センチほどと短く切れば強度も増します」

こうしてできたお菓子を嵯峨天皇に献上していた。天皇は、

「ほう、これは匂いもいいが、カリカリして旨い、それに上品な甘さがいい」

「はい、それを稲荷神社のお土産にしたいのですが、ぜひ天皇にこのお菓子の名前を...」

「そか、それより先にお主に見せたいものがある」

「はいはい、またですか?...天皇」

天皇はなにやら声をかけると奥からこれまた若い姫が出てきて伊蔵に挨拶をしている。その姫は近江の呉服商の高島屋の孫娘で15歳の「果林」という。その高島屋が都に本店を置き、宮内庁御用達にしてほしいという陳情があり、そのワイロにこの果林を差し出したということは天皇からその経緯を聞かなくても伊蔵は宮中の噂で知っていた。当時の未成年というのは15歳以下の事で男も女も15歳からは立派な成人としていたから天皇は法律違反を犯してはいなかったことになる。

その果林がこのお菓子を食べて、

「いやん～これ美味しいです。これ伊蔵とやら、これは何という名前の唐菓子じゃ～」

「いえ、姫さま、それは唐のものではなくて日本最初のお菓子になります。それを天皇に命名してほしくて今夜はきたのです」

「そか、それならわらわが命名する。そう、それなら我が名を未来に残すために「かりん糖」とする」

天皇は786年生まれの36歳でもう愛妾は伊蔵の知っているだけで10人を軽く超えている。それに子供も皇后との間に6名、正式な愛妾の間には約20名、さらに一夜だけの恋だが、嵯峨天皇の子供だと認定されているのは約20名とされていた。そして今夜紹介された果林...なにはともあれ天皇が美味しいといい、果林が命名した「かりん糖」は稲荷名物になり飛ぶように売れたというお話しでした。

◎独居老人・年金生活者の文化・イオンの無料コンサート❤️

年金生活では1100円(老人割引)の映画すらいけない、そして生演奏のコンサートなんてものは絶対に行けない。それなら家でテレビばかり見ていると歩くこともなくさらにボケます。

近所の老人ホームではお年寄りを集めて介護士らが「童謡」を唄って聞かせている場面によく遭遇するが、年寄りを子ども扱いというよりバカにしている。そしてそれを歌ったりお遊戯を強要さえしている。

もう年寄りを子供に返して早く死ねといっているようなものだ!。そんなことより我々より若い男女の色気のあるパフォーマンスを見せたほうが老爺、労婆の脳の活性化にもなります。

そんなわけで私はイオンの無料のコンサートが大好きでよく見に行きます。24日のクリスマスイブにはクリスマスコンサートに行ってきました。若い女性の三人組でフルーツ、ホルーン、ピ

アノの生演奏だがこれは元気もらった。

この年末から年始にかけてこの無料コンサートがあるが、これが我々独居老人の唯一の楽しみでもある。予定としては津軽三味線、ドレミちゃんのバルーンショー、それに物まね歌謡ショーもある。どれも一流の芸人のパフォーマンスで見た後は私のコラムの筆も走りますからこれが脳の活性化になっていると思う。

一方で松竹芸能の新人の舞台もあるが、これは新人だけに下手になる。しかし、夢を持って活動している気持ちがわかる。老婆心なのか?これらにも心からの拍手を贈っています。

📷 画像は、今年の気に入った無料のパフォーマンス3枚(イオン洛南店、伏見稻荷大社)





伏見稲荷大社奉納演奏16、11月26日
和パントの「凜ひとえ」と音川伊奈利

堀川・堀川下水は新種の植物、野菜の宝庫だった。堀川牛蒡は鴨と合う・嵯峨天皇823年3月に生前引退決定 80話

堀川・堀川下水は新種の植物、野菜の宝庫だった。堀川牛蒡は鴨と合う・嵯峨天皇823年3月に生前引退決定 80話

京の都の川はほとんどが北から南へと流れている。これは北の端の金閣寺よりも南の端の東寺までの高低差が約50mもあるのが原因になる、北山からの水、東山からの水もすべて桂川、鴨川に集まりそれが淀川になり大阪湾に流れている。

平安時代にも下水があり右京、左京の生活排水などはすべて堀川に通じるように土木工事が完備されてかなり都は世界の都市でも清潔な街でもあった。便所の排泄物は貴重な畑の肥料として下水には流されないから下水といってもそんなに不潔ではなかった。また夏などゴミが溜まり不潔になると堀川の上流の鴨川の堰から水を大量に流せば淀川に流れるという仕組みになっていた。

この堀川は幅こそ6mほどあったが、水が流れるのは真ん中の4mほどで両端には1mほどの土があった。ここにありとあらゆる植物の種や野菜の根が流れてきて自生して育っているのを川の近所の子供らが見つけて摘み取り親孝行していた。

ある時この子供らが見つけたのは木の根っこ間違ふほどの太い牛蒡だった。元々の牛蒡というのは細いものだが、これは誰かが貧弱な牛蒡を川に捨てたところその牛蒡が横に寝たままで育ちヒゲ根のすべてが下に伸びて下水という栄養豊富な環境でお化けのような牛蒡ができていた。さすがにこれは気味が悪いと食べられずに稲荷大学の農学部を持ち込まれていた。

稲荷神社三代目の宮司の伊蔵もこれには驚いていたが、学生らは伊蔵に、

「これの中はスカスカで繊維も太くて味も匂いもそんなにしません」

「そか、しかし、食べても害はないのか？」

「はい、私たちも煮たり焼いたりして食べましたが、お腹は大丈夫です」

「これはそんなに多く自生しているのか？」

「はい、もうこの品種そのものは固定化してこの種を普通の畑で育ててもこの大きさの牛蒡ができるようになったのです」

「そか、それなら料理方法を考えればこの栽培が全国に広がるかも...」

「はい、それにあの堀川にはまだ新種の生姜やスイカなど、それに南国の珍しいメロンというものも自生していました。水のあるところには小魚が、それを目当てに渡り鳥が飛んできます、そしてそこに土があれば珍しいものが育ちます」

こうして農学部から料理研究部にバトンタッチされて学生らはこの堀川下水原産地のお化け牛蒡

を堀川牛蒡と名付けて食べ方の研究をしていた。この大味の野菜には動物性タンパク質があうと鹿、猪、熊の肉まで試していたが結論としては鴨の肉がいいとわかった。この鴨の肉をミンチにしてスカスカの牛蒡の穴に詰め込んで醤油と沖縄の黒糖で煮込みました。それを輪切りにしたところ牛蒡の繊維が柔らかくなり鴨の味と見事にマッチしていた。

これを例によって嵯峨天皇に献上したところ天皇は、

「ほう、これは旨い！、鴨は九条ネギしか合わないと思っていたが、このお化け牛蒡にも鴨が合うのう〜」

「はい、それに同じ堀川で発見された新種のお化け生姜も鴨の肉の匂い消しにはいています」

「そか、それで血行がよくなり体がポカポカするのか...」

「はい、鴨も堀川の鴨です」

「そか、下水とは汚いものと思っていたが、こんなに美味しいものが育つのか...」

「いえ、これは都会の下水の川で世界の都市で堀川が一番清潔で綺麗な川といわれています。それには都の下水局の職員が並々ならぬ努力をしているからです」

「そか、清潔で綺麗な政治をしようと思ったらこの堀川下水と同じで政治家が並々ならない努力が必要なのに、我が貴族連中は業者からワイロを受け取り私腹を肥やしているが、伊蔵よ、来年こそはこの貴族の汚職を一掃したいが協力をしてくれるか？」

「はい、天皇、喜んで協力いたします。それに貴族の長があのでセコイ舛添から小池百合子に代わりましたから今度こそ期待できます」

「そか、それなら予も来年の823年の3月には生前退位をする」

「はい、長い間お疲れさまでした。それでは天皇〜よいお年を」

「そか、お主の稻荷神社も三が日で230万人もの初詣客があるというが、テロには厳重な警戒をよろしくたのむ」

◎今年1年を振り返ると...幸せだったかもわからない♡

悪いことはなに一つもなかった。しかし、いいことも何一つなかったということは差し引き「幸せ」だったもわからない。まだ一昨年から引き続き眼の病気の「加齢黄斑変性症」の治療と痛風の治療を受けている。しかし、これも順調に治っている様子だからこれも含めて幸せだったかもわからない。

痛風では大好きなビールと塩干物の魚類が禁止、眼の病気では「ほうれんそう」と「牡蠣」を食べなさいといわれて食べている。もう仕事はリタイアして貧しい年金暮らしで金はないが時間はたっぷりあるというのも「まだ売れていない作家」にとっては最高の幸せになるのかもわからない。

もしなにかの間違いで私のコラム、小説が何かの新聞、雑誌で取り上げられてそれが評判を呼び

仕事が増えるとすれば金も入るし夢が実現することになりこれも幸せになる。しかし、そんなことになれば酒のお付き合いも増えるし原稿の締め切りに追われて病気になるかもわからない。

というような自問自答を毎年繰り返している。さらに来年の抱負になるが、やはり来年も今年のように「なにも悪いことがない」ように願うしかない。この連読を維持すれば後20年は生きられるような気がする。売れる売れないは別にして我が一生涯を「作家」としての誇りを持ちながらまっとうすればたぶん私の死に顔は素敵だと思う。

さらに100歳まで生きれば現在の私の周りの知人、友人らは仕事の鬼で金の亡者でいずれ睡眠不足、過労、ストレスで先に天国に逝くだろう...その点、私は睡眠過剰、その分過労もストレスも溜まらないから元気のままポックリ逝く自信はある。なんていう強がりだけの年の瀬のご挨拶でした。合掌



津軽三味線

イオン洛南店の無料ライブ

お笑いコラム...「伏見稲荷大社」の物語も80話にもなりました。最初の1話は「吉祥院天満宮・政所公園の白狐」これになります

お笑いコラム...「伏見稲荷大社」の物語も80話にもなりました。最初の1話は「吉祥院天満宮・政所公園の白狐」これになります

🌀 これを書いたのは今年の7月で最初は「京都歴史裏のコラム」で約10話ほど書いたが、その一つに「吉祥院天満宮・政所公園の白狐」というのがあった。この次も伏見稲荷大社の話題と続いたのでそれならと「伏見稲荷大社の物語」を約20話を目標に書いていた。そのころからこのブログのアクセスが急増したもので気をよくしてさらに2日に1回のペースで書いてきました。

なにせつたない文章ですからこれを誤魔化そうと画像に力を入れてきました。この足はすべて自転車での移動で伏見稲荷大社だけでも5回、嵐山方面でも3回も撮影に行きました。丁度このころは真夏で37度の日もありました。それに先にコラムを書いてから撮影なのでそれに合う画像になるが、これがまた以前に行った同じ場所近くになるのでかなりの無駄足にもなった。(健康にはいいが)

なにはともあれお正月前の今日(12月30日)はこの80話を振り返り、その1話を再掲載いたします。この1話の吉祥院天満宮は私の家のほん近くにあり、元旦の初詣は毎年ここに決めています。伏見稲荷大社の三が日はあまりにも人が多いのでいつも4日、5日に行きます。

🍷 「吉祥院天満宮・政所公園の白狐」...伏見稲荷大社の物語の1話...80話まで書けています

吉祥院天満宮の南側に政所公園というのがある。政所というのは諸説あるが、この場合は太閤秀吉の正室の「おね」のことでこの政所公園の南側の一角にはこの北政所の墓碑がある。しかし、この吉祥院村になぜ?北政所の墓碑があるのかということは解明されていないばかりかこの北政所の戒名が間違っって石に彫られているためにこの墓碑は偽物だという説が有力になる。

この墓碑の裏は児童公園で子供の遊具やゲートボール場、それに公衆トイレも完備されている。北側の通路は大きい樹木の陰で昼間は休憩や食事のために車が数台止まっている。私もよくここで近所のスーパーで買った弁当を食べた後に昼寝をしていた。

ある日、ミニ稲荷寿司10個入りを車の中で食べていると小さな女の子が窓越しに笑顔をくれた。公園の中を見回したがこの子の母親らしき姿は見えない、私は近所の女の子だと判断して窓を開けて、

「お嬢さん、この近くの子?」

その子は小さな指で南の方向を指さしている。この辺りは古い民家とマンションが多い地域で子

供が一人で公園で遊んでいてもそんなに違和感はなかった。その子に「これ...ほしい?食べる?」と聞くと満面の笑顔で頷いている。

ミニ稲荷寿司だから小さな子供でもすぐ食べられる、その子は3個食べた後に笑顔でお礼をいっている。この女の子とは一言の会話はしていないが意思是心の中まで通じていた。そして20分ばかり昼寝をしたが、この時の夢にさっきの小さな女の子の母親がでてきた。

この母親は「娘に美味しい稲荷寿司をありがとうございました。あの娘はあの北政所のお墓で眠っている狐でございます」

「狐?ということはお母さんも狐ですか?」


「はい、白狐の白藤といいます。元々あのお墓の場所は吉祥院稲荷神社という祠があったのです。ところが江戸時代に今でいう村おこしの観光政策で当時人気のあった北政所の墓にしたほうが参拝者は増えると墓にしてしまったのです」

「村おこしね〜...」

「はい、その当時私の娘は生まれたばかりで祠の下にあった穴にいましたが、その穴に埋められて死んでしまいました」

そんなことがあってから私は毎月17日の「いなりの日」にはこの元吉祥院稲荷神社の北政所の墓所に稲荷寿司をお供えしています。そしてその夜には必ず白狐の白藤さんが白い藤の柄の着物を着て私の家に遊びにきてくれます。

(これは再掲載です)

...この1話から80話まで続けられたのは皆さまのアクセスのおかげです。一年間ありがとうございました。よいお正月をお迎えください。



今年1年間のご愛読ありがとうございました

神様は目に見えないからこそ神である。仏壇の位牌は元々朝廷の官位を証明するものであった。伏見稲荷大社の物語... 82話

神様は目に見えないからこそ神である。仏壇の位牌は元々朝廷の官位を証明するものであった。伏見稲荷大社の物語... 82話

823年の正月には初詣を兼ねて全国の村々から稲荷神社のお札をもらうための一行が来る。このお札とは木の板に「正一位 稲荷大明神」と書かれた物で家の神棚に祀る小さな物から祠の祀る大きな物まであった。これをご神体として持ち帰り好きな名前の〇〇稲荷神社と命名して神棚に祀れば立派な稲荷神社の末社の〇〇稲荷神社となる。

この木片の神様だが、日が経てば朽ちることになるからそれでは神様に失礼になるとこのお札を交換するためにまたお札をもらいにこななければならない。これはこれで稲荷神社としては商売にはなるが、こんなことで儲ける気はないと稲荷神社三代目の宮司の伊蔵は思っていた。そこで伊蔵はご神体を長く朽ちない石とか硬い唐木にするかと考えていた。

この唐木は紫檀、黒檀、白檀、果林という中国から輸入した硬い木材になる。この唐木はすでに朝廷でも使われていた。たとえば宮司の伊蔵の官位は「従七位上」だが、この官位を授かる儀式では黒檀の木で作った「位牌」というものに「従七位上 荷田伊蔵」と掘られたものをもらっていた。この位牌を伊蔵の自宅の神棚に祀っていた。つまり、位牌とは官位を証明する証書でもあった。ちなみにこれが後の鎌倉時代から仏壇の位牌(亡くなった人の戒名、または法名を記すもの)となり庶民にも大流行していた。

しかし、これでは貧しい農民には手がでないと考えた伊蔵は、稲荷神社で授与する「お札」とは稲荷神社から神をその地域の〇〇神社まで送り届ける神輿であるという話を信者に広めていた。つまり、このお札とは神輿であって神がその〇〇稲荷神社まで送り届ける役割であってその後はもうそこには神が鎮座している。その祠の中がたとえ空間であろうともそこには神がいるということになる。そしてさらに信者に「神様は目に見えないからこそ神である」ということを力説していた。

この伊蔵が言った「神は目に見えない」に大反発をしたのが京都の仏教会に奈良の仏教会であった。元々この時代は神社も寺もそんなに分け目はなく同じ宗教として共存共栄してきた。しかし、伊蔵のいった言葉には仏教の「目に見える仏像」信仰とは正反対のことを言っていることになるからだ。たとえば奈良の大仏は目に見える信仰の代表格でもあり、そしてどの寺にもご本尊という目に見える仏さんがいたからだ。

これに対して伊蔵も反論をしている。稲荷神社の御神体は稲荷山の山そのものでこれは見えて

いる。大昔からの太陽信仰もこれも目に見えている。ただ、分祀する場合にはご神体である山を削って分祀をできないから木のお札を授与している。これも目に見える物だが、これは元をただせば木の切れ端であって神そのものではない。これと同じで仏教の仏像も元は木であって仏ではない。

そしてこの板切れ、木の彫刻を神や仏に変身させる力というのも宮司にも坊主にもない。ましてや石の墓を拜んで魂を入れたり抜いたりするのは科学的にも無理な話になる。しかし、それを信じるのは人の心であるが、その心なんてものも人の目には見えない。たしかに拜む目標としてそこに仏像や墓があれば拜みやすくなる。また稲荷神社の赤い鳥居をくぐり社殿を拜むというのもこれと同じになる。つまり、この神も仏なんていうものをこの世で誰1人として見たものはいないからこそ、私は「神様は目に見えないからこそ神様である」といったのです。

この伊蔵の反論にこれまた怒った京都の仏教会は嵯峨天皇に伊蔵を処分してほしいという直訴をしていた。天皇は伊蔵を呼んで、

「これ伊蔵よ!たしかにお主のいうことは科学的だが、それはそれとしてあまり坊主と喧嘩するな」

「はい、恐れ入ります」

「しかし、仏教にも色々な宗派があり、これまた神社にも様々な考え方があるが、この考え方の違いで論争するのはいいが、これで喧嘩をすれば悲惨な宗教戦争から権力争いの戦にもなる。ここは坊主より度量のある伊蔵が折れてほしい」

「はい、それでは京都仏教会と奈良仏教会に詫びの手紙を差し出します」

「そか、最近の観光寺院というのは庭の紅葉を見せるだけで町民から安くない拝観料を取ってはいるが、伊蔵がいう庶民が困らないように「神様は見えないからこそ神であって、たとえ祠の中は空気だけでも願いが叶う」という教えは予も支持をする」

この稲荷神社と仏教会の論争事件はまたたくのまに全国に広がっていた。そして伊蔵が大人の判断をして仏教会にわび状を入れたことには町民どころか貴族の官女、侍女までが寺側を罵り、伊蔵を褒めていた。そしてこれらは寺への抗議の意味も込めて貴族恒例の初詣の寺参りをやめて各神社に初詣を変更していた。

当時の寺というのは皇族や貴族からの手厚い信仰がなければ経営は難しかった。どの寺にも〇〇宮、〇〇様寄進の門とか本堂というのがあったからだ。もちろんそれまでの初詣は先祖の墓に参るとというのが最大の目標だったので墓がある寺だったが、この事件があってからは墓参りと初詣が分離して初詣は神社という歴史がここから始まっていた。このことに大慌てした仏教会は天皇に伊蔵との和解を申し入れていた。

その和解の申し入れを伊蔵に報告をしていた。天皇は、


「ほい、伊蔵よ...またお主のパフォーマンスが当たったが、作戦通りか？」

「いえ、それは天皇...間違いで、天皇のお力です」

「そか、寺の坊主たちは庶民の生活などに見向きもせず、貴族との癒着に頭をつかっていたが、今回のことで少しは反省するだろう」

「はい、しかし、今回の作戦は天皇が考えたことですから...感謝しています」

「そか、お主と予の目に見えない連携プレーはお主のいう「神様は目に見えないからこそ神である」ということになるのお～ホホホ」

 ...画像は吉祥院天満宮

恒例の元旦初詣、この神社の初詣客は毎年増えているような気がします。参拝できる場所が一か所だからか参道の一の鳥居まで長く～並んでいました。新しく「菅原道真の産湯の井」というものが再現されている。

吉祥院天満宮



毎年同じ場所で撮っているが
1年1年老いていきます

お賽銭の勘定に京都銀行の行員10名が一週間もかかるという伏見稲荷大社・その1200年前のお賽銭のお話し 83話

お賽銭の勘定に京都銀行の行員10名が一週間もかかるという伏見稲荷大社・その1200年前のお賽銭のお話し 83話

823年の初詣三が日が終わると賽銭及び献上品の記帳が行われる。この時代は貨幣がそんなに流通していないので現在のような大きな賽銭箱はなくこじんまりしていた。この献上品はやはり米が中心で後は酒樽、そして醤油に味噌、そして各地の海産物になる。しかし、これらを大八車で持ち込むのは大手の商売人になる。

これらの献上品は畳50枚ほどの外拝殿に山のように並べられるが、そこには献上をした業者の名前が記してありいわば参拝者への宣伝にも大いになっていた。また献上品を当日持ち込まないで後日届ける場合でもこれも紙に書いて張り出されるからこれも宣伝になる。一般参拝者もこのお供え一覧表を見て楽しむということもできた。今でいえばテレビのCMでどの店が流行っているのか、どの店が信用があるのかの判断材料にもなっていた。

たとえば、

「米五石 高島屋殿」「酒三樽 大倉酒造殿」「昆布五十本 敦賀海産問屋殿」「絹織物十丈 大丸殿」「鮑の燻製三貫 京都物産殿」「醤油三樽 東丸殿」「銀三枚 日本通運殿」「塩十貫 赤穂商店」「荏胡麻油五樽 山崎屋殿」「海苔100帖 山本山殿」「味噌三樽 信州味噌」などというふうになっている。

これらの献上品のすべては業者に引き取られて金、銀に換金されていた。そしてこれが神官や巫女の給料にもなっていたが、この稲荷神社というのはいわゆる官幣神社ではなくまったくの官から独立した民間の神社で朝廷や政府からの援助はピタ銭一文ももらってはいなかった。この官幣神社の他には村社というものもあるが、これは村やその地域の住人が神社を経営していることになる。

この官にも頼らず民間の個人経営神社として711年に設立されてここまで大きくなったことに対してこの稲荷神社は「商売の神様」として崇拜されきたという歴史があった。しかも儲けた金のすべてを道路、農地の開拓、農業用水の土木工事に使っていた意味からも商売人の鏡として尊敬されてきた。いわば江戸時代の近江商人、昭和の松下幸之助でもあった。

このお賽銭の献上品を業者はかなり高く引き取っている。これは業者の信仰からともう一つの理由は稲荷神社の献上品のお下がりだという縁起物の付加価値が付く。そればかりか全国からの珍しい海産物が多くありこの時期にはこれを心待ちにしている都人が多くいるためにこれが高く売

れたという事情もあった。いわば現在の北海道物産展、沖縄物産展のようなもので大人気にもなっていた。

稲荷神社の筆頭神官の為次郎は稲荷神社三代目の宮司の伊蔵に献上品の記帳帖を見せながら、「宮司、今年は去年より賽銭もお供え物、それにお札とお御籤の売り上げも三割ほど増えています」

「ほう、それはありがたいことだ、世間では不景気だといっているが...」

「はい、嵯峨天皇のサガノミクスの成果もなかなか庶民にまでは届いてはいません」

「そか、それを受けて有力貴族の藤原自民と藤原維新、それに創価氏の一部がバクチ場を公認せよと迫っているそうだが...」

「はい、それも参議でバクチ場賛成貴族の賛成多数で決まったようです」

「そか、あれらは博打場を開設しようと思っている有力寺院からワイロを受け取っている」

「はい、寺が庶民の味方をして寺本来の布教活動をしていればこの稲荷神社のように信者は増えると思います」

「そうだ～この都からギャンブル依存症が元で国を追われた無戸籍者やホームレスを保護して職業訓練をして就職させて人手不足を補った。今では無国籍者は一人もいないが、これには20年もの月日と莫大な金を使った。またそれらカジノとかいう寺の博打場に誘って金を巻き上げるというのは世界の恥になると思うが...」

この伊蔵は嵯峨天皇とはかなり親しい間柄だが、政治の話は一切しなかった。本来政治と宗教とは分離しなければならないと考えていたからだ。しかし、他の仏教も神社も少なからず有力貴族との癒着はあり、またその癒着がなければ寺の経営も格も維持できなかった。この意味でも稲荷神社は完全独立した日本で唯一の民間の神社になる。そしてこの歴史こそが外人観光客の3年連続日本一の人気度になるが、これがアメリカンドリームならぬ、イナリドリームと感じているのであろう。

♥...2017年の福袋...パンツ3枚1080円

私は元々50年来のパンツはブリーフ派でした。ところが最近このブリーフの柄物がイオンから消えて白しかなかった。そこで今年からボクサーブリーフ派に転向することになりました。

しかし、このメンズ下着売り場はボクサーブリーフ一色で色柄とも品揃えに力をいれているようです。中には豹柄とかピンクのセクシーなものまである。ここの読者で私にパンツをプレゼントしてくれる方々にいっておきます。柄物のブリーフかボクサーブリーフにしてください、サイズは**M**です。(尚、中身は賞味期限が切れています)

🦋...画像は福袋のパンツ3枚組

福袋



3枚1080円

嵯峨天皇の即決断で1200年前からお寺に保育所ができた。この日本ではまだ「保育園落ちた!」の状況とは日本の恥になる。伏見稲荷大社の物語 84話

嵯峨天皇の即決断で1200年前からお寺に保育所ができた。この日本ではまだ「保育園落ちた!」の状況とは日本の恥になる。伏見稲荷大社の物語 84話

稲荷神社も神職と巫女との社内恋愛が増えて共稼ぎが多くなっていた。巫女とは本来若くて独身の女性というのが決まりだったが、この稲荷神社は神楽の舞は若い女性が中心になるが雅楽の演奏や舞の指導はベテランの巫女を起用していた。巫女の仕事はなにも表舞台の仕事だけではなく神社の事務、経理、それに神様への食事も年中無休で用意しなければならない。

男の神職は70名、それに巫女さんが30名の大所帯で運営していたが、それは稲荷神社本体で他には系列の事業体として表参道の直営お茶屋を3軒運営する稲荷カンパニー、神社を警備するフォックス警備保障、それに稲荷大学もあった。この稲荷大学は当初は神職と巫女さんの学校だったが、現在は私立総合大学になっていて職員は教授を含めて100名、学生は500名在籍していた。つまり、稲荷グループとしては社員が300名という当時では京都で一番大きな会社でもあった。

そこで稲荷神社三代目の宮司の伊蔵はこれら社員の子供のために稲荷保育園を開設していた。保母さんは稲荷大学の女性の学生から希望者を募り、これらの学生の入学金と授業料の全額を免除していた。稲荷大学は2年制の全寮制の短期大学でこの2年間を保母見習いとして働けば卒業後には保母の資格とともにこの稲荷保育園で保母として正式に働いていた。当時(823年ごろ)女性が給金を貰って働く場は大店の下働きぐらいしかなかった。それに巫女さんと保母さんという資格がある職業ができたものだから、全国の女性たちからこの稲荷大学保母部、それに巫女部に入学希望者が殺到していた。

このころ大都会でもあった都でも男は外で働き女は家で子育てと家事をするというのが定番だった。したがってあるゆる職人も工人も働くのは男になる。しかし、その夫が早死にしたり、離婚すればたちまち女性が働かねばならない。これが農村ならば親兄弟、親戚もいるが、なにせこの都の住人は他府県からの新規参入者が多くてこれもかなわない。この時代は食うものが買えなかったら餓死するか自殺するしか方法はなかった。そこで伊蔵は嵯峨天皇に官営の母子家庭のための保育所を造るようと直訴していた。天皇は、

「そか、それはお主の新しい稲荷大学の保育部の卒業生の就職を斡旋する場所にもなるが...それに政教分離の原則に反するが?」

「たしかにその面もあります。しかし、この都で子供がいるために働けず餓死、自殺した母子はもうここ5年で100名を超えています。これは人権問題になります」

「そか、しかし、そんなことに金を使うことには貴族の賛成は得られない」

「そうですね～もう、かれこれこの保育所のない時代が50年も続いているのに貴族らは知らん顔をしています」

「そうだが...なにかいいアイデアはないのか～伊蔵」

「はい、それはあります。まずどの地域にもお寺はあります。その一室を借りてせめて昼間だけでも母子家庭の子供を預かってもらうのです。保母はその数に対して稲荷大学保母部の学生及び卒業生を派遣します。国はその費用を負担してください」

「そか、お寺か～しかし、寺はどういうかはわからない」

「天皇、天皇がそうしろと命令すれば寺の誰もが反対はできません」

「そか、もし逆らうなら年貢及び労役免除を取り消すといえればいいのか?伊蔵...」

「はい、もし坊主が困っている母子を見捨てるなら、国も坊主を見捨てる暗に...」

「ほう、伊蔵よ!お主も悪知恵が働くのう～」

こうして母子家庭のための官営保育所は京の都に十数か所もできた。母親は子供をお寺の保育所に預けて男の職場でもあった染物工場や酒、醤油、味噌の工場で働いたが、それは人手不足の解消とともに男ばかりの職場に華が咲き、男同士の喧嘩、博打もなくなり、そしてバツイチのカップルも誕生したという目出度いお話しになりました。

@...我が家の近所にも幼稚園や保育園はあるが、そのすべてとっていいほど経営母体は地域のお寺になっています。この歴史の始まりこそが伊蔵が天皇を利用してお寺の一部屋を借りたことになっている。そしてそれが1200年後の今も続いていることこそが日本のいい文化になります。

しかし、それにしても50年前の各党の選挙公約を読めばどの党も「保育所をポストの数ほど造る」と公約しているが、その公約がまだ実現していないことに政治家は恥を感じていないのだろうか?...この嗟哉天皇のように即決断できる政治家と伊蔵のようなブレインの出現をいつまで持つのか?それとも小池百合子氏に期待するのはまだわからない。



キツネと音川伊奈利

小野篁の禁断の恋...藤原香子に貢いで閻魔さんの書記官としてのアルバイト。生まれた子供が「小野小町」「紫式部」伏見稻荷大社の物語 85話

小野篁の禁断の恋...藤原香子に貢いで閻魔さんの書記官としてのアルバイト。生まれた子供が「小野小町」「紫式部」伏見稻荷大社の物語 85話

小野篁(おののたかむら)は従三位の高級貴族だった。仕事は大学院の文章博士で日本と中国の歴史が専門だった。当時の貴族は朝は7時に役所に出勤はするが正午でそれぞれ屋敷に帰り仕事を家に持ち帰る在宅勤務になってはいた。しかし、それは建前であって午後はそれぞれ好きな遊びをしていた。

ある時、篁の蹴鞠仲間の藤原為時の屋敷で蹴鞠大会が開催されていたが、その為時の娘の香子に篁が一目惚れして連日のように恋の文を送っていた。香子はまだ15歳の姫でこのような恋文などは初めての経験で心は燃えていた。しかしながら篁には妻も子供いるからと自制で香子はこの恋文の返事は書かなかった。それでも篁からの恋文は100通を超えていたが、それをなんとか止めさせようと香子は篁に文を送った。

そこには「私が本当に好きなら篁さまの出身地の山科の小野村に敷地二千坪に屋敷を建てて私を迎えてほしい」という文だった。しかし、篁は高級官僚ではあるがやはり朝廷のサラリーマンでそう簡単には金の工面はできなかった。そこで当時の役人の間で流行っていたアルバイトを探していた。そのアルバイトというのはこの世ではなくあの世の地獄の閻魔様の書記官だった。

この地獄も日本の国の人口が爆発的に増えたところで日本には約400~500万人もの人間がいた。その1%が地獄に堕ちて閻魔さまが吟味するのだがその数は日に150名を超える日もあった。そこで地獄では人手不足解消に優秀な貴族を雇用していた。篁の勤務は夜の8時から朝の6時まででその地獄の勤務の終わったころには昼の仕事と24時間ほとんど寝なかった。これを2年間も続けて篁はやっと念願の香子の屋敷を建てて香子をおこの屋敷に迎えていた。

しかし、この貴族の間ではこの篁が都一の美女を囲ったことに嫉妬、妬みを持つものまで現れて「篁は役人が禁止されているアルバイトをしたと」という理由で嵯峨天皇に篁の罷免の要請があった。天皇はすぐに稻荷神社三代目の宮司の伊蔵を離宮に呼んでいた。天皇は伊蔵に、「篁が地獄の書記官をしてそのアルバイト代で香子の屋敷を建てたと聞くが、これは本当のことか?伊蔵」

「いえ、天皇直属の諜報機関でもあるフォックス警備警備保障の狐の部員が調べたが、そんな地獄のアルバイトはありませんでした」

「そか、それならどうしてその金を手に入れたのか?」

「これはたぶんですが...なにかのワイロだと思います」

「そか、しかし、篁は大学院の文章博士になるが、どんな利権があるのか？」

「はい、これは貴族の子息を大学院に入れるための便宜だと思います」

「そか、それなら貴族の全員を芋づる式に検挙しなくてはならないが...」

「はい、そうなればこの国の政治、統治はできなくなります」

「そか、それなら篁を遣唐使として3年ほど唐の国に派遣すれば他の貴族もこのことを忘れるだろう」

「はい、貴族の誰もが悪いことをすれば遣唐使に選ばれるという事例のいい見本にもなります」

このころの遣唐使というのは無事日本に帰ってこられれば名誉、それに官位も上がって収入も増えるが、生きて帰れる確率は船の転覆、病気などで30%未満の危険な仕事になっていた。唐との国との外交だからこればかりは日本の高官の随行員を派遣しなければ相手国に失礼になるので従4位以上の高級貴族は遣唐使に選ばれないようにと願っていた。

この嵯峨天皇に采配にガックリきた篁は遣唐使が出発する半年後まではほとんど香子の小野の屋敷にいた。そのおかげで香子に姫が誕生したが、この姫が後の世界三大美女の「小野小町」になる。篁を副遣唐使にした遣唐使の4隻の船団の2隻が対馬沖で沈没してやむなく日本に帰ってきたが、嵯峨天皇は次の遣唐使にも篁を指名していた。その間にまた篁は香子の屋敷に入りびたり次も姫を授かっていた、この香子の二女が源氏物語を書いた「紫式部」となっていた。

そして篁にすれば二回目の遣唐使になるが、この時も嵐に巻き込まれて船団はやむなく日本に帰って来た。この時も不思議に篁の乗った船は無事だった。その後、この遣唐使が中止されたために篁は悪運が強いとされ、また絶対に沈没しないという理由で今も学問の神様として大学受験者の篁への墓へのお参りが絶えない。

♥...小野篁の墓は堀川紫明上がるの場所にあるが、ここは紫式部の墓にもなる。ここに篁と式部の親子の墓は京都でも珍しいこの両名だけの単独の墓所になっている。紫式部へのお参りは多いが、この横の篁の墓はそんなに知られていない。

...画像は紫式部の墓所で右横には小野篁の墓もある。

紫式部の墓

小野篁の墓

堀川深明上かる、島津製作所紫野工場の北
側の一角にある

